

令和5年度

(2023年度)

講義要項

農学ビジネス学科

保 育 学 科

拓殖大学北海道短期大学

学科別索引

農学ビジネス学科

環境農学コース	・・・1～65
地域振興ビジネスコース	・・・66～145
保育学科	・・・146～219

科目別担当教員索引

農学ビジネス学科

環境農学コース

【基礎科目】

文章表現法	・・・1
哲学	・・・2
日本国憲法	・・・3
法学	・・・4
環境科学	・・・5
農業基礎科学	・・・6
作物栽培概論	・・・7
生涯スポーツ演習	・・・8
総合英語Ⅰ	・・・9
総合英語Ⅱ	・・・10
総合英語Ⅲ	・・・11
総合英語Ⅳ	・・・12
英語コミュニケーションⅠ	・・・13
英語コミュニケーションⅡ	・・・14
英語コミュニケーションⅢ	・・・15
英語コミュニケーションⅣ	・・・16

【専門科目（必修科目）】

クリーン農業論	・・・17
地域振興論	・・・18
国際農業論	・・・19
キャリアスキル	・・・20
1年ゼミナール	・・・21
2年ゼミナール	・・・22

【専門科目（コース選択必修科目）】

コンピュータ概論	・・・23
農業基礎実験・実習〈実験〉	・・・24
農業基礎実験・実習〈実習〉	・・・25
農業研修（1年）	・・・26
農業研修（2年）	・・・27

【専門科目（選択科目）】

水稻生産学	・・・28
畑作物生産学	・・・29
野菜生産学	・・・30
花卉生産学	・・・31
水稻実習	・・・32
畑作実習	・・・33
野菜実習	・・・34
花卉実習	・・・35
施設園芸学	・・・36
土壌管理学	・・・37
土壌作物診断実習	・・・38

日本酒学	・・・39
日本酒製造実習	・・・40
植物資源応用実習	・・・41
病虫害管理学	・・・42
農業機械学	・・・43
農業機械研修	・・・44
農産物利用学	・・・45
農産加工実験	・・・46
生物工学概論	・・・47
作物栄養生理学	・・・48
食農社会論	・・・49
グリーン・ツーリズム論	・・・50
食品・農産物流通論	・・・51
農業経営概論	・・・52
社会統計学	・・・53
初級簿記	・・・54
キャリア技能Ⅰ（玉掛け技能）	・・・55
キャリア技能Ⅱ（小型クレーン）	・・・56
キャリア技能Ⅲ（フォークリフト）	・・・57
キャリア技能Ⅳ（車両系建設機）	・・・58
キャリア技能Ⅴ（食品衛生責任者）	・・・59
キャリア技能Ⅵ（ガス溶接技能）	・・・60
キャリア技能Ⅶ（農業用ドローンオペレーター教習）	・・・61
キャリア技能Ⅷ（ミュージカル）	・・・62
キャリア技能Ⅸ（ミュージカル）	・・・63
海外研修	・・・64
卒論演習	・・・65

農学ビジネス学科
地域振興ビジネスコース

【基礎科目】

文章表現法	・・・66
哲学	・・・67
心理学	・・・68
日本国憲法	・・・69
法学	・・・70
経済学	・・・71
現代経済論	・・・72
政治学	・・・73
地方政治論	・・・74
環境科学	・・・75
情報科学	・・・76
生涯スポーツ演習	・・・77
総合英語Ⅰ	・・・78
総合英語Ⅱ	・・・79
総合英語Ⅲ	・・・80
総合英語Ⅳ	・・・81
英語コミュニケーションⅠ	・・・82
英語コミュニケーションⅡ	・・・83
英語コミュニケーションⅢ	・・・84
英語コミュニケーションⅣ	・・・85
総合中国語Ⅰ	・・・86
総合中国語Ⅱ	・・・87
総合中国語Ⅲ	・・・88
総合中国語Ⅳ	・・・89
中国語コミュニケーションⅠ	・・・90
中国語コミュニケーションⅡ	・・・91
中国語コミュニケーションⅢ	・・・92
中国語コミュニケーションⅣ	・・・93
総合日本語Ⅰ（留学生用）	・・・94
総合日本語Ⅱ（留学生用）	・・・95
総合日本語Ⅲ（留学生用）	・・・96
総合日本語Ⅳ（留学生用）	・・・97
日本語コミュニケーションⅠ（留学生用）	・・・98
日本語コミュニケーションⅡ（留学生用）	・・・99
日本語コミュニケーションⅢ（留学生用）	・・・100
日本語コミュニケーションⅣ（留学生用）	・・・101

【専門科目（必修科目）】

クリーン農業論	・・・102
地域振興論	・・・103
国際農業論	・・・104
キャリアスキル	・・・105
1年ゼミナール	・・・106
2年ゼミナール	・・・107

【専門科目（コース選択必修科目）】

ビジネス実務総論	・・・108
ビジネス実務演習Ⅰ	・・・109
ビジネス実務演習Ⅱ	・・・110
情報技術の基礎Ⅰ	・・・111
情報技術の基礎Ⅱ	・・・112

経営学総論	・・・113
現代企業論	・・・114
マクロ経済学	・・・115
ミクロ経済学	・・・116
地域プロジェクト	・・・117

【専門科目（選択科目）】

日本酒学	・・・118
農産物利用学	・・・119
食農社会論	・・・120
グリーン・ツーリズム論	・・・121
食品・農産物流通論	・・・122
社会統計学	・・・123
NPO論	・・・124
観光産業	・・・125
北海道学	・・・126
地域観光ビジネス論	・・・127
ボランティア論	・・・128
初級簿記	・・・129
中級簿記	・・・130
会計学	・・・131
情報技術の運用Ⅰ	・・・132
情報技術の運用Ⅱ	・・・133
政治理論史	・・・134
経済学史	・・・135
職業能力基礎（SPI）	・・・136
キャリア技能Ⅴ（食品衛生責任者）	・・・137
キャリア技能Ⅶ（ミュージカル）	・・・138
キャリア技能Ⅸ（ミュージカル）	・・・139
インターンシップ	・・・140
地域特別演習A～D	・・・141
海外研修	・・・142
卒論演習	・・・143
日本事情Ⅰ（留学生用）	・・・144
日本事情Ⅱ（留学生用）	・・・145

科目名	文 章 表 現 法	教員名	はたけやま 畠山 佳幸	開 講 コース	環境農学	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
この授業では、大学生としてどのように授業を受け、レポート作成にどのように活かすか、大学における文章表現、口頭発表（スピーチ・プレゼンテーション・ディベート等）社会に出てからも基本となるビジネススキルの養成を目的とする。 到達目標は以下のとおりである。 ・大学生生活に必要な日本語表現力を身につける。 ・レポート作成技術を確実なものにする。 ・自分の考えを伝えられる表現力を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用							
II. 授業計画〔単位数：2 単位、授業回数：15 回〕							
〔前期〕 1. アカデミックワードと日常語、仮名遣い・送り仮名・句読点 2. 四字熟語・ことわざ・慣用句・漢字の使い分け 3. 敬語・手紙・Eメール 4. 文のねじれ、接続表現の使い方 5. 事実と意見、結論の述べ方 6. データの解釈・文献の検索 7. レポートの構成 8. 参考文献の書き方・引用の仕方・体裁・書式 9. レポート課題と書く順序 10. 調査の概要 11. 調査結果と考察 12. 結論と今後の課題 13. レポートサンプル 14. 論文サンプルA 15. 論文サンプルB							
III. 講義の進め方							
プリント中心に演習と組み合わせ展開する							
IV. 試験と成績評価							
授業における達成度をプリントの提出で行う（25％）3 回の小テスト（25％×3）により評価する							
V. 授業外学修							
課題として提出してもらった文章を書くことで、書く、発表する、議論するために必要なスキルが身につきます。 授業の進行に合わせて予習の範囲を時指示する。							
VI. 使用教材							
なし							
教科書：なし							
参考書：適宜プリントを配布							

科目名	哲 学	教員名	橋本 信 はしもと まこと	開 講 コース	環境農学	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
この講義の目的は「よく生きるとはどういうことか？」を一人一人が深く主体的に考えることを手助けすることにある。今まで当たり前であったことに疑問が寄せられ、吟味がなされる。このような問いかけと吟味の過程に求められるのが哲学的思考である。 哲学は人間が自己と世界を総体的に把握しようとする知の営みである。この講義では、人間として生きる上で関わる多様な物事を原理的に把握する思考へ向かうことによって、私たちが人間としてどのように生きるべきかを幅広く考えることをねらいとしている。到達目標は以下のとおりである。 ・論理的思考の基礎的力量を備える。 ・生命・人間・社会についての基本的な理解力を備える。 ・十分な根拠に基づいた主張を展開することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ① 貧困 ② 飢餓 ⑤ ジェンダー ⑦ エネルギー ⑬ 気候変動							
II. 授業計画〔単位数：2 単位、授業回数：15 回〕							
〔後期〕 1. 哲学とは 2. 言葉とは 3. 論理とは 4. 人間とは 5. 人間関係とは 6. 現代の人間関係とは 7. 社会とは 8. 現代社会とは 9. 現代社会で生きるとは 10. 自然とは 11. 「人新世」とは 12. 自然との共生とは 13. 人間の生命とは 14. 人間の自由とは 15. 人間の哲学とは							
III. 講義の進め方							
対話型の講義を目指す。授業時の質疑応答や小テストや小レポートの提出に加えて、主体的に取り組むことを主眼とする読書レポートと課題レポートをまとめてもらうこととする。提出先は BB の予定である。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、小テスト・小レポート 75%、読書レポート 10%、課題レポート 15%で行う予定である。それぞれの詳細は授業時に説明する。							
V. 授業外学修							
15 回の授業資料は事前に BB に掲載するとともに、授業後にも更新された内容を BB に掲載するので、BB 講義資料によって予習・復習することを推奨する。また、各種レポートは BB 提出とするため、バッチリまでに書き直しなどの作業をすることも推奨する。さらに、授業内容に関連する資料も BB 講義資料に掲載する予定なので、参考にすることを推奨する。							
VI. 使用教材							
教科書：指定しない 参考書：『人間の哲学の再生にむけて』宇都宮芳明著（世界思想社）、『現代社会はどこに向かうか』見田宗介著（岩波新書）、『第四次産業革命』クラウス・シュワブ著（日本経済新聞出版社）、『5000 人の白熱教室』マイケル・サンデル著（早川書房）、『生命誌の世界』中村桂子著（NHK 出版）、『環境倫理学のすすめ』加藤尚武著（丸善ライブラリー）、『人新世の「資本論」』斎藤幸平著（集英社新書）							

科目名	日 本 国 憲 法	教員名	こばやし ひでたか 小林 秀高	開 講 コース	環境農学	2 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
憲法は、国家の権力を規制し、国民の自由を守るために制定されている。講義では、1. 国家を規制する法としての憲法の役割について解説すること、2. これから学習する社会科学（経済学、経営学、政治学、法学、心理学等々）の基礎を身につけることを目標として展開する。後半の講義は憲法の条文などの解説ではなく、現代社会における具体的な憲法の論点を取り扱う。4 大編入希望者は受講を推奨する。 到達目標は以下のとおりである。 ・立憲主義的憲法の意味や役割、機能を理解できる。 ・基本的人権の歴史的な成立過程を理解し、日本国憲法における基本的人権の意味を理解できる。 ・現代社会における憲法の役割と法律の役割を区別して説明することができる。 ・公務員試験等で要求される憲法の基礎的な知識を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑩不平等 ⑤ジェンダー ①貧困 ⑯平和							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. ガイダンス／憲法と社会科学 2. 社会科学の目的と学習方法 3. 概念と歴史 1：立憲主義憲法の意味 4. 概念と歴史 2：人権の成立 5. 概念と歴史 3：人権の限界 6. 概念と歴史 4：新しい人権 7. 概念と歴史 5：日本国憲法の誕生 8. 人権と平等 1：平等の概念 9. 人権と平等 2：アファーマティブ・アクション 10. 人権と平等 3：婚姻 11. 人権と平等 4：貧困と平等 12. 統治機構論 1：国家財政と民営化 13. 統治機構論 2：選挙と政策決定 14. 統治機構論 3：司法への国民参加 15. 統治機構論 4：安全保障と自衛隊							
III. 講義の進め方							
講義は毎回、1. 基本的な知識の確認、2. 現代における憲法の論点、3. 自分の意見のまとめの 3 つのパートから成り立つ。特に高校までに学習した世界史の知識と日本史の知識が必要になってくるが、知識は必要に応じて解説する。1 と 2 は講義形式で行う。3 についてはリアクション・ペーパーに記載する時間をとる。 講義の一部は遠隔で実施する場合もある。							
IV. 試験と成績評価							
講義ごとに提出するリアクション・ペーパー（100%）によって評価をする。また、任意提出のレポートを 1 回課す。詳細については初回講義時に指示をする。							
V. 授業外学修							
講義毎に提出するリアクション・ペーパーの内容は次の講義の際に解説をする。提出後次の授業までに課された内容を調べておくことが復習および予習となる。欠席した授業回については Blackboard を確認しリアクション・ペーパーの内容を必ず確認しておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書：特定の教科書は使用しない。 参考書：必要な資料については授業中で適時紹介する。							

科目名	法 学	教員名	こばやし ひでたか 小林 秀高	開 講 コース	環境農学	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
現代の社会では、意識せずとも日常生活は法的な仕組みによって成り立っている。しかしながら、普段の生活の中で法を意識することは難しい。本講義では、社会生活に必要な法律学の基礎を身につけ、理解することを目指す。また、前半は多くの学生が関わる就職活動やアルバイトに関連する法律、後半は刑罰と裁判員として関わる刑事裁判に関するテーマを扱う予定である。4大編入希望者は受講を推奨する。 到達目標は以下のとおりである。 ・日常生活が法によって成り立っていることが理解できる。 ・法学的な思考法の基礎が理解できる。 ・時事的な問題についての法的側面を理解できる。 ・公務員試験等で要求される法学の基礎的な知識を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ⑤ジェンダー ⑩平和							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[後期] 1. ガイダンス／リーガル・マインド 2. 基礎法学1：法の分類 3. 基礎法学2：民事法 4. 基礎法学3：刑事法 5. 労働法1：就活・アルバイトのための法律 6. 労働法2：女性の社会参加と法律 7. 刑法1：なぜ人を罰するのか 8. 刑法2：刑罰の目的と再犯 9. 刑法3：どんなときに犯罪は成立するのか 10. 刑法4：罪を犯しても罰せられないとき 11. 権利の実現と裁判1：刑事手続きと民事手続き 12. 権利の実現と裁判2：警察の役割 13. 権利の実現と裁判3：検察官の役割 14. 権利の実現と裁判4：裁判所の役割 15. 権利の実現と裁判5：上訴と再審							
III. 講義の進め方							
講義は毎回、1. 基本的な知式の確認、2. 現代における憲法の論点、3. 自分の意見のまとめの3つのパートから成り立つ。特に高校までに学習した世界史の知識と日本史の知識が必要になってくるが、知識は必要に応じて解説する。1と2は講義形式で行う。3についてはリアクション・ペーパーに記載する時間をとる。 講義の一部は遠隔で実施する場合もある。							
IV. 試験と成績評価							
講義ごとに提出するリアクション・ペーパー（100％）によって評価をする。また、任意提出のレポートを1回課す。詳細については初回講義時に指示をする。							
V. 授業外学修							
VI. 使用教材							
教科書：特定の教科書は使用しない 参考書：初回に配布するシラバスを参照のこと。							

科目名	環 境 科 学	教員名	い が ら し 五十嵐 としなり 俊成	開 講 コース	環境農学	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標 環境科学とは、自然環境と社会環境に大別される環境のうちの自然環境を主な題材とする科学であり、自然科学分野に属する生態学、地球物理学、農学、化学などのほか、医学や、法学、政治学、経済学、倫理学などの社会科学にも関連する基礎的・総合的な学問分野である。 その中で、本講義では、地球規模の環境を踏まえながら SDGs が生まれた背景や環境問題の現状の状態を学ぶとともに、環境と調和した人類の活動のあり方や他の学問分野との関連を学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・環境がどのように成り立ち、人類が環境とどのように関わっているかを理解する。 ・人類が起こしている深刻な環境問題の内容と、環境問題と SDGs にどう対処すべきかを理解する。 <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ①貧困 ②飢餓 ③保健 ④教育 ⑤ジェンダー ⑥水・衛生 ⑦エネルギー ⑨イノベーション ⑩都市 ⑫生産・消費 ⑬気候変動 ⑭海洋資源 ⑮陸上資源 ⑯平和 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回] [前期] 1. 環境科学とは 2. SDGs とは何か? (教科書第 1 章) 3. 地球規模の環境問題 (教科書第 2 章) 4. 海洋プラスチック問題 (教科書第 2 章) 5. 地球の温暖化問題 (教科書第 2 章) 6. 地球温暖化への対応 (教科書第 2 章) 7. 大気汚染とオゾン層の破壊 (教科書第 2 章) 8. 人工化学物質のリスク管理 (教科書第 2 章) 9. 生物多様性の喪失 (教科書第 2 章) 10. 森林の働きと森林破壊 (教科書第 2 章) 11. 深刻化する砂漠化問題 (教科書第 2 章) 12. 日本の環境問題とエネルギー (教科書第 3 章) 13. 世界の多様な資源とその活用 (教科書第 4 章) 14. 環境問題にどう立ち向かうか (教科書第 3 章) 15. 地球環境問題とグローバルな生き方 (教科書第 4 章)							
III. 講義の進め方 対面授業を基本とするが、コロナの状況等に応じてオンデマンド授業で行う可能性もある。 授業計画に沿って、プリントを配布し、パワーポイントを用いて講義する。 毎回、出席確認を兼ねて、授業内容の理解度等を確認する小テストを実施する。 授業方法については、掲示板と Active mail で連絡するので、必ず確認すること。 卒業後の進路確保のため「資格」を重視する者には、環境社会検定 (エコ検定) を受験することを薦める。							
IV. 試験と成績評価 毎回の小テスト (50%) と期末試験 (50%) によって、到達目標の達成度を判定し成績評価を行う。							
V. 授業外学修 「授業計画」にある教科書の指定された章を予習して授業に参加すること。 環境科学における課題は SDGs とどのように関連しているのか、環境問題の根本的な原理・原因・対策を正しく理解し、普段からグローバルな視点に立って自ら考え行動できるように授業を進める。 日常の中で環境問題に関する体験や記事をノートに書き出して出席すると理解が深まります。							
VI. 使用教材 教科書：藤岡達也著「一億人の SDGs と環境問題」講談社 参考書：改訂 8 版 環境社会検定試験 eco 検定公式テキスト、適宜プリントを配布 *実務経験のある教員による授業科目 [実務経験と授業との関係] 担当教員は、農業試験場での実務経験を有し、当該科目における地球規模の環境や世界共通の環境に焦点を絞り、その実態や環境問題について教授します。							

科目名	農 業 基 礎 科 学	教員名	やまくろ よしひろ 山 黒 良 寛	開 講 コース	環境農学	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標 実習、演習を含めた環境農学コースの授業を理解するための基礎的スキルを学ぶことが本科目の目的である。 本科目の前半では農業生産に係る用語、単位および計算方法について学ぶ。次に、これまでに勉強してきた生物・化学をベースにして、農業生産に必要な植物の生理生態および作物の特性や光合成・遺伝などの分野について学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・農業を学ぶ上での生物・化学の基礎的リテラシーを身につける。 ・単位の変換、パーセントの計算を活用できる。 ・日常生活と関係の深い生物現象を通して、科学技術の進歩と農業生産の発展について理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑨イノベーション ⑫持続可能な生産と消費 ⑬気候変動 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業週数：1 5 回] [前期] 1 農業現場で用いる単位、長さ、面積、重さ、体積、時間など単位の基礎と相互変換の考え方 2 単位を用いた計算の方法、パーセントの活用、肥料計算の基礎 3 物質の構成、物質の量と反応 : 身の回りの物質、原子、分子 4 化学と農業 : 化学変化とエネルギー、酸化還元反応とエネルギー 5 人間生活と農業と環境 : 農業・農村の多面的な役割と農耕文化 6 日本農業の特徴 : 農業総産出額と食糧自給率 7 農業と生物 : 農業とは？ 生命現象とは？ 8 地球環境と生き物の形質 : 進化と生き物の多様性 9 光合成 : 生命の源・光合成、環境条件と光合成 10 生きものの成長 : 細胞との構造、細胞分裂、 11 植物の組織と器官 : 器官と組織系、分裂組織、維管束系の細胞 12 遺伝 : 連続する生命、メンデルの法則、ヒトの形質の遺伝、遺伝子と染色体 13 食物と代謝 : 生物の栄養、同化と異化、食物中の栄養素、食物の消化 14 微生物と農業 : 微生物の発見、微生物の発生、農業と微生物、病気と微生物 15 農業の現状と農業の役割・機能、学習のまとめ							
III. 講義の進め方 プリントをベースに様々な関連資料を活用して講義をすすめる。単調な知識の羅列にならないように食料、環境問題などのトピックスを学んだ内容から解き明かすなど、考える授業としたい。理解度を確認するために小テストを実施する。 農業の基礎知識を身につけるため、毎回、日本農業技術検定の基礎問題に取り組む。							
IV. 試験と成績評価 毎回の小テスト（50％）と期末試験（50％）によって、到達目標の達成度を判定し成績評価を行う。							
V. 授業外学修 「授業計画」にある内容について、参考図書を読んでから授業に参加すること。 配布されたプリントは、次の授業までに再度読み直して授業に参加すること。							
VI. 使用教材 教科書 : 使用しない（プリントおよび関連資料を配付） 参考書 : 鈴木正彦「園芸学の基礎」（農文協）							

科目名	作物栽培概論	教員名	おかだ 佳菜子	開講 コース	環境農学	1年次	前期
I. 目的と内容および到達目標							
人類は植物が生産する物質に依存して生きている。 作物とは何か、農作物の形態と機能そして発育の特性を学び、栽培環境との関わりに触れ、高生産的で持続的な作物生産を行うための基礎とする。 到達目標は以下のとおりである。 ・作物を基本的な器官の形態と生長、役割について理解している。 ・収穫物の基本的な特性とその発現について理解している。 ・基本的な作物栽培管理技術の意味を理解している。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓、⑨イノベーション、⑬気候変動、⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[前期] 1. 作物とは何か 2. 作物の分類 3. 作物の品種 4. 作物の発育①発育とは 5. 作物の発育②発育と環境 6. 作物の形態と機能①種子、発芽、葉、茎 7. 作物の形態と機能②根、花芽形成、受精・受粉、子房、イモ 8. 作物の生長と光合成 9. 作物の生長と養水分吸収 10. 作物の品種改良と目標 11. 作物栽培の基礎①播種・育苗・定植 12. 作物栽培の基礎②生育制御 13. 作物栽培の基礎③収穫と調整 14. 作物栽培の基礎④作型・作付体系 15. 作物栽培計画							
III. 講義の進め方							
教科書、プリント、プロジェクターを使用。 予習（小テスト）と復習（小テスト、スライド）をふくむ反復学習。							
IV. 試験と成績評価							
成績の評価は、小テスト（20%）、定期試験（80%）から評価する。							
V. 授業外学修							
作物は生命力にあふれた、素晴らしい機能と形態をもつ。作物の合理的な生長の姿に感心すること、そしてその作物を自分で育てたいという気持ちは、農業をはじめるスタートである。農場の作物を定期的に観察しながら理解をすすめてほしい。 新しく学ぶ農業用語はノートに整理をしながら復習をしてください。次週の内容に関わる予習課題を出しますので、挑戦してください。							
VI. 使用教材							
教科書：園芸学の基礎（農文協） 参考書：みんなの農業教室（農文協）							

科目名	生涯スポーツ演習	教員名	おさだ ひろし 長田 宏志	開 講 コース	環境農学	1年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
スポーツは、人間の心身を解放し、より豊かで充実した生活習慣を実現できる方法の一つとも言える。 身体を動かす機会が減少していることや、体力の低下が重要視される中、誰もが参加できるスポーツに自発的、主体的に親しむことができる力を身に付ける。 具体的には、学生たちが生涯を通じて活気あるライフスタイルの形成を獲得するために、健康づくり・体力づくりだけではなく、共通の「楽しさ」を感じることができ積極的にスポーツに親しむことで他者とのコミュニケーション構築の大切さを得ることから、人間形成において重要な役割があることを理解し実践する。また、安全に配慮し競技スポーツに併せて、運動強度が低く体力に過剰な負担をかけずに行えるニュースポーツも展開する。 突発的な事故に対しての対応と救急救命についての説明と指導。							
到達目標は以下のとおりである。 ・学生たちが、自ら主体的に心身を解放し、積極的にスポーツに親しむことができる。 ・安全に配慮し、社交場としての「楽しさ」を感じながら人間形成において重要な役割があることを理解する。 ・様々なスポーツに親しみ、身体づくり、動きづくり、楽しみづくりに結び付けて実践できる。							
<SDGs（持続可能な開発目標）との関連>							
③保健 ④教育 ⑯平和							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：30回]							
[前期]				[後期]			
1. オリエンテーション、体づくり運動				1. 体づくり運動 (ストレッチング、トレーニング)			
2. 実技 バレーボール (基本技能)				2. 実技 サッカー (基本技能)			
3. " (")				3. " (応用技能・戦術)			
4. " (応用技能)				4. " (リーグ戦)			
5. " (戦術・リーグ戦)				5. " (リーグ戦・技能テスト)			
6. " (")				6. 実技 バスケットボール (基本技能)			
7. " (リーグ戦・技能テスト)				7. " (応用技能)			
8. 実技 バドミントン (基本技能)				8. " (リーグ戦)			
9. " (ルール・応用技能)				9. " (リーグ戦)			
10. " (リーグ戦)				10. " (リーグ戦・技能テスト)			
11. " (リーグ戦・技能テスト)				11. 実技 卓球 (基本技能)			
12. " (技能テスト)				12. " (グループ戦)			
13. 実技 ソフトテニス (基本技能)				13. " (グループ戦・技能テスト)			
14. " (グループ戦)				14. 実技 生涯スポーツ (①)			
15. " (グループ戦・技能テスト)				15. 実技 生涯スポーツ (②)			
III. 講義の進め方							
基本的には実技中心で授業を進め、AおよびBクラスに分けて実施する。							
IV. 試験と成績評価							
各種目の基本技能・応用技能 (70%)							
授業の取り組み〔意欲・関心〕〔協調性・コミュニケーション〕〔安全への配慮〕 (30%)							
V. 授業外学修							
基本的な技能、ルールについての資料に事前に目を通して理解をしてから授業に臨むこと。							
運動にふさわしい服装、靴を準備して参加して下さい。							
VI. 使用教材							
教科書 : なし							
参考書 : なし							

科目名	総合英語 I	教員名	しばた 恵美子	開講 コース	環境農学	1年次	前期
I. 目的と内容および到達目標							
身近なトピックを通して、英語の4スキル（listening, speaking, reading, writing）を学ぶ。従来の翻訳型英語学習を離れ、すべて英語のテキストを通じて自然な英語にふれ、英語の質の向上をはかる。 到達目標は以下のとおりである。 ・academic and professional life に向けて、4 スキル向上をはかる。 ・documentary videos, short films 等の視聴を通じて実用的な英語表現を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑤ジェンダー ⑧成長・雇用							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. オリエンテーション Useful classroom language 2. UNIT1 Occupation SPEAKING(introducing yourself) GRAMMER(the verb be) 3. U.1 Occupation LISTENING(meeting people) READING(occupation) 4. U.2 Personal details SPEAKING(personal information) GRAMMER(possessives / Wh-questions) 5. U.2 Personal details LISTENING(personal information/numbers) READING(personal details) 6. U.3 Personal possessions SPEAKING(Personal possessions) GRAMMER(this/that, these/those) 7. U.3 Personal possessions LISTENING(identifying people and possessions, numbers) 8. Review U.1-3 Documentary videos, Further reading 9. U.4 Kinds of music SPEAKING(likes and dislikes) GRAMMER(simple present :like) 10. U.4 Kinds of music LISTENING(music preferences) READING(likes and dislikes) 11. U.5 Leisure activities(1) SPEAKING(suggesting things to do) GRAMMER(the simple present) 12. U.5 Leisure activities(1) LISTENING(free time activities) READING(What do you do for fun?) 13. U.6 Abilities SPEAKING(things you can do) GRAMMER(can and can' t) 14. U.6 Abilities LISTENING(things people can do) READING(people' s abilities) 15. Review U.4-6 Documentary videos, Further reading							
III. 講義の進め方							
授業計画に沿ってグループワーク、プレゼンテーション練習、real-life documentary videos の視聴などを取り入れ、受け身の学びではなく、各自が積極的に参加できるように進める。また、授業は主に英語で行う。							
IV. 試験と成績評価							
試験（ライティング 70%・オーラル 10%） ユニット毎に提出するリアクションペーパー（10%） 授業への参加（意欲・発表）状況（10%）							
V. 授業外学修							
・授業の進行に合わせて予習の範囲は適時指示する。 ・オンラインプラクティスクラスに登録し、各自復習する。							
VI. 使用教材							
教科書：Smart CHOICE (4th edition) Starter(OXFORD UNIVERSITY PRESS) 辞書：オリエンテーションで説明する。							

科目名	総 合 英 語 II	教員名	しばた 恵美子 新発田	開 講 コース	環境農学	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
総合英語 I のテキストを引き続き使用して、身近なトピックから 4 スキル (listening, speaking, reading, writing) を効率的に学び、各自の英語の幅を広げる。 ユニット毎の学習テーマを明確にし、演習問題にとりくみながら、学習内容の確認と定着を図る。 到達目標は以下のとおりである。 ・ユニット毎に総括練習をして学びの定着をはかる。 ・身近な話題を聞き取り、英語で考える。 <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ④教育 ⑤ジェンダー ⑧成長・雇用							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. UNIT 7 Clothing SPEAKING(present action) GRAMMAR(present continuous) 2. U. 7 LISTENING(What people are doing) READING(What people are doing) 3. U. 8 Household items SPEAKING (things in your home) GRAMMAR(there is and there are) 4. U. 8 LISTENING(looking for things) READING(describing rooms) 5. U. 9 Places around town SPEAKING (directions in a town) GRAMMAR(prepositions of place) 6. U. 9 LISTENING (following directions) READING(directions) 7. Review U. 7-9 (documentary videos, further reading) 8. U. 10 Food and drink SPEAKING(food and drink) GRAMMAR(count/ noncount nouns) 9. U. 10 LISTENING(recipe needs) READING(food and drink) 10. U. 11 Everyday places SPEAKING(when you were) GRAMMAR(past tense of be) 11. U. 11 LISTENING (where people were) READING(past activities and places) 12. U. 12 Leisure activities(2) SPEAKING(past activities) GRAMMAR(simple past) 13. U. 12 LISTENING(weekend activities) READING(past activities) 14. Review U. 10-12(documentary videos, further reading) 15. まとめとプレゼンテーション							
III. 講義の進め方							
授業計画に沿ってグループワーク、スピーキング練習、real-life documentary videos の視聴などを取り入れ、受け身の学びではなく、各自が積極的に参加できるように進める。また、授業は主に英語で行う。							
IV. 試験と成績評価							
試験 (ライティング 70%・オーラル 10%) ユニット毎に提出するリアクションペーパー (10%) 授業への参加 (意欲・発表) 状況 (10%)							
V. 授業外学修							
・授業の進行に合わせて予習の範囲は適時指示する。 ・オンラインプラクティスクラスに登録し、各自復習する							
VI. 使用教材							
教科書 : Smart CHOICE 4th edition STARTER (OXFORD UNIVERSITY PRESS) 総合英語 I に同じ							

科目名	総 合 英 語 Ⅲ	教員名	しばた 恵美子	開 講 コース	環境農学	2 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標 これまで学んできた 4 スキル (listening, speaking, reading, and writing) をさらに向上させ、これからの 学業や仕事を進めていくうえで、役にたつような英語能力の獲得を目指す。 到達目標は以下のとおりである。 ・実生活に役立つ英語スキルを向上させ、英語で表現できるようになる。 ・real-life documentary videos を活用して身近な話題にふれ、cross-cultural awareness、critical thinking を身につける。 <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ④教育 ⑤ジェンダー ⑧成長・雇用							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回] [前期] 1. UNIT1 Countries SPEAKING(Introductions) GRAMMAR(The verb be) 2. U.1 Countries LISTENING(Information questions) READING(Biographies) 3. U.2 Jobs SPEAKING(Comparing jobs) GRAMMAR(The simple present) 4. U.2 Jobs LISTENING(Personal information) READING(Three jobs) 5. U.3 Food SPEAKING(Likes and dislikes) GRAMMAR(Questions with do) 6. U.3 Food LISTENING(Ordering in restaurants) READING(Street food) 7. Review(documentary videos, further reading) 8. U.4 Sports SPEAKING(Habits and routines) GRAMMAR(Frequency adverbs) 9. U.4 Sports LISTENING(Leisure activities) READING(professional sports) 10. U.5 Daily activities SPEAKING(Daily activities) GRAMMAR(Present continuous) 11. U.5 Daily activities LISTENING(Describing activities) READING(Taking selfies) 12. U.6 Problems SPEAKING(Past events) GRAMMAR(Past tense of be) 13. U.6 Problems LISTENING(Problems) READING(Tribute bands) 14. Review(documentary videos, further reading) 15. まとめとプレゼンテーション							
III. 講義の進め方 積極的な授業への参加を促し、双方向のコミュニケーションをはかる。また、4 スキルの獲得と向上をはかるた めグループワーク、documentary videos, conversation videos などを利用する。授業は主に英語で行う。							
IV. 試験と成績評価 試験 (ライティング 70%・オーラル 10%) ユニット毎に提出するリアクションペーパー (10%) 授業への参加 (意欲・発表) 状況 (10%)							
V. 授業外学修 ・授業の進行に合わせて予習の範囲は適時指示する。 ・オンラインプラクティスクラスに登録し、各自復習する							
VI. 使用教材 教科書 : Smart CHOICE 4 th edition Level 1 (OXFORD UNIVERSITY PRESS) 参考書 : オリエンテーションで説明する							

科目名	総 合 英 語 IV	教員名	しばた 恵美子	開 講 コース	環境農学	2 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標 これからの学業や仕事を進めていくうえで、役にたつような英語能力の獲得を目指す。そのため、これまでの 4 スキル (listening, speaking, reading, and writing) を実践形式で学んでいく。 到達目標は以下のとおりである。 ・ 4 スキルを向上させ、実生活での英語表現の幅を広げる。 ・ real-life documentary videos を活用して身近な話題にふれ、cross-cultural awareness、critical thinking を身につける。 <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ④教育 ⑤ジェンダー ⑧成長・雇用							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回] [後期] 1. UNIT 7 Clothes SPEAKING (Talking about clothes) GRAMMAR (Comparative adjectives) 2. U. 7 Clothes LISTENING (Clothes comparisons) READING (Clothes shopping) 3. U. 8 Appearance and personality SPEAKING (Describing people) GRAMMAR (Be like and look like) 4. U. 8 Appearance and personality LISTENING (Describing people) READING (Describing friends) 5. U. 9 Local attractions SPEAKING (Tourist sites) GRAMMAR (Can and can't) 6. U. 9 Local attractions LISTENING (Describing attractions) READING (A famous city) 7. Review (Documentary videos and further reading) 8. U. 10 Places around town SPEAKING (Places around town) GRAMMAR (There is and there are) 9. U. 10 Places around town LISTENING (city facilities) READING (An airport) 10. U. 11 Vacation activities SPEAKING (Vacation activities) GRAMMAR (simple past) 11. U. 11 Vacation activities LISTENING (Describing vacations) READING (Hotel description) 12. U. 12 Transport SPEAKING (Further plans) GRAMMAR (Be going to +verb) 13. U. 12 Transport LISTENING (Transportation) READING (Driverless cars) 14. Review (Documentary videos and further reading) 15. まとめとプレゼンテーション							
III. 講義の進め方 積極的な授業への参加を促し、双方向のコミュニケーションをはかる。また、4 スキルの獲得と向上をはかるためグループワーク、real-life documentary videos などを利用する。授業は主に英語で行う。							
IV. 試験と成績評価 試験 (ライティング 70%・オーラル 10%) ユニット毎に提出するリアクションペーパー (10%) 授業への参加 (意欲・発表) 状況 (10%)							
V. 授業外学修 ・ 授業の進行に合わせて予習の範囲は適時指示する。 ・ オンラインプラクティスクラスに登録し、各自復習する							
VI. 使用教材 教科書 : Smart CHOICE 4 th edition Level 1 (OXFORD UNIVERSITY PRESS) 総合英語Ⅲに同じ							

科目名	英語コミュニケーションⅠ	教員名	しばた 恵美子	開 講 コース	環境農学	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標 自信をもってコミュニケーションすることは、自分自身を正確にまた適切に表現するために不可欠である。国際化が進む社会のなかで、母国語に加えて英語によるコミュニケーションのスキルアップを目的とする。 到達目標は以下のとおりである。 ・実践的な会話モデルや対話練習を通して、英語でのコミュニケーションに自信を持つ。 ・さまざまなトピックでボキャブラリーを確認する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑯平和 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回] [前期] - Lesson 1 & 2 Listening for formal and informal language - Lesson 3 Can you say that again? - Listen for repetition - Lesson 4 Nice weather, isn' t it? - Making small talk - Lesson 5 I love hip-hop! - Listen for differences - Lesson 6 My favorite movie is... - Asking about favorites / Returning questions - Lesson 7 What time is it? - Listen for times - Lesson 8 Would you try kayaking? - Asking for opinions / Giving options - Lesson 9 Do you have any brothers? - Asking about family / Describing family members - Lesson 10 She' s pretty smart. - Listen for personalities - Lesson 11 I love your shirt! - Giving compliments / Responding to compliments - Lesson 12 What' s she wearing? - Listen for descriptions - Lesson 13 When do you get up? - Asking about routines / Describing routines - Lesson 14 When do you get there? - Listen to ask a follow-up question - Lesson 15 What do you do first? - Asking about a sequence / Describing sequence - Lesson 16 What are you doing? - Listen for activities							
III. 講義の進め方 ・授業計画に沿って、教科書を中心に行う。 ・講義内容に応じたアクティビティ等を行うことがある。 ・授業は主に英語で行う。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は、定期テスト（80%）、課題ワーク・発表（20%）で行う。							
V. 授業外学修 ・予習範囲は、授業の進行に合わせて適宜指示する。 ・復習は、オンラインプラクティスにアクセスして各自のペースで行う。							
VI. 使用教材 教科書 : Speak Now 1 (Oxford University Press)							

科目名	英語コミュニケーションⅡ	教員名	しばた 恵美子	開 講 コース	環境農学	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
自信をもってコミュニケーションすることは、自分自身を正確にまた適切に表現するために不可欠である。国際化が進む社会のなかで、母国語に加えて英語によるコミュニケーションのスキルアップを目的とする。 到達目標は以下のとおりである。 ・実践的な会話モデルや対話練習を通して、英語でのコミュニケーションに自信を持つ。 ・さまざまなトピックでボキャブラリーを確認する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑯平和 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数: 1 単位、授業回数: 15 回]							
[前期] 1. Lesson 17&18 Where can I get a lamp? - Listen for suggestions 2. Lesson 19 Where's the mall? - Asking about locations / Describing locations 3. Lesson 20 Take a left. - Giving directions / Asking for clarification 4. Lesson 21 How much is coffee? - Asking about prices / Giving prices 5. Lesson 22 Will you take \$20? - Listen for bargained prices 6. Lesson 23 Do you ever buy books? - Asking about frequency / Describing frequency 7. Lesson 24 Your phone is so cool! - Listen for product features 8. Lesson 25 Do you eat much fruit? - Listen for eating habits 9. Lesson 26 We need onions. - Asking about needs / Describing needs 10. Lesson 27 Do you eat a big lunch? - Describing what I eat / Talking about healthy eating habits 11. Lesson 28 How does it taste? - Listen for descriptions 12. Lesson 29 I had a great weekend. - Listen for past events 13. Lesson 30 What time did you call? - Asking about past events 14. Lesson 31 You won't believe this! - Listen to people's reactions 15. Lesson 32 What are your plans? - Asking about future plans / Describing future plans							
III. 講義の進め方							
・授業計画に沿って、教科書を中心に行う。 ・講義内容に応じたアクティビティ等を行うことがある。 ・授業は主に英語で行う。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、定期テスト（80%）、課題ワーク・発表（20%）で行う。							
V. 授業外学修							
・予習範囲は、授業の進行に合わせて適宜指示する。 ・復習は、オンラインプラクティスにアクセスして各自のペースで行う。							
VI. 使用教材							
教科書 : Speak Now 1 (Oxford University Press)							

科目名	英語コミュニケーションⅢ	教員名	しばた 恵美子	開 講 コース	環境農学	2年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標 自信をもってコミュニケーションすることは、自分自身を正確にまた適切に表現するために不可欠である。国際化が進む社会のなかで、母国語に加えて英語によるコミュニケーションのスキルアップを目的とする。 到達目標は以下のとおりである。 ・自信を持って英語でコミュニケーションをすることができる。 ・さまざまなトピックでボキャブラリーを確認し、広げていく。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑯平和 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：15回] [前期] 1. Lesson 1&2 Where are you from? - Starting a conversation / Asking about appearance 2. Lesson 3 Alice is more serious. - Listen for personality traits 3. Lesson 4 All of my friends text. - Talking about qualities 4. Lesson 5 I' ve never had Thai food. - Listen for food experiences 5. Lesson 6 First, grill the bread. - Giving a series of instructions / Reminding someone of something 6. Lesson 7 The service is great. - Listen for opinions 7. Lesson 8 Are you ready to order? - Taking orders / Ordering food 8. Lesson 9 I have a sore throat. - Listen for health problems 9. Lesson 10 What should I do? - Asking for advice / Giving advice 10. Lesson 11 I' d love to try that! - Listen for activities 11. Lesson 12 Soccer is more exciting! - Asking for comparisons / Making comparisons 12. Lesson 13 I can write pretty well. - Describing abilities / Making recommendations 13. Lesson 14 I' d have to have... - Expressing necessity / Expressing lack of necessity 14. Lesson 15 I travel for free. - Listen for pros and cons 15. Lesson 16 Is the manager there? - Asking for someone on the phone / Asking about a job							
III. 講義の進め方 ・授業計画に沿って、教科書を中心に行う。 ・講義内容に応じたアクティビティ等を行うことがある。 ・授業は主に英語で行う。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は、定期テスト（80%）、課題ワーク・発表（20%）で行う。							
V. 授業外学修 ・予習範囲は、授業の進行に合わせて適宜指示する。 ・復習は、オンラインプラクティスにアクセスして各自のペースで行う。							
VI. 使用教材 教科書 : Speak Now 2 (Oxford University Press)							

科目名	英語コミュニケーションⅣ	教員名	しばた 恵美子	開 講 コース	環境農学	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標 自信をもってコミュニケーションすることは、自分自身を正確にまた適切に表現するために不可欠である。国際化が進む社会のなかで、母国語に加えて英語によるコミュニケーションのスキルアップを目的とする。 到達目標は以下のとおりである。 ・自信を持って英語でコミュニケーションをすることができる。 ・さまざまなトピックでボキャブラリーを確認し、広げていく。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑯平和 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：15回] [後期] - Lesson 17&18 That's sounds fun! - Talking about free-time activities / Showing interest - Lesson 19 I'm sorry, but I can't. - Listen for responses and excuses - Lesson 20 Sorry I'm late. - Apologizing / Responding to an apology - Lesson 21 Did you go alone? - Asking double questions / Describing past events - Lesson 22 Which do you prefer? - Listen for preferences - Lesson 23 You must get a visa. - Expressing prohibitions / Expressing obligations - Lesson 24 When is the next train? - Listen for prices and schedules - Lesson 25 I usually wear... - Asking about general behavior / Describing general behavior - Lesson 26 What do you think? - Listen for ideas - Lesson 27 Can you do me a favor? - Making requests / Agreeing to requests - Lesson 28 What is it used for? - Listen for uses - Lesson 29 I think it's fun! - Listen for opinions - Lesson 30 I feel the same way. - Agreeing with opinions / Disagreeing with opinions - Lesson 31 What would you do? - Listen for reactions to situations - Lesson 32 Then what happened? - Describing a series of events							
III. 講義の進め方 ・授業計画に沿って、教科書を中心に行う。 ・講義内容に応じたアクティビティ等を行うことがある。 ・授業は主に英語で行う。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は、定期テスト（80%）、課題ワーク・発表（20%）で行う。							
V. 授業外学修 ・予習範囲は、授業の進行に合わせて適宜指示する。 ・復習は、オンラインプラクティスにアクセスして各自のペースで行う。							
VI. 使用教材 教科書 : Speak Now 2 (Oxford University Press)							

科目名	ク リ ー ン 農 業 論	教員名	佐藤 毅 さとう たかし	開 講 コース	環境農学	1 年次	後 期																																													
I. 目的と内容および到達目標																																																				
20 世紀は大量生産・大量消費の時代となり、農業においては食の安全・安心が危ぶまれるとともに、環境に及ぼす負荷が増大し、このままの近代化には限界が見えてきた。本講義は、このような視点で農業の現状を理解するとともに、今後目指すべき 21 世紀の農業である環境保全型農業「クリーン農業」の理念と具体像を学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・ 人類の農耕開始から現代に至るまで、農業が環境とどのようにかかわってきたかを正しく認識する。 ・ 急速に近代化した農業がどのような環境問題を抱え、これからの農業がどうあるべきかを理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑥水・衛生 ⑧経済成長と雇用 ⑨イノベーション ⑫持続可能な生産と消費 ⑬気候変動 ⑮陸上資源																																																				
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]																																																				
[後期]																																																				
<table><tr><td>1. 農業と環境の関係</td><td>:</td><td>そもそも農業とは何か、環境とは</td></tr><tr><td>2. 農業生態系に関する基礎知識</td><td>:</td><td>自然生態系と農業生態系の違い</td></tr><tr><td>3. 拡大を続ける人類の活動</td><td>:</td><td>18 世紀の産業革命によって農業や食料生産はどう変化したか</td></tr><tr><td>4. 化学肥料の発明と普及</td><td>:</td><td>化学肥料が農業をいかに変え、農業環境に影響をもたらしたか</td></tr><tr><td>5. 化学肥料による環境負荷と軽減技術</td><td>:</td><td>化学肥料の使用量を合理的に減らすには</td></tr><tr><td>6. 有害生物の防除と化学農薬の開発</td><td>:</td><td>化学農薬が農業をいかに変え、そして環境に悪影響をもたらしたか</td></tr><tr><td>7. 農薬登録と安全性の確保</td><td>:</td><td>我が国の農薬登録制度、農薬の残留基準とは</td></tr><tr><td>8. 減農薬をいかに達成するか</td><td>:</td><td>IPM（総合的病害虫・雑草管理）とは</td></tr><tr><td>9. 遺伝子組換え作物</td><td>:</td><td>遺伝子組み換え作物の現状と北海道の取り組み</td></tr><tr><td>10. 日本の食料・物資の収支</td><td>:</td><td>日本の食料需給の不均衡、日本の輸出入の不均衡</td></tr><tr><td>11. 欧米の農業環境政策</td><td>:</td><td>アメリカの低投入持続的農業、EU の農業環境政策</td></tr><tr><td>12. 日本の農業環境政策</td><td>:</td><td>環境保全型農業の始まり、食の安全安心・規格・表示の取り組み経過</td></tr><tr><td>13. 農業の規範・基準</td><td>:</td><td>農業にも規範・基準の時代、GAP、ISO、HACCP、JAS、YES! clean</td></tr><tr><td>14. 環境行政と環境関連法令</td><td>:</td><td>時代とともに整備、発展してきた日本の環境法と環境政策</td></tr><tr><td>15. クリーン農業を学ぶ意味</td><td>:</td><td>めざすべき環境保全型農業とは</td></tr></table>								1. 農業と環境の関係	:	そもそも農業とは何か、環境とは	2. 農業生態系に関する基礎知識	:	自然生態系と農業生態系の違い	3. 拡大を続ける人類の活動	:	18 世紀の産業革命によって農業や食料生産はどう変化したか	4. 化学肥料の発明と普及	:	化学肥料が農業をいかに変え、農業環境に影響をもたらしたか	5. 化学肥料による環境負荷と軽減技術	:	化学肥料の使用量を合理的に減らすには	6. 有害生物の防除と化学農薬の開発	:	化学農薬が農業をいかに変え、そして環境に悪影響をもたらしたか	7. 農薬登録と安全性の確保	:	我が国の農薬登録制度、農薬の残留基準とは	8. 減農薬をいかに達成するか	:	IPM（総合的病害虫・雑草管理）とは	9. 遺伝子組換え作物	:	遺伝子組み換え作物の現状と北海道の取り組み	10. 日本の食料・物資の収支	:	日本の食料需給の不均衡、日本の輸出入の不均衡	11. 欧米の農業環境政策	:	アメリカの低投入持続的農業、EU の農業環境政策	12. 日本の農業環境政策	:	環境保全型農業の始まり、食の安全安心・規格・表示の取り組み経過	13. 農業の規範・基準	:	農業にも規範・基準の時代、GAP、ISO、HACCP、JAS、YES! clean	14. 環境行政と環境関連法令	:	時代とともに整備、発展してきた日本の環境法と環境政策	15. クリーン農業を学ぶ意味	:	めざすべき環境保全型農業とは
1. 農業と環境の関係	:	そもそも農業とは何か、環境とは																																																		
2. 農業生態系に関する基礎知識	:	自然生態系と農業生態系の違い																																																		
3. 拡大を続ける人類の活動	:	18 世紀の産業革命によって農業や食料生産はどう変化したか																																																		
4. 化学肥料の発明と普及	:	化学肥料が農業をいかに変え、農業環境に影響をもたらしたか																																																		
5. 化学肥料による環境負荷と軽減技術	:	化学肥料の使用量を合理的に減らすには																																																		
6. 有害生物の防除と化学農薬の開発	:	化学農薬が農業をいかに変え、そして環境に悪影響をもたらしたか																																																		
7. 農薬登録と安全性の確保	:	我が国の農薬登録制度、農薬の残留基準とは																																																		
8. 減農薬をいかに達成するか	:	IPM（総合的病害虫・雑草管理）とは																																																		
9. 遺伝子組換え作物	:	遺伝子組み換え作物の現状と北海道の取り組み																																																		
10. 日本の食料・物資の収支	:	日本の食料需給の不均衡、日本の輸出入の不均衡																																																		
11. 欧米の農業環境政策	:	アメリカの低投入持続的農業、EU の農業環境政策																																																		
12. 日本の農業環境政策	:	環境保全型農業の始まり、食の安全安心・規格・表示の取り組み経過																																																		
13. 農業の規範・基準	:	農業にも規範・基準の時代、GAP、ISO、HACCP、JAS、YES! clean																																																		
14. 環境行政と環境関連法令	:	時代とともに整備、発展してきた日本の環境法と環境政策																																																		
15. クリーン農業を学ぶ意味	:	めざすべき環境保全型農業とは																																																		
III. 講義の進め方																																																				
対面授業を基本とするが、コロナの状況等に応じてオンデマンド授業で行う可能性もある。 授業計画に沿って、プリントを配布し、パワーポイントを用いて講義する。 毎回、出席確認を兼ねて、授業内容の理解度等を確認する小テストを実施する。																																																				
IV. 試験と成績評価																																																				
毎回の小テスト（50％）と期末試験（50％）によって、到達目標の達成度を判定し成績評価を行う。																																																				
V. 授業外学修																																																				
毎回配布するプリントだけではなく、ルーズリーフ等を活用して、授業ファイルを作成することを勧めます。 予習として、関連する参考書を読んで生じた疑問点などをファイルに書きだして出席し、積極的に質問すること。復習として、プリントの記載だけではなく、ファイルに重要事項をまとめておくこと。																																																				
VI. 使用教材																																																				
教科書：プリントを毎回配付する。 参考書：『クリーン農業時代』相馬 暁監修（チクマ秀版社）、『北海道いま農業が面白い』『2020 年農業が輝く』相馬 暁（北海道新聞社）、『クリーン農業導入手引き書』北海道農政部編（北海道農業改良協会）2002、『地球をめぐる不都合な物質』日本環境化学会編集（講談社ブルーバックス）、『世界で最初に飢えるのは日本』鈴木宣弘（講談社+α 新書）																																																				
*実務経験のある教員による授業科目 [実務経験と授業との関係] 担当教員は、農業試験場での実務経験を有し、当該科目における農業の現状を理解するとともに、今後目指すべき 21 世紀の農業である環境保全型農業「クリーン農業」の理念と具体像について教授します。																																																				

科目名	地 域 振 興 論	教員名	工藤 遥 くどう はるか	開 講 コース	環境農学	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
本講義では、学術的な視点と実践的な視点から地域振興を検討することを目的とする。日本全体で人口が減少し、地域が衰退していく中で、現在、各自治体は地域創生の計画を策定し、実施することが求められている。今後、どの地域で生活する上でも地域の振興を考えることは避けられない。講義とグループワークを通じて地域が抱える課題について考える。 到達目標は以下のとおりである。 ・地域とは何かを理解できるようになる。 ・各地域が抱える課題について理解できるようになる。 ・意見や視点の多様性が問題解決には必要なことが理解できるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑨イノベーション ⑧成長・雇用 ⑪都市 ③保健 ⑩実施手段 他							
II. 授業計画〔単位数：2 単位、授業回数：15 回〕							
〔前期〕 1. 授業ガイダンス、地域振興とは 2. 人口減少と地域振興 3. 少子高齢化と地域生活 4. 都市化・過疎化と地域社会 5. 地域政策の歴史 6. 「地方創生」の概況 7. 地域課題とまちづくり 8. 中間まとめ、グループワーク 9. 地域経済・産業の再生、活性化 10. 地域ブランド 11. 観光まちづくり 12. 雇用、移住政策 13. 地域福祉 14. 持続可能性・SDGs と地域振興 15. まとめとふりかえり、グループワーク							
III. 講義の進め方							
スライドを使って講義をする。教科書は使用せず、適宜プリントを配布する。統計データや新聞記事、映像資料等も教材として使用する。授業の最後に出欠確認も兼ねたリアクションペーパーの提出を求める。意見交換や課題発表などのグループワークも実施する。なお、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
リアクションペーパー（50%）、グループワーク課題（10%）、期末レポート（40%）を総合的に評価する。							
V. 授業外学修							
地域毎に抱える課題は異なることから、自分の出身地や居住地、関心のある地域の情報について、ニュースや新聞記事、文献・資料、統計データなどを実際に調べるなどして普段から情報収集を行い、考えや感想などを記録しておくことを推奨する。							
VI. 使用教材							
教科書：使用しない（適宜プリントを配布） 参考書：適時紹介する							

科目名	国 際 農 業 論	教員名	村上 良一 むらかみ りょういち	開 講 コース	環境農学	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
日本は食料輸入大国であり、非常に大きな心配を抱えた国である。それは国内外の要因に規定された結果である。本講義では、その過程や構造について説明するため各国・地域の農政や国際交渉、農業関連企業の行動を採り上げて行う。 到達目標は以下のとおりである。 ・世界の農業生産構造と農産物貿易構造について基本的な理解ができる。 ・国際農産物貿易交渉の変遷と主要点について基本的な理解ができる。 ・世界の農業生産と食料供給に多大な影響を及ぼしている多国籍アグリビジネスについて基本的な理解ができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ①貧困 ②飢餓 ⑩不平等 ⑮陸上資源							
II. 授業計画〔単位数：2 単位、授業回数：15 回〕							
〔後期〕 1. 農業の社会的役割と現状の主要な生産方法が及ぼす地球環境への影響等の概要について講義 2. 世界の食料問題に影響を及ぼしている農産物供給・貿易構造の現状について講義(教科書 3 章) 3. 農業政策の歴史とガット・ウルグアイラウンド以降の国際農産物貿易交渉の変遷について講義(教科書 4 章) 4. 現段階における国際農産物交渉の対立点やその背景等について講義(教科書 4 章) 5. 周期的に生じつつある「食料危機」について事例紹介を中心に講義 6. ガット・ウルグアイラウンド以降の日本の農業政策の概要と特徴について講義 7. ガット・ウルグアイラウンド以降の米国、EU の農業政策の変遷の概観について講義 8. 多国籍アグリビジネスの概観について講義(教科書序章) 9. 多国籍アグリビジネスの活動について種子ビジネスを事例に講義(教科書 12 章) 10. 輸出志向型農業の問題点と多国籍アグリビジネスについて事例紹介を交えて講義(教科書 9 章) 11. 日本の食料事情に影響を与えつつある多国籍アグリビジネスの活動事例について講義(教科書 11 章) 12. 多国籍アグリビジネスの活動についてスマート農業を事例に講義(教科書 13 章) 13. 多国籍アグリビジネスの活動について海外農業投資を事例に講義(教科書 14 章) 14. 農業労働力のグローバル化について日本を事例に講義(教科書 15 章) 15. 今後の世界と日本の農業・食料事情の展望についての講義(教科書終章)							
III. 講義の進め方							
・講義形式で教科書、スライドを中心に用い、プリント配布、動画視聴などを適宜行う。 ・時々、前回の内容を確認するような発問を行うので、ノートを見ながらでもよいから答えられるように復習をよくしておくこと。 ・また、一部の授業回を遠隔授業方式で行うこともある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は小レポート(30%) 期末のレポート試験(70%) の合計で評価する。							
V. 授業外学修							
・教科書の章が明記されている授業回では事前に該当する章を読んで授業に臨むこと。 ・用語・事項を調べる時は『新版 キーワードで読みとく現代農業と食料・環境』を参考にすること。 ・食料・農業に関するニュースについて意識的にチェックしておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書：冬木勝仁・岩佐和幸・関根佳恵編『アグリビジネスと現代社会』(筑波書房) 参考書：谷口信和他『世界の農政と日本』(農林統計協会)、田代洋一『農業・食料問題入門』(大月書店)、小池恒夫他編『新版 キーワードで読みとく現代農業と食料・環境』(昭和堂)							

科目名	キャリアスキル	教員名	畠山・二木 小林 (孝)	開 講 コース	環境農学	1 年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
この科目は、就農・農業法人就職、農業関連産業等への就職、四年制大学への編入など、卒業後の進路希望に応じたクラスごとで展開する。 自己の生き方を探求するという観点から、自己啓発的な体験学習や討論などを通して、職業の選択決定に必要な能力・態度やコミュニケーション能力を養う。自己の充実や生き甲斐を目指し、生涯にわたって学習に取り組む意欲や態度を育成しながらビジネススキル(文章力、話す力、論理構築力など社会に出てからの仕事遂行能力)を高める。 到達目標は以下のとおりである。 ・自分を知り、社会・職業・学問等を学ぶことで将来の進路を考え、自分の興味・関心・能力・適性にあった進路計画を立てることができる。 ・「読む力」「書く力」「聞く力」「話す力」を向上させて、自己のライフプランが形成できる。 <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ②飢餓 ④教育 ⑧成長・雇用							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：30 回]							
[前期]				[後期]			
1. 大学での授業の受け方、過ごし方、履修指導				1. 夏季休暇中の取組成果発表、意見交換			
2. 進路学習セミナー、資格取得ガイダンス				2. 課題「地産地消・地産外商」発表、意見交換			
3. 進路別特別演習				3. 進路別特別演習			
4. 進路学習セミナー、自己紹介発表				4. 課題「世界の穀物・日本の穀物」発表、意見交換			
5. 自己分析、性格適性検査				5. 課題「過疎化・高齢化を活かす戦略」発表、意見交換			
6. 英語能力検定				6. 課題「地球温暖化と食糧生産」発表、意見交換			
7. 未来の自分探し、進路探し、我が道等自己 PR				7. 課題「6 次産業化の利点と課題」発表、意見交換			
8. 適性検査(クレペリン)				8. 進路別特別演習			
9. 課題「環境問題と農業」発表、意見交換				9. 課題「農産物の付加価値」発表、意見交換			
10. 課題「果たしたい社会貢献」発表、意見交換				10. 空知農協青年部との情報交換			
11. 課題「スマート農業」発表、意見交換				11. 接遇、マナーセミナー			
12. 進路別特別演習				12. 課題「農業の体質強化と自己の役割」発表、意見交換			
13. 進路別特別演習				13. 冬季休暇中の取組計画発表、意見交換			
14. 進路別特別演習				14. 冬季休暇中の取組成果発表、意見交換			
15. 夏季休暇中の取組計画発表、意見交換				15. 2 年次に向けた決意表明、意見交換			
III. 講義の進め方							
授業形態は、学年一斉、進路希望別等で学生の発表に基づく討論を中心に展開するとともに、進路別の取組課題を中心とした演習(進路別特別演習)を実施する。							
IV. 試験と成績評価							
学生個々の資質を高める取組を積極的に推進できたかを学生個々が行う発表・レポート (90%) 及び各種検定試験成績 (10%) を基に評価する。なお、発表・レポートについては、自分の興味・関心・能力・適性にあった進路計画を立てることができたか、「読む力」「書く力」「聞く力」「話す力」を向上させて、自己のライフプランが形成できたか、を評価する。							
V. 授業外学修							
「発表課題」について事前に充分調べることでそれぞれの発表者の考えが理解しやすくなる。また、意見交換での内容も深まります。							
VI. 使用教材							
参考書は必要に応じ実費で使用する。説明資料は適宜配付する。							

科目名	1 年 ゼ ミ ナ ー ル	教員名	各専任教員	開 講 コース	環境農学	1 年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標 ゼミナールは、各教員ごとに少人数のクラスで編成され、各学生はいずれかのゼミナールに所属する。1 年次に各学生が所属するゼミナール(以下、ゼミという)では、大学生活を円滑に送るための支援をするとともに、他の科目の補助となる基礎を学ぶ。また、見学研修、農場公開デー、農業セミナー及びゼミ成果発表会にはゼミ活動として参加し、農業への理解を深めるとともに、レポート作成をとおして「自ら学び・成長していく能力」(スタディ・スキル)の基礎を身につける。なお、ゼミ授業の内容はそれぞれのゼミに応じて多様に設定される。学生には自己のスタディ・スキルを日常的に向上させる取組を奨励する。 到達目標は以下のとおりである。 ・履修科目の選定ができ、学習目標を設定できる。 ・設定された課題についてレポートにまとめることができる。 ・文章読解、文章表現、議論、調査、発表などの技法の基礎力を備えている。 <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ②飢餓 ④教育 ⑦エネルギー ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑫生産・消費 など							
II. 授業計画 [単位数：4 単位、授業回数：30 回] [前・後期] 授業は各ゼミの内容展開に応じて特定の課題に制約されずに展開される。なお、見学研修、農場公開デー、農業セミナー及びゼミ成果発表会等への参加は「1 年ゼミナール」に位置づける。							
III. 講義の進め方 各ゼミ担当教員が具体的に提示する方法・資料・教材などを基に、各学生の自発・自主的な学習を中心とした進め方となる。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は、ゼミ課題レポート (60%)、見学研修報告 (10%)、農場公開デー研修報告 (10%)、農業セミナー研修報告 (10%)、ゼミ成果発表会研修報告 (10%) で行う。 履修科目の選定ができ、学習目標を設定できたか、また、設定された課題についてレポートにまとめることができたか、評価する。							
V. 授業外学修 実習農場で栽培している作物の種類や試験課題を理解するとともに、図書館で保管されている先輩方の卒論を読んで自分自身で学習目標を出来るだけ早く設定することが大切です。							
VI. 使用教材 各ゼミ担当教員が「1 年ゼミナール」の時間に具体的に指示する。							

科目名	2 年 ゼ ミ ナ ー ル	教員名	各専任教員	開 講 コース	環境農学	2 年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
2 年次は専門的なゼミが展開される。1 年次の 1 月に各ゼミの内容説明を受けた後、志願票を提出して、所属するゼミが決定する。卒論演習(選択科目)を履修する学生は、ゼミ担当教員の指導を受けることになる。 この科目の内容はそれぞれのゼミに応じて多様に設定される。また、農場公開デーにおいては、各学生は取り組んでいる研究概要を来場者に説明しなければならない。後期末の 1 月下旬のゼミ成果発表会では、各学生が 1 年間の成果を学会形式で発表する。 到達目標は以下のとおりである。 ・自己が取り組む研究について理解し、説明できる。 ・設定された課題について十分な根拠に基づいたレポートにまとめることができる。 ・文章読解、文章表現、議論、調査、発表などの技法の基礎力を備えている。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ④教育 ⑦エネルギー ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑫生産・消費							
II. 授業計画 [単位数：4 単位、授業回数：30 回]							
[前・後期] 授業は各ゼミの内容展開に応じ特定の課題に制約されずに展開する。農場公開デー、農業セミナー及びゼミ成果発表会等は「2 年ゼミナール」活動に位置づける。							
III. 講義の進め方							
各ゼミ担当教員が具体的に提示する方法・資料・教材などを基に、各学生の自発・自主的な学習を中心とした進め方となる。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、ゼミ毎に提示された課題レポート(60%)、農場公開デー準備・実践(10%)、農業セミナー研修報告(10%)、ゼミ成果発表会発表準備・発表(20%)で評価する。 また、ゼミ成果発表会では、学会形式に従った発表をすることができたか、評価する。							
V. 授業外学修							
農業の現状を理解することで、適切な研究課題の設定や試験結果の結論に結びつけることができます。農業白書や農林水産省のホームページなどを参考に、現状や課題を整理してみましょう。							
VI. 使用教材							
各ゼミ担当教員が「2 年ゼミナール」の時間に具体的に指示する。							

科目名	コンピュータ概論	教員名	まつはし ゆうみ 松橋 祐美	開 講 コース	環境農学	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
この講義の目的はパソコンおよび周辺機器とインターネットなどの情報通信を不安なく使用でき、さらに大学生生活はもちろんのこと、社会生活で活用できる技術の習得を目的とする。 講義はパソコンを使用した実技で行い、コンピュータ・インターネットとその基礎を学び、ワープロ（Word）・表計算（Excel）・プレゼンテーション（PowerPoint）を使用しさまざまな場面で活用することができる技術を習得する。 到達目標は以下のとおりである。 ・インターネットを利用し情報の活用と学内 e-learning やメールシステムを不安なく使用できる。 ・パソコンの基本操作を理解し、データの保存・活用・共有ができる。 ・各ソフトの基本操作から学び、レポートや研究などに活用できる。 <SDG s（接続可能な開発目標）との関連> ④教育							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[前期]							
1. コンピュータ環境とインターネット（パスワード管理、Web メールの設定と送受信）・遠隔教育システム（e-learning システム、課題の閲覧と提出方法、情報倫理）の理解 2. Word の基本操作および保存先・保存媒体の理解・文書編集と作表と通信文書 3. 文字入力と文書編集・作表の応用、遠隔教育システムの活用と理解 4. Excel の基本操作および四則演算と保存 5. 計算機能（統計関数および標準偏差とばらつきの理解） 6. 作表と関数の応用、遠隔教育システムの活用 7. 作表とグラフ作成（Excel と Word の連携とリンク機能） 8. PowerPoint の基本操作・プレゼンテーション技術と図形の活用および印刷の設定 9. PowerPoint を使用してのプレゼンテーション資料作成 10. Excel のその他の関数とデータベース機能・グラフの活用と他ソフトのリンク機能 11. 文書作成応用技術と文書編集 12. 文書作成応用技術と文書編集活用 13. データ活用と応用問題 14. 情報通信技術と応用問題 15. 各ソフトの活用と応用問題							
III. 講義の進め方							
テキストと e-learning を使用しパソコンの実技演習を行う。毎講義 e-learning を利用し当日の課題の確認、提出などを通して学内のシステムを活用しインターネット等データの送受信の理解を深める。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。課題の提出は e-learning システムを活用する。 学内で受験可能なコンピュータサービス技能評価試験（能力開発協会）、P 検の資格取得が目指せるように進める。							
IV. 試験と成績評価							
講義毎の課題の提出で完成度を含めた理解度を確認し成績の評価（80%）とし、試験は行わない。授業への出席確認メール送信および e-learning を利用した課題提出評価（20%）とする。							
V. 授業外学修							
講義時間外のコンピュータ室を利用できる時間を活用し学内の環境になれるために積極的に利用を勧める。 また、授業時間内に完成しなかった提出済の課題については、空き時間を活用し授業後 5 日以内であれば再提出を受け付ける。							
VI. 使用教材							
教科書：オリジナルテキストを使用する。 参考書：							
*実務経験のある教員による授業科目 [実務経験と授業との関係] 担当教員は、IT 活用の実務経験を有し、パソコンおよび周辺機器とインターネットなどの情報通信を不安なく使用でき、社会生活で活用できる技術について教授します。							

科目名	農業基礎実験・実習 ＜実 験＞	教員名	岡田・上西・山黒 島山・二木・藤田	開 講 コース	環境農学	1 年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
農業基礎実験・実習は、一年間をととして屋外の圃場および実験室内で作物を扱い、農業の基礎を学ぶことを目的とする。圃場実習では、栽培経験が全くない学生を想定し、作物ごとに播種から栽培管理、収穫・出荷調整までを実習する。また、農作業機械の基礎についても学ぶ。 室内実験では、実験器具の取り扱い方や作物の計測方法、データの取り方、まとめ方、考え方を学ぶ。また、屋外・室内で植物の観察をととして、植物の体のしくみ、微生物による土のはたらきを学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・作物栽培の基礎を習得し、栽培暦を作成し、基本的な栽培管理が実践できる。 ・作物の生育調査・収穫調査をととして、作物の収量構成要素・内部品質について理解し説明ができる。 ・植物各器官の観察をととして、科学的思考力を伸ばし植物の体の仕組みについて理解し説明できる。 ・作物の栽培調査・実験をととして、農業分野の発展を図る能力と態度を身につける。 ・科学レポートの書き方を理解し、科学レポートの作成ができる。 ＜SDGs（持続可能な開発目標）との関連＞ ②飢餓 ⑫生産・消費							
II. 授業計画（室内実験）[単位数：4 単位、授業回数：2 3 回]				2 コマ連続授業			
[前期]				[後期]			
1. オリエンテーション、実験器具・顕微鏡の使い方				1. アミロプラストとデンプン粒子の観察			
2. 花の構造観察（実体顕微鏡）				2. DNA 抽出実験・カッテージチーズ製造実験			
3. 作物の生長点の観察				3. 気孔の観察			
4. 顕微鏡観察、無菌播種した外殖体の置床				4. 維管束の観察（根）			
5. 播種深度試験播種、外殖体観察				5. 維管束の観察（茎・葉）			
6. 播種深度試験観察、農場作物観察、外殖体観察				6. 種子保存試験置床			
7. 光合成試験播種準備、播種深度試験観察				7. 科学レポート指導、種子保存試験調査、化学反応実験			
8. 播種深度試験最終調査、継代培養				8. 種子保存試験データ整理、授業のまとめ			
9. 光合成試験播種、播種深度試験データのまとめ							
10. 科学レポート指導、光合成試験・継代培養観察							
11. 光合成試験観察・間引き、農場作物観察							
12. 光合成試験観察、山野草観察、バイテク試験順化							
13. 光合成試験収穫調査、							
14. 科学レポート指導、原形質流動観察、ポット上げ							
15. 花粉管発芽観察							
III. 講義の進め方							
気象条件や材料の都合で予定を変更することがある。 実験・実習は同じテーマに関して数回にわたって行われるので、終了後にレポートを提出する。							
IV. 試験と成績評価							
提出された実験・実習記録ファイル(20%)、レポート(40%)、普段の実験・実習への達成度（40%）で評価する。 また、無断で欠席しデータを得られない場合は、成績に関係する。実験・実習の合計を評価とする。							
V. 授業外学修							
実験の進捗状況に合わせて課題等を提示するので事前学修や復習することで作物生産に必要な植物や野菜の基礎知識を理解するとともに深めることが出来ます。							
VI. 使用教材							
教科書：特になし 日誌・資料：各自に配布。但し、持ち帰り不可、所定の場所に保存する。							
*実務経験のある教員による授業科目 [実務経験と授業との関係]							
担当教員は、農業改良普及員としての実務経験を有し、作物ごとに播種から栽培管理、収穫・出荷調整まで、農業の基礎について教授します。							

科目名	農業基礎実験・実習 ＜実 習＞	教員名	岡田・上西・山黒 島山・二木・藤田	開 講 コース	環境農学	1 年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
農業基礎実験・実習は、一年間をととして屋外の圃場および実験室内で作物を扱い、農業の基礎を学ぶことを目的とする。圃場実習では、栽培経験が全くない学生を想定し、作物ごとに播種から栽培管理、収穫・出荷調製までを実習する。また、農作業機械の基礎についても学ぶ。 室内実験では、実験器具の取り扱い方や作物の計測方法、データの取り方、まとめ方、考え方を学ぶ。また、屋外・室内で植物の観察をととして、植物の体のしくみ、微生物による土のはたらきを学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・作物栽培の基礎を習得し、栽培暦を作成し、基本的な栽培管理が実践できる。 ・作物の生育調査・収穫調査をととして、作物の収量構成要素・内部品質について理解し説明ができる。 ・植物各器官の観察をととして、科学的思考力を伸ばし植物の体の仕組みについて理解し説明できる。 ・作物の栽培調査・実験をととして、農業分野の発展を図る能力と態度を身につける。 ・科学レポートの書き方を理解し、科学レポートの作成ができる。 ＜SDGs（持続可能な開発目標）との関連＞ ②飢餓 ⑫生産・消費							
II. 授業計画（実習）[単位数：4 単位、授業回数：2 3 回]				2 コマ連続授業			
〔前期〕 1. オリエンテーション、ミニトマト播種 2. ミニトマト鉢上げ、ハウス展張、肥料計算 3. 水稻播種、葉物野菜播種、土壌改良資材計算 4. カボチャ、ストック播種、ミニトマトハウス準備 5. カボチャ鉢上げ、ミニトマト定植準備（灌水チューブ設置、マルチ設置）、ストック八重鑑別 6. ミニトマト定植準備（支柱立て、穴あけ）、パレイショ植え付け、タマネギ定植 7. 田植え、ミニトマト定植、葉物収穫調査、レポートの書き方 8. カボチャ定植、水稻苗観察、ニンジン播種 9. スtock定植、ソバ、播種 10. ミニトマト整枝誘引、カボチャ整枝 11. パレイショ培土、農業機械説明 12. 水稻幼穂観察、ニンジン他除草、 13. 土壌断面調査、タマネギ除草 14. スtock採花、ニンジン除草 15. エダマメ根粒菌調査、ミニトマト整枝誘引				〔後期〕 1. パレイショ収穫調査、レポートの書き方 2. かぼちゃ収穫調製 3. ニンジン収穫調製 4. タマネギ収穫調製 5. 水稻歴代品種収穫調査 6. 水稻収量構成要素調査 7. 収穫物の製品作り 8. 水稻レポートの書き方			
III. 講義の進め方							
気象条件や材料の都合で予定が変更されることがある。後期は必要に応じて9回以降も講義を行う。 実験・実習は同じテーマに関して数回にわたって行われ、終了後にレポートを提出する。 1. 本実験・実習はすべての講義科目と連動し、基礎となる科目である。意識して受講することを望む。 2. 圃場での実習や室内実験は各回連続性があるので遅刻や無断欠席のないこと。 3. 実習服の指定はないが、清楚で実習しやすい服装であること。長靴は各自用意し、特に寒い時期は温かい服装を心がける。実習棟には各自のロッカーを用意するので整理整頓に努める。 4. 屋外での実習中は、教員が全体に目が届かないことがあるので、農場職員の指示・指導にも従うこと。							
IV. 試験と成績評価							
提出された実験・実習記録ファイル(10%)、レポート(40%)、小テスト(10%)、普段の実験・実習への達成度(40%)で評価する。また、無断で欠席しデータを得られない場合は、成績に関係する。実験・実習の合計を評価とする。							
V. 授業外学修							
授業後に実験・実習記録ファイルを整理し、農業用語および作業の意味に対する理解を深めること。事前学修として次週の授業テーマにあった課題を随時提出することから、積極的に取り組むこと。							
VI. 使用教材							
日誌・資料：各自に配布。但し、持ち帰り不可、所定の場所に保存する。 *実務経験のある教員による授業科目〔実務経験と授業との関係〕 担当教員は、農業改良普及員としての実務経験を有し、作物ごとに播種から栽培管理、収穫・出荷調整まで、農業の基礎について教授します。							

科目名	農 業 研 修	教員名	二木 浩志 山黒 良寛	開 講 コース	環境農学	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
農業研修の本体部分は、2年次の7月末から8月前半（場合によっては1年次3月からの休暇期間または2年次前期の休日）の計15日間、農家または農業関連企業等に1人ずつ滞在（農家においては宿泊）し、実務研修を受けることである。 1年次後期に実施する農業研修授業は、研修先の選定作業と、農業研修に必要な心構えや農業情報の事前学習等を行う場である。これにより研修で何を学び、それを将来目標にどう活かすかを思考、構築する。 到達目標（15日間の農業研修終了時）は以下のとおりである。 ・新たな産業形成と雇用創出にむけた農業・企業経営体の現状を理解し、実務についての技術と知識を身につける。 ・農家、企業の人々との協働をとおして、社会性やチームワーク力を身につける。 ・実社会に対応できる、自立した社会人となるための心構えや実践力を身に付ける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション							
II. 授業計画〔単位数：2単位、授業回数：15回〕							
〔後期〕 1. 農業研修の意味 2. 農業研修基本資料の作成 3. 「研修生紹介カード」の作成 4. 「我が家の経営」（実家農家学生）の作成 5. 日本農業の概況（座学） 6. 日本農業の現状（座学） 7. 北海道農業の概況（座学） 8. 北海道農業の現状（座学） 9. 研修地域の特徴（座学） 10. 農業現場の常識、慣行、農作業安全（座学） 11. 2年による農業研修体験報告 12. 研修先の選定（農業関連企業等、その他） 13. 研修先の選定（稲作、畑作） 14. 研修先の選定（野菜・花き等の園芸） 15. 研修開始へ向けた準備作業							
III. 講義の進め方							
PowerPoint 資料を中心に講義するが、適宜プリントも配布する。 農業研修「授業」は、全体としては1年次後期と2年次前期の2部構成になっており、1年次後期は、各自の希望を明らかにして研修先を絞り込む重要な作業が含まれている。従って、全員での座学もあるが、少人数に分けての協議も行う。							
IV. 試験と成績評価							
1年後期の農業研修「授業」については、それ単独では定期試験や成績評価は行わない。農業研修の最終的な成績評価は、2年の①15日間の研修中に作成する研修日誌、②教員による巡回指導状況、③研修先から返送される研修生評価表、④1年後期と2年前期の農業研修「授業」の取り組み状況の4つを総合して評価する。							
V. 授業外学修							
北海道の農業状況について資料を配付し、事前に課題を指示（6回）する。次授業時冒頭で発表出来るよう準備する。レポートとして提出する。							
VI. 使用教材							
教科書 : なし。 参考書 : なし。座学の資料は随時配布する。							

科目名	農 業 研 修	教員名	二木 浩志 山黒 良寛	開 講 コース	環境農学	2年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
2年次の7月末から8月前半（場合によっては1年次3月からの休暇期間内または2年次前期の休日）の計15日間、農家または農業関連企業等に1人ずつ滞在（農家においては宿泊）し、実務研修を受けるのが科目「農業研修」の本体部分である。 2年次前期に実施する農業研修授業は、研修先の確定作業と農業研修に必要な心構えや農業情報の事前学習等を行う場である。 到達目標（15日間の農業研修終了時）は以下のとおりである。 ・新たな産業形成と雇用創出にむけた農業・企業経営体の現状を理解し、実務についての技術と知識を身につける。 ・農家、企業の人々との協働をとおして、社会性やチームワーク力を身につける。 ・実社会に対応できる自立した社会人となるための心構えや実践力を身に付ける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[前期] 1. 既（春期）研修者による体験報告 2. 研修先の確定（稲作） 3. 研修先の確定（畑作） 4. 研修先の確定（野菜・花卉） 5. 研修先の確定（畜産、農業関連企業等） 6. 研修先の再調整 7. 農業研修基本資料の作成（“研修生紹介カード”等） 8. 農業研修基本資料の作成（“我が家の経営”等） 9. 農業現場対応の座学（農家経営など） 10. 農業現場対応の座学（法人化など） 11. 農業現場対応の座学（農地法など） 12. 農業現場対応の座学（農作業安全など） 13. 研修開始へ向けた準備作業（全体説明） 14. 研修開始へ向けた準備作業（研修日誌記入法、病虫害蔓延防止対策、礼状等の書き方など） 15. 研修開始へ向けた準備作業（準備作業の点検）							
III. 講義の進め方							
PowerPoint 資料を中心に講義するが、適宜プリントも配布する。 農業研修授業は、1年次後期と2年次前期の2部構成になっており、2年次後期は、各自の研修先を確定させる重要な作業が含まれている。従って、全員での座学もあるが、少人数に分けての協議も行う。							
IV. 試験と成績評価							
農業研修の最終的な成績評価は、以下の4つを総合して行う。 ①15日間の研修中に作成する研修日誌(25%)、②研修中の教員による巡回指導状況(25%)、③研修先から返送される研修生評価表(25%)、④1年後期・2年前期の農業研修「授業」の取り組み状況(25%)の4つを総合して評価する。							
V. 授業外学修							
農業用語等については、事前に課題を指示（4回）する。次授業時冒頭で発表出来るよう準備する。レポートとして提出する。							
VI. 使用教材							
教科書：なし。研修日誌を配布する。 参考書：なし。座学の資料は随時配布する。							

科目名	水 稻 生 産 学	教員名	おかだ か・なこ 岡田 佳菜子	開 講 コース	環境農学	2 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標 お米は世界 38 億人の主食であり、エネルギー供給源として重要な役割を果たしている。日本人は、カロリーの 25% をお米に頼っている。本講義では、日本のお米の生産地である北海道における水稻栽培体系を、播種から収穫、調整まで各生育時期の水稻の生育特性をしり、どのような管理がなぜ必要かを理解できるよう講義を進める。 到達目標は以下のとおりである。 ・水稻における各栽培管理の役割を理解する。 ・水稻の生育と収量、品質の関係について理解する。 ・水稻栽培に関わる専門用語を理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑨イノベーション、⑫生産・消費							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回] [前期] 1. 米の生産状況 2. 北海道の水稻の特徴 3. 水稻の遺伝と品種改良 4. 育苗と移植 5. 耕起と施肥 6. 水管理 7. 雑草・病害虫防除 8. 収穫・乾燥・脱穀・貯蔵 9. 外観品質・食味 10. 気象と栽培管理 11. 北海道の水田土壌 12. 直播栽培 13. 田畑輪換 14. 糯（もち）品種の特性と栽培 15. 加工用米、飼料米の特性と栽培							
III. 講義の進め方 プリント、プロジェクターを使い講義をすすめる。 講義内容の理解度を確認するため、毎回、小テストを行う。							
IV. 試験と成績評価 成績の評価は、小テスト（20%）、定期試験（80%）から評価する。							
V. 授業外学修 毎回の授業内容の積み上げ式で理解が進みます。「復習」がもっとも大切である。 ・1 年次に学んだ農業用語をもう一度見直して受講する。 ・新しくならう専門用語は、毎回復習して意味を確認して、次の授業を受講する。 ・授業で理解したことは、聞いたことも含め自己流にノートを取り復習に活用する。 授業の進行に合わせて予習の範囲を適時指示する。							
VI. 使用教材 教科書 ：使用しない 参考書 ：適宜紹介する							

科目名	畑作物生産学	教員名	ふたつき ひろし 二木 浩志	開講 コース	環境農学	2年次	前期
I. 目的と内容および到達目標							
本講で扱う畑作物とは、主要畑作4品である小麦、豆類、ばれいしょ、てんさいである。これらの作物はヒトに生存と活動のためのエネルギーを供給するため、広い面積で極力手間をかけずに粗放的に栽培される。面積当たりの利益も大きくない。それだけに、なるべく労力と経費をかけずに、少しでも収穫量を多くする技術が重要となる。併せて、作物を原料として受け入れる実需者側の品質上の要求にも応えなければならない。それぞれの作物ごとに由来、利用法、特性、栽培暦、栽培技術、品質上の栽培目標、品種などを逐次解説する。 到達目標は以下のとおりである。 ・畑作物にかかわる主要用語を理解し、学習を深めるためおよび生産現場などで活用できる。 ・個々の畑作物の由来と特性を理解し、世界の食糧事情に関心を持つ。 ・畑作物の栽培管理の要点と課題を知り、栽培に活用できる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑫生産・消費 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[前期] 1. 世界の畑作物 2. 輪作と雑草対策 3. 小麦の特性 4. 小麦の生産技術 5. 小麦の品質評価項目と栽培法 6. 豆類の特性 7. 豆類の生産技術 8. 豆類の品目と品種 9. ばれいしょの特性 10. ばれいしょの生産技術 11. ばれいしょの生産技術と品種 12. てんさいの特性 13. てんさいの移植栽培 14. てんさいの直播栽培 15. 畑作物低コスト生産技術							
III. 講義の進め方							
PowerPoint 資料を主体に講義するが、プリントも適宜配布する。							
IV. 試験と成績評価							
定期考査（30%）、小テスト(50%)、課題レポート発表(20%)で評価する。							
V. 授業外学修							
授業の進行に合わせて予習範囲は適時指示する。 作物栽培についての課題レポート提出のため、事前に資料を収集すること。予習範囲は別に指示する。 配布したプリントは必ずファイルして、それ以降の講義に持参すること。講義中に過去のプリントを用いて復習することがある。畑作実習を履修する学生は本授業の単位を必ず取得すること。							
VI. 使用教材							
教科書：プリントおよび関連資料を配付する 参考書：2020 北海道の作物管理、北海道農業入門「畑作編」北海道農業改良普及協会							

科目名	野 菜 生 産 学	教員名	やまくろ 山 黒 よしひろ 良 寛	開 講 コース	環境農学	2 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
野菜は種類、栽培法、作型が多岐にわたっている。農業後継者や新規就農者の中に高収益を目指して野菜を導入することが多い。この授業では、野菜園芸の歴史や発展および輸送、品質保持など基本技術を中心に学ぶとともに、さらに個々の野菜品目、品種、作型について学ぶ。農業経営の中で野菜栽培管理に応用できる実践的栽培技術の習得に力をいれた内容である。 到達目標は以下のとおりである。 ・野菜園芸の意義を理解しその生産状況や栽培の基礎が説明できる。 ・主要な野菜について生育と生理を理解し、栽培方法が説明できる。 ・持続可能な農業技術を理解し、その目的を説明できる。 ・主要な野菜栽培ができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑫生産・消費							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. 野菜園芸の意義、経営様式の分化、産地形成、生産状況 2. 品種と作型 3. 生長と発育 (1) 種子、茎葉 4. 生長と発育 (2) 地下部 5. 生長と発育 (3) 花成と抽だい 6. 生長と発育 (4) 果菜類の花と果実の発育 7. 生長と発育 (5) 品質 8. 生長と発育 (6) 貯蔵 9. 野菜栽培の実際：養液栽培と植物工場 10. ナス科野菜の栽培 11. ウリ科野菜の栽培 12. バラ科野菜の栽培 13. アブラナ科野菜、根菜類の栽培 14. マメ科、葉物野菜の栽培 15. ユリ科野菜の栽培、病虫害防除と IPM							
III. 講義の進め方							
テキスト、プリント資料、ppt による実際の栽培状況および一般的な板書の説明による授業を行う。							
IV. 試験と成績評価							
随時レポート(20%)、数回の小テスト(20%)、講義毎のリアクションペーパー (20%)、授業に臨む姿勢・取り組み態度(40%)により総合的に成績を評価する。							
V. 授業外学修							
「授業計画」にある内容について、参考図書を読んでから授業に参加すること。 配布されたプリントは、次の授業までに再度読み直して授業に参加すること。							
VI. 使用教材							
教科書 : 北海道農業入門「野菜編」北海道農業改良普及協会 参考書 : 「北海道野菜地図その 46」北海道農業協同組合中央会							

科目名	花 卉 生 産 学	教員名	こばやし たかお 小林 孝夫	開 講 コース	環境農学	2年次	前 期																														
I. 目的と内容および到達目標																																					
花卉は農業総生産額の 4%を占める農業の重要な一分野であり、今後も花卉の需要の拡大が期待されている。花卉は、観賞用作物であることから嗜好性が強く、種類・品種が極めて多く、また、品質に対する要求が高いことから、資本と労力を投入し、高度な技術を駆使して良質の生産物を生産しなければならない。さらに、流通の変化に対応した経営が求められている。 本講義では、花卉生産に必要な基礎の理論、技術を紹介し、花卉生産の実践に役立てる。 到達目標は以下のとおりである。 ・花卉の形態や生理・生態に関する基本事項を理解し、それらを説明することができる。 ・専門用語を正しく理解し、指導書や専門書を読解することができる。 ・花卉生産を制御する手立てとその特徴を理解し、それらを説明することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑫生産・消費 ⑮陸上資源 ⑪都市																																					
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]																																					
[前期]																																					
<table><tr><td>1. 花きの生産、消費の現状</td><td>(教科書 第1章-1)</td></tr><tr><td>2. 花きの利用とデザイン</td><td>(教科書 第1章-3)</td></tr><tr><td>3. 花きの分類と形態</td><td>(教科書 第1章-2)</td></tr><tr><td>4. 花きの成長・開花と環境</td><td>(教科書 第2章-2)</td></tr><tr><td>5. 花きの開花調節技術（温度）</td><td>(教科書 第2章-2)</td></tr><tr><td>6. 花きの開花調節技術（日長）</td><td>(教科書 第2章-2)</td></tr><tr><td>7. 花きの成長と草姿の調節</td><td>(教科書 第2章-2)</td></tr><tr><td>8. 花きの繁殖方法</td><td>(教科書 第2章-3)</td></tr><tr><td>9. 花きの育種</td><td>(教科書 第2章-4)</td></tr><tr><td>10. 土壌の性質と施肥</td><td>(教科書 第2章-5)</td></tr><tr><td>11. 花きの品質と品質保持</td><td>(教科書 第2章-6)</td></tr><tr><td>12. 苗の生産</td><td>(教科書 第3章-1)</td></tr><tr><td>13. 鉢物生産</td><td>(教科書 第3章-2)</td></tr><tr><td>14. 切り花生産（1年草、宿根草）</td><td>(教科書 第3章-3)</td></tr><tr><td>15. 切り花生産（球根類、花木）</td><td>(教科書 第3章-4)</td></tr></table>								1. 花きの生産、消費の現状	(教科書 第1章-1)	2. 花きの利用とデザイン	(教科書 第1章-3)	3. 花きの分類と形態	(教科書 第1章-2)	4. 花きの成長・開花と環境	(教科書 第2章-2)	5. 花きの開花調節技術（温度）	(教科書 第2章-2)	6. 花きの開花調節技術（日長）	(教科書 第2章-2)	7. 花きの成長と草姿の調節	(教科書 第2章-2)	8. 花きの繁殖方法	(教科書 第2章-3)	9. 花きの育種	(教科書 第2章-4)	10. 土壌の性質と施肥	(教科書 第2章-5)	11. 花きの品質と品質保持	(教科書 第2章-6)	12. 苗の生産	(教科書 第3章-1)	13. 鉢物生産	(教科書 第3章-2)	14. 切り花生産（1年草、宿根草）	(教科書 第3章-3)	15. 切り花生産（球根類、花木）	(教科書 第3章-4)
1. 花きの生産、消費の現状	(教科書 第1章-1)																																				
2. 花きの利用とデザイン	(教科書 第1章-3)																																				
3. 花きの分類と形態	(教科書 第1章-2)																																				
4. 花きの成長・開花と環境	(教科書 第2章-2)																																				
5. 花きの開花調節技術（温度）	(教科書 第2章-2)																																				
6. 花きの開花調節技術（日長）	(教科書 第2章-2)																																				
7. 花きの成長と草姿の調節	(教科書 第2章-2)																																				
8. 花きの繁殖方法	(教科書 第2章-3)																																				
9. 花きの育種	(教科書 第2章-4)																																				
10. 土壌の性質と施肥	(教科書 第2章-5)																																				
11. 花きの品質と品質保持	(教科書 第2章-6)																																				
12. 苗の生産	(教科書 第3章-1)																																				
13. 鉢物生産	(教科書 第3章-2)																																				
14. 切り花生産（1年草、宿根草）	(教科書 第3章-3)																																				
15. 切り花生産（球根類、花木）	(教科書 第3章-4)																																				
III. 講義の進め方																																					
教科書を参考に、パワーポイントを利用した講義を中心に進める。できる限り対話型講義とする。講義の理解を確認するため数回の小テストを実施する。																																					
IV. 試験と成績評価																																					
小テスト（40%）、期末テスト(40%)、講義中の発表態度（20%）により総合的に成績を評価する。																																					
V. 授業外学修																																					
教科書を使用する授業の際は、事前に指定された章を読んで予習しておくこと。小テストは復習材料として利用し、間違えた箇所は教科書や配布資料、参考書等で再確認しておくこと。																																					
VI. 使用教材																																					
教科書：樋口春三「新版 草花栽培の基礎」（農文協） 参考書：鈴木正彦著「園芸学の基礎」（農文協）、腰岡政二著「花卉園芸学の基礎」（農文協）																																					

科目名	水 稲 実 習	教員名	岡田 佳菜子	開 講 コース	環境農学	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
自分の家のイネや水田が、どのような状態にあるか理解することは重要である。この授業では直播栽培、減化学肥料栽培、熟期の異なる品種の栽培を体験し、いろいろな姿のイネを観察する。収穫物がどのように成長するか、調査と観察を通して理解すること。学外視察を通して、良い水田・悪い水田について、自ら考える機会としてください。							
到達目標は以下のとおりである。							
・ 水稲の管理作業の要点を理解する。 ・ 収穫物に関わる調査の意味を理解する。 ・ 良いイネの姿、良い水田を知る。 ・ イネの収量・品質の決定要因を理解する。							
<SDGs（持続可能な開発目標）との関連>							
②飢餓 ⑨イノベーション							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：30回]				2コマ連続授業			
[前期]				[後期]			
1. 稲栽培計画書（作業暦）の作成				1. 刈り取り適期診断			
2. 土壌診断・資材計算				2. 移植収穫			
3. 育苗				3. 直播収穫			
4. 有機物管理				4. 収量構成要素調査（穂数）			
5. 直播栽培				5. 収量構成要素調査（登熟歩合・千粒重）			
6. 移植（機械と手植え）				6. 農家視察・施設視察			
7. 除草				7. 収量調査			
8. 深水の灌漑について				8. 品質調査			
9. 生育調査				9. 食味官能試験			
10. 農家視察				10. 本年の水稲生育の特徴			
11. 生育調査				11. 熟期の異なる品種の比較（レポート課題）			
12. 病虫害防除				12. 有機物を使用した水稲の特徴（レポート課題）			
13. 生育調査				13. 直播と移植栽培の比較（レポート課題）			
14. 初期生育データまとめ				14. 餅米の食味官能試験			
15. 出穂・開花の観察				15. 栽培ごよみの作成			
III. 講義の進め方							
実習内容の理解を深めるために、圃場作業の前に講義を行う。 作業中に得たこと・知ったことを毎回作業ノートに記録する。							
IV. 試験と成績評価							
意欲（50%）、作業ノート（20%）、レポート（30%）から評価する。							
V. 授業外学修							
毎回ノートを整理して、調査や作業がどのような意味をもつかを理解してください。 収量調査後は3つのレポート課題を課す。							
VI. 使用教材							
教科書：使用しない 参考書：適宜紹介する							

科目名	畑 作 実 習	教員名	ふたつき 二木 ひろし 浩志	開 講 コース	環境農学	2 年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
畑作物栽培の主要4作物（小麦、てんさい、ばれいしょ、大・小豆）の生育特性と栽培方法の実際を学ぶ。実際の畑作生産では機械化が進んでいる中、直接作物に触れ、じっくり観察する機会は意外に少なくなっている。実習では作物を自らの手で播種、移植、植付け、栽培管理することにより、畑作物の生育特性を理解し、より効果的・効率的な畑作物栽培方法について学修する。 到達目標は以下のとおりである。 ・畑作物の栽培管理をととして、生育特性を習得する。 ・栽培管理の要点を把握し、実践できる。 ・畑作物の生育調査方法等を習得し、まとめることができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ④教育 ⑫生産・消費							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：23回]				2コマ連続授業			
[前期]				[後期]			
1. ガイダンス、肥料秤量と施肥準備				1. ばれいしょ収穫、調査			
2. 秋まき小麦栽培管理、圃場区画				2. 秋まき小麦播種			
3. てんさい播種（直播栽培）				3. 小豆収穫			
4. ばれいしょ植付				4. 小麦脱穀、収穫調査			
5. 秋まき小麦止葉期調査、分肥				5. 大豆収穫			
6. 豆類播種、				6. てんさい収穫、大・小豆類脱穀			
7. ばれいしょ培土、除草				7. てんさい糖分など調査、データ取りまとめ			
8. 小麦出穂期調査、栽培管理				8. 肥料工場、土壌分析施設視察研修			
9. てんさい初期生育調査、栽培管理							
10. ばれいしょ初期生育調査、栽培管理							
11. 畑作物根圏調査、栽培管理							
12. 豆類生育調査、栽培管理							
13. てんさい生育調査、栽培管理							
14. 秋まき小麦収穫、緑肥調査、栽培管理							
15. ばれいしょ生育調査、栽培管理							
III. 講義の進め方							
は種、植付け、除草など栽培管理、収穫調査など農作業とデータのとりまとめを中心に授業をすすめる。圃場実習であるので天候等の影響を受けることが考えられるので、臨機応変に補講等を行う。班に分けて調査作物を選定し、調査データをとりまとめる。実習日誌には、板書以外に必ず観察経過も記録しておく。							
IV. 試験と成績評価							
学習態度・(30%)、理解度(20%)、調査記録(20%)、調査結果のまとめ(20%)、外部研修レポート(10%)などに基づいて総合的に評価する。							
V. 授業外学修							
作物の生育状況等、授業時間以外にも調査・観察が必要になる。生育状況等事前に指示するので、観察記録を取るようにすること。(作物の出芽や出芽揃い、開花や着蕾、出穂等) ほ場面積や機材の関係上、受講者数の上限を30名程度とする。適期作業を逃がさないように補講を行う。雨天などで作業が出来ない時、また、作業のピーク時には授業時間以外にも補講を行うことがある。							
VI. 使用教材							
教科書：							
参考書：授業内で紹介する							

科目名	野 菜 実 習	教員名	上西 孝明 藤田 寿雄	開 講 コース	環境農学	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
野菜は種類、栽培法、作型が多岐にわたっている。また、農業経営の中で、高収益を目指し野菜を導入することが多い。この実習では、実際の野菜の生産と栽培管理に対応できるよう実践的栽培力の養成に力を入れた実習内容を用意した。 ①大玉トマトの仕立て法と養液栽培、②長ネギの栽培、③メロンの栽培、④アスパラガスの露地栽培、⑤サツマイモの栽培、⑥ラッカセイの栽培、⑦イチゴの栽培、⑧ペポカボチャの栽培などを学生が班別に分かれて実践的な栽培を行い、観察、収穫調査等を行う。作業は担当者を中心に全員で行う。また、市場視察や農業試験場の視察を通じて流通と最新栽培技術にふれる。 到達目標は以下のとおりである。 ・野菜栽培の基本と実践力を身につけることができる。 ・高収益野菜の栽培法について理解し、その栽培技術が習得できる。 ・農業経済に対する関心が高まり、野菜の生産と流通についての理解が深まる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ④教育 ⑫生産と消費							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：23回]							
[前期]				[後期]			
1. オリエンテーション、大玉トマト播種 2. ネギ類播種、大玉トマト鉢上げ、イチゴ鉢上げ 3. ハウス展張、施肥 4. メロン定植準備、ハウス管理 5. アスパラ収穫と品質 6. ラッカセイ播種、栽培管理 7. サツマイモ定植、キャベツ播種、栽培管理 8. ペポカボチャ播種、栽培管理 9. アスパラガス露地栽培残渣整理、施肥、収穫方法 10. 大玉トマト定植及び管理 11. ネギ類定植、栽培管理 12. イチゴ定植、栽培方法と管理 13. 札幌中央卸売市場視察 14. 大玉トマト収穫、品質調査 15. アスパラガス収穫後管理、メロン品質調査と糖度				1. ネギ培土、品質調査 2. ペポカボチャ収穫、品質 3. 野菜農業試験場視察 4. サツマイモ収穫、品質 5. サツマイモの加工 6. ラッカセイの収穫、品質 7. 越冬キャベツ収穫、冬野菜 8. 各野菜調査結果の検討			
III. 講義の進め方							
野菜栽培計画を年間作業から十分把握することから始め、各回の農作業、作物管理、処理、調査など学生が主体的に行う。後期は必要に応じて9回以降も行う。 授業計画は作物の生育・気候などにより前後する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
作業日誌(10%)、レポート(20%)、数回の小テスト(20%)、実習に対する姿勢・取り組み(50%)により総合的に成績を評価する。							
V. 授業外学修							
授業後に実験・実習記録ファイルを整理し、農業用語および作業の意味に対する理解を深めること。 新野菜や最新の栽培方法に取り組む時、正しい情報をどう選び出せるか、実践をとおして技術を習得し日誌に記す。							
VI. 使用教材							
教科書：「北海道野菜地図その46」北海道農業協同組合連合会 参考書：授業内で紹介する							

科目名	花 卉 実 習	教員名	小林 孝夫 藤田 寿雄	開 講 コース	環境農学	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
花卉産業(生産者、輸送業者、市場、小売業者)は経済取引規模(最終購入者価格)で約1兆円となっており、花卉は今後も需要の拡大が期待されている。一方、北海道は夏季の冷涼な気候を活かした切り花の夏秋出荷が盛んであり、花卉生産を学ぶ利点も大きい。 本実習では、主な切り花、鉢花、花壇苗を栽培し、それぞれの栽培管理(品種検討、播種、育苗、施肥、定植、灌水、温度管理、病害虫防除、摘心、採花、出荷等)の基礎について学ぶと共に、花卉園芸植物の形態や生理を理解する。また、花卉生産農家、花卉集出荷場、花卉卸売市場等の見学を実施し、生産から流通、消費までの流れを理解する。 到達目標は以下のとおりである。 ・ 主要な花卉園芸作物の生理・生態に関する基礎的な技術と経験を備えている。 ・ 切り花、花壇用苗物を生産できる基礎的な技術と経験を備えている。 ・ 花卉園芸作物の生産から流通、消費までの基礎的な知識を備えている。 <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ⑫生産・消費 ⑧成長と雇用 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：23回]				2コマ連続授業			
[前期]				[後期]			
1. 花壇苗播種				1. 切り花の採花・選花、出荷(規格)調製			
2. ビニールハウス被覆				2. ほ場管理			
3. 鉢上げ準備、園芸用土の調製				3. 切り花の採花・選花、出荷(規格)調製			
4. 花壇苗鉢上げ				4. 切り花の採花・選花、品質判定			
5. 花壇苗鉢上げ、生育調査				5. 秋植え球根の定植			
6. 切り花ハウスの定植準備 (畝立て、マルチ)				6. 花壇、プランターの片づけ			
7. ハウス花き類の定植				7. ビニールハウスの片づけ			
8. 花壇の整備				8. 各種調査のとりまとめ			
9. 花壇・プランターへの定植							
10. 露地ほ場準備							
11. 露地花き定植、は種							
12. 花卉集出荷場、切り花生産農家の見学							
13. 切り花のほ場の管理、生育調査							
14. 花き市場視察							
15. 切り花の採花・選花、出荷(規格)調製							
III. 講義の進め方							
栽培及び見学を通して、生産から流通、消費までの流れを理解することに重点をおいて実習を展開する。主要切り花の定植から採花までの栽培管理の実際を体験し、栽培管理の概要を把握する。							
IV. 試験と成績評価							
毎回の実習報告書およびレポートや見学報告書(70%)及び実習意欲(30%)などを総合的に勘案し評価する。実習報告書については、花卉栽培の基礎的な技術ポイントを把握し、作物の生育を正しく観察できているかを評価する。レポートについては、作物を正しく調査し、そのデータから結論を導き出せるかを評価する。							
V. 授業外学修							
花き生産学のテキストを活用して実習内容の理解を深める。軍手や長靴、作業着、防寒着、雨具は各自が準備し、天候不良でも実習できるように準備すること。メモが取れるよう実習手帳等を準備し、授業中だけでなく授業外でもほ場をよく観察し、気づいた点はメモし、実習の報告書に整理する。							
VI. 使用教材							
教科書：北海道フラワーガイド その31 北海道農業協同組合連合会 参考書：『色と咲く順でわかる花の名前辞典』長岡求監修(永岡書店)							

科目名	施設園芸学	教員名	こばやし たかお 小林 孝夫	開講 コース	環境農学	2年次	後期																														
I. 目的と内容および到達目標																																					
日本の園芸作物生産において施設での栽培は重要な役割を果たしている。野菜、花きなどが周年いつでも供給されているのは施設園芸の技術があるからである。寒冷な気候の北海道の園芸作物の生産は露地が主体だが、気候の変動を受けにくく安定計画生産が可能な施設栽培への需要はこれから増える。本講義では施設園芸の基礎的に重点を置きつつも、高度な施設園芸技術を紹介する。 到達目標は以下のとおりである。 ・施設園芸学の基礎的な知識を理解し、指導書や専門書を読解することができるようになる。 ・施設の管理方法を理解し、実践できる知識を習得する。 ・高度な施設園芸技術のアウトラインを理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑫生産・消費 ⑮陸上資源 ②飢餓																																					
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]																																					
[後期]																																					
<table><tr><td>1. 施設園芸の現状</td><td>(教科書 第1章)</td></tr><tr><td>2. ハウスの基本1 構造</td><td>(教科書 第2章)</td></tr><tr><td>3. ハウスの基本2 被覆資材</td><td>(教科書 第2章)</td></tr><tr><td>4. ハウスの付帯設備1 かん水</td><td>(配布資料)</td></tr><tr><td>5. ハウスの付帯設備2 マルチ、遮光資材</td><td>(配布資料)</td></tr><tr><td>6. ハウスの付帯設備3 冷暖房</td><td>(配布資料)</td></tr><tr><td>7. 作型開発</td><td>(教科書 第4章)</td></tr><tr><td>8. 土壌と施肥</td><td>(教科書 第7章)</td></tr><tr><td>9. 養液栽培</td><td>(教科書 第8章)</td></tr><tr><td>10. 養液土耕</td><td>(教科書 第8章)</td></tr><tr><td>11. 環境制御と植物1 光</td><td>(教科書 第9章)</td></tr><tr><td>12. 環境制御と植物2 温度</td><td>(教科書 第9章)</td></tr><tr><td>13. 環境制御と植物3 湿度・飽差</td><td>(教科書 第9章)</td></tr><tr><td>14. 環境制御と植物4 CO₂</td><td>(教科書 第10章)</td></tr><tr><td>15. 環境制御と植物5 統合環境制御</td><td>(教科書 第10章)</td></tr></table>								1. 施設園芸の現状	(教科書 第1章)	2. ハウスの基本1 構造	(教科書 第2章)	3. ハウスの基本2 被覆資材	(教科書 第2章)	4. ハウスの付帯設備1 かん水	(配布資料)	5. ハウスの付帯設備2 マルチ、遮光資材	(配布資料)	6. ハウスの付帯設備3 冷暖房	(配布資料)	7. 作型開発	(教科書 第4章)	8. 土壌と施肥	(教科書 第7章)	9. 養液栽培	(教科書 第8章)	10. 養液土耕	(教科書 第8章)	11. 環境制御と植物1 光	(教科書 第9章)	12. 環境制御と植物2 温度	(教科書 第9章)	13. 環境制御と植物3 湿度・飽差	(教科書 第9章)	14. 環境制御と植物4 CO ₂	(教科書 第10章)	15. 環境制御と植物5 統合環境制御	(教科書 第10章)
1. 施設園芸の現状	(教科書 第1章)																																				
2. ハウスの基本1 構造	(教科書 第2章)																																				
3. ハウスの基本2 被覆資材	(教科書 第2章)																																				
4. ハウスの付帯設備1 かん水	(配布資料)																																				
5. ハウスの付帯設備2 マルチ、遮光資材	(配布資料)																																				
6. ハウスの付帯設備3 冷暖房	(配布資料)																																				
7. 作型開発	(教科書 第4章)																																				
8. 土壌と施肥	(教科書 第7章)																																				
9. 養液栽培	(教科書 第8章)																																				
10. 養液土耕	(教科書 第8章)																																				
11. 環境制御と植物1 光	(教科書 第9章)																																				
12. 環境制御と植物2 温度	(教科書 第9章)																																				
13. 環境制御と植物3 湿度・飽差	(教科書 第9章)																																				
14. 環境制御と植物4 CO ₂	(教科書 第10章)																																				
15. 環境制御と植物5 統合環境制御	(教科書 第10章)																																				
III. 講義の進め方																																					
教科書を参考に、パワーポイントを利用した講義を中心に進める。教科書に掲載されていない学習項目は、資料を配布する。できる限り対話型講義とする。講義の理解を確認するため数回の小テストを実施する。																																					
IV. 試験と成績評価																																					
小テスト (40%)、期末テスト(40%)、講義中の発表態度 (20%) により総合的に成績を評価する。																																					
V. 授業外学修																																					
教科書を使用する授業の際は、事前に指定された章を読んで予習しておくこと。小テストは復習材料として利用し、間違えた箇所は教科書や配布資料、参考書等で再確認しておくこと。																																					
VI. 使用教材																																					
教科書：図解でよくわかる 施設園芸のきほん（誠文堂新光社） 参考書：最新施設園芸学（朝倉書店）、施設園芸・植物工場ハンドブック（農文協） 環境制御のための植物生理（農文協）																																					

科目名	土 壌 管 理 学	教員名	あさひ だいじ 安積 大治	開 講 コース	環境農学	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
土壌は作物生産の基盤であるとともに、地球上の様々な物質循環に大きな役割を果たしている。しかしながら我が国の教育課程では土壌について学ぶ機会ほとんどない。近年世界的に土壌の劣化や生産性の低下が大きな問題となっており、土壌の持続的な管理の重要性が増している。土壌に関する知識は農業生産にとどまらず、環境問題を考える上でも重要である。 本科目では、土壌の種類、成り立ちや特徴、環境問題との関わりなど、土壌に関する広範な知識を学び、特に農業生産における土壌の役割や、生産力を将来にわたって持続していくために必要な土壌管理に関する知識を習得することを目的とする。 到達目標は以下のとおりである。 ・土壌に関する基礎的な用語を習得し、土壌の種類とその成り立ち、特徴などに関する基礎的な知識を理解する。 ・土壌の物理性、化学性、生物性と、農作物の生産性との関わりについての知識を理解する。 ・土壌の持続的な生産性を維持するための土壌管理に関する知識を理解する。 ＜SDGs（持続可能な開発目標）との関連＞ ②飢餓 ③保健 ⑥水・衛生 ⑫持続可能な生産と消費 ⑬気候変動 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[前期]							
1. 土壌とは何か 2. 土壌の生成 3. 土壌の種類と分類、代表的な土壌とその特徴 4. 土壌の物理性1 土性、三相分布、 5. 土壌の物理性2 保水性 排水性 6. 土壌の物理性3 診断と改善対策 7. 土壌の化学性1 pH EC 8. 土壌の化学性2 CEC 9. 土壌の化学性3 交換性塩基（カリウム、カルシウム、マグネシウム） 10. 土壌の化学性4 リン酸 11. 土壌の化学性5 窒素 12. 土壌の化学性6 微量元素・重金属 13. 土壌の生物性 14. 有機物 15. 土壌と環境 ※進捗状況や理解度などにより、講義順等を変更する場合がある。							
III. 講義の進め方							
プリント資料に沿って、パワーポイント等で内容を補足しながら講義を行う。毎講義後に小テストを実施して理解度を確認しつつ授業を進める。							
IV. 試験と成績評価							
小テスト成績（50%）、課題レポート（30%）、授業への出席状況および授業態度（20%）などを総合的に勘案して評価を行う。							
V. 授業外学修							
・講義で配布するプリント資料の内容は次週以降の講義とも深くかかわることから、特に講義で指摘した事項については、復習を行って次の講義に備えること。 ・講義において、広範な知識や理解を深めるための参考書籍等を紹介するので、積極的に活用すること。							
VI. 使用教材							
教科書：使用しない。プリント資料を配付する。さらに理解を深めるには以下の参考書を学習されたい。 参考書：「新版 土壌学の基礎」松中照夫（農文協） ISBN 9784540171055 「新版 土壌肥料用語事典 第2版」藤原俊六郎ら（農文協） ISBN 9784540082207 「北海道施肥ガイド2020」北海道農政部（北海道農業改良普及協会） ISBN 2300100274706							

科目名	土 壌 作 物 診 断 実 習	教員名	小林 孝夫 中村 隆一	開 講 コース	環境農学	2 年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
今日までの多肥型の農業は土に養分を蓄積さ、環境にも大きな負荷をかけてきた。昨今の肥料高騰もあり、土に蓄積された養分を適正に評価し、データに基づいた適正な施肥に多くの地域で進められている。本実習では、土の養分蓄積状況を把握することのできる土壌診断法を学ぶ。土壌と肥料からの養分供給量は作物の栄養状態にも大きな影響を及ぼす。外見の症状や診断分析によって、物言わぬ作物の栄養状態を判断するための基礎も学ぶ。作物に適量の養分を供給することは環境に負荷をかけること無しに、高品質な農産物を生産する上で欠かせない。この実習で学ぶ事項は、本学科の標榜する環境保全型農業の基盤をなす技術である。 到達目標は以下のとおりである。 ・土壌診断の主な項目の分析、作物栄養診断の分析を実際に経験する。 ・化学実験の基本操作を理解し、実践できる。 ・土壌診断結果に基づいた施肥対応を組み立てることができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑫生産・消費 ⑮陸上資源 ②飢餓							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：2 3 回]				2 コマ連続授業			
[前期]				[後期]			
1. ガイダンス 2. 実験基本操作（器具） 3. 実験基本操作（分析機器） 4. 土壌サンプリング方法 5. 土壌サンプル乾燥、土性・腐植・土色判定 6. 土壌サンプル調整、仮比重測定 7. 土壌微生物バイオマスの測定 8. pH 測定、乾燥土壌水分測定 9. 有効態リン酸の抽出・測定（トルオーグリン酸） 10. 有効態リン酸の抽出・測定（ブレイリン酸） 11. 酸可性銅、亜鉛の抽出・測定 12. 交換性塩基の抽出・測定 13. 葉柄汁液診断 14. EC 測定、硝酸態窒素測定 15. アンモニア態窒素測定				1. 中和石灰量準備 リン酸吸収係数の測定 2. 中和石灰量の測定 腐植の測定 3. 熱水抽出性窒素の測定、湛水培養窒素の準備 4. 湛水培養窒素の測定、可給態ケイ酸の測定 5. 土壌断面調査 6. レポート作成方法、分析結果に基づく施肥方法 7. 作物体分解 8. 作物体無機成分分析			
III. 講義の進め方							
分析実験を中心に授業を進める。土壌分析演習については、自ら土壌調査を行い採取したサンプルを用いて、土壌の化学性、物理性、生物性の分析を行い、その結果に基づいた施肥・肥培管理法を組み立てる。JAなどで実施される土壌診断結果を活用出来るようにする。作物分析については、拓大実験実習農場の作物を材料に栄養診断手法の演習を行う。 実験器具と実験スペースの制約や安全確保のために、受講生は 24 名を上限とする							
IV. 試験と成績評価							
実験方法の理解度や実験精度（40％）および分析結果に基づくレポート（60％）によって成績を評価する。							
V. 授業外学修							
実験が終了したら、分析項目ごとに実験方法やデータは正確にまとめておくこと。実験は危険を伴うので、慎重かつ真面目な態度で臨み、教員の指示を聞き逃さないようにする。実験演習時は必ず白衣を着用する。 レポートは自分で分析したデータを用い、「北海道施肥ガイド 2020」に基づいて作成するので、事前に本書に目を通しておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書：毎回プリントを配布する 参考書：『北海道施肥ガイド 2020』公益社団法人北海道農業改良普及協会.							

科目名	日 本 酒 学	教員名	専任教員 非常勤講師	開 講 コース	環境農学	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
日本酒学をととして、日本酒の歴史・文化・分類・楽しみ方・風土など日本酒を育む背景を理解するとともに、酒米生産、醸造技術など日本酒ができるまでの過程を学習する。また、アルコール飲料にかかる法規制、アルコールと健康、販売戦略、日本酒による地域振興など、日本酒を題材にして幅広い内容を分野横断的に学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・日本酒醸造は我が国が誇るべき食品加工技術及び文化であることを理解する。 ・地域で生産された米を活用した日本酒造りの基礎的な知識と技術を理解する。 ・日本酒検定 3 級取得レベルの知識を得る。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑫持続可能な生産と消費 ⑮陸上資源 ③健康と福祉							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. 概説（清酒の歴史と文化、なぜ日本酒学を学ぶか） 2. 酒類総説（製造法・糖化、発酵、酒税法による分類） 3. 酒を科学し造り手を支える国税局鑑定官室の取り組み 4. 北海道における酒造好適米の生産と販売 5. 北海道における酒造好適米の品種改良と今後の課題 6. 北海道における酒造好適米の栽培技術 7. 発酵とは ～ 酵母と麹・微生物の世界 8. 日本酒の製造工程 9. 私の目指す酒造り 10. 酒蔵の経営とマーケティング戦略 11. 食彩豊かな日本の食卓 ～ 料理と酒のハーモニー 12. アルコール飲料にかかる法規制 13. アルコールと健康 ～ 酒は百薬の長・百悪の長 14. 日本酒と地域振興 15. 総括 ～ 日本酒検定 3 級に向けて							
III. 講義の進め方							
授業は、本学専任教員が専門分野に係る講義を行うほか、各界の専門家を非常勤講師に招いて、オムニバス形式で実施する。主に対面の講義形式で実施するが、場合によって Zoom 等を用いたオンライン授業を行う。 講師の都合などで、授業計画に変更があることに留意する。							
IV. 試験と成績評価							
各授業における小テスト（100%）により評価する。							
V. 授業外学修							
オムニバス形式のため、事前にプリントを配布することは難しいので、授業外学修は復習中心となる。 予習については、参考書等により関連する内容を予習し、疑問点を整理したうえで授業に臨むこと。 日本酒検定 3 級取得をぜひ目指してほしい。							
VI. 使用教材							
毎回プリントを配布する。 参考書として、「新訂 日本酒の基 吟酒師必携」NPO 法人 FBO（料飲専門家団体連合会）を推薦する。							

科目名	日本酒製造実習	教員名	たなか ひでひこ 田中 英彦	開 講 コース	環境農学	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
日本酒製造は、並行複発酵方式により糖化と発酵を同時に進行させるなど、工程が複雑である。また、米の作柄や品質が酒の品質に影響するだけでなく、また同じ原料を配合し同じように仕込んだモロミでも微生物の働き方のちがいでタンクごとの発酵の進み具合が異なるなどの特徴がある。 本実習は、実験・実習農場において酒造好適米を生産するとともに、実験室内で実際の醸造工程に沿って日本酒製造技術の基礎を学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・北海道の酒造好適米と栽培方法について理解する ・日本酒の醸造技術について理解する。 ・日本酒と微生物との関係について理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑫持続可能な生産と消費 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：12回]				2コマ連続授業			
[前期]				[後期]			
1. 酒造好適米の播種				1. 酒造好適米の収穫			
2. 酒造好適米の移植				2. 酒造好適米の脱穀・調整			
3. 酒造好適米の精米実験				3. 酒造好適米の品質分析			
4. 麹菌の働き（麹甘酒の仕込み）				4. 醸造技術（酒母づくり）			
5. 酵母の働き				5. 醸造技術（醪づくり）			
				6. 醸造技術（上槽）			
				7. 日本酒の品質評価			
III. 講義の進め方							
実習内容の理解を深めるために、プリントを用いて講義を行った後に、各種の作業を行う。受講者は、毎回の実習内容を実習ファイルに記録し、レポート課題は後日提出する。 なお、同じ時間割に「植物資源応用実習」が配置され、作物の生育状況などにより、どちらの実習を行うかなど、授業計画は適宜変更される場合があるので、掲示板とアクティブメールをチェックし、担当教官からの連絡を必ず確認すること。							
IV. 試験と成績評価							
実習内容の理解度を、実習態度・実習ファイル(50%)、レポート(50%)から評価する。							
V. 授業外学修							
各種の実験は、実習当日のみでは完結せず、授業時間以外にも観察・調査が必要な場合がある。授業時間以外にも、自主的に観察を定期的に行い、実習ファイルにメモする習慣をつけること。							
VI. 使用教材							
教科書は使用しない。毎回プリントを配布する。参考書として、酒造実習（公益財団法人 日本醸造協会）を推奨する。実習ファイルを各自に配布する。授業には、必ず実習ファイルを持参すること。							

科目名	植物資源応用実習	教員名	たなか 田中 英彦	開 講 コース	環境農学	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
植物資源応用実習は、水稻を題材にして作物育種と種苗の管理の基礎を学ぶほか、各種作物栽培における雑草および病害虫の発生と対策、作物品質の評価として加工品の製造と評価法を学ぶ。 到達目標は次のとおりである。 ・作物育種と種苗管理について、その要点を理解している。 ・病害虫・雑草について、発生状況に応じて適切な防除を行うための考え方を理解している。 ・実験計画に従って、個人及びチームで問題解決する基本的な能力を備えている。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑨イノベーション ⑫持続可能な生産と消費							
II. 授業計画 [単位数： 1 単位、授業回数：12 回]				2 コマ連続授業			
[前期]				[後期]			
1. 野草の栽培化（春の山菜） 2. 作物育種と種苗の管理①（黒米播種） 3. 雑草の発生と対策①（大豆除草剤試験） 4. 病害虫の発生と対策①（コナガフェロモントラップ） 5. イネ科植物の分類と同定 6. 作物育種と種苗の管理②（黒米異形抜き） 7. 作物育種と種苗の管理③（水稻人工交配）				1. 病害虫の発生と対策②（ダイコン殺虫剤試験） 2. 作物品質の評価①（ショウガの加工） 3. 作物品質の評価②（冷凍枝豆の食味評価） 4. 作物品質の評価③（大豆系統の豆腐加工適性） 5. 作物品質の評価④（コンニャクの製造）			
III. 講義の進め方							
実習内容の理解を深めるために、プリントを用いて講義を行った後に、各種の作業を行う。多くの場合には、試験処理区を設け、調査して得られた実験結果を取りまとめて考察する。受講者は、毎回の実習内容を日誌に記録し、レポート課題は後日提出する。 なお、同じ時間割に「日本酒醸造実習」が配置され、どちらの実習を行うかなど、授業計画は適宜変更される場合があるので、掲示板とアクティブメールをチェックし、担当教官からの連絡を必ず確認すること。							
IV. 試験と成績評価							
実習内容の理解度を、実習態度・実習ファイル(50%)、レポート(50%)から評価する。							
V. 授業外学修							
各種の実験は、実習当日のみでは完結せず、授業時間以外にも観察・調査が必要な場合がある。授業時間以外にも、自主的に試験圃場の観察を定期的に行い、作物の生育と病害虫、雑草の発生状況を確認し、実習ファイルにメモする習慣をつけること。							
VI. 使用教材							
教科書：なし。プリントを毎回配布する。 実習ファイル：各自に配布する。授業には、必ず実習ファイルを持参すること。							

科目名	病 害 虫 管 理 学	教員名	堀田 治邦 ほりた はるくに	開 講 コース	環境農学	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
農作物を栽培すると必ず病害虫が発生し、被害を受ける。これら被害を軽減するにはさまざまな防除手段を講ずる必要がある。この授業では病害虫管理学を初めて学ぶ学生に対して、原因となる病害虫の種類や特徴、発生様式などを紹介し、基礎的な知識の習得を図る。また、防除手段の種類（耕種的、物理的、生物学的および化学的）を体系的に学び、病害虫の診断から防除までの一連の流れを習得する。加えて、防除の中心と位置付けられる農薬について、その種類や効果を解説し、安全な使用に当たっての基礎知識を学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・病害虫に関する基礎知識を身につける。 ・病害虫を防除するに当たって、さまざまな防除法の知識を身につける。 ・農薬の種類や使用法を学習し、その安全性や効果的な防除体系を理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑫生産・消費 ⑬気候変動							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. 病害虫による被害と社会的影響 2. 病害による被害 3. 害虫による被害 4. 病害虫発生の3要因 5. 病害虫の診断と予察 6. 耕種的防除法 7. 物理的防除法 8. 生物的防除法 9. 化学的（農薬）防除法 10. 殺菌剤の種類と効果 11. 殺虫剤の種類と効果 12. 農薬の正しい使い方 13. 農薬への耐性を持つ病害虫 14. 総合防除の考え方 15. 有機農業と病害虫管理							
III. 講義の進め方							
授業計画に従ってパワーポイントで講義を行う。講義資料（15 回分）をまとめた冊子を初回講義時に配布する。各回の講義から得られた追加情報があればメモをとっていただく。途中で 5 分程度の休み時間を設ける。							
IV. 試験と成績評価							
講義の理解度を評価するため毎回小テストを行う。また、冬休み前にレポート問題を配付し、最終講義までに提出していただく。評価は小テスト 50%、レポート 30%、授業への参加状況（意欲・発表）20%の配分で総合的に勘案する。							
V. 授業外学修							
講義資料は授業の単位ごとに章立てしてあるので、これを基に予習に取り組んでいただく。講義から得られた情報は資料等にメモ書きするなど、理解を深めてもらう。章末に復習問題が設けてあるので、適時取り組んでいただき、より理解を深めていただく。							
VI. 使用教材							
教科書：使用せず、講義資料を配付する。 参考書：「北海道病害虫防除提要」北海道植物防疫協会							

科目名	農 業 機 械 学	教員名	じょうにし たかあき 上西 孝明	開 講 コース	環境農学	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
農業では人間の労働を軽減し、生産性を高めるために種々の農業機械が開発されてきた。現在、農業機械のない農業は考えられず、農業機械なしに農業経営を行うことは不可能である。労働の効率化、省力化、低コスト化、環境との調和を推し進め、安全・安心な農産物の生産が求められている。 この授業では、農業用エンジン、トラクタなど機械の基本的な原理とともに、各種作業機械について基本構造、作業について講述するとともに最新の IT を使ったハウス自動制御管理の紹介及び道内で使用される農業機械・ドローンの見学会を行う。 到達目標は以下のとおりである。 ・作物毎の機械化作業体系を理解し説明できる。 ・トラクタの構造の基礎を理解し性能について説明できる。 ・各作業機について理解し効率的作業を進めることができる。 ・ハウス自動制御管理、ドローンの理解を深める。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ④教育 ⑫持続可能な生産と消費							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. 基本単位系、農業の歴史と農業機械発達史 2. 機械化作業体系 3. トラクタの構造と機能 1（トラクタの分類、動力装置、伝動、変速装置） 4. トラクタの構造と機能 2（走行装置、油圧装置、差動装置） 5. 内燃機関の種類と原理 6. 内燃機関の主要構造と性能 7. その他の動力および農業機械 8. 耕耘整地作業機、播種・施肥機 9. 移植機・栽培管理作業機（防除機） 10. 栽培管理機（中耕除草機）、収穫調製機 1 11. 収穫調製機 2、その他作業機 12. 機械利用コストの策定 13. 農業機械の利用計画の策定 14. スマート農業について 15. 農作業の安全、IT 技術・農業用ドローン等について							
III. 講義の進め方							
テキストに従い、一般的な板書、ppt と補足プリント資料の説明による授業を行う。							
IV. 試験と成績評価							
小テスト・リアクションペーパー(30%)、レポート(30%)、授業に対する姿勢（40%）により総合的に成績を評価する。							
V. 授業外学修							
営農に不可欠な農業機械を効率的に使用するため、予習・復習により理解を高める。 授業の進行に合わせて予習・復習の内容を適時指示する。							
VI. 使用教材							
教科書 ： 参考書 ：授業内で紹介する							

科目名	農 業 機 械 研 修	教員名	じょうにし 上西 孝明	開 講 コース	環境農学	1 年次 2 年次	前 期 前 期
I. 目的と内容および到達目標							
道立農業大学校農業機械研修センターにおいて、トラクタ基本操作+機械作業スキルアップ研修の講習に参加して研修を行う。トラクター、作業機の操縦及び農業機械の構造と整備方法、安全利用など専門知識について、学科と実技を習得する。本研修受講者は農業機械学（1 年前期）の単位を取得していることが必須である。 到達目標は以下のとおりである。 ・農業機械に関する専門知識を習得し、自分で簡易な修理を行うことができる。 ・トラクタ、トレーラーの運転操作、作業技術を習得し実践する力を備える。 ・自動操舵運転等の農業機械のICT技術の理解が進む。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ④教育 ⑫生産・消費							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、研修日数：5 日]							
[前期]							
1 日目 学科 農作業事故の実態とトラクタ作業の安全確保、危険予知トレーニング（KYT） 基本作業と耕法（プラウ、ロータリー）							
2 日目 演習 工具取扱い、トラクタの仕業点検							
3 日目 演習 トラクタの簡易整備1 作業機の着脱と調整8（プラウ、ロータリー、ディスク）							
4 日目 演習 耕起・整地作業の実践、自動操舵システム							
5 日目 演習 ガイダンスシステムと航空写真に基づく可変施肥、トラクタの簡易整備2							
III. 講義の進め方							
研修の時期は1,2 年次8 月下旬～9 月上旬の5 日間であり、道立農業大学校農業機械研修センター（中川郡本別町）にて全寮制で行う。拓大では研修前に事前授業を実施する。研修日程の詳細は各学期始めに農業大学校より提示されるので、事前授業で連絡する。事前授業では研修の概要を説明し、各自願書を書いて提出してもらう。願書提出時には免許証サイズの証明写真（3.0cm×2.5cm）1 枚、本人及び現住所の証明できる公文書の写しが必要。その他連絡事項は必要に応じて掲示板に掲示する。							
IV. 試験と成績評価							
農業機械研修センターからの成績(80%)と受講中の寮生活における研修態度(20%)の報告をもとに評価する。							
V. 授業外学修							
農業機械研修受講には「農業機械学」（1 年前期科目）の単位が必須。受講者はトラクター等の運転をするので大型特殊免許の取得を推奨する 営農に不可欠な農業機械を効率的に使用するため 予習、復習により理解を高める。							
VI. 使用教材							
教科書：農大推薦教科書使用							
参考書：							

科目名	農 産 物 利 用 学	教員名	はたけやま 島山 佳幸	開 講 コース	環境農学	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
人間は古くから様々な農産物を原料として各種加工食品を作り出してきた。本講義では、農産物等に含まれる成分の科学的な性質や各種加工食品の製造方法及び製造工程上における食品成分の変化を学び、農産物利用食品の問題点や特に穀類（小麦）の基礎的な加工方法と発酵食品について学ぶ。 農産物を利用し加工することというのは付加価値をつけるだけではなく、農産物の価値を下げないという利点もあることから 6 次産業化の大きな柱になり得る事を学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・農産物、農産食品を構成している主成分の種類、性質の基礎的な知識を理解する。 ・農産物を利用した加工食品の特徴を理解し、加工技術と利用方法の基礎について理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ④教育 ⑥水・衛生							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. (水分) 食品中の水の状態と働き（結合水・準結合水・自由水） 2. 小麦粉とは（小麦の構造・形状と種類・製造工程） 3. 小麦粉の成分（ビタミン・ミネラル・アミノ酸・澱粉） 4. 小麦粉の製粉工程と小麦フスマの利用と成分 5. 麦の違いと特徴・日本の小麦と世界の小麦 6. 強力粉と薄力粉の違い・小麦に含まれるタンパク質の違いと使い分け 7. 硬質小麦と軟質小麦の違い・小麦粉のブレンド・賞味期限 8. 小麦の澱粉（老化・パンの硬さ）アミロースとアミロペクチン・グルテン形成 9. 小麦から作られる加工食品（うどん・パン・パスタ等） 10. グルテンとアレルギー（アレルギー反応と小麦） 11. 発酵とは（微生物の働き・発酵食品をつくる微生物）発酵のしくみと化学反応 12. 腐敗・食中毒と微生物 13. 発酵食品の種類と製造法（味噌・醤油・ワイン・日本酒・チーズ・ヨーグルト等） 14. 豚肉の加工食品と種類 15. 発酵・熟成で造られる肉製品（生ハム・ドライ・セミドライソーセージ）							
III. 講義の進め方							
授業計画に沿ってプリント(参考資料)を中心に講義する。							
IV. 試験と成績評価							
農産物を構成している化学物質、農産物を利用した食品製造の特徴及び食品を構成している物質の特性について説明できることを到達目標とし、成績評価は、3～4 回の小テスト(33%×3・25%×4)で行う。							
V. 授業外学修							
授業の進行状況に合わせて次回の授業内容を説明するので興味、関心のある部分、疑問に思う部分についてノートにまとめておくことで授業の理解度が高まります。 授業の進行に合わせて予習の範囲を適時指示する。							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない 参考書 : 適宜プリント配布							

科目名	農 産 加 工 実 験	教員名	はたけやま 畠山 佳幸	開 講 コース	環境農学	1 年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
農産物加工・食品製造に関する知識、技術のうち本実験では基礎的、基本的な加工食品を体験的、実践的に学び食品素材の性質や加工方法の原理などを科学的な目で捉えながら実験実習を行い、加工食品についての知識を深める。 「食品衛生責任者」資格については、食品衛生責任者養成講習会に参加して取得することができること、また、この資格は今後の農業経営に欠かせない資格であることから、積極的に取得することを奨励する。 到達目標は以下のとおりである。 - 食品製造に関わる基礎的な技術と知識を体験的に理解する。(加工品の原理を説明できる) - 食品の主成分である炭水化物・脂質・蛋白質の化学や機能性等、農産物の加工をとおり化学的な意義について基礎的な理解を深める。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑫生産・消費 ⑥水・衛生							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：2 3 回]				2 コマ連続授業			
[前期]				[後期]			
1. 食品加工の意義と必要性・グルテンの抽出実験				1. 菓子パン製造実習Ⅳ			
2. パン製造の基礎基本				2. うどん製造実習（本州産小麦）			
3. ロールパン製造実習（手捏ね）				3. うどん製造実習（道産小麦）			
4. ロールパン製造実習（機械打ち）				4. 調理パン製造実習Ⅱ			
5. 鶏卵の鮮度試験、乳化実験(マヨネーズの製造実験)				5. 調理パン製造実習Ⅲ			
6. イチゴジャムの製造実習				6. パスタ製造実習			
7. 編みパン製造実習Ⅰ				7. 豆乳を利用した加工実験			
8. 編みパン製造実習Ⅱ				8. 編みパン製造実習Ⅲ			
9. 強力粉と薄力粉でつくるパン製造実習							
10. 米粉粉入りロールパンの製造実習							
11. パン製造実習・ベーカースパーセント							
12. 菓子パン製造実習Ⅰ							
13. 菓子パン製造実習Ⅱ							
14. 菓子パン製造実習Ⅲ							
15. 調理パン製造実習Ⅰ							
III. 講義の進め方							
導入段階で製造 実験、製造実習の手順や方法を集中して説明した後、実験実習を中心に授業を展開する。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、毎回の実験レポート(100%)で評価することから、実験レポートには実験材料、方法、結果、考察を記述する。なお、実験レポートの作成に当たっては、実験中の観察記録に特に留意し、考察等を整理することが必要である。							
V. 授業外学修							
授業の進行に合わせて次週の製造実験内容について説明するので事前に調べることで食品製造実験の理解が深まります。							
VI. 使用教材							
教科書：プリント適宜配布							

科目名	生 物 工 学 概 論	教員名	佐藤 毅 さとう たかし	開 講 コース	環境農学	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
生物学技術（バイオテクノロジー）の中で、植物の組織培養技術は農作物の種苗生産や品種開発に広く利用されている。例えば、茎頂培養を利用してウイルスフリーのバレイショ種イモやイチゴ苗が生産され、蒔（やく）培養を利用して「ななつぼし」や「ゆめぴりか」などの良食味水稻品種が開発された。また近年、多くの農作物で遺伝情報（ゲノム、DNA）の全塩基配列が明らかになり、トウモロコシ、ダイズ、ナタネなどでは除草剤や害虫に抵抗性の遺伝子組換え作物が開発・利用されている。さらに最近、ゲノム編集と呼ばれる遺伝子操作技術が開発されて、水稻やトマトなどの農作物の品種開発と一般栽培での利用が開始されようとしている。本講義では、農作物で利用されているバイオテクノロジーの基本知識と利用状況、さらに今後の方向性について考える。 到達目標は以下のとおりである。 ・農作物における遺伝の原理と品種開発の方法について説明できる。 ・植物の組織培養技術を理解し、農業に役立てるための知識を備えている。 ・植物の遺伝子組換えとゲノム編集技術の基礎を理解し、農作物での利用と問題点について考察できる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ③保健 ⑥水・衛生 ⑫持続可能な生産と消費 ⑬気候変動 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期]							
1. 生物での遺伝の原理 2. 生物での遺伝物質の複製と変化 3. 農作物の品種開発 (1) 自殖性作物 4. 農作物の品種開発 (2) 他殖性作物と栄養繁殖作物 5. 農作物の品種開発 (3) 突然変異の利用 6. 農作物で利用されている組織培養技術の概要 7. 組織培養技術を利用した種苗生産 (1) バレイショ 8. 組織培養技術を利用した種苗生産 (2) イチゴ 9. 組織培養技術を利用した農作物の育種 (1) 蒔培養 10. 組織培養技術を利用した農作物の育種 (2) 胚培養と細胞融合 11. 遺伝子組換え技術の原理 12. 遺伝子組換え技術の利用状況 (1) 世界 13. 遺伝子組換え技術の利用状況 (2) 日本 14. ゲノム編集技術の原理と農作物での利用状況 15. 遺伝子組換え技術とゲノム編集技術を利用した農作物の安全性							
III. 講義の進め方							
授業計画に沿ってプリント(配布資料)を中心に講義する。毎回の講義の最後に 10 分程度の小テストを行う。その日の講義のポイントを出題し、次回の講義日に採点した答案を返却する。小テストの問題が期末テストの問題になるので、理解が不十分だったところを復習する必要がある。なお、一部を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、毎回の講義での小テスト (50%) 及び期末テスト (50%) で行う。							
V. 授業外学修							
「授業計画」にある教科書の指定された章を読んで授業に参加すること。 授業の進行に合わせて予習範囲は適時指示します。読んだ上で生じた疑問や理解できなかった点を事前にノートに書き出して出席すると理解が深まります。							
VI. 使用教材							
教科書 : 『図解でよくわかる 品種・育種のきほん』西尾 剛 (誠文社新光社) 参考書 : 『遺伝子とは何か』中屋敷 均 (講談社ブルーバックス)、『日本の品種はすごい』竹下大学 (中公新書)、『農学基礎セミナー 植物バイオテックの実践』大澤勝次・久保田旺 (農文協)							

科目名	作物栄養生理学	教員名	中村 隆一 小林 孝夫	開 講 コース	環境農学	2年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
本講義の前半は、光合成とそれによってもたらされた炭水化物が収穫部位に蓄積していく仕組みを学ぶ。農業技術は作物による光合成の量を増やし、それを環境条件に対応して収穫部位に集中するための技であることを理解する。講義の後半には光合成を効率的に進行させ、最大収量を得るための無機成分供給について基礎から学ぶ。 現在の農産物の生産は、単に量をとるばかりでなく、おいしさや環境保全の支点も求められる。作物の栄養状態は美味しさや品質、環境保全に直接関連するので、作物品質や環境保全にかかわる話題も講義の中に盛り込んで進める。 到達目標は以下のとおりである。 ・作物生理を理解し、栽培法等を通じてそれを作物生産に活用できる。 ・作物栄養を理解し、それを施肥改善や環境保全に活用できる。 ・作物栄養、作物整理と作物の品質の関係を理解し、品質改善に活用できる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑥水・衛生 ⑫生産・消費 ⑬気候変動 ⑮陸上資源							
II. 授業計画〔単位数：2単位、授業回数：15回〕							
〔前期〕 1. 植物の起源と動物、植物の違い 2. 葉、維管束、根の構造と働き 3. 光合成の仕組み 4. 光合成産物の転流と貯蔵 5. 光への作物の反応とその活用 6. 植物の生長と環境条件 7. 個体群の構造と機能 8. ストレスへの耐性、水分 9. ストレスへの耐性、温度 10. 植物ホルモンとその活用 11. 土から得る養分 12. 肥料の種類と活用 13. 施肥標準の基本と適正な施肥量、施肥法 14. 土壌診断に基づく施肥対応と環境保全 15. 農産物の品質と作物栄養							
III. 講義の進め方							
プリントをベースに様々な関連資料を活用しつつ、理解しやすい授業を行う。授業内容の理解や習熟度を確かめるため、適宜小テストを実施する。							
IV. 試験と成績評価							
授業態度（30点）、小テスト（50点：10点×5回）、レポート（20点：20点1回）を総合的に勘案し評価する。							
V. 授業外学修							
授業の理解を深めるために、プリントを元に復習し、理解が不十分な点は参考書や教官への質問で補習すること。小テストは、この理解度を自ら把握してこれを深めるために有用なので、参考書等を活用して提出すること。							
VI. 使用教材							
教科書：プリントおよび関連資料を配付する。 参考書：『作物栄養のしくみ』高橋英一（農文協）、『植物生産生理学』石井龍一（朝倉書房） 『作物生産生理学の基礎』平澤 正（農文協）							

科目名	食 農 社 会 論	教員名	村上 良一 むらかみ りょういち	開 講 コース	環境農学	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
飢餓と飽食の併存、食の安全と安心が関心事となって久しいが、問題解決ははるかに遠いようにみえるなかで、国連でも確認されている「食料主権」という考えが注目を集めている。講義ではこの考えを意識しながら、主として現代日本を対象に「食と農」に関する現状と課題解決にむけた取り組みや条件などについて採りあげる。 到達目標は以下のとおりである。 ・ 飢餓と飽食が生み出される社会的要因・構造について基本的な理解ができる ・ 現代日本の食生活と農業の特徴についての基礎知識を持っている。 ・ 現代の食生活改善の取り組みについて理解できるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ①貧困 ②飢餓 ③保健 ⑩不平等 ⑫生産・消費 ⑮陸上資源							
II. 授業計画〔単位数：2 単位、授業回数：15 回〕							
〔前期〕 1. 「飢餓」「飽食」「安全」「楽しみ」——食に関するキーワードから 2. 現代日本の食生活は「豊か」か？——進行する「食の貧困」（教科書 1 章） 3. 「豊かな食」を作る人の「貧困」（教科書 2 章） 4. 現代日本の食生活——作られたのか？欲したのか？——「学校給食」を手がかりに（教科書 1 章） 5. 世界と日本の飢餓と貧困の実情紹介 6. 食品ロスの現状とそれが生まれる背景 7. SDGs からみた食と農——フードマイレージ、バーチャルウォーターなどを事例に 8. 食とコミュニティ——フードデザート問題を中心に 9. 産消提携、CSA(教科書 5 章) 10. 地域における食の問題解決の新しい取り組み事例紹介 11. 地産地消と北海道における地域経済循環（教科書 7 章） 12. スローフードと食育 13. フェアトレード、フードバンク、子ども食堂(教科書 1 章) 14. 「食料主権」とは？——その形成過程と食農問題解決における有効性(教科書 12 章) 15. 貧困、不平等、飢餓、健康格差、地球環境破壊、の解決をめざす食のあり方とは							
III. 講義の進め方							
講義形式で教科書、スライドを中心に用い、プリント配布、動画視聴などを適宜行う。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は小レポート(30%)と期末のレポート試験(70%)の合計で行う。							
V. 授業外学修							
・ 教科書の章が明記されている授業回では事前に該当する章を読んで授業に臨むこと。 ・ 食料・農業に関するニュースについて意識的にチェックしておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書：冬木勝仁・岩佐和幸・関根佳恵編『アグリビジネスと現代社会』（筑波書房）。 参考書：大塚茂他『現代の食とアグリビジネス』（有斐閣）、藤原辰史『給食の歴史』（岩波書店）、藤原辰史『縁食論』（ミシマ社）、池上甲一他『食と農のいま』（ナカニシヤ出版）、池上申一他『食の共同体』（ナカニシヤ出版）							

科目名	グリーン・ツーリズム論	教員名	むらかみ 村上 良一	開 講 コース	環境農学	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
グリーン・ツーリズムは日本では農村振興策の一つとして 20 世紀末の 1990 年代以降注目されるようになってきた。本講義では、グリーン・ツーリズムの概要と海外の事例、北海道内外の事例そしてやはり新しく生まれてきた地域資源を再発見する他のツーリズムについても紹介していく。そしてグリーン・ツーリズムを契機に生活全般を見直し環境と調和する持続可能な生活様式についても考えてゆくことを目標とする。 到達目標は以下のとおりである。 ・グリーン・ツーリズムに関する基本的な知識を持っている。 ・日本と北海道のグリーン・ツーリズムの取組みの基礎的な知識を持っている。 ・都市農村交流の意義が理解できるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ④教育 ⑫生産・消費 ⑬気候変動 ⑮陸上資源							
II. 授業計画〔単位数：2 単位、授業回数：15 回〕							
〔後期〕 1. 現代日本社会が抱える諸問題解決の糸口としてのグリーン・ツーリズム 2. 日本のグリーン・ツーリズムの普及過程 3. グリーン・ツーリズムへの多様なアプローチ 4. 農業の構造変化によるグリーン・ツーリズム創出の必然性 5. 日本のグリーン・ツーリズムの事例紹介 6. 西欧のグリーン・ツーリズム 7. 韓国のグリーン・ツーリズム 8. 台湾のグリーン・ツーリズム 9. 中国のグリーン・ツーリズム 10. 海外のグリーン・ツーリズムの事例紹介 11. 北海道のグリーン・ツーリズム（畑作地域） 12. 北海道のグリーン・ツーリズム（稲作地域 草地酪農地域） 13. 体験教育とグリーン・ツーリズム 14. 農家民泊とグリーン・ツーリズム 15. 日本社会とグリーン・ツーリズム——持続可能な生活様式を目指して							
III. 講義の進め方							
・スライド、プリント、板書を適宜使用して進める。 ・また、一部の授業回を遠隔授業方式で行うこともある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は小レポート(30%)と期末のレポート試験(70%)とで評価することを予定している。							
V. 授業外学修							
・グリーン・ツーリズムや都市農村交流に関わるニュースを意識的にチェックしておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない 参考書 : 山崎光博『グリーン・ツーリズムの現状と課題』(筑波書房)、井上和衛『グリーン・ツーリズム—軌跡と課題』(筑波書房)、長尾正克編著『グリーン・ツーリズム 北海道からの発信』(筑波書房)、佐藤真弓『都市農村交流と学校教育』(農林統計出版)、宮田静一『農泊のススメ』(弦書房)。							

科目名	食品・農産物流通論	教員名	村上 良一 むらかみ りょういち	開 講 コース	環境農学	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
本講義は、規制緩和が進行する現下の農産物流通の特徴や課題について明らかにすることを目的とする。そのために最初に流通論の基本的な講義を数回程度行い流通に関するイメージを与える。続いて、食品・農産物流通に関する講義を行う。 到達目標は以下のとおりである。 ・流通一般の意義や基本的な仕組みについて理解し、説明できるようになる。 ・農産物流通について基本的な理解ができ、説明できるようになる。 ・主要な農産物の流通の具体的な仕組みについて基本的な理解ができ説明できるようになる。 ・農産物地域ブランド戦略など農産物販売戦略に役立てられるような基礎的知識が身につけられるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑧成長・雇用 ⑫生産・消費 ⑮陸上資源							
II. 授業計画〔単位数：2単位、授業回数：15回〕							
〔後期〕 1. 講義の進め方や関連学問分野の紹介、流通論の基本について 2. 小売業・卸売業といった流通に関わる基本的概念や社会的意義などについて 3. 物流等流通に関する事例紹介と解説 4. 日本の商業・流通の発展史の概説 5. スーパーマーケット、コンビニ、ネット通販等流通の現在について 6. 農産物流通の独自性について特に農協共販の意義とその課題について 7. 卸売市場の発展過程と意義について 8. 流通再編下、改めて確認されるべき卸売市場の意義とその課題について 9. 食品流通の現状が及ぼす地球環境への影響についての事例紹介 10. 農産物地域ブランド戦略と事例紹介 11. 食管制度廃止以降“一般商品化”が進行する米の流通について 12. 消費上限なき農産物ともいわれる花卉の流通の現状と課題について 13. 畜産物輸入激増へと変貌したもとの畜産物の流通について（食肉） 14. 需給調整が著しく困難でありながら苦境にあえいでいる畜産物の流通について（牛乳・乳製品） 15. 今後の食品・農産物流通の課題と展望について							
III. 講義の進め方							
講義スライドを映写しながら、講義を行うことを基本とする。また、講義の内容理解を深めるため、数回程度、参考資料として解説を加えながらDVD視聴を行うことを予定している。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、小レポート(30%)期末のレポート試験(70%)で行う。							
V. 授業外学修							
・食料品購入時において、価格変動や品ぞろえ、陳列方法の特徴などについて注意深く観察することを心掛けること。 ・食料品のならず、流通一般に関するニュースを日々チェックしておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない 参考書 : 桂 暎一編著『青果物のマーケティング』(昭和堂)、日本農業市場学会編『農産物・食品の市場と流通』(筑波書房)、藤島廣二他『フード・マーケティング論』(筑波書房)、藤島廣二他『実践農産物地域ブランド化戦略』(筑波書房)。							

科目名	農 業 経 営 概 論	教員名	村上 良一 むらかみ りょういち	開 講 コース	環境農学	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
国内外において農業経営は家族経営が今でも主流をなしており、国連でもその意義が再確認されている。同時に企業経営も広がりを見せている。それらと家族経営の違いを意識しながら、共通する経営手法についても解説する。また地域における営農にとって不可欠な農業関連組織や団体の特徴や役割についても解説する。 到達目標は以下のとおりである。 ・持続的な農業経営に不可欠な基礎知識を習得し応用できるようになる。 ・地域における農業諸組織、農業団体の特徴と役割を理解できるようになる。 ・農業経営の診断手順と、経営の改善方策の考え方を理解できるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑫生産・消費 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. 現代の農業経営—北海道農業の現状を中心に 2. 家族農業経営と企業的農業経営の特徴と違い 3. 農家資産・経営費・生産費 4. 農業生産の生産要素（土地・労働・資本）の特性とその有効活用 5. 農業新規参入や農業法人経営などの事例紹介 6. 農業経営組織 7. 農業生産組織・集団 8. 農業法人（農地所有適格法人 株式会社など） 9. 農業経営に関わる諸団体（JA・農業委員会・土地改良区など）の特徴と役割 10. 北海道（道央）における地域農業の展開事例紹介 11. 農業におけるマーケティング活用（基礎理論の解説） 12. 農業におけるマーケティング活用（ブランド化やJAのとりくみなど事例紹介） 13. 農業経営診断（損益分析など農業経営診断の進め方に関する解説） 14. 農業経営の設計の基本 15. 農業経営診断・設計の基本についての総括的な意見交換							
III. 講義の進め方							
スライドと配布プリントを併用しながら講義形式で進めるが、講義内容について意見や確認的な質問をすることもある。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は小レポート(30%) 期末のレポート試験(70%)の合計で行う。							
V. 授業外学修							
・自分の出身地（農業経営体が存在しない市町村の学生は都府県レベル）について基本的な数値データを調べ、地域農業の特徴を理解しておくこと。調査対象資料は農林業センサスである。 ※「2020 年農林業センサス報告書」を検索し→第 1 巻「都道府県別統計書」とたどっていくと「農林業経営体数」などが Excel データで出てくる。							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない。 参考書 : 大泉一貫他『農業経営概論』（実教出版）、七戸長生『日本農業の経営問題』（北海道大学図書刊行会）、長尾正克『ジャスト・プロポーション—新しい農業経営論の構築に向けて』（筑波書房）、村田武編『新自由主義グローバリズムと家族農業経営』（筑波書房）。							

科目名	社 会 統 計 学	教員名	こばやし ひでたか 小林 秀高	開 講 コース	環境農学	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
社会統計学では、アンケート調査や量的なデータを分析するための手法を学ぶ。統計学は、政府や企業の意思決定や、マーケティング、世論調査のツールとして活用されている。本講義では新聞やニュースに登場する統計を読めるようになることを主な目的とする。授業は Excel を使用する演習と統計学に関する講義の二部からなる。受講時点では Excel の技術や数学的な素養は必要としないが、PC の操作を苦にしないことは必要である。 到達目標は以下のとおりである。 ・ 基礎的な統計数値や世論調査の意味が分かる ・ Excel を使用して 2 変数間の関係を分析できる ・ 回帰分析および重回帰分析の基礎を理解できる <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. ガイダンス／なぜ分析をするのか 2. データの種類と特徴 3. データの入手とインターネット・アーカイブの使い方 4. 多様な分析の手法：統計分析によって何が分かるのか 5. 記述統計によるデータの把握 6. 記述統計とグラフの作成 7. 回帰分析 1：回帰分析で何が分かるか 8. 回帰分析 2：単回帰分析 9. 回帰分析 3：重回帰分析 10. 2 変数間のクロス集計表 1：クロス表から何が分かるか 11. 2 変数間のクロス集計表 2：クロス表による分析 12. 2 変数間のクロス集計表 3：2 つのデータの間に関係はあるのか？ 13. 統計解析を利用したレポートの作成 1：問いと仮説の設定 14. 統計解析を利用したレポートの作成 2：仮説の分析と検証 15. 統計解析を利用したレポートの作成 3：レポート発表							
III. 講義の進め方							
本講義は講義と演習からなる。講義では統計学の知識や統計を活用した事例を紹介する。演習では既存のデータを使用し、実際に分析を通じて統計の読み方や手法に慣れることを目的とする。演習が含まれるため、遅刻や欠席が多い場合は授業内容についていくことは難しい。PC の操作をともなう演習のため、受講者の人数は地域振興ビジネスコースの学生と合わせて 25 名に制限する。選考については初回講義で説明する。 講義の一部は遠隔で実施する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
試験は行わない。毎回の演習内容と期末に作成するレポートで評価する。レポートの作成の基礎的方法は授業内で解説をする。評価は毎回の演習を 60%、レポートを 40%とする。							
V. 授業外学修							
毎回、講義内容に関連する課題を課す。その実施が復習となるため、定められた期日までに必ず取り組むこと。欠席した場合は Blackboard を確認して課題内容を確認すること。							
VI. 使用教材							
教科書：特定の教科書は使用しない 参考書：伊藤 公一朗『データ分析の力—因果関係に迫る思考法』光文社新書 中室牧子、津川友介『「原因と結果」の経済学』ダイヤモンド社							

科目名	初 級 簿 記	教員名	ほんだ よみこ 本田 陽美子	開 講 コース	環境農学	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
農業経営を支える両輪は、栽培や飼養の管理技術と経営管理技術である。この片輪である経営管理の基礎となるデータや情報をは握するために、複式簿記記帳が必要となる。また、現在の農業収入等は、政策に左右されることも多くなっている。 そこで、経営実態を計数で把握できる記帳技術の修得と経営所得安定対策、社会保障、消費税制度などの情勢をふまえた農業簿記を身につけることが大切となる。 到達目標は以下のとおりである。 ・簿記用語と勘定科目名とその内容を理解する ・取引仕訳を行い、適切な簿記の流れで簿記処理を行える ・簿記記帳を通して、補助金制度等によるお金の流れや農業関連制度など経営のおおまかな内容を理解する <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑫持続可能な生産と消費 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[前期]							
1. ガイダンス・簿記とは、北海道特有のクミカン制度について 2. 個人経営における農業経営（農業と生活の混在）、労災制度による特別加入（教科書1章） 3. 勘定科目について（農業・青色申告科目）、事業主取引（教科書2章） 4. 簿記の手続きの流れと仕訳、消費税制度（教科書2章） 5. 勘定科目について（農業特有の勘定科目）（教科書第3章） 6. 仕訳と勘定科目（収益）、経営所得安定対策等交付金（教科書第4章） 7. 仕訳と勘定科目（費用）（教科書第4章） 8. 資産・負債の仕訳と勘定科目（教科書第5・6章） 9. 仕訳帳から元帳へ（教科書2章） 10. 元帳から（合計）残高試算表の作成（教科書2章） 11. 農産物・材料の棚卸と家事消費（教科書7章） 12. 固定資産（減価償却資産）の減価償却方法（教科書7章） 13. 決算整理と整理記入帳作成（教科書7章） 14. 精算表と決算整理後合計残高試算表作成（教科書7章） 15. 決算処理まとめ・簿記を農業に活かす							
III. 講義の進め方							
・授業計画に沿って、教科書、配付資料、スライドを使用 ・講義を中心に演習により記帳技術を身につけ、自習により定着を図る							
IV. 試験と成績評価							
小テスト(5回 15%)、期末テスト(50%)、課題(レポート等 2回 20%)、授業への参加意欲・姿勢(15%)等を総合的に判断する。詳細については、初回講義時に説明する。							
V. 授業外学修							
・予習よりも復習に重点を置き、特に仕訳については反復して学習すること ・簿記特有の用語が多いので、ノート等にまとめ確実に理解し習得すること ・授業中に行った演習で、やり残した部分がある時や欠席した場合は、必ずやってから次回授業に出席すること							
VI. 使用教材							
教科書：農業簿記検定教科書 3級 大原出版株式会社 著者 一般社団法人 全国農業経営コンサルタント協会 学校法人 大原学園大原簿記学校 参考書：特に指定しない							

科目名	キャリア技能Ⅰ (玉掛け技能)	教員名	こばやし たかお 小林 孝夫	開 講 コース	環境農学	1・2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標 産業界の発展とともに、生産及び流通機構の業務の中で多種多様な荷物の運搬が増大し、クレーン等の運搬荷役機械の利用も年々増加してきている。農業分野においても同様であり、クレーン等を使用する作業安全を確保するためには、これに従事する者、なかでも玉掛け作業には玉掛けに必要な知識と技能を身につける必要が不可欠である。このため、労働安全衛生法第61条において、つり上げ荷重1t以上の揚貨装置の玉掛け作業には玉掛け技能講習修了者等、一定の資格を持っている者でないと就業できない。本授業は、学生のキャリアアップを図るため同技能講習を実施する。 到達目標は以下のとおりである。 ・玉掛け作業に必要な知識、技能の習得により安全な作業が行える ・労働安全衛生法による玉掛け技能講習修了証の取得 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長と雇用 ⑨イノベーション ⑫生産と消費							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業日数：3日] 出張技能講習依頼先の教習センタのカリキュラムによる。小型移動式クレーン運転技能講習修了者は一部講習が免除となる。 1日目 学科 クレーン等に関する知識、力学に関する知識、玉掛け用具、玉掛け方法について 2日目 学科 関係法令 学科試験 演習 実際の荷を使用した玉掛け作業（ワイヤーと荷重、玉掛け作業） 3日目 演習 実際の荷を使用した玉掛け作業（揚貨装置と玉掛け作業） 技能試験							
III. 講義の進め方 研修は土・日曜日・祝日に実施する。年度初めに開講時期を知らせる。研修は、本学にて出張技能講習を依頼する教習センタ講師が行う。定員は20名とし、受講希望者が多いときは調整する。 事前に受講説明会を開き、申込方法、申込書の書き方等を説明するので必ず参加すること。受講説明会の日程は掲示板で周知する。 必要書類等：申込書、受講費用、自動車運転免許証または本籍がわかる住民票、写真（30×24mm）2枚 受講費用：31,000円(教科書、試験費込み) 但し小型移動式クレーン運転技能講習修了者は26,000円							
IV. 試験と成績評価 教習センタの授業を受講し、学科試験・技能試験に合格した者は、労働安全衛生法による玉掛け技能講習修了証が交付されるとともに「キャリア技能Ⅰ」1単位を付与する。							
V. 授業外学修 学外の教習センタ講師の指導を受けるので、学生らしい態度で受講すること。また、実技演習が出来るような靴、服装で受講すること。遅刻、欠席した場合は、それ以降の研修は受講できなくなる。							
VI. 使用教材 教科書：玉掛け作業教本（(株)PEO 建機教習センタ） 参考書：							

科目名	キャリア技能Ⅱ (小型移動式クレーン)	教員名	こばやし たかお 小林 孝夫	開 講 コース	環境農学	1・2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
産業界の発展とともに、生産及び流通機構の業務の中で多種多様な荷物の運搬が増大し、クレーン等の運搬荷役機械の利用も年々増加してきている。農業分野においても同様であり、積載型トラッククレーン等を使用する作業安全を確保するためには、これに従事する者、なかでも作業には移動式クレーンに必要な知識と技能を身につける必要が不可欠である。このため、労働安全衛生法第61条において、つり上げ荷重1t以上5t未満の小型移動式クレーンの運転業務には移動式クレーン運転士免許所持者または、小型移動式クレーン運転技能講習修了者でないと就業できない。本授業は、学生のキャリアアップを図るため同技能講習を実施する。 到達目標は以下のとおりである。 ・移動式小型クレーン運転作業に必要な知識、技能の習得により安全な作業が行える。 ・労働安全衛生法による移動式小型クレーン運転技能講習修了証の取得。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長と雇用 ⑨イノベーション ⑫生産と消費							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業日数：3日]							
[後期] 出張技能講習依頼先の教習センタのカリキュラムによる。玉掛け技能講習修了者は一部講習が免除となる。 1日目 学科 クレーン等に関する知識、力学に関する知識、玉掛け用具、玉掛け方法について 2日目 学科 関係法令 学科試験 演習 実際の荷を使用したクレーン作業（運転のための合図） 3日目 演習 実際の荷を使用したクレーン作業（クレーンの運転と荷作業） 技能試験							
III. 講義の進め方							
研修は土・日曜日・祝日に実施する。年度初めに開講時期を知らせる。研修は、本学にて出張技能講習を依頼する教習センタ講師が行う。定員は20名とし、受講希望者が多いときは調整する。 事前に受講説明会を開き、申込方法、申込書の書き方等を説明するので必ず参加すること。受講説明会の日程は掲示板で周知する。 必要書類等：申込書、受講費用、自動車運転免許証または本籍がわかる住民票、写真（30×24mm）2枚 受講費用：53,000円(教科書、試験費込み) 但し玉掛け技能講習は47,000円							
IV. 試験と成績評価							
教習センタの授業を受講し、学科試験・技能試験に合格した者は、労働安全衛生法による小型移動式クレーン運転技能講習修了証が交付されるとともに「キャリア技能Ⅱ」1単位を付与する。							
V. 授業外学修							
学外の教習センタ講師の指導を受けるので、学生らしい態度で受講すること。また、実技演習が出来るような靴、服装で受講すること。遅刻、欠席した場合は、それ以降の研修は受講できなくなる。							
VI. 使用教材							
教科書：小型移動式クレーン運転者教本（株）PEO 建機教習センタ） 参考書：							

科目名	キャリア技能Ⅲ (フォークリフト)	教員名	こばやし たかお 小林 孝夫	開 講 コース	環境農学	1・2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標 近年、物流システムの合理化、運搬荷役作業の省力化の進展に伴いフォークリフトの普及はめざましい。農業分野においても同様であり、フォークリフトを使用する作業安全を確保するためには、これに従事する者、なかでも作業者にはフォークリフトに必要な知識と技能を身につける必要が不可欠である。このため、労働安全衛生法第61条において、フォークリフト構造規格が定められ、最大荷重 1t 以上のフォークリフトの運転の業務には、フォークリフト運転技能講習修了者でないと就業できない。本授業は、学生のキャリアアップを図るため同技能講習を実施する。 到達目標は以下のとおりである。 ・最大荷重 1t 以上のフォークリフト運転作業者に必要な知識、技能の習得により安全な作業が行える。 ・労働安全衛生法によるフォークリフト運転技能講習修了証の取得。 <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ⑧成長と雇用 ⑨イノベーション ⑫生産と消費							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業日数：2 日] 出張技能講習依頼先の教習センタのカリキュラムによる。 1 日目 学科 フォークリフトに関する知識、原動機・走行装置に関する知識、荷役装置の構造・点検整備について 2 日目 学科 関係法令 学科試験 演習 実際の荷を使用したフォークリフト作業 技能試験							
III. 講義の進め方 研修は土・日曜日に実施する。年度初めに開講時期を知らせる。研修は、本学にて出張技能講習を依頼する教習センタ講師が行う。定員は 20 名とし、受講希望者が多いときは調整する。 事前に受講説明会を開き、申込方法、申込書の書き方等を説明するので必ず参加すること。受講説明会の日程は掲示板で周知する。 受講資格：大型特殊免許取得者 必要書類等：申込書、受講費用、自動車運転免許証または本籍がわかる住民票、写真 (30×24mm) 2 枚 受講費用：24,000 円(教科書、試験費込み)							
IV. 試験と成績評価 教習センタの授業を受講し、学科試験・技能試験に合格した者は、労働安全衛生法によるフォークリフト運転技能講習修了証が交付されるとともに「キャリア技能Ⅲ」1 単位を付与する。							
V. 授業外学修 学外の教習センタ講師の指導を受けるので、学生らしい態度で受講すること。また、実技演習が出来るような靴、服装で受講すること。遅刻、欠席した場合は、それ以降の研修は受講できなくなる。							
VI. 使用教材 教科書 ：フォークリフト運転者教本 ((株)PEO 建機教習センタ) 参考書 ：							

科目名	キャリア技能Ⅳ （車両系建設機械）	教員名	こばやし たかお 小林 孝夫	開 講 コース	環境農学	1・2年次	前・後期
Ⅰ. 目的と内容および到達目標							
建設機械の導入は、省力化、作業時間の短縮をもたらし、建設業、土石採種業、農林業など幅広い業種で使用されてきている。建設機械の種類は多いが、掘削用機械（油圧式ショベル等）、整地・運搬・積み込み用機械（トラクターショベル等）は農業分野において導入が拡大している。機体質量3t以上のショベル等の車両系建設機械（整地、運搬、積み込み用及び掘削用）の運転業務に就く場合は、労働安全衛生法第61条において、車両系建設機械（整地、運搬、積み込み用及び掘削用）運転技能講習修了者でないと就業できない。本授業は、学生のキャリアアップを図るため同技能講習を実施する。 到達目標は以下のとおりである。 ・車両系建設機械（整地、運搬、積み込み用及び掘削用）運転作業者に必要な知識、技能の習得により安全な作業が行える。 ・労働安全衛生法による車両系建設機械（整地、運搬、積み込み用及び掘削用）運転技能講習修了証の取得。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長と雇用 ⑨イノベーション ⑫生産と消費							
Ⅱ. 授業計画 [単位数：1単位、授業日数：2日]							
出張技能講習依頼先の教習センタのカリキュラムによる。							
1日目							
学科	車両系建設機械（整地、運搬、積み込み用及び掘削用）に関する知識、油圧装置・走行装置に関する知識、トラクタ系、ショベル系建設機械の構造・取り扱いについて						
2日目							
学科	車両系建設機械の安全、関係法令						
学科試験							
演習	実際の荷を使用した車両系建設機械（パワーショベル、ホイール式トラクタショベル）作業						
技能試験							
Ⅲ. 講義の進め方							
研修は土・日曜日に実施する。年度初めに開講時期を知らせる。研修は、本学にて出張技能講習を依頼する教習センタ講師が行う。定員は20名とし、受講希望者が多いときは調整する。 事前に受講説明会を開き、申込方法、申込書の書き方等を説明するので必ず参加すること。受講説明会の日程は掲示板で周知する。 受講資格：大型特殊免許取得者 必要書類等：申込書、受講費用、自動車運転免許証または本籍がわかる住民票、写真（30×24mm）2枚 受講費用：47,000円(教科書、試験費込み)							
Ⅳ. 試験と成績評価							
教習センタの授業を受講し、学科試験・技能試験に合格した者は、労働安全衛生法による車両系建設機械（整地、運搬、積み込み用及び掘削用）運転技能講習修了証が交付されるとともに「キャリア技能Ⅳ」1単位を付与する。							
Ⅴ. 授業外学修							
学外の教習センタ講師の指導を受けるので、学生らしい態度で受講すること。また、実技演習が出来るような靴、服装で受講すること。遅刻、欠席した場合は、それ以降の研修は受講できなくなる。							
Ⅵ. 使用教材							
教科書	車両系建設機械（整地、運搬、積み込み用及び掘削用）運転者教本（(株)PEO 建機教習センタ）						
参考書							

科目名	キャリア技能Ⅴ (食品衛生責任者)	教員名	はたけやま 晶山 佳幸	開講 コース	環境農学	1・2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標 食品衛生責任者は食品衛生責任者養成講習を受講した者などで、食品衛生責任者として選任されている者と定義している。食品衛生法に定められた許可営業者(食品衛生管理者の設置義務がある業種以外の飲食店営業など)は、営業許可施設ごとに食品衛生責任者を選任し保健所に届け出ることになっていることから、本養成講習を受講し、資格を取得する必要がある。 到達目標は以下のとおりである。 ・食品衛生責任者養成講習会を受講し、食品衛生責任者資格を取得する。 <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ②飢餓 ⑥水・衛生							
II. 授業計画 [単位数：1単位、集中講義] [集中] 1. 衛生法規(伝染病、疾病予防) 2. 衛生法規(環境衛生、労働衛生) 3. 公衆衛生学(食品衛生法、施設基準、管理運営基準等) 4. 食品衛生学(食品事故) 5. 食品衛生学(食品の取扱い) 6. 食品衛生学(施設の衛生管理、自主管理等) 7. 修了考査							
III. 講義の進め方 社団法人 北海道食品衛生協会が企画・運営する食品衛生責任者講習会を受講する。講習会の開催日時や講習会場については別途連絡する。なお、本養成講習会受講者は別途講習料(8,000円)を支払って受講する。							
IV. 試験と成績評価 本養成講習会を欠かさず受講し、修了考査に合格した者は、食品衛生責任者資格が取得できると共に「キャリア技能Ⅴ」1単位を付与する。							
V. 授業外学修 食品を取り扱う際の衛生管理や過去に起きた食中毒や食品事故について事前学習しておくことにより講習会の内容理解が深まる。							
VI. 使用教材 教科書：受講テキストは講習会当日、北海道食品衛生協会から支給される。							

科目名	キャリア技能Ⅵ (ガス溶接技能)	教員名	こばやし たかお 小林 孝夫	開 講 コース	環境農学	1・2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標 可燃性ガス及び、酸素を用いて行う溶接、溶断の作業は、各現場において広く行われており、これらの作業中に使用される装置の欠陥や作業方法の不適正などにより、大きな爆発や火災がしばしば発生している。農業現場においても各種機械・施設の修理・作成に溶接技能は欠かせない。 このような見地から、労働安全衛生法第61条に基づく労働安全衛生規則では、可燃性ガスと酸素を用いて行う金属の溶接・溶断・加熱の作業に従事する者は、原則としてガス溶接技能講習の修了者でなければならないことになっている。本授業は、学生のキャリアアップを図るため同技能講習を実施する。 到達目標は以下のとおりである。 ・ガス溶接、溶断の作業に必要な知識、技能の習得により安全な作業が行える。 ・労働安全衛生法によるガス溶接技能講習修了証の取得。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長と雇用 ⑨イノベーション ⑫生産と消費							
II. 授業計画〔単位数：1単位、授業日数：2日〕 出張技能講習依頼先の教習センタのカリキュラムによる。 1日目 学科 設備の構造・取扱いの知識、可燃性ガス及び酸素の知識について 学科 関係法令 学科試験 2日目 演習 ガス溶接等の設備の取扱い実技							
III. 講義の進め方 研修は土・日曜日に実施する。年度初めに開講時期を知らせる。研修は、本学にて出張技能講習を依頼する教習センタ講師が行う。定員は20名とし、受講希望者が多いときは調整する。 事前に受講説明会を開き、申込方法、申込書の書き方等を説明するので必ず参加すること。受講説明会の日程は掲示板で周知する。 必要書類等：申込書、受講費用、自動車運転免許証または本籍がわかる住民票、写真（30×24mm）2枚 受講費用：20,000円(教科書、試験費込み)							
IV. 試験と成績評価 教習センタの授業を受講し、学科試験・技能取り扱いに合格した者は、労働安全衛生法によるガス溶接技能講習修了証が交付されるとともに「キャリア技能Ⅵ」1単位を付与する。							
V. 授業外学修 学外の教習センタ講師の指導を受けるので、学生らしい態度で受講すること。また、実技演習が出来るような靴、服装で受講すること。遅刻、欠席した場合は、それ以降の研修は受講できなくなる。							
VI. 使用教材 教科書：ガス溶接技能教本（株）PEO 建機教習センタ） 参考書：							

科目名	キャリア技能Ⅶ (農業用ドローンオペレーター教習)	教員名	じょうにし たかあき 上西 孝明	開 講 コース	環境農学	1・2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
ドローンをはじめとするロボットやAI 技術を駆使した新しい農業スタイル「スマート農業」は、高齢化や人手不足が問題視されるなか、作業の効率化やコスト削減を実現する施策として期待されている。 農業用ドローンでの農薬散布が年々増加しているなか、適正な管理、操縦技術、法律を守った運用が望まれている。 到達目標は以下のとおりである。 ・農業用ドローンオでの農薬散布に必要な知識、技能の習得により安全に作業が行える。 ・農業用ドローンオペレーターの技能認定証を習得（対象機種 DGI 社 MG-1、T-10、T-20、T-30） ・ <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長と雇用 ⑨イノベーション ⑫生産・消費							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：5 日]							
出張技能講習依頼先のカリキュラムによる。							
1 日目							
学科 運用管理①（ドローンの概要）②（関連法律について） 散布飛行の知識①（オペレーターの心構え・機体の基礎知識・散布飛行について）							
演習 散布飛行練習①～⑤（ドローンの操作実技）							
2 日目							
学科 散布飛行の知識②③							
演習 散布飛行練習⑥～⑪							
3 日目							
学科 散布飛行の知識④ 農薬の知識①（農薬について使用に伴う注意事項）							
演習 散布飛行練習⑫～⑰							
4 日目							
学科 農薬の知識② 作物保護の知識①②（作物保護、病害などについて） 筆記試験							
演習 散布飛行練習⑱・実技試験							
5 日目							
学科 自動航行について①～③（自動航行を活用した農薬散布について） 筆記試験（自動航行）							
演習 自動航行の練習①～④（自動航行を活用した農薬散布についての実技）							
III. 講義の進め方							
教習の時期は 8 月下旬～後期開始までの 5 日間に実施する。年度初めに開講時期を知らせる。本学にて出張技能講習を依頼先講師で行う。 事前に受講説明会を開き、受講費用（教科書、試験費含む）、受講申請書の書き方などを指導するので必ず参加すること。受講説明会の日程は掲示板に張り出すので見落とさないこと。							
IV. 試験と成績評価							
農業用ドローンオペレーター教習を受講し、合格した者は農業用ドローンオペレーターの技能認定証が交付されるとともに「キャリア技能Ⅶ」1 単位を付与する。							
V. 授業外学修							
技能講習は出張講習（北短分校）の形を取っており、学外の教習講師の指導を受けるので、学生らしい態度、実技の出来る服装を心掛け、講習をより良く理解するためドローンの基礎用語の予習をすること。							
VI. 使用教材							
教科書 : DJIA GRAS 教習所 学科テキスト 参考書 :							

科目名	キャリア技能Ⅷ (ミュージカル)	教員名	保育学科他 専任教員	開講 コース	環境農学	1年次	集中
I. 目的と内容および到達目標							
拓大ミュージカルは全学科の学生からなる実行委員会形式によって運営されている。公演は毎年2月中旬2日間2回に渡り深川市民会館(深川市民交流ホール「み・らい」)で行われ、2日間で約1,400人の観客動員実績がある。実行委員会は、専任教員の指導の下、毎年9月下旬に結成され、5か月間に渡って設定された授業時間及び課外時間を使って活動している。公演を成功させるための活動は、演者以外にも衣装、大道具、小道具の製作、音響、チケット販売、パンフレット広告募集など多岐に渡るため、各部署に分かれて活動している。 到達目標は以下のとおりである。 ・活動当初に定めた自己到達目標の達成のため努力することができる。 ・集団活動での責任感や協調性、主体性などを常に意識して活動することができる。 ・所属部署での役割を最後までやり遂げることができる。 <SDGs(持続可能な開発目標)との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑫生産・消費 ⑮陸上資源							
II. 授業計画[単位数：2単位、集中]							
公演日は2024年2月中旬を予定。 以下の活動分野(所属部署)があり、それぞれの活動計画によって後期から制作が進められる。 <制作スタッフ> 保育学科他専任教員の他、以下の非常勤講師が指導にあたる。 ・前田順二 講師 演技指導 ・藤井綾子 講師 衣装製作指導・ダンス指導 ※その他、舞台製作アドバイザー・衣装製作アドバイザーを置く 1 キャスト 2 音響 3 舞台美術(大道具・小道具) 4 衣装 5 舞台監督 <事務局スタッフ> 1 総務・会計 2 広報渉外							
III. 講義の進め方							
10月上旬から2月中旬の公演日に向けて活動する。 通常時間中の活動は原則として月・金(16:00～17:20)、土曜(9:10～16:00)。なお、土曜日、休暇期間中の活動は授業時間外(課外)活動となっている。休暇期間を利用した活動は、日曜・祭日を除く平日(9:10～16:00)。ただし、年末年始の活動は実施しない。							
IV. 試験と成績評価							
試験は実施しない。成績評価は活動実践(90%)及び活動記録シート(10%)で行う。							
V. 授業外学修							
活動の成果を積み上げながら進めるので、毎回とも準備に労苦を惜しまず、計画的・積極的に休むことなく参加することが求められる。準備は授業時間だけでは不足する場合があるので、部署ごとに必要に応じて授業外にも取り組むことが大事である。							
VI. 使用教材							
台本や楽譜、舞台設計図など、必要な資料は、授業で配布する。また、公演後は活動過程・公演を収録したDVDが製作される。							

科目名	キャリア技能Ⅸ (ミュージカル)	教員名	保育学科他 専任教員	開講 コース	環境農学	2年次	集中
I. 目的と内容および到達目標 拓大ミュージカルは39年の実績と伝統に支えられた本学の特徴的学びの活動である。1年次では企画力・協調性・忍耐力・集中力など、様々な人間力を育み、感動の涙を自ら体験することを第一の目的として活動を体験するが、2年生としての関わりは、1年生を指導し、リーダーシップを発揮し、社会人として巣立つ前の最後の学び、特にリーダーシップ性を高めることを目標にしている。 組織運営の最初から最後までを責任を持って関わることで、1年次では知りえなかった様々な問題や課題を体験できる。その経験は、社会人として大きな糧になるもの。労苦を共に体験することも重要な目的である。 到達目標は以下のとおりである。 ・活動当初に定めた自己到達目標達成のため努力をすることができる。 ・2年生としての責任感やリーダーシップなどを常に意識して活動することができる。 ・所属セクションでの役割を最後までやり遂げることができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑫生産・消費 ⑮陸上資源							
II. 授業計画〔単位数：2単位、集中〕 公演日は2024年2月中旬を予定。 以下のような活動分野があり、それぞれの活動計画によって後期より制作が進められる。 <制作スタッフ> 1 キャスト 2 音響 3 舞台美術（大道具・小道具） 4 衣装 5 舞台監督部 <事務局スタッフ> 1 総務会計部 2 広報渉外部							
保育学科他の専任教員の他、以下の非常勤講師が指導にあたる。 前田順二 講師 演技指導 藤井綾子 講師 衣装製作指導・ダンス指導 ※その他、舞台製作アドバイザー・衣装製作アドバイザーを置く							
III. 講義の進め方 10月上旬から2月中旬の公演日に向けて活動する。 通常授業期間中の活動は原則として月・金（16:00～17:20）土曜（9:10～16:00）。 なお、土曜日、休暇期間の活動は授業外時間（課外）活動となっている。 休暇期間を利用した活動は、日曜祭日を除く平日（9:10～16:00）。ただし、年末年始の活動は例年行わない。							
IV. 試験と成績評価 試験は実施しない。成績評価は活動実践（90%）及び活動記録シート（10%）で行う。							
V. 授業外学修 活動の成果を積み上げながら進めるので、毎回とも準備に労苦を惜しまず、計画的・積極的に休むことなく参加することが求められる。準備は授業時間だけでは不足する場合があるので、部署ごとに必要に応じて授業外にも取り組むことが大事である。							
VI. 使用教材 教科書：台本や楽譜、舞台設計図など、必要な資料は、授業で配布する。 参考書：毎年、活動過程・公演を収録したDVDが製作されるので参考にして欲しい。							

科目名	海外研修	教員名	じょうにし 上西 孝明	開講 コース	環境農学	1・2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
この科目は、海外における研修および諸活動を対象とし、海外研修前後に単位認定に関わる所定の申請を行った者を対象に、学科会議等の審査を経て単位を付与するものである。 拓殖大学で実施される海外研修については、あらかじめ所定の手続きを済ませ、参加の可否は学内及び主催者による選考によっている。 到達目標は以下のとおりである。 ・ 本学開講科目と関連する研修において研鑽につとめ、研修後に本学学習に生かせる。 ・ 海外生活を体験することにより、グローバルな視点を養い、広く社会に貢献できる人間になる。 ・ 海外生活における必要なコミュニケーション能力を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ④教育 ⑫生産・消費							
II. 授業計画〔単位数：2単位、現地研修日数：2～3週間程度〕							
・ 拓殖大学が実施する海外研修の場合は、事前研修は拓殖大学において実施されるが、本学においてもレポート課題説明等の事前研修を他コース・他学科と合同で行う。 ・ 研修後にはレポート提出指導、報告会等の事後研修を他コース・他学科と合同で行う。							
III. 講義の進め方							
・ 海外研修申請書の記入に当たっては、選考に関わる重要書類であることから、ゼミ担当教員の指導を受けた上で内容を精査して行うこと。所定のスケジュールに従い選考手続き書類を提出する。 ・ その他事務的な手続きについても学内の掲示などに注意が必要である。							
IV. 試験と成績評価							
・ 事前研修・現地研修・事後研修に関する評価をもとに、学科会議にて審議の上単位認定の可否を判定する。研修終了後はその旨ゼミ担当教員に申し出た上で、学務課窓口にて申請の手続きを行わなくてはならない。 ・ 拓殖大学実施の海外研修への参加の最終的な選考は学内で決定する。							
V. 授業外学修							
・ 海外研修に参加するにあたり、英語コミュニケーション、総合英語の履修などから英語の基礎力を身に付け、海外生活における必要なコミュニケーション能力を身に付けること							
VI. 使用教材							
教科書：担当教員の指示に従うこと。 参考書：							

科目名	卒 論 演 習	教員名	各専任教員	開 講 コース	環境農学	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標 この科目は、2年次に各学生が選択するゼミナール（以下、ゼミという）授業の成果等を卒業論文という形に結実するために開設される科目である。したがって、科目の内容はそれぞれのゼミに応じて多様に設定される。 学生は2年ゼミを選択する際は、この点に留意しなければならない。 到達目標は以下のとおりである。 ・設定されたテーマに従って十分な根拠に基づく主張を論文としてまとめることができる。 ・学会形式に従った発表をすることができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ④教育 ⑦エネルギー ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑫生産・消費 など							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：30回] [前・後期] 授業は前期・後期をとおして2年ゼミの進行に即して実施するが、特定の時間帯に制約されずに展開する。							
III. 講義の進め方 各ゼミ担当教員が具体的に提示する方法・資料・教材などをもとに、各学生の自発的な学習を中心とした進め方となる。したがって、各学生は自己の研究テーマに応じた日常的な研究実践を継続して取り組むとともに、日々の記録を着実に実践することが極めて大切である。							
IV. 試験と成績評価 ゼミ毎に定められた形式の卒業論文が評価対象の中心であるが、卒業論文及びゼミ成果発表会の取組なども評価の対象となる。 成績評価は、設定されたテーマに従って十分な根拠に基づく主張を論文としてまとめることができたか（80%）、学会形式に従った発表をすることができたか（20%）、で評価する。							
V. 授業外学修 図書館にある過去の卒論を見て、書き方、表現の方法、取りまとめ方を参考にすると良いでしょう。							
VI. 使用教材 各ゼミ担当教員がゼミの時間及び研究活動時に具体的に指示する。							

科目名	文 章 表 現 法	教員名	工藤 遥 くどう はるか	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
文章を読み、その意味内容を的確に理解することや、自分の考えを明快かつ論理的に書くこと・伝えることは、「学び」の基礎であり、社会生活の様々な場面で必要とされる技能である。 本講義では、学生として求められる文章読解・文章表現の基礎を修得し、レポート作成とプレゼンテーションに必要な知識と技能を身につけることを目的として、読解力や表現力を高めるための課題に取り組む。 到達目標は以下のとおりである。 ・日本語の表現・読解に関する基礎的な知識と技能を身につける。 ・レポート作成に必要な基礎的な知識と技能を身につける。 ・プレゼンテーションに必要な基礎的な知識と技能を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育							
II. 授業計画〔単位数：2 単位、授業回数：15 回〕							
〔前期〕 1. 授業ガイダンス、入学準備学習のふりかえり 2. 日本語表現の基本 3. 接続表現と論理的思考 4. 論理的表現と文章読解（教科書第 5 章、第 10 章、第 11 章） 5. 要約表現①：要約表現の基本（教科書第 5 章、第 6 章） 6. 要約表現②：要約作成の練習（教科書第 6 章） 7. レポート作成①：レポート作成の基本（教科書第 14 章） 8. レポート作成②：情報収集、文献探索（教科書第 7 章、第 8 章、第 9 章） 9. レポート作成③：アウトライン、引用・文献表記（教科書第 13 章、第 14 章） 10. レポート作成④：書式、パラグラフ、文章表現（教科書第 14 章） 11. レポート作成⑤：グループワーク 12. プレゼンテーション①：口頭発表の基本（教科書第 12 章） 13. プレゼンテーション②：発表資料の作成 14. プレゼンテーション③：口頭発表の準備 15. プレゼンテーション④：課題発表							
III. 講義の進め方							
スライドを使って講義をする。適宜プリントを配布する。小テスト、要約作成、レポート作成、プレゼンテーションの演習課題など、個人／ペア／グループで課題に取り組んでもらう。なお、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
小テスト（20%）、要約作成（10%）、レポート作成（40%）、プレゼンテーション（30%）を総合的に評価する。							
V. 授業外学修							
学生として欠くことのできない基礎的な知識と技能を身につけるための授業である。講義で学んだことを実践できるようになるためには、教科書を精読して予習を行い、講義内容や課題指示をよく聴いて課題や復習に取り組むことが肝要である。レポート作成やプレゼンテーション課題に関しては、文献調査や執筆・資料作成、発表準備にある程度の時間が必要となるため、計画的に取り組むことが求められる。疑問点があれば積極的に質問し、参考書等も活用しながら自主的に学修することを推奨する。							
VI. 使用教材							
教科書：拓殖大学政経学部 編『大学生 学びのツール 改訂版（新入生ガイドブック）』 参考書：田中共子 編『よくわかる学びの技法』（ミネルヴァ書房）、小棹理子 他『大学生のための基礎力養成ブック』（丸善出版）、石黒圭『この 1 冊できちんと書ける 論文・レポートの基本』（日本実業出版社）、井下千以子『思考を鍛えるレポート・論文作成法』（慶應義塾大学出版会）							

科目名	哲 学	教員名	はしもと まこと 橋本 信	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次 2 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
この講義の目的は「よく生きるとはどういうことか？」を一人一人が深く主体的に考えることを手助けすることにある。今まで当たり前であったことに疑問が寄せられ、吟味がなされる。このような問いかけと吟味の過程に求められるのが哲学的思考である。 哲学は人間が自己と世界を総体的に把握しようとする知の営みである。この講義では、人間として生きる上で関わる多様な物事を原理的に把握する思考へ向かうことによって、私たちが人間としてどのように生きるべきかを幅広く考えることをねらいとしている。到達目標は以下のとおりである。 ・論理的思考の基礎的力量を備える。 ・生命・人間・社会についての基本的な理解力を備える。 ・十分な根拠に基づいた主張を展開することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ①貧困 ②飢餓 ⑤ジェンダー ⑦エネルギー ⑬気候変動							
II. 授業計画〔単位数：2 単位、授業回数：15 回〕							
〔後期〕 1. 哲学とは 2. 言葉とは 3. 論理とは 4. 人間とは 5. 人間関係とは 6. 現代の人間関係とは 7. 社会とは 8. 現代社会とは 9. 現代社会で生きるとは 10. 自然とは 11. 「人新世」とは 12. 自然との共生とは 13. 人間の生命とは 14. 人間の自由とは 15. 人間の哲学とは							
III. 講義の進め方							
対話型の講義を目指す。授業時の質疑応答や小テストや小レポートの提出に加えて、主体的に取り組むことを主眼とする読書レポートと課題レポートをまとめてもらうこととする。提出先は BB の予定である。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、小テスト・小レポート 75%、読書レポート 10%、課題レポート 15%で行う予定である。それぞれの詳細は授業時に説明する。							
V. 授業外学修							
15 回の授業資料は事前に BB に掲載するとともに、授業後にも更新された内容を BB に掲載するので、BB 講義資料によって予習・復習することを推奨する。また、各種レポートは BB に提出するため、〆切までに書き直しなどの作業をすることも推奨する。さらに、授業内容に関連する資料も BB 講義資料に掲載する予定なので、参考にすることを推奨する。							
VI. 使用教材							
教科書 : 指定しない 参考書 : 『人間の哲学の再生にむけて』宇都宮芳明著（世界思想社）、『現代社会はどこに向かうか』見田宗介著（岩波新書）、『第四次産業革命』クラウス・シュワブ著（日本経済新聞出版社）、『生命誌の世界』中村桂子著（NHK 出版）、『環境倫理学のすすめ』加藤尚武著（丸善ライブラリー）、『心の起源』木下清一郎著（中公新書）、『人新世の「資本論」』斎藤幸平著（集英社新書）							

科目名	心 理 学	教員名	あなみず 穴水 ゆかり	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
ヒトの何気ない行動や判断には、心が大きくかかわっている。心理学とは「こころとは何か」を解明する学問であり、目に見えない心のはたらきを研究する学問である。本講義では心理学の基礎的な理論をもとに、①自己や他者の理解に向けた心理学の学びを深めること、②心理学の理論を自分自身の生活と関連づけて理解すること、③心理学について学んだことを日常生活に適用できるようになること、を目的とする 到達目標は以下のとおりである。 ・心理学を学んだことがない人に対して、心理学の視点からヒトの行動をわかりやすく説明できる。 ・心理学の理論を理解し、それを自分自身の生活と関連づけて理解できる。 ・心理学について学んだことを、日常生活に適用できるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ④教育 ⑧成長・雇用							
II. 授業計画〔単位数：2単位、授業回数：15回〕							
〔前期〕 1. オリエンテーション - 「心理学」とは？ - 2. 胎児期～乳児期の発達 - 発達 - 3. 乳児期～幼児期の発達① - 発達、認知 - 4. 乳児期～幼児期の発達② - 発達、認知 - 5. 児童期の発達 - 発達、認知心理 - 6. 青年期～老年期の発達 - 発達、認知 - 7. SNS とうまくつきあおう - 炎上やSNS 疲れはなぜ起きる - 8. 自分を知るためのヒント① - 感情と情動 - 9. 自分を知るためのヒント② - 性格、パーソナリティ - 10. 相手を知るためのヒント - 行動、コミュニケーション - 11. 恋愛に役立つ心理学 - 社会 - 12. 仕事に役立つ心理学① - 感覚、知覚、認知、記憶 - 13. 仕事に役立つ心理学② - 社会、産業、経営、組織 - 14. 心の不調を知る① - メンタルヘルス - 15. 心の不調を知る② - メンタルヘルス -							
III. 講義の進め方							
授業計画に沿って、スライドと配布資料を中心に授業を行う。適宜、映像資料などを用いる。 授業中は通信携帯機器の操作、申し出なくスライドの写真を撮ることを厳禁とする。これが守れない場合は退室を求め、以後の授業参加は不可とする。 なお、やむを得ず一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、定期試験（80%）及び提出物（20%）により行う。 演習の参加状況については提出物の内容により判断する。定期試験では配布資料の持ち込みを可とする。 単位取得のためには、授業への出席を前提条件とする。							
V. 授業外学修							
事前学修は特に必要ないが、興味のある回については、あらかじめ内容について調べておくとうかがい学びが深まるだろう。 授業後は配布資料を整理しておく。疑問点や理解できなかったことについては随時、質問を受けつける。興味のある内容については文献等により、さらに学びを深めてほしい。							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない。(適宜プリントを配布) 参考書 : 『Newton 別冊 ゼロからわかる心理学』『Newton 別冊 心理学 実践編』 横田正夫著『教養のトリセツ 心理学』（日本文芸社）ほか、講義の中で適宜紹介する。							

科目名	日 本 国 憲 法	教員名	こばやし ひでたか 小林 秀高	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
憲法は、国家の権力を規制し、国民の自由を守るために制定されている。講義では、1. 国家を規制する法としての憲法の役割について解説すること、2. これから学習する社会科学（経済学、経営学、政治学、法学、心理学等々）の基礎を身につけることを目標として展開する。後半の講義は憲法の条文などの解説ではなく、現代社会における具体的な憲法の論点を取り扱う。 到達目標は以下のとおりである。 ・立憲主義的憲法の意味や役割、機能を理解できる。 ・基本的人権の歴史的な成立過程を理解し、日本国憲法における基本的人権の意味を理解できる。 ・現代社会における憲法の役割と法律の役割を区別して説明することができる。 ・公務員試験等で要求される憲法の基礎的な知識を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑩不平等 ①貧困 ⑤ジェンダー ⑯平和							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[前期] 1. ガイダンス／憲法と社会科学 2. 社会科学の目的と学習方法 3. 概念と歴史1：立憲主義憲法の意味 4. 概念と歴史2：人権の成立 5. 概念と歴史3：人権の限界 6. 概念と歴史4：新しい人権 7. 概念と歴史5：日本国憲法の誕生 8. 人権と平等1：平等の概念 9. 人権と平等2：アファーマティブ・アクション 10. 人権と平等3：婚姻 11. 人権と平等4：貧困と平等 12. 統治機構論1：国家財政と民営化 13. 統治機構論2：選挙と政策決定 14. 統治機構論3：司法への国民参加 15. 統治機構論4：安全保障と自衛隊							
III. 講義の進め方							
講義は毎回、1. 基本的な知識の確認、2. 現代における憲法の論点、3. 自分の意見のまとめの3つのパートから成り立つ。特に高校までに学習した世界史の知識と日本史の知識が必要になってくるが、知識は必要に応じて解説する。1と2は講義形式で行う。3についてはリアクション・ペーパーに記載する時間をとる。 講義の一部は遠隔で実施する場合もある。							
IV. 試験と成績評価							
期末試験 40%、講義ごとに提出するリアクション・ペーパー60%によって評価をする。また、任意提出のレポートを1回課す。詳細については初回講義時に指示をする。							
V. 授業外学修							
講義毎に提出するリアクション・ペーパーの内容は次の講義の際に解説をする。提出後次の授業までに課された内容を調べておくことが復習および予習となる。欠席した授業回についてはBlackboardを確認しリアクション・ペーパーの内容を必ず確認しておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書：特定の教科書は使用しない。 参考書：授業で配布するシラバスを参照のこと。							

科目名	法 学	教員名	こばやし ひでたか 小林 秀高	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
現代の社会では、意識せずとも日常生活は法的な仕組みによって成り立っている。しかしながら、普段の生活の中で法を意識することは難しい。本講義では、社会生活に必要な法律学の基礎を身につけ、理解することを目指す。また、前半は多くの学生が関わる就職活動やアルバイトに関連する法律、後半は刑罰と裁判員として関わる刑事裁判に関するテーマを扱う予定である。 到達目標は以下のとおりである。 ・日常生活が法によって成り立っていることが理解できる。 ・法的な思考法の基礎が理解できる。 ・時事的な問題についての法的側面を理解できる。 ・公務員試験等で要求される憲法の基礎的な知識を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ⑤ジェンダー ⑩平和							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. ガイダンス／リーガル・マインド 2. 基礎法学1：法の分類 3. 基礎法学2：民事法 4. 基礎法学3：刑事法 5. 労働法1：就活・アルバイトのための法律 6. 労働法2：女性の社会参加と法律 7. 刑法1：なぜ人を罰するのか 8. 刑法2：刑罰の目的と再犯 9. 刑法3：どんなときに犯罪は成立するのか 10. 刑法4：罪を犯しても罰せられないとき 11. 権利の実現と裁判1：刑事手続きと民事手続き 12. 権利の実現と裁判2：警察の役割 13. 権利の実現と裁判3：検察官の役割 14. 権利の実現と裁判4：裁判所の役割 15. 権利の実現と裁判5：上訴と再審							
III. 講義の進め方							
講義は毎回、1. 基本的な知式の確認、2. 現代における憲法の論点、3. 自分の意見のまとめの3つのパートから成り立つ。特に高校までに学習した世界史の知識と日本史の知識が必要になってくるが、知識は必要に応じて解説する。1と2は講義形式で行う。3についてはリアクション・ペーパーに記載する時間をとる。 講義の一部は遠隔で実施する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
期末試験 40%、講義ごとに提出するリアクション・ペーパー60%によって評価をする。また、任意提出のレポートを1回課す。詳細については初回講義時に指示をする。							
V. 授業外学修							
講義毎に提出するリアクション・ペーパーの内容は次の講義の際に解説をする。提出後次の授業までに課された内容を調べておくことが復習および予習となる。欠席した授業回についてはBlackboardを確認しリアクション・ペーパーの内容を必ず確認しておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書 : 特定の教科書は使用しない 参考書 : 初回に配布するシラバスを参照。							

科目名	経 済 学	教員名	はただ ひでお 畠田 英夫	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
本講義の目的は、現代経済の仕組みや機能に関する初歩的な知識とその理解を深めることにある。また、現代の日本経済の課題に類するより複雑な現実経済の現象を理解するための基礎となる見方や考え方を学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・経済活動や交易の意義を理解している。 ・価格決定の仕組と機能を理解している。 ・自由な貿易のメリット・デメリットを理解している。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑫生産・消費 ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ①貧困 ⑩不平等							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. 経済学とは何か 2. 経済学の原則 希少性と機会費用・経済と経済主体 3. 交易と市場の誕生・貨幣 4. 市場の役割と種類 5. 消費者の目的と行動 6. 生産者の目的と行動 7. 需要と供給による価格決定 8. まとめ1: 需要・供給分析の性質 9. 貿易とその利益 10. 比較優位論 11. 国際収支と為替 12. 経済のグローバル化 13. 自由貿易と保護貿易 14. 国際貿易と現代経済 15. まとめ2: 交易は人々を豊かにする							
III. 講義の進め方							
随時課題を解いてもらいながら講義を進行する。また、日本経済や経済学に関する動画を副教材として用いて講義を進行する。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
授業時に随時行う課題・平常点(80%)・期末レポート(20%)により、成績評価をおこなう。							
V. 授業外学修							
毎回の授業時に指示する予復習の学修課題に必ず取り組むこと。 新聞(あるいはニュース・サイト)の経済記事を日常的に「眺める」習慣をつけたい。経済記事は漫然とタイトルだけを流し読みするだけでもよい。経済と経済学に対する理解を飛躍的にのばすことが期待できる。 授業外学修や講義内容その他の質問を歓迎する。							
VI. 使用教材							
教科書 : 指定しない(適宜資料を指示する)。 参考書 : 『経済学講義』飯田泰之(筑摩書房) 『マンキュー入門経済学』N・グレゴリー・マンキュー(東洋経済新報社) 『入門 経済学』アセモグル・レイブソン・リスト(東洋経済新報社)							

科目名	現 代 経 済 論	教員名	はただ ひでお 畠田 英夫	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
本講義の目的は、現代経済が抱える様々な課題について学ぶ。前期の「経済学」で学んだ経済の初歩的な知識に加え、現代経済の課題を理解するのに必要な知識を学んだのちに、地域経済の活性化、少子高齢化と社会保障、マネー経済の進展、経済的格差等の課題について取り上げる。 到達目標は以下のとおりである。 ・現代経済が抱える主要な課題について知っている。 ・地域経済の発展について理論的に考えることができる。 ・経済的格差の現実と基本的な理論について理解している。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑫生産・消費 ⑧成長・雇用 ⑩不平等 ①貧困 ②飢餓 ⑪都市 ⑦エネルギー ⑯平和							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. 現代経済の諸相 2. GDP と経済成長 3. 金融機関と金融市場 4. 景気変動と景気の予測 5. 物価と金利の経済への影響 6. 日本銀行の金融政策 7. 財政の経済的役割 8. まとめ 1: 経済政策の手法と効果 9. 地域経済を考える枠組み 10. 地域経済の分析 11. 少子高齢化と経済 12. グローバルマネーと仮想通貨 13. 経済格差の問題 14. 経済格差の長期分析 15. まとめ 2: 現代経済の諸相と経済学							
III. 講義の進め方							
随時課題を解いてもらいながら講義を進行する。また、日本経済や経済学に関するビデオを副教材として用いて講義を進行する。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
授業時に随時行う課題・平常点(80%)・期末レポート(20%)により、成績評価をおこなう。							
V. 授業外学修							
毎回の授業時に指示する予復習の学修課題に必ず取り組むこと。 1 年生後期以降は、経済記事を「眺める」なかで興味を持ったテーマを追跡することにも挑戦したい。時事的な話題のうちに様々な意見や理論を知るだけでなく、基本的な理論の妥当性や有効性について深く理解することができよう。 授業外学修や講義内容その他の質問を歓迎する。							
VI. 使用教材							
教科書 : 指定しない(適宜資料を指示する)。 参考書 : 『経済学講義』飯田泰之(筑摩書房) 『新・日本経済入門』三橋規宏他(日本経済新聞出版社)							

科目名	政 治 学	教員名	小林 秀高 こばやし ひでたか	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
本講義では、政治学の基礎的な概念を身につけるために主に政治制度の観点から講義を行う。政治とは、一見無秩序に行われている様に見えるが、様々な制度の影響を受け成り立っている。政治学は今あるルールを固定的なものとは考えずに、ルールの作成、実行される仕組み、ルールの変更を対象とする。講義全体のテーマは「現代の民主制」とするが、内容はさらに「政治体制論」「政治過程論」「国際政治」の3つに分けられる。 到達目標は以下のとおりである。 ・現代の民主制の基本的な考え方を理解する。 ・選挙および投票の仕組み、政党および政治家の役割を理解する。 ・日本の政治体制の基本的な仕組みを知り、ニュースや時事問題を理解する。 ・公務員試験などで要求される政治学の基礎的な知識を理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ①貧困 ②飢餓 ⑤ジェンダー ⑩不平等 ⑯平和							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[前期] 1. 民主主義論 1：ガイダンス・政治とはなにか 2. 民主主義論 2：民主主義の歴史 3. 民主主義論 3：民主制と政治体制 4. 民主主義論 4：現代の民主制 5. 民主主義論 5：民主主義の変化（まとめ1） 6. 政治体制論 1：大統領制と議院内閣制 7. 政治体制論 2：大統領制と議院内閣制の長所と短所 8. 政治体制論 3：政党とは何か 9. 政治体制論 4：政党と政党システム 10. 政治体制論 5：政治体制が政治に与える影響（まとめ2） 11. 政治過程論 1：選挙と選挙制度 12. 政治過程論 2：選挙における政党・候補者の行動 13. 政治過程論 3：選挙における有権者の行動 14. 政治過程論 4：投票のパラドクス 15. 政治過程論 5：選挙が政治に与える影響（まとめ3）							
III. 講義の進め方							
講義主体で進める。講義で使用したスライドなどは授業終了後にブラックボードに掲載する。また、必要に応じて資料映像などの視聴も行う。また、初回時に各授業のテーマと参考文献を記載したシラバスを配布する。予習・復習に活用すること。講義の一部は遠隔で実施する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
授業への取り組みを総合的に評価する。授業内容への質問や、毎回配布するコメントシート、授業中の発言授を評価に加える。また、授業の理解度を確認する試験を授業中に3回実施する。詳しくは初回に配布するシラバスを参照のこと。評価割合は試験60%、コメント40%となる。							
V. 授業外学修							
初回授業に毎回の講義に関するリーディングリストを配布する。各講義前にそれらの文献を読んでもることが予習となる。また、まとめの回（1～3）にはそれらの文献を読み直して参加すること。							
VI. 使用教材							
教科書：特定の教科書を使用しない 参考書：参考文献リストおよび授業のシラバスを初回講義時に配布する							

科目名	地 方 政 治 論	教員名	こばやし ひでたか 小林 秀高	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
この講義では、第一に、地方政治における議会の機能と役割、第二に、地方自治体における行政の役割、第三に、地方政治と中央政治の関係について解説する。地方政治は国政とことなり身近な人々が数多く関わり、具体的な生活に関わる業務を行っている。また、最近では住民投票や市町村合併、地方消滅、地方創成などの話題で注目を浴びることが多いが、その内容は関係者以外には理解しにくい。これらの内容を整理し具体的な事例を中心に解説する。 到達目標は以下のとおりである。 ・地方自治体における政治と行政の役割を理解する。 ・中央政府と地方自治体の役割と権限の違いを理解する。 ・地方政治と中央政治の関係を理解する。 ・公務員試験などで問われる政治学の基礎的な知識を理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ⑧成長・雇用 ⑪都市							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. 日本政治史 1：戦後改革と地方分権 2. 日本政治史 2：55 年体制の政治と地方政治 3. 日本政治史 3：55 年体制の崩壊と地方政治 4. 日本政治史 4：政権交代と地方政治 5. 日本政治史 5：日本の政治の特徴とは何か（試験とまとめ 1） 6. 地方分権改革 1：地方に政治はあるのか 7. 地方分権改革 2：日本における地方分権と中央集権 8. 地方分権改革 3：日本における地方分権の進展 9. 地方分権改革 4：地方分権と地方創生 10. 地方分権改革 5：日本ではなぜ地方分権改革が始まったのか（試験とまとめ 2） 11. 地方分権の課題 1：地方分権と住民の役割 12. 地方分権の課題 2：地方議員の質と選挙 13. 地方分権の課題 3：多選市長と官製談合 14. 地方分権の課題 4：大都市と地方 15. 地方分権の課題 5：地方における課題とは何か（試験とまとめ 3）							
III. 講義の進め方							
講義を中心とする。前期開講の「政治学」の知識を前提として授業は展開されるので履修していないものは必要な知識を自分で身につける必要がある。授業で使ったスライドは授業後 blackboard に掲載されるので、復習に利用すること。予習については初回授業時に配布のシラバスを参考のこと。							
IV. 試験と成績評価							
授業への取り組みを総合的に評価する。授業内容への質問や、毎回配布するコメントシート、授業中の発言授を評価に加える。また、授業の理解度を確認する作試験を授業中に 3 回実施する。評価割合は試験 60%、コメント 40%となる。							
V. 授業外学修							
初回授業に毎回の講義に関するリーディングリストを配布する。各講義前にそれらの文献を読んでもることが予習となる。また、まとめの回（1～3）にはそれらの文献を読み直して参加すること。							
VI. 使用教材							
教科書：教科書は使用しない。 参考書：講義で配布するシラバスを参照のこと。							

科目名	環 境 科 学	教員名	いがらし 五十嵐 としなり 俊成	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
環境科学とは、自然環境と社会環境に大別される環境のうちの自然環境を主な題材とする科学であり、自然科学分野に属する生態学、地球物理学、農学、化学などのほか、医学や、法学、政治学、経済学、倫理学などの社会科学にも関連する基礎的・総合的な学問分野である。 その中で、本講義では、地球規模の環境を踏まえながら SDGs が生まれた背景や環境問題の現状の状態を学ぶとともに、環境と調和した人類の活動のあり方や他の学問分野との関連を学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・環境がどのように成り立ち、人類が環境とどのように関わっているかを理解する。 ・人類が起こしている深刻な環境問題の内容と、環境問題と SDGs にどう対処すべきかを理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ①貧困 ②飢餓 ③保健 ④教育 ⑤ジェンダー ⑥水・衛生 ⑦エネルギー ⑨イノベーション ⑩都市 ⑫生産・消費 ⑬気候変動 ⑭海洋資源 ⑮陸上資源 ⑯平和 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[前期]							
1. 環境科学とは 2. SDGs とは何か? (教科書第 1 章) 3. 地球規模の環境問題 (教科書第 2 章) 4. 海洋プラスチック問題 (教科書第 2 章) 5. 地球の温暖化問題 (教科書第 2 章) 6. 地球温暖化への対応 (教科書第 2 章) 7. 大気汚染とオゾン層の破壊 (教科書第 2 章) 8. 人工化学物質のリスク管理 (教科書第 2 章) 9. 生物多様性の喪失 (教科書第 2 章) 10. 森林の働きと森林破壊 (教科書第 2 章) 11. 深刻化する砂漠化問題 (教科書第 2 章) 12. 日本の環境問題とエネルギー (教科書第 3 章) 13. 世界の多様な資源とその活用 (教科書第 4 章) 14. 環境問題にどう立ち向かうか (教科書第 3 章) 15. 地球環境問題とグローバルな生き方 (教科書第 4 章)							
III. 講義の進め方							
対面授業を基本とするが、コロナの状況等に応じてオンデマンド授業で行う可能性もある。 授業計画に沿って、プリントを配布し、パワーポイントを用いて講義する。 毎回、出席確認を兼ねて、授業内容の理解度等を確認する小テストを実施する。 授業方法については、掲示板と Active mail で連絡するので、必ず確認すること。 卒業後の進路確保のため「資格」を重視する者には、環境社会検定（エコ検定）を受験することを薦める。							
IV. 試験と成績評価							
毎回の小テスト（50％）と期末試験（50％）によって、到達目標の達成度を判定し成績評価を行う。							
V. 授業外学修							
「授業計画」にある教科書の指定された章を予習して授業に参加すること。 環境科学における課題は SDGs とどのように関連しているのか、環境問題の根本的な原理・原因・対策を正しく理解し、普段からグローバルな視点に立って自ら考え行動できるように授業を進める。 日常の中で環境問題に関する体験や記事をノートに書き出して出席すると理解が深まります。							
VI. 使用教材							
教科書：藤岡達也著「一億人の SDGs と環境問題」講談社 参考書：改訂 8 版 環境社会検定試験 eco 検定公式テキスト、適宜プリントを配布							

科目名	情 報 科 学	教員名	かわまた まさお 川真田 政夫	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
本科目は、地域振興ビジネスコースの1年次の学生を対象とした基礎科目である。情報科学の文系初学者にも理解できるように、パワーポイントを用いながら基礎知識について概説する。 本科目においてはコンピュータの原理、インターネットの仕組み、コンピュータセキュリティといった情報の知識的側面の習得を目指す。 到達目標は以下のとおりである。 ・コンピュータの基礎的な原理、インターネットの仕組みについて理解できる。 ・コンピュータセキュリティの基礎的な対策について理解できる。 ・情報技術の応用やデータ形式の基礎的な事柄について理解できる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑨イノベーション							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[前期] 1. ハードウェア 2. ソフトウェア 3. ヒューマンインタフェース 4. 情報の形態 5. 情報の検索、情報の共有 6. コンピュータとネットワーク 7. 情報の蓄積と伝達 8. レポート作成法 9. 情報のデータ化と分析・マイニング 10. モデル化とシミュレーション 11. モデル化とシステム設計 12. プレゼンテーションとその方法 13. 情報セキュリティ 14. アクセシビリティ 15. 支援技術							
III. 講義の進め方							
情報科学の基礎的な知識について参考資料を中心に講義する。 また、一部の授業を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、毎時間終了時の確認レポート（100%）で行う。							
V. 授業外学修							
主に独立行政法人 情報処理推進機構 ITパスポートの内容で講義する。 事前学修は無いが、復習し、理解を深めること。							
VI. 使用教材							
教科書：使用しない（適宜プリントを配布）							

科目名	生涯スポーツ演習	教員名	あきづき 秋月	あかね 茜	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標								
スポーツは、人間の心身を解放し、より豊かで充実した生活を実現できる手段の一つともいえる。 本講義では、各種スポーツやレクリエーション運動の実践を通じて、楽しみながら自己の五感を発揮し、心と体を開放していくためのプログラムを展開する。具体的には、これまでの学校教育で経験している一般スポーツに併せて、運動能力や性別に大きな影響を受けることなく誰もが楽しむことができるスポーツを実践する。その上で、学生個々が主体的に仲間と関わりながら、生涯に渡って社会的・日常的生活を豊かにしていくためのスポーツ実践を考える。 到達目標は以下のとおりである。 ・学生個々が心身を解放しながら、主体的に楽しくスポーツを実践できる。 ・安全に配慮し、それぞれの運動についてその特性に応じた技能を高めることが出来る。 ・日常生活におけるスポーツの意義を理解し、実践に結び付けることが出来る。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健								
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：30 回]								
[前期]					[後期]			
1. オリエンテーション					1. レクリエーション			
2. ミニバレー（基礎）					2. バスケットボール（基礎）			
3. ミニバレー（応用）					3. バスケットボール（基礎）			
4. バレーボール（基礎）					4. バスケットボール（応用）			
5. バレーボール（応用）					5. バドミントン（基礎）			
6. タグラグビー（基礎）					6. バドミントン（基礎）			
7. タグラグビー（応用）					7. バドミントン（応用）			
8. タグラグビー（応用）					8. バドミントン（応用）			
9. サッカー／フットサル（基礎）					9. ニュースポーツ [ホッケー]（基礎）			
10. サッカー／フットサル（応用）					10. ニュースポーツ [ホッケー]（応用）			
11. サッカー／フットサル（応用）					11. ニュースポーツ [ホッケー]（応用）			
12. フットサル（基礎）					12. 卓球（基礎）			
13. フットサル（応用）					13. 卓球（応用）			
14. ニュースポーツ [ディスク]（基礎）					14. 卓球（応用）			
15. ニュースポーツ [ディスク]（応用）					15. 生涯スポーツの理念と実践とは			
III. 講義の進め方								
基本的に実技中心に授業を進め、必要に応じてクラスに分けて実施する。 主に活動場所は体育館又は屋外とする。体育館では必ず屋内用の運動靴を準備し使用すること。								
IV. 試験と成績評価								
実技評価（50%） レポート課題（30%） 授業への参加状況（20%） 遅刻 2 回で欠席 1 回分の取り扱いとする。 また、授業開始から 30 分が経過しても出席が認められない場合は欠席の取り扱いとする。								
V. 授業外学修								
【事前事後学修】日頃から、規則正しい生活習慣を心がけるとともに、健康・スポーツに関するトピックスについて関心を持つように努めること。また、柔軟性をあげるためのストレッチや基本的な技能を遂行するために必要な筋力をつけるためのトレーニングに取り組んでおくこと。								
VI. 使用教材								
・必要に応じて資料を配布する。								

科目名	総 合 英 語 I	教員名	平尾 政幸 荻原 裕子	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
学生達の中には高校時代に学習した英文法や講読は現場の英語で役に立たないと考えている人がたくさんいる。これは大きな間違いで、文法、講読の力は英語力の向上にとって不可欠である。大切なことは基礎力で、それを確立することがこの講義のねらいである。「読んで訳すことができれば満足」ではなく、それを生かして楽しみながら英語を使ってみることが大切である。 到達目標は以下のとおりである。 ・基本的な英文法である基本3時制や5文型を修得し、英文の基本的構造を理解することができる。 ・応用的な英文法である進行形、完了形、受動態、使役を使用した構文を習得し、英文を理解することができる。 ・都市の人口などの集中問題、日本における大学進学率、魚の魚肉の色による分類などをテーマとした社会や科学に関する基礎的な英文を和訳することができる。 ・日本人の神社と寺に関する風習をテーマとした英文読解を通して、日本の文化の一面を理解することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. 基本3時制：Grammar, Reading(1) (語彙と文法) (教科書：Chapter 1.) 2. 基本3時制：Reading(2) (読解問題) , (教科書：Chapter 1.) 3. 基本3時制を用いた練習問題 (筆記と音読を中心とした復習) (教科書：Chapter 1.) 4. 進行形：Grammar, Reading(1) (語彙と文法) (教科書：Chapter 2.) 5. 進行形：Reading(2) (読解問題) , (教科書：Chapter 2.) 6. 進行形を用いた練習問題 (筆記と音読を中心とした復習) (教科書：Chapter 2.) 7. 完了形：Grammar, Reading(1) (語彙と文法) (教科書：Chapter 3.) 8. 完了形：Reading(2) (読解問題) , (教科書：Chapter 3.) 9. 完了形を用いた練習問題 (筆記と音読を中心とした復習) (教科書：Chapter 3.) 10. 受動態：Grammar, Reading(1) (語彙と文法) (教科書：Chapter 4.) 11. 受動態：Reading(2) (読解問題) , (教科書：Chapter 4.) 12. 受動態を用いた練習問題 (筆記と音読を中心とした復習) (教科書：Chapter 4.) 13. 使役：Grammar, Reading(1) (語彙と文法) (教科書：Chapter 5.) 14. 使役：Reading(2) (読解問題) , (教科書：Chapter 5.) 15. 使役を用いた練習問題 (筆記と音読を中心とした復習) (教科書：Chapter 5.)							
III. 講義の進め方							
講義は、次の二つの特徴を持つ教科書を使用して展開していく。一つは、文法の再確認であり、もう一つは、様々な分野に関する話題について書かれた短いエッセイを読み解くというものである。原則的には、教科書の内容に準じて授業を展開する。ただし授業は使える英語を身につけることが目標なので、自宅では、声を出し、繰り返し練習することが欠かせない。							
IV. 試験と成績評価							
学生の授業に対する参加の度合いが力の向上と密接に関連しているとの認識であるため、やむを得ない理由以外の欠席は、しないこと。また、遅刻もしないように注意すること。成績評価は、共通問題による小テスト (60%) やレポート等 (40%) により行う。							
V. 授業外学修							
授業前の事前準備として講義要項の「授業計画」に記載されている教科書の範囲のページについて「音声ファイルダウンロード」(教科書の ii ページ下部のアドレス参照) を利用しながら読んで、問題について可能な限り解答をして授業に参加するようにすること。授業後には、復習として誤答箇所等について主体的に分析をして理解を深めること。							
VI. 使用教材							
教科書：『Access to Simple English』石井 隆之 他 著 (成美堂) クラス分けを行う。クラスによっては、上記の教科書に加え更に教科書を追加したりプリントを配布したりすることもある。 参考書：少なくとも7万語以上の掲載語のある辞書。例えば小西友七 (編) 「ジーニアス英和辞書」(株大修館。電子辞書も軽くて便利でよい。積極的に活用すること。辞書を活用すると大きな効果がある。							

科目名	総 合 英 語 II	教員名	平尾 政幸 荻原 裕子	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
後期のこの科目では、語学学習の絶好の機会と考えて受講することが大切である。学生達の中には、前期を終了した時点での自分の語学力がそれほど伸びていないことに気付いてとまどっている学生もいるであろう。この授業で学ぶ文法、講読の力は英語の理解力の向上にとりとても重要な基礎力になることを再認識するべきだ。そしてこれらを利用して英語の雑誌を読むとか小説を読むとか具体的な目標を立てて実行していくことも大切である。「教科書だけができれば満足」でなく、それを生かして楽しみながら実際の英語の理解に取り組むことが大切である。 到達目標は以下のとおりである。 ・ 基本的な英文法である文の種類や不定詞を発展させた文型を修得し英文の基本的構造を理解することができる。 ・ 応用的な英文法である動名詞や分詞を使用した構文を習得し、基礎的な英文を読み理解することができる。 ・ トランプの絵柄の由来、神話における男性と女性の話、人生にとって大切なものなどという文化的な事柄に関する基礎的な英文を和訳することができる。 ・ リサイクルをテーマとした英文読解を通して、社会における環境問題を理解することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑫生産・消費 ⑩実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. 5 文型：Grammar, Reading(1)（語彙と文法）（教科書：Chapter 6.） 2. 5 文型：Reading(2)（読解問題），（教科書：Chapter 6.） 3. 5 文型を用いた練習問題（筆記と音読を中心とした復習）（教科書：Chapter 6.） 4. 文の種類（平叙文、疑問文等）と不定詞に関する練習問題 Grammar, Reading(1)（語彙と文法）（教科書：Chapter 7.） 5. 文の種類（平叙文、疑問文等）：Reading(2)（読解問題）（教科書：Chapter 7.） 6. 文の種類（平叙文、疑問文等）と不定詞に関する練習問題（筆記と音読を中心とした復習）（教科書：Chapter 7.） 7. 不定詞：Grammar, Reading(1)（語彙と文法）（教科書：Chapter 8.） 8. 不定詞：Reading(2)（読解問題），（教科書：Chapter 8.） 9. 不定詞：練習問題（筆記と音読を中心とした復習）（教科書：Chapter 8.） 10. 動名詞：Grammar, Reading(1)（語彙と文法）（教科書：Chapter 9.） 11. 動名詞：Reading(2)（読解問題），（教科書：Chapter 9.） 12. 動名詞を用いた練習問題（筆記と音読を中心とした復習）（教科書：Chapter 9.） 13. 分詞：Grammar, Reading(1)（語彙と文法）（教科書：Chapter 10.） 14. 分詞：Reading(2)（読解問題），（教科書：Chapter 10.） 15. 分詞を用いた練習問題（筆記と音読を中心とした復習）（教科書：Chapter 10.）							
III. 講義の進め方							
クラス別に授業を行う。各クラスには、共通の教科書に加えて、クラス別に教材を使用する。原則的には教科書の内容に準じ授業展開する。使える英語を習得することが目標なので声を出し、練習する。自宅学習も欠かせない。							
IV. 試験と成績評価							
学生の授業参加の度合いが力の向上と関連すると認識しているため、やむを得ない理由以外の欠席や遅刻は、しないこと。成績評価は、共通問題による小テスト（60%）とクラス別の試験やレポート等（40%）により行う。							
V. 授業外学修							
授業前の事前準備として講義要項の「授業計画」に記載されている教科書の範囲のページについて「音声ファイルダウンロード」（教科書の ii ページ下部のアドレス参照）を利用しながら読んで、問題について可能な限り解答をして授業に参加するようにすること。授業後には、復習として誤答箇所等について主体的に分析をして理解を深めること。							
VI. 使用教材							
教科書：『Access to Simple English』石井 隆之 他 著（成美堂） クラス分けを行う。クラスによっては、上記の教科書に加えて更に 1 冊教科書を追加したりプリントを配布したりすることもある。 参考書：少なくとも 7 万語以上の掲載語のある辞書。例えば小西友七（編）「ジーニアス英和辞書」（株）大修館。電子辞書も軽くて便利でよい。積極的に活用すること。辞書を活用すると大きな効果がある。							

科目名	総 合 英 語 Ⅲ	教員名	平尾 まさゆき 政幸	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
1年次を終了して、2年次に進級した学生は、この4月に向かって新たな英語の目標を検討している学生もいることであろう。これは、学業における大きなチャンスであり、英語の実力を資格試験の合格や留学への参加により更に向上させたいと考えている学生もいることであろう。この科目は、正にそのような学生にとっても、有益になるように構成されていて基礎力から大学生になり、初めて学ぶような語彙や表現も盛り込んである。「単に単位が取得できればよい」という学習姿勢から「英語を使って現在、及び将来、何をするのか？」というような積極的な思いが必要である。 到達目標は以下のとおりである。 ・基本的な英文法である句と節、前置詞、接続詞を発展させた文型を修得し英文の基本的構造を理解することができる。 ・応用的な英文法である話法や関係代名詞を使用した構文を習得し、基礎的な英文を読み理解することができる。 ・神道における赤ちゃん誕生の意味、文明と文化の違い、英語の早口言葉などという文化的な事柄に関する基礎的な英文を和訳することができる。 ・セクシャルハラスメント、いじめをテーマとした英文読解を通して社会における問題を理解することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ④教育 ⑤ジェンダー							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：15回]							
[前期]							
1. 句と節：Grammar, Reading(1)（語彙と文法）（教科書：Chapter 11.） 2. 句と節：Reading(2)（読解問題），（教科書：Chapter 11.） 3. 句と節を用いた練習問題（筆記と音読を中心とした復習）（教科書：Chapter 11.） 4. 前置詞：Grammar, Reading(1)（語彙と文法）（教科書：Chapter 12.） 5. 前置詞：Reading(2)（読解問題），（教科書：Chapter 12.） 6. 前置詞を用いた練習問題（筆記と音読を中心とした復習）（教科書：Chapter 12.） 7. 接続詞：Grammar, Reading(1)（語彙と文法）（教科書：Chapter 13.） 8. 接続詞：Reading(2)（読解問題），（教科書：Chapter 13.） 9. 接続詞を用いた練習問題（筆記と音読を中心とした復習）（教科書：Chapter 13.） 10. 話法：Grammar, Reading(1)（語彙と文法）（教科書：Chapter 14.） 11. 話法：Reading(2)（読解問題），Listening and Composition（教科書：Chapter 14.） 12. 話法を用いた練習問題（筆記と音読を中心とした復習）（教科書：Chapter 14.） 13. 関係代名詞：Grammar, Reading(1)（語彙と文法）（教科書：Chapter 15.） 14. 関係代名詞：Reading(2)（読解問題），Listening and Composition（教科書：Chapter 15.） 15. 関係代名詞：を用いた練習問題（筆記と音読を中心とした復習）（教科書：Chapter 15.）							
III. 講義の進め方							
講義は、次の二つの特徴を持つ教科書を使用して展開していく。一つは、文法の再確認であり、もう一つは、様々な分野に関する話題について書かれた短いエッセイを読み解くというものである。原則的には、教科書の内容に準じて授業を展開する。ただし授業は使える英語を身につけることが目標なので、自宅では、声を出し、繰り返し練習することが欠かせない。							
IV. 試験と成績評価							
学生の授業に対する参加の度合いが力の向上と密接に関連しているとの認識であるため、やむを得ない理由以外の欠席は、しないこと。また、遅刻もしないように注意すること。成績評価は、小テスト（60%）やレポート等（40%）により行う。							
V. 授業外学修							
授業前の事前準備として講義要項の「授業計画」に記載されている教科書の範囲のページについて「音声ファイルダウンロード」（教科書のiiページ下部のアドレス参照）を利用しながら読んで、問題について可能な限り解答をして授業に参加するようにすること。授業後には、復習として誤答箇所等について主体的に分析をして理解を深めること。							
VI. 使用教材							
教科書：昨年度、使用した教科書『Access to Simple English』石井 隆之 他 著（成美堂）を使う。 昨年度の続きから学習する。							

科目名	総 合 英 語 IV	教員名	平尾 まさゆき ひろお まさゆき 政幸	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
2 年次も後半となり、今期において新たな英語の目標を検討している学生もいるであろう。これは、大きなチャンスであり、英語の実力を資格試験の合格や留学への参加により更に向上させたいと思う学生もいるだろう。この科目は、基礎力から大学生になり、初めて学ぶような語彙や表現も盛り込んである。「単に単位が取得できればよい」という学習姿勢から「英語を使って現在、及び将来、何をするのか？」という積極的な思いが必要である。 到達目標は以下のとおりである。 - 基本的な英文法である冠詞と名詞、代名詞、助動詞を発展させた文型を修得し英文の基本的構造を理解することができる。 - 応用的な英文法である関係副詞、仮定法を使用した構文を習得し、基礎的な英文を読み理解することができる。 - 師とその弟子、失敗と成功、教育において褒めること、日本神話における男性と女性などという文化的な事柄に関する基礎的な英文を和訳することができる。 - 哺乳類カモノハシの生態をテーマとした英文読解を通して環境における事柄を理解することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ④教育 ⑤ジェンダー ⑭海洋資源							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[後期] - 関係副詞：Grammar, Reading(1) (語彙と文法) (教科書：Chapter 16.) - 関係副詞：Reading(2) (読解問題), (教科書：Chapter 16.) - 関係副詞を用いた練習問題 (筆記と音読を中心とした復習) (教科書：Chapter 16.) - 助動詞：Grammar, Reading(1) (語彙と文法) (教科書：Chapter 17.) - 助動詞：Reading(2) (読解問題), (教科書：Chapter 17.) - 助動詞を用いた練習問題 (筆記と音読を中心とした復習) (教科書：Chapter 17.) - 仮定法：Grammar, Reading(1) (語彙と文法) (教科書：Chapter 18.) - 仮定法：Reading(2) (読解問題), (教科書：Chapter 18.) - 仮定法を用いた練習問題 (筆記と音読を中心とした復習) (教科書：Chapter 18.) - 冠詞と名詞：Grammar, Reading(1) (語彙と文法) (教科書：Chapter 19.) - 冠詞と名詞：Reading(2) (読解問題), (教科書：Chapter 19.) - 冠詞と名詞を用いた練習問題 (筆記と音読を中心とした復習) (教科書：Chapter 19.) - 代名詞：Grammar, Reading(1) (語彙と文法) (教科書：Chapter 20.) - 代名詞：Reading(2) (読解問題), Listening and Composition (教科書：Chapter 20.) - 代名詞：を用いた練習問題 (筆記と音読を中心とした復習) (教科書：Chapter 20.)							
III. 講義の進め方							
講義は、次の二つの特徴を持つ教科書を使用して展開していく。一つは、文法の再確認であり、もう一つは、様々な分野に関する話題について書かれた短いエッセイを読み解くというものである。原則的には、教科書の内容に準じて授業を展開する。ただし授業は使える英語を身につけることが目標なので、自宅では、声を出し、繰り返し練習することが欠かせない。							
IV. 試験と成績評価							
学生の授業に対する参加の度合いが力の向上と密接に関連しているとの認識であるため、やむを得ない理由以外の欠席は、しないこと。また、遅刻もしないように注意すること。成績評価は小テスト (60%) やレポート等 (40%) により行う。							
V. 授業外学修							
授業前の事前準備として講義要項の「授業計画」に記載されている教科書の範囲のページについて「音声ファイルダウンロード」(教科書の ii ページ下部のアドレス参照) を利用しながら読んで、問題について可能な限り解答をして授業に参加するようにすること。授業後には、復習として誤答箇所等について主体的に分析をして理解を深めること。							
VI. 使用教材							
教科書：前期に使用した教科書『Access to Simple English』石井 隆之 他 著 (成美堂) を使う。 前期の続きから学習する。							

科目名	英語コミュニケーションⅠ	教員名	平尾 政幸 ひらお まさゆき	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標 本授業は、Listening comprehension（聴解力）を始めとして、会話、筆記、読解力を含めた総合的な英語によるコミュニケーション能力を増強することを主たる目的としている。 到達目標は以下のとおりである。 ・仕事について話し合う時に使われる基本的な英語を聞き取ることができるようになる。 ・仕事について話し合う時に使われる基本的なことを、英語で伝えることができる。 ・レストランにおいて使われる基本的な英会話を聞き取ることができる。 ・レストランにおいて必要とされる基本的なことを英語で表現することができる。 ・仕事のスケジュールに関して必要なことを簡単な英語で表現したり、聞き取ったりすることができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑨インフラ、産業化、イノベーション ⑰実施手段							
II. 授業計画 〔単位数：1 単位、授業回数：15 回〕 〔前期〕 1. オリエンテーション（クラス分けテスト、講義要項説明、有資格者による単位認定制度の説明） 2. Jobs & Careers（Key Vocabulary and Listening, Conversation）（教科書：Unit 1.） 3. Jobs & Careers（Grammar Input & Output）（教科書：Unit 1.） 4. Jobs & Careers（Short Reading）（教科書：Unit 1.） 5. Jobs & Careers（Vocabulary Booster）（教科書：Unit 1.） 6. Entertainment（Key Vocabulary and Listening）（教科書：Unit 2.） 7. Entertainment（Conversation）（教科書：Unit 2.） 8. Entertainment（Grammar Input & Output）（教科書：Unit 2.） 9. Entertainment（Short Reading）（教科書：Unit 2.） 10. Entertainment（Vocabulary Booster）（教科書：Unit 2.） 11. Work Schedule（Key Vocabulary and Listening）（教科書：Unit 3.） 12. Work Schedule（Conversation）（教科書：Unit 3.） 13. Work Schedule（Grammar Input & Output）（教科書：Unit 3.） 14. Work Schedule（Short Reading）（教科書：Unit 3.） 15. Work Schedule（Vocabulary Booster）（教科書：Unit 3.）							
III. 講義の進め方 クラス別に授業を行う。各クラスには、共通の教科書に加えて、クラス別に教材を使用する。授業は、コミュニケーション能力の増強を目的として教科書やCDを使用しながら会話を中心に聴解を加え総合的な能力を向上させる。							
IV. 試験と成績評価 学生の授業に対する参加の度合いが力の向上と密接に関連しているとの認識であるため、やむを得ない理由以外の欠席は、しないこと。また、遅刻もしないように注意すること。成績評価は、共通問題による小テスト（60%）とクラス別の試験やレポート等（40%）により行う。							
V. 授業外学修 授業前の事前準備として講義要項の「授業計画」に記載されている教科書の範囲のページについて「音声ファイルダウンロード」（教科書の2 ページ下部のアドレス参照）を利用しながら読んで、問題について可能な限り解答をして授業に参加するようにすること。授業後には、復習として誤答箇所等について主体的に分析をして理解を深めること。							
VI. 使用教材 教科書：『English Switch』Robert, Hickling. 臼倉 美里 著（金星堂）。 クラス分けテストを行い、クラス分けを行う。クラスによっては、上記の教科書に加えて更に1 冊教科書を追加したりプリントを配布したりすることもある。 参考書：少なくとも7 万語以上の掲載語のある辞書。例えば小西友七（編）「ジーニアス英和辞書」（株）大修館。 電子辞書も軽くて便利でよい。積極的に活用すること。辞書を活用すると大きな効果がある。							

科目名	英語コミュニケーションⅡ	教員名	平尾 政幸 ひらお まさゆき	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標 本授業は、前期で養った Listening comprehension（聴解力）を更に発展させながら、会話、筆記、読解力を含めた総合的な英語力を更に応用する形でコミュニケーション能力を増強することを主たる目的としている。 到達目標は以下のとおりである。 ・病院で医師に対して自分の言いたいことを簡単な英語で表現し、医師の言うことを聞き取ることができる。 ・買い物で使われる基本的な英語を聞き取ることができるようになる。 ・買い物で基本的なことを、英語で伝えることができる。 ・仕事のミーティングに関して基本的な英会話を聞き取ることができる。 ・仕事のミーティングに関して基本的なことを英語で表現することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ④教育 ⑪実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回] [後期] 1. Health & Fitness (Key Vocabulary and Listening) (教科書：Unit 4.) 2. Health & Fitness (Conversation) (教科書：Unit 4.) 3. Health & Fitness (Grammar Input & Output) (教科書：Unit 4.) 4. Health & Fitness (Short Reading) (教科書：Unit 4.) 5. Health & Fitness (Vocabulary Booster) (教科書：Unit 4.) 6. Shopping (Key Vocabulary and Listening) (教科書：Unit 5.) 7. Shopping (Conversation) (教科書：Unit 5.) 8. Shopping (Grammar Input & Output) (教科書：Unit 5.) 9. Shopping (Short Reading) (教科書：Unit 5.) 10. Shopping (Vocabulary Booster) (教科書：Unit 5.) 11. Business Meeting (Key Vocabulary and Listening) (教科書：Unit 6.) 12. Business Meeting (Conversation) (教科書：Unit 6.) 13. Business Meeting (Grammar Input & Output) (教科書：Unit 6.) 14. Business Meeting (Short Reading) (教科書：Unit 6.) 15. Business Meeting (Vocabulary Booster) (教科書：Unit 6.)							
III. 講義の進め方 クラス別に授業を行う。各クラスには、共通の教科書に加えて、クラス別に教材を使用する。授業は、コミュニケーション能力の増強を目的として教科書やCDを使用しながら会話を中心にして聴解を加えて総合的な能力を向上させる。							
IV. 試験と成績評価 学生の授業に対する参加の度合いが力の向上と密接に関連しているとの認識であるため、やむを得ない理由以外の欠席は、しないこと。また、遅刻もしないように注意すること。成績評価は、共通問題による小テスト（60%）とクラス別の試験やレポート等（40%）により行う。							
V. 授業外学修 授業前の事前準備として講義要項の「授業計画」に記載されている教科書の範囲のページについて「音声ファイルダウンロード」（教科書の2 ページ下部のアドレス参照）を利用しながら読んで、問題について可能な限り解答をして授業に参加するようにすること。授業後には、復習として誤答箇所等について主体的に分析をして理解を深めること。							
VI. 使用教材 教科書：『English Switch』Robert, Hickling. 臼倉 美里 著（金星堂）。 クラス分けテストを行い、クラス分けを行う。クラスによっては、上記の教科書に加えて更に1 冊教科書を追加したりプリントを配布したりすることもある。 参考書：少なくとも7 万語以上の掲載語のある辞書。例えば小西友七（編）「ジーニアス英和辞書」（樹大修館）。電子辞書も軽くて便利でよい。積極的に活用すること。辞書を活用すると大きな効果がある。							

科目名	英語コミュニケーションⅢ	教員名	平尾 まさゆき ひらお まさゆき 政幸	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
英会話の上達に困難さを感じている学生は、とても多いことであろう。この授業では、会話に必要な基礎的な内容が入ったシンプルな教材を用意した。教材には、就職活動・就職先での業務で遭遇するような場面を中心として英語を使用した題材を主として構成されている。学生は、このような教材を利用して、各自の英語による会話能力を上達させるように意識することが望まれる。 到達目標は以下のとおりである。 ・自動車販売で顧客に対して言いたいことを簡単な英語で表現し、顧客の言うことを聞き取ることができる。 ・就職面接の場面で使われる応用的な英語の問答を聞き取ることができるようになる。 ・就職面接の場面で使われる応用的な英語の問答を英語で伝えることができる。 ・仕事における出張の際に必要な基本的な英会話を聞き取ることができる。 ・仕事における出張の際に必要な基本的なことを英語で表現することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑨インフラ、産業化、イノベーション ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. Recruitment (Key Vocabulary and Listening) (教科書：Unit 7.) 2. Recruitment (Conversation) (教科書：Unit 7.) 3. Recruitment (Grammar Input & Output) (教科書：Unit 7.) 4. Recruitment (Short Reading) (教科書：Unit 7.) 5. Recruitment (Vocabulary Booster) (教科書：Unit 7.) 6. Customer Needs (Key Vocabulary and Listening) (教科書：Unit 8.) 7. Customer Needs (Conversation) (教科書：Unit 8.) 8. Customer Needs (Grammar Input & Output) (教科書：Unit 8.) 9. Customer Needs (Short Reading) (教科書：Unit 8.) 10. Customer Needs (Vocabulary Booster) (教科書：Unit 8.) 11. Business Trip (Key Vocabulary and Listening) (教科書：Unit 9.) 12. Business Trip (Conversation) (教科書：Unit 9.) 13. Business Trip (Grammar Input & Output) (教科書：Unit 9.) 14. Business Trip (Short Reading) (教科書：Unit 9.) 15. Business Trip (Vocabulary Booster) (教科書：Unit 9.)							
III. 講義の進め方							
授業は、コミュニケーション能力増強を目的として教科書やCDを使用し会話を中心にして聴解を加え総合的な能力を向上させる。							
IV. 試験と成績評価							
学生の授業に対する参加の度合いが力の向上と密接に関連しているとの認識であるため、やむを得ない理由以外の欠席は、しないこと。また、遅刻もしないように注意すること。成績評価は、小テスト（60%）やレポート等（40%）により行う。							
V. 授業外学修							
授業前の事前準備として講義要項の「授業計画」に記載されている教科書の範囲のページについて「音声ファイルダウンロード」（教科書の2 ページ下部のアドレス参照）を利用しながら読んで、問題について可能な限り解答をして授業に参加するようにすること。授業後には、復習として誤答箇所等について主体的に分析をして理解を深めること。							
VI. 使用教材							
教科書 : 教科書：『English Switch』Robert, Hickling. 臼倉 美里 著（金星堂）。 参考書 : 少なくとも7 万語以上の掲載語のある辞書。例えば 小西友七（編）「ジーニアス英和辞書」（株）大修館。電子辞書も軽くて便利でよい。積極的に活用すること。辞書を活用すると大きな効果がある。							

科目名	英語コミュニケーションⅣ	教員名	平尾 まさゆき ひろお まさゆき 政幸	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
2 年生の後期の段階においても英会話の上達に困難さを感じている学生は、とても多いことであろう。この授業では、会話に必要な基礎的な内容が入ったシンプルな教材を用意した。教材には、仕事上の業務や銀行における相談をする場面を中心とした題材を主として構成されている。学生は、このような教材を利用して、各自の英語による会話能力を上達させるように意識することが望まれる。 到達目標は以下のとおりである。 ・ 仕事上の業務で使われる基本的な英語を聞き取ることができるようになる。 ・ 仕事上の業務で使われる基本的なことを、英語で伝えることができる。 ・ 仕事における企画・立案を行う際に必要な応用的な英語の問答を含む英会話を聞き取ることができる。 ・ 仕事における企画・立案を行う際に必要な応用的な英語の問答を含む英語で表現することができる。 ・ 銀行における相談の際に使用する会話を簡単な英語で表現し、相談相手の言うことを聞き取ることができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑨インフラ、産業化、イノベーション ⑫持続可能な生産と消費 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. Advertising (Key Vocabulary and Listening) (教科書：Unit 10.) 2. Advertising (Conversation) (教科書：Unit 10.) 3. Advertising (Grammar Input & Output) (教科書：Unit 10.) 4. Advertising (Short Reading) (教科書：Unit 10.) 5. Advertising (Vocabulary Booster) (教科書：Unit 10.) 6. Factory Tour (Key Vocabulary and Listening) (教科書：Unit 11.) 7. Factory Tour (Conversation) (教科書：Unit 11.) 8. Factory Tour (Grammar Input & Output) (教科書：Unit 11.) 9. Factory Tour (Short Reading) (教科書：Unit 11.) 10. Factory Tour (Vocabulary Booster) (教科書：Unit 11.) 11. Money Matters (Key Vocabulary and Listening) (教科書：Unit 12.) 12. Money Matters (Conversation) (教科書：Unit 12.) 13. Money Matters (Grammar Input & Output) (教科書：Unit 12.) 14. Money Matters (Short Reading) (教科書：Unit 12.) 15. Money Matters (Vocabulary Booster) (教科書：Unit 12.)							
III. 講義の進め方							
授業は、コミュニケーション能力増強を目的として教科書やCDを使用し会話を中心にして聴解を加え総合的な能力を向上させる。							
IV. 試験と成績評価							
学生の授業に対する参加の度合いが力の向上と密接に関連しているとの認識であるため、やむを得ない理由以外の欠席は、しないこと。また、遅刻もしないように注意すること。成績評価は、小テスト（60%）やレポート等（40%）により行う。							
V. 授業外学修							
授業前の事前準備として講義要項の「授業計画」に記載されている教科書の範囲のページについて「音声ファイルダウンロード」（教科書の2 ページ下部のアドレス参照）を利用しながら読んで、問題について可能な限り解答をして授業に参加するようにすること。授業後には、復習として誤答箇所等について主体的に分析をして理解を深めること。							
VI. 使用教材							
教科書：『English Switch』Robert, Hickling. 臼倉 美里 著（金星堂）。 参考書：少なくとも7万語以上の掲載語のある辞書。例えば 小西友七（編）「ジーニアス英和辞書」（株）大修館。電子辞書も軽くて便利でよい。積極的に活用すること。辞書を活用すると大きな効果がある。							

科目名	総 合 中 国 語 I	教員名	あみや よしお 網谷 義男	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
語学は発音に十分な時間をかけ、基礎を固めれば固めるほどのびが早い。この科目は、中国語を初めて学習する学生が正確な発音ができるようになることに重点をおく。 到達目標は以下のとおりである。 ・ピンイン（中国式ローマ字）を正確に読み書きができる。 ・あいさつ言葉や0 から 10 までの数字を正確に読み書きができる。 ・基礎的な文法を理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. ガイダンス（中国や中国語を知る）（教科書「ウォーミングアップ」） 2. 教科書「発音」①単母音、そり舌母音と声調 3. 教科書「発音」②複母音 4. 教科書「発音」③子音 5. 教科書「発音」④鼻母音 6. 教科書「発音」⑤声調変化、あいさつ言葉と0 から 10 までの数字 7. 教科書「第1課」の新出単語と文法（人称代名詞と名詞述語文） 8. 教科書「第1課」の本文と練習問題 9. 教科書「発音」と「第1課」の活用 10. 教科書「第2課」の新出単語と文法（指示代名詞1，疑問詞疑問文） 11. 教科書「第2課」の文法（「的」、副詞）と本文 12. 教科書「第2課」の練習問題と「第3課」の新出単語 13. 教科書「第3課」の文法（動詞述語文、「有」、指示代名詞2、省略疑問文） 14. 教科書「第3課」の本文と練習問題 15. 教科書「第2課」と「第3課」の活用							
III. 講義の進め方							
授業外学修に基づき予習復習等の準備してきたことを前提として、授業は教科書の内容に沿って進めていく。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、まとめの試験（60%）、毎回の授業での理解度や小テスト（40%）で行う。							
V. 授業外学修							
正確な発音が上達に欠かせないため、教科書付属の音声教材をダウンロードすること 「授業計画」に従い、該当箇所を確認の上、あるがままの音声を聞きながら、その音を中国語の漢字を使って文字に起こす方法で、音声と文字を一致させる練習をしてくること（一致できない箇所を明確にチェックしてくること）							
VI. 使用教材							
教科書：『さあ、中国語を学ぼう！会話・講読』 竹島 毅・趙 昕 著 白水社 参考書：特に指定はしない。必要に応じて授業中に紹介する。							

科目名	総合中国語Ⅱ	教員名	あみや よしお 網谷 義男	開講 コース	地域振興 ビジネス	1年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
この科目は、正確な発音の習得と基礎的な文法、語彙の習得、簡単な中国語を「読む」、「書く」ことができる能力の習得に力を入れる。 到達目標は以下のとおりである。 ・基礎単語約 300 語による発音（ピンイン）及び単語の意味が分かる。 ・中国語検定試験 準 4 級に挑戦できる力をつける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. 前期の学習項目の活用練習（教科書第 1 課から第 3 課） 2. 第 4 課の新出単語と文法（形容詞述語文、量詞、数量を尋ねる疑問詞） 3. 教科書「第 4 課」の本文と練習問題 4. 教科書「第 4 課」の練習問題と第 5 課の新出単語 5. 教科書「第 5 課」の文法（曜日・時刻、時点・時間量の表し方） 6. 教科書「第 5 課」の文法（反復疑問文、介詞 1）と本文 7. 教科書「第 5 課」の練習問題 8. 教科書「第 4 課」と「第 5 課」の活用 9. 教科書「第 6 課」の新出単語と文法（完了） 10. 教科書「第 6 課」の文法（「在」、介詞 2）と本文 11. 教科書「第 6 課」の練習問題と第 7 課の新出単語 12. 教科書「第 7 課」の文法（連動文、助動詞 1、文末の助詞、選択疑問文） 13. 教科書「第 7 課」の本文 14. 教科書「第 7 課」の練習問題 15. 教科書「第 6 課」と「第 7 課」の活用							
III. 講義の進め方							
授業外学修に基づき予習復習等の準備してきたことを前提として、授業は教科書の内容に沿って進めていく。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、まとめの試験（60%）、毎回の授業での理解度や小テスト（40%）で行う。							
V. 授業外学修							
正確な発音が上達に欠かせないため、教科書付属の音声教材をダウンロードすること 「授業計画」に従い、該当箇所を確認の上、あるがままの音声を聞きながら、その音を中国語の漢字を使って文字起こす方法で、音声と文字を一致させる練習をしてくること（一致できない箇所を明確にチェックしてくること）							
VI. 使用教材							
教科書：『さあ、中国語を学ぼう！会話・講読』 竹島 毅・趙 昕 著 白水社 参考書：特に指定はしない。必要に応じて授業中に紹介する。							

科目名	総合中国語Ⅲ	教員名	あみや よしお 網谷 義男	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標 1年間の中国語の学習を通して、中国語の大体の輪郭をつかむことができたはずである。この科目は、やや複雑な中国語を「読む」、「書く」ことができる能力の習得に力を入れる。 到達目標は以下のとおりである。 ・基礎単語約500語による発音（ピンイン）及び単語の意味が分かる。 ・上記の単語を使用して、単文の日本語訳や中国語訳ができる。 ＜SDGs（持続可能な開発目標）との関連＞ ④教育 ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 〔単位数：1単位、授業回数：15回〕 〔前期〕 1. 1年次の学習項目の活用練習（教科書「第4課から第5課」） 2. 教科書「第8課」の新出単語と文法（経験、介詞3） 3. 教科書「第8課」の文法（「有」、位置を表す語）と本文 4. 教科書「第8課」の練習問題と第9課の新出単語 5. 教科書「第9課」の文法（動作の進行、主述述語文、助動詞2） 6. 教科書「第9課」の文法（複雑な目的語）と本文 7. 教科書「第9課」の練習問題 8. 教科書「第8課」と「第9課」の活用 9. 教科書「第10課」の新出単語と文法（様態補語、助動詞3、動詞の重ね型） 10. 教科書「第10課」の文法と本文 11. 教科書「第10課」の練習問題と第11課の新出単語 12. 教科書「第11課」の文法（比較、「少し」という意味の副詞、動作の結果の残存） 13. 教科書「第11課」の本文 14. 教科書「第11課」の練習問題 15. 教科書「第10課」と「第11課」の活用							
III. 講義の進め方 授業外学修に基づき予習復習等の準備してきたことを前提として、授業は教科書の内容に沿って進めていく。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は、まとめの試験（60%）、毎回の授業での理解度や小テスト（40%）で行う。							
V. 授業外学修 正確な発音が上達に欠かせないため、教科書付属の音声教材をダウンロードすること 「授業計画」に従い、該当箇所を確認の上、あるがままの音声を聞きながら、その音を中国語の漢字を使って文字に起こす方法で、音声と文字を一致させる練習をしてくること（一致できない箇所を明確にチェックしてくること）							
VI. 使用教材 教科書：『さあ、中国語を学ぼう！会話・講読』 竹島 毅・趙 昕 著 白水社 参考書：特に指定はしない。必要に応じて授業中に紹介する。							

科目名	総合中国語Ⅳ	教員名	網谷 義男 あみや よしお	開講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標 この科目は、複雑な中国語を「読む」、「書く」ことができる能力の習得に力を入れる。例えば、類似表現であればそれぞれの中心的意味を把握するだけではなく、どういうときに区別されずに使用されるのかなども把握してもらう。 到達目標は以下のとおりである。 ・常用語 700 語以上による発音（ピンイン）及び単語の意味が分かる。 ・上記の単語を使用して、単文の日本語訳や中国語訳ができる。 ・中国語検定試験 4 級に挑戦できる力をつける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回] [後期] 1. 前期の学習項目の活用練習（教科書「第8課」から「第11課」） 2. 教科書「第12課」の新出単語と文法（述語に数字が使用される名詞述語文、状態の変化、「是～的」） 3. 教科書「第12課」の文法（二重目的語）と本文 4. 教科書「第12課」の練習問題と第13課の新出単語 5. 教科書「第13課」の文法（結果補語、存現文、近未来表現） 6. 教科書「第13課」の本文 7. 教科書「第13課」の練習問題 8. 教科書「第12課」と「第13課」の活用 9. 教科書「第14課」の新出単語と文法（方向補語） 10. 教科書「第14課」の文法（使役）と本文 11. 教科書「第14課」の練習問題と第15課の新出単語 12. 教科書「第15課」の文法（可能補語、受け身、「把」） 13. 教科書「第15課」の本文 14. 教科書「第15課」の練習問題 15. 教科書「第14課」と「第15課」の活用							
III. 講義の進め方 授業外学修に基づき予習復習等の準備してきたことを前提として、授業は教科書の内容に沿って進めていく。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は、まとめの試験（60%）、毎回の授業での理解度や小テスト（40%）で行う。							
V. 授業外学修 正確な発音が上達に欠かせないため、教科書付属の音声教材をダウンロードすること 「授業計画」に従い、該当箇所を確認の上、あるがままの音声を聞きながら、その音を中国語の漢字を使って文字に起こす方法で、音声と文字を一致させる練習をしてくること（一致できない箇所を明確にチェックしてくること）							
VI. 使用教材 教科書：『さあ、中国語を学ぼう！会話・講読』 竹島 毅・趙 昕 著 白水社 参考書：特に指定はしない。必要に応じて授業中に紹介する。							

科目名	中国語コミュニケーションⅠ	教員名	藤田 守 ふじた まもる	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標 中国語学習において入門は極めて重要である。母音の数が多い言語であればあるほど、「音」が細分化されている。中国語には単母音と複母音合わせて 36 もの母音がある。よく中国語は発音が難しい、と言われているのもこの所以である。従って、本科目では、正確な発音の習得を重要課題に掲げ、「聴く」「話す」能力の向上に力点を置くことにする。人の発する「音」を正確に受信し、自らも正確な「音」が発信できてはじめて人とのコミュニケーションが成り立つからである。 到達目標は以下のとおりである。 ・中国語の発音の原理を理解し、ピンインを正確に「聴く」「話す」「書く」ことができる。 ・平易な挨拶言葉を身につけ、場面に応じて適切に使うことができる。 ・教授活動を行なうにおいて必要最低限のごく平易な教室用語を理解することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 〔単位数：1 単位、授業回数：15 回〕 〔前期〕 1. ガイダンス、中国及び中国語の概況 2. 教科書「発音」①「単母音、そり舌母音と声調」の習得 3. 教科書「発音」②「複母音」の習得 4. 教科書「発音」③「子音」の習得 5. 教科書「発音」④「鼻母音」の習得 6. 教科書「発音」⑤「声調変化、あいさつ言葉、教室用語」の習得 7. 教科書「第1課」の新出単語と文法の習得 8. 教科書「第1課」の会話本文、練習問題とその応用 9. 教科書「発音」と「第1課」の活用 10. 教科書「第2課」の新出単語と文法の習得 11. 教科書「第2課」の会話本文 12. 教科書「第2課」の練習問題とその応用「第3課」の新出単語の習得 13. 教科書「第3課」の文法の習得 14. 教科書「第3課」の会話本文、練習問題とその応用 15. 教科書「第2課」と「第3課」の活用							
III. 講義の進め方 授業外学修に基づき予習復習等の準備してきたことを前提として、授業は教科書の内容に沿って進めていく。 第一に、ピンインの読み方、書き方をマスターする。第二に、単語の読み方、書き方を覚える。第三に、会話文を理解したうえで、流暢に読めるよう繰り返し音読練習を行なう。第四に、学習した基本文型を使って簡単な日常会話の練習を行なう。授業計画に基づく予習や復習が求められる。							
IV. 試験と成績評価 まとめの試験 60%、平常点 40%の割合で評価を行なう。 ・まとめの試験は、使用教科書の内容及び授業中に取り扱った内容すべてを範囲とする。 ・平常点は、授業内容への理解度、小テストなどの評価から総合判定する。							
V. 授業外学修 正確な発音が上達に欠かせないため、教科書付属の音声教材をダウンロードすること 「授業計画」に従い、該当箇所を確認の上、あるがままの音声を聞きながら、その音を中国語の漢字を使って文字に起こす方法で、音声と文字を一致させる練習をしてくること（一致できない個所を明確にチェックしてくること）							
VI. 使用教材 教科書：『さあ、中国語を学ぼう！会話・講読』 竹島 毅・趙 昕 著（白水社） 参考書：特に指定しない。必要があれば授業中に紹介する。							

科目名	中国語コミュニケーションⅡ	教員名	藤田 守 張 健華	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
中国語コミュニケーションⅠで身につけた発音に関する基礎知識を踏まえ、簡単な日常会話レベルの中国語コミュニケーション能力の養成を目的とする。引き続き正確な発音を身につけるための音読学習を中心に行ないながら、基礎的な語彙、文法を適切に運用した平易な日常会話能力の習得へと展開していく。耳に入ってくる「音」をそのまま復唱する段階を越え、更に聞こえてくる中国語の意味を的確に理解し、それを自分の中で再構成し、自らの言葉として発信する能力を身につけていく。 到達目標は以下のとおりである。 ・基礎単語約 300 語による「聴く」「話す」「書く」能力を身につける。 ・平易な日常会話能力を身につけ、場面に応じて適切に使うことができる。 ・中国語検定試験の準 4 級レベルに相応する聴解力及び会話力を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. 中国語コミュニケーションⅠで学習した内容の確認と活用練習 2. 教科書「第4課」の新出単語と文法の習得 3. 教科書「第4課」の会話本文、練習問題とその応用 4. 教科書「第4課」の練習問題とその応用「第5課」の新出単語の習得 5. 教科書「第5課」の文法の習得 6. 教科書「第5課」の文法の習得と会話本文 7. 教科書「第5課」の練習問題とその応用 8. 教科書「第4課」と「第5課」の活用 9. 教科書「第6課」の新出単語と文法の習得 10. 教科書「第6課」の文法の習得と会話本文 11. 教科書「第6課」の練習問題とその応用「第7課」の新出単語の習得 12. 教科書「第7課」の文法の習得 13. 教科書「第7課」の会話本文 14. 教科書「第7課」の練習問題とその応用 15. 教科書「第6課」と「第7課」の活用							
III. 講義の進め方							
授業外学修に基づき予習復習等の準備してきたことを前提として、授業は教科書の内容に沿って進めていく。 第一に、ピンインの読み方、書き方をマスターする。第二に、単語の読み方、書き方を覚える。第三に、会話文を理解したうえで、流暢に読めるよう繰り返し音読練習を行なう。第四に、学習した基本文型を使って簡単な日常会話の練習を行なう。授業計画に基づく予習や復習が求められる。							
IV. 試験と成績評価							
まとめの試験 60%、平常点 40%の割合で評価を行なう。 ・まとめの試験は、使用教科書内容及び授業中に取り扱った内容すべてを範囲とする。 ・平常点は、授業内容への理解度、小テストなどの評価から総合判定する。							
V. 授業外学修							
正確な発音が上達に欠かせないため、教科書付属の音声教材をダウンロードすること 「授業計画」に従い、該当箇所を確認の上、あるがままの音声を聞きながら、その音を中国語の漢字を使って文字起こす方法で、音声と文字を一致させる練習をしてくること（一致できない箇所を明確にチェックしてくること）							
VI. 使用教材							
教科書：『さあ、中国語を学ぼう！会話・講読』 竹島 毅・趙 昕 著（白水社） 参考書：特に指定しない。必要があれば授業中に紹介する。							

科目名	中国語コミュニケーションⅢ	教員名	藤田 守 ふじた まもる	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
中国語コミュニケーションⅠとⅡで学習した発音に関する基礎知識及び基礎語彙、基礎文法、簡単な会話能力を踏まえ、更なる中国語コミュニケーション能力の向上を目指す。正確な発音を身につけるための音読学習を続けながら、語彙、文法を適切に使った日常会話能力の養成に力点を置く。中国語の文の構造を的確に理解し、身近な事柄について自らの言葉で表現できるようにする。更に、言葉の背景にある中国人の意識構造、文化背景に触れながら、円滑なコミュニケーションのための「中国語話術」を考えるきっかけを与える。 到達目標は以下のとおりである。 ・基礎単語約 500 語による「聴く」「話す」「書く」能力を身につける。 ・上記単語を用いた短文の日中間通訳ができる。 ・一般的な日常会話能力を身につけ、場面に応じて適切に使うことができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. 一年次に学習した内容の復習 2. 教科書「第 8 課」の新出単語と文法の習得 3. 教科書「第 8 課」会話本文 4. 教科書「第 8 課」の練習問題とその応用「第 9 課」の新出単語の習得 5. 教科書「第 9 課」の文法とその習得 6. 教科書「第 9 課」会話本文 7. 教科書「第 9 課」の練習問題とその応用 8. 教科書「第 8 課」と「第 9 課」の活用 9. 教科書「第 10 課」の新出単語と文法の習得 10. 教科書「第 10 課」の会話本文 11. 教科書「第 10 課」の練習問題とその応用「第 11 課」の新出単語の習得 12. 教科書「第 11 課」の文法とその習得 13. 教科書「第 11 課」の会話本文 14. 教科書「第 11 課」の練習問題とその応用 15. 教科書「第 10 課」と「第 11 課」の活用							
III. 講義の進め方							
授業外学修に基づき予習復習等の準備してきたことを前提として、授業は教科書の内容に沿って進めていく。 第一に、単語の読み方、書き方を覚える。第二に、会話文を理解したうえで、流暢に読めるよう繰り返し音読練習を行なう。第三に、学習した基本文型を使って日常会話の練習を行なう。第四に、状況に応じて、参考資料を用いてのディスカッションを行なう。授業計画に基づく予習や復習が求められる。							
IV. 試験と成績評価							
まとめの試験 60%、平常点 40%の割合で評価を行なう。 ・まとめの試験は、使用教科書内容及び授業中に取り扱った内容すべてを範囲とする。 ・平常点は、授業内容への理解度、小テストなどの評価から総合判定する。							
V. 授業外学修							
正確な発音が上達に欠かせないため、教科書付属の音声教材をダウンロードすること 「授業計画」に従い、該当箇所を確認の上、あるがままの音声を聞きながら、その音を中国語の漢字を使って文字起こす方法で、音声と文字を一致させる練習をしてくること（一致できない箇所を明確にチェックしてくること）							
VI. 使用教材							
教科書：『さあ、中国語を学ぼう！会話・講読』 竹島 毅・趙 昕 著（白水社） 参考書：特に指定しない。必要があれば授業中に紹介する。							

科目名	中国語コミュニケーションⅣ	教員名	藤田 守 ふじた まもる	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
中国語コミュニケーションⅠ・Ⅱ・Ⅲで学習した基礎語彙、基礎文法、簡単な会話能力を土台に、生きた言葉としての中国語運用能力の向上を目指す。正確な発音を身につけるための音読学習を続けながら、語彙、文法を適切に運用したやや複雑な文章の「聴く」「話す」「書く」能力の向上に力点を置く。更に、中国語の類似表現におけるそれぞれの中心的意味および使い分けなどの能力を身につける。また、引き続き言葉の背景にある中国人の意識構造、文化背景についての考察を通し、他言語・異文化に対する理解の柔軟性を培う。 到達目標は以下のとおりである。 ・常用語 700 語以上による「聴く」「話す」「書く」能力を身につける。 ・上記単語を用いた短文の日中間通訳ができる。 ・中国語検定試験の 4 級レベルに相応する聴解力及び会話力を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. 中国語コミュニケーションⅢで学習した内容の確認と活用練習 2. 教科書「第 12 課」の新出単語と文法の習得 3. 教科書「第 12 課」の会話本文 4. 教科書「第 12 課」の練習問題とその応用「第 13 課」の新出単語 5. 教科書「第 13 課」の文法とその習得 6. 教科書「第 13 課」の会話本文 7. 教科書「第 13 課」の練習問題とその応用 8. 教科書「第 12 課」と「第 13 課」の活用 9. 教科書「第 14 課」の新出単語と文法の習得 10. 教科書「第 14 課」の文法とその習得、会話本文 11. 教科書「第 14 課」の練習問題と「第 15 課」の新出単語の習得 12. 教科書「第 15 課」の文法とその習得 13. 教科書「第 15 課」の会話本文 14. 教科書「第 15 課」の練習問題とその応用 15. 教科書「第 14 課」と「第 15 課」の活用							
III. 講義の進め方							
授業外学修に基づき予習復習等の準備してきたことを前提として、授業は教科書の内容に沿って進めていく。 第一に、単語の読み方、書き方を覚える。第二に、会話文を理解したうえで、流暢に読めるよう繰り返し音読練習を行なう。第三に、学習した基本文型を使って日常会話の練習を行なう。第四に、状況に応じて、参考資料を用いてのディスカッションを行なう。授業計画に基づく予習や復習が求められる。							
IV. 試験と成績評価							
まとめの試験 60%、平常点 40%の割合で評価を行なう。 ・まとめの試験は、使用教科書内容及び授業中に取り扱った内容すべてを範囲とする。 ・平常点は、授業内容への理解度、小テストなどの評価から総合判定する。							
V. 授業外学修							
正確な発音が上達に欠かせないため、教科書付属の音声教材をダウンロードすること 「授業計画」に従い、該当箇所を確認の上、あるがままの音声を聞きながら、その音を中国語の漢字を使って文字起こす方法で、音声と文字を一致させる練習をしてくること（一致できない箇所を明確にチェックしてくること）							
VI. 使用教材							
教科書：『さあ、中国語を学ぼう！会話・講読』 竹島 毅・趙 昕 著（白水社） 参考書：特に指定しない。必要があれば授業中に紹介する。							

科目名	総合日本語Ⅰ (留学生科目)	教員名	藤田 守 ふじた まもる	開講 コース	地域振興 ビジネス	1年次	前期
I. 目的と内容および到達目標							
留学生は1年次には日本語能力試験N2の合格が学科の目標とされており、それに必要な継続的自習能力の養成が本演習の目的となる。初級日本語の復習とN2レベルの読解・文法を中心に授業を進めるが、必要に応じてN3レベルの読解・文法の復習も行う。 到達目標は以下のとおりである。 1 基礎的な日本語において統語的に正しく意味が通る文を組み立てたり、文や文章の内容に合った文法形式を判断したりすることができる 2 生活・仕事などいろいろな話題も含め、説明文や指示文など150～200字程度の書き下ろしの基礎的な日本語によるテキストを読んで、内容が理解できる 3 書き下ろした解説、エッセイなど350字程度の基礎的な日本語のテキストを読み、キーワードや因果関係などが理解できる 4 解説、エッセイ、手紙など550字程度の基礎的な日本語のテキストを読み、概要や論理の展開などが理解できる <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：15回]							
[前期]							
1. 教科書・読解「第1章」①指示語の内容 と 教科書・文法「第1章」(1) 助詞 2. 教科書・読解「第1章」②事実関係 3. 教科書・読解「第1章」③言葉の意味 4. 教科書・読解「第1章」④話の展開 と 教科書・文法「第1章」(2) 副詞 5. 教科書・読解「第1章」⑤人物の気持ち 6. 教科書・読解「第1章」⑥理由や根拠 7. 教科書・読解「第1章」⑦全体の内容 と 教科書・文法「第1章」(3) 接続詞 8. 教科書・読解「第1章」⑧筆者が言いたいこと 9. 教科書・読解「第1章」⑨連絡文 10. 教科書・読解「第1章」⑩情報検索 と 教科書・文法「第1章」(4) 敬語 11. 教科書・読解「第2章」事実関係・論理関係①解説 12. 教科書・読解「第2章」事実関係・論理関係②論説 13. 教科書・読解「第2章」心の動きや考え方①エッセイ と 教科書・文法「第2章」N3文型の復習 14. 教科書・読解「第2章」心の動きや考え方②小説 15. 教科書・読解「第2章」心の動きや考え方③紀行文							
III. 講義の進め方							
授業計画通りに進めるが、授業の内容が多く進行もはやい。受講者が中心となり学修を進めるため、新出語句、発音などは主体的に授業外学修に基づき十分に準備して授業に臨むこと。なお、大学の授業は日本語学校とは異なることを自覚すること。また、授業には国語（日本語）辞典（電子辞典も可）を持参すること。							
IV. 試験と成績評価							
評価の内訳は、課題提出状況（50%）と授業中の質疑応答（50%）とする。本科目の目標達成度を客観的に把握するため、日本語能力試験（7月）またはJ.TEST 日本語検定（7月）が必須となる。携帯電話やスマートフォンの無断使用や教員の指示に従わないものは退場させ欠席とする。全授業回数の2/3未満の出席の場合はF評価の対象となる。							
V. 授業外学修							
語学科目1単位の取得には授業と自習を合わせて最低45時間が必要であると定められている。 授業計画に従い1日最低2時間は日本語の勉強時間を確保すること その範囲において、毎日しっかり予習・復習すること 問題を解くだけでなく、理解できない言葉や覚えにくい言葉を明確にすること それらを確実に記憶するため、流ちょうに音読をしながらその言葉を書き出せるように努めること							
VI. 使用教材							
教科書 : 日本語能力試験N2 文法 必修パターン J リサーチ出版 日本語能力試験N2 読解 必修パターン J リサーチ出版							

科目名	総合日本語Ⅱ (留学生科目)	教員名	ふじた まもる 藤田 守	開講 コース	地域振興 ビジネス	1年次	後期
I. 目的と内容および到達目標							
1 年次は日本語能力試験N2の合格が学科の目標とされており、それに必要な継続的自習能力の養成が本演習の目的となる。初級日本語の復習とN2レベルの読解・文法を中心に授業を進める。 到達目標は以下のとおりである。 ・総合日本語Ⅰで身に付けた日本語の聴解・読解・文法の力を活用することができる。 ・広告、パンフレットなどの基礎的な日本語で書き下ろした情報素材（600字程度）の中から必要な情報を探し出すことができる。 ・学士課程で社会科学の専門的学習・研究を進めるのに必要な日本語の基礎的知識と技術を習得する。 ・職業生活や社会生活に必要な日本語のコミュニケーション能力の基礎を習得する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：15回]							
[後期] 1. 教科書・文法「第1章」(1) N2文型の整理 2. 教科書・文法「第1章」(2) 言葉をつなぐ練習 3. 教科書・文法「第1章」(3) 文と文をつなぐ練習 4. 教科書・文法「第2章」問題7 5. 教科書・読解「第1章」①問題文の基本的な読み方 と 教科書・文法「第2章」問題8 6. 教科書・読解「第1章」②チェックのしかた 7. 教科書・読解「第1章」③指示語（コソアド表現）の整理 と 教科書・文法「第2章」問題9 8. 教科書・読解「第1章」④文末表現の整理 9. 教科書・読解「第1章」⑤接続表現の整理 10. 教科書・読解「第2章」①内容理解（短文） 11. 教科書・読解「第2章」②内容理解（中文） 12. 教科書・読解「第2章」③統合理解 13. 教科書・読解「第2章」④主張理解（長文） 14. 教科書・読解「第2章」⑤情報検索 15. 教科書・読解「模擬問題」							
III. 講義の進め方							
授業計画通りに進めるが、授業の内容が多く進行もはやい。受講者が中心となり学修を進めるため、新出語句、発音などは主体的に授業外学修に基づき十分に準備して授業に臨むこと。なお、大学の授業は日本語学校とは異なることを自覚すること。また、授業には国語（日本語）辞典（電子辞典も可）を持参すること。							
IV. 試験と成績評価							
評価の内訳は、課題提出状況（50%）と授業中の質疑応答（50%）とする。本科目の目標達成度を客観的に把握するため、日本語能力試験（12月）またはJ.TEST日本語検定（11月）の受験が必須となる。携帯電話やスマートフォンの無断使用や教員の指示に従わないものは退場させ欠席とする。全授業回数の2/3未満の出席の場合はF評価の対象となる。							
V. 授業外学修							
語学科目1単位の取得には授業と自習を合わせて最低45時間が必要であると定められている。 授業計画に従い1日最低2時間は日本語の勉強時間を確保すること その範囲において、毎日しっかり予習・復習すること 問題を解くだけでなく、理解できない言葉や覚えにくい言葉を明確にすること それらを確実に記憶するため、流ちょうに音読をしながらその言葉を書き出せるように努めること							
VI. 使用教材							
教科書：日本語能力試験N2 文法 必修パターン Jリサーチ出版 日本語能力試験N2 読解 必修パターン Jリサーチ出版							

科目名	総合日本語Ⅲ (留学生科目)	教員名	ふじた まる 藤田 守	開講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前期
I. 目的と内容および到達目標 2年次の留学生には学科で定める学習到達目標は日本語能力試験N1の合格またはJ. TEST700点到達である。従って、本演習の目的はそれに必要な継続的自習能力の養成となる。総合日本語Ⅰ・Ⅱにおいて習得した日本語力を活用して中級文法要点を整理し、総合練習を行う。 到達目標は以下のとおりである。 ・応用的な日本語において統語的に正しく意味が通る文を組み立てたり、文や文章の内容に合った文法形式を判断したりする。 ・生活・仕事などいろいろな話題も含め、説明文や指示文など150～200字程度の書き下ろしの応用的なテキストを読んで、内容が理解する。 ・書き下ろした解説、エッセイなど350字程度の応用的なテキストを読み、キーワードや因果関係等を理解する。 ・解説、エッセイ、手紙など550字程度の応用的なテキストを読み、概要や論理の展開などが理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑩都市 ⑪実施手段							
II. 授業計画 〔単位数：1単位、授業回数：15回〕 〔前期〕 1. ガイダンス及び学習計画指導・教科書・読解「試験に出る言葉」 2. 教科書・読解「第1章 短文・中文」①指示語の内容 3. 教科書・読解「第1章 短文・中文」②事実関係 4. 教科書・読解「第1章 短文・中文」③言葉の意味 5. 教科書・読解「第1章 短文・中文」④話の展開 6. 教科書・読解「第1章 短文・中文」⑤人物の気持ち 7. 教科書・読解「第1章 短文・中文」⑥理由や根拠 8. 教科書・読解「第1章 短文・中文」⑦全体の内容 9. 教科書・読解「第1章 短文・中文」⑧筆者が言いたいこと 10. 教科書・読解「第1章 短文・中文」⑨連絡文 11. 教科書・読解「第1章 短文・中文」⑩情報検索 12. 教科書・読解「第2章 長文A事実関係・論理関係に注目するパターン」①解説 13. 教科書・読解「第2章 長文A事実関係・論理関係に注目するパターン」②論説 14. 教科書・読解「第2章 長文B心の動きや考え方に注目するパターン」①エッセイ 15. 教科書・読解「第2章 長文B心の動きや考え方に注目するパターン」②エッセイ							
III. 講義の進め方 授業計画通りに進めるが、授業の内容が多く進行もはやい。受講者が中心となり学修を進めるため、新出語句、発音などは主体的に授業外学修に基づき十分に準備して授業に臨むこと。また、授業には国語（日本語）辞典（電子辞典も可）を持参すること。							
IV. 試験と成績評価 評価の内訳は、課題提出状況（50%）と授業中の質疑応答（50%）とする。本科目の目標達成度を客観的に把握するため、7月に実施される日本語能力試験またはJ. TEST 日本語検定の受験が必須となる。携帯電話やスマートフォンの無断使用や教員の指示に従わないものは退場とし、欠席とする。全授業回数の2/3未満の出席の場合はF評価の対象となる。							
V. 授業外学修 語学科目1単位の取得には授業と自習を合わせて最低45時間が必要であると定められている。 授業計画に従い1日最低2時間は日本語の勉強時間を確保すること その範囲において、毎日しっかり予習・復習すること 問題を解くだけでなく、理解できない言葉や覚えにくい言葉を明確にすること それらを確実に記憶するため、流ちょうに音読をしながらその言葉を書き出せるように努めること							
VI. 使用教材 教科書：日本語能力試験N1 読解 必修パターン J リサーチ出版							

科目名	総合日本語Ⅳ (留学生科目)	教員名	ふじた まる 藤田 守	開講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	後期
I. 目的と内容および到達目標							
総合日本語科目の総まとめの科目として、自習能力の完成を目指す。これまで養った日本語力を活用して読解問題の解答手続きの要領を整理のうえ総合練習を継続する。 到達目標は以下のとおりである。 ・応用的な日本語において統語的に正しく意味が通る文を組み立てたり、文や文章の内容に合った文法形式を判断したりする。 ・生活・仕事などいろいろな話題も含め、説明文や指示文など150～200字程度の書き下ろしの応用的なテキストを読んで、内容が理解する。 ・書き下ろした解説、エッセイなど350字程度の応用的なテキストを読み、キーワードや因果関係等を理解する。 ・解説、エッセイ、手紙など550字程度の応用的なテキストを読み、概要や論理の展開などが理解する。 ＜SDGs（持続可能な開発目標）との関連＞ ④教育 ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：15回]							
1. 教科書・読解「試験に出る言葉」 2. 教科書・読解「第2章 長文B心の動きや考え方に注目するパターン」②小説 3. 教科書・読解「第2章 長文B心の動きや考え方に注目するパターン」③紀行文 4. 教科書・読解「第1章 対策準備」①指示語の内容 5. 教科書・読解「第1章 対策準備」②事実関係 6. 教科書・読解「第1章 対策準備」③指示語（コソアド表現）の整理 7. 教科書・読解「第1章 対策準備」④文末表現の整理 8. 教科書・読解「第1章 対策準備」⑤接続表現の整理 9. 教科書・読解「第2章 実戦練習」①内容理解（短文） 10. 教科書・読解「第2章 実戦練習」②内容理解（中文） 11. 教科書・読解「第2章 実戦練習」③内容理解（長文） 12. 教科書・読解「第2章 実戦練習」④統合理解 13. 教科書・読解「第2章 実戦練習」⑤主張理解（長文） 14. 教科書・読解「第2章 実戦練習」⑥情報検索 a 15. 教科書・読解「第2章 実戦練習」⑥情報検索 b							
III. 講義の進め方							
授業計画通りに進めるが、授業の内容が多く進行もはやい。受講者が中心となり学修を進めるため、新出語句、発音などは主体的に授業外学修に基づき十分に準備して授業に臨むこと。また、授業には国語（日本語）辞典（電子辞典も可）を持参すること。							
IV. 試験と成績評価							
評価の内訳は、課題提出状況（50％）と授業中の質疑応答（50％）とする。本科目の目標達成度を客観的に把握するため、日本語能力試験（12月）またはJ.TEST日本語検定（11月）の受験が必須となる。携帯電話やスマートフォンの無断使用や教員の指示に従わないものは退場させ欠席とする。全授業回数の2/3未満の出席の場合はF評価の対象となる。							
V. 授業外学修							
語学科目1単位の取得には授業と自習を合わせて最低45時間が必要であると定められている。 授業計画に従い1日最低2時間は日本語の勉強時間を確保すること その範囲において、毎日しっかり予習・復習すること 問題を解くだけでなく、理解できない言葉や覚えにくい言葉を明確にすること それらを確実に記憶するため、流ちょうに音読をしながらその言葉を書き出せるように努めること							
VI. 使用教材							
教科書：日本語能力試験N1読解 必修パターン Jリサーチ出版							

科目名	日本語コミュニケーションⅠ (留学生科目)	教員名	ふじた まる 藤田 守	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
円滑なコミュニケーションには自然な日本語の「音」の把握が当面の重要課題である。正しい発音と基本語彙、構文力をひとつひとつ確実にするため、発音の仕方を充分理解し、「聞く」「発音」の動作をくり返し「音」に慣れることに、授業の力点を置く。テキストの音声教材のシャドーウィング（発音の聴取と同時に復唱）やディクテーション（書き取り）によるヒアリングの訓練、他の授業科目でも求められるプレゼンテーションの練習も合わせて行う。 到達目標は以下のとおりである。 ・具体的な課題解決に必要な情報を聞き取り、次に何をするのが適当か理解できる ・事前に示されている聞くべきことをふまえ、ポイントを絞って聞くことができる ・テキスト全体から話者の意図や主張などが理解できる ・イラストを見ながら、状況説明を聞いて、適切な発話が選択できる ＜SDGs（持続可能な開発目標）との関連＞ ④教育 ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. ガイダンス・「教科書・聴解 基礎編」1 音の特徴を聞き分けよう 2. 「教科書・聴解 基礎編」2 音の変化を聞き取ろう 3. 「教科書・聴解 基礎編」3 終助詞 4. 「教科書・聴解 基礎編」4 イントネーション 5. 「教科書・聴解 基礎編」5 指示詞 6. 「教科書・聴解 基礎編」6 副詞の省略表現 7. 「教科書・聴解 基礎編」7 会話の流れ 8. 「教科書・聴解 対策編」第1章 UNIT1 会話の流れを読むパターン 9. 「教科書・聴解 対策編」第1章 UNIT2 会話の中に答えがないパターン 10. 「教科書・聴解 対策編」第2章 UNIT1 5W1Hを聞き取るパターン 11. 「教科書・聴解 対策編」第2章 UNIT2 条件を聞き取るパターン 12. 「教科書・聴解 対策編」第3章 UNIT1 テーマについて聞くパターン 13. 「教科書・聴解 対策編」第3章 UNIT2 意見を聞くパターン 14. 「教科書・聴解 対策編」第3章 UNIT3 予測するパターン a 15. 「教科書・聴解 対策編」第3章 UNIT3 予測するパターン b							
III. 講義の進め方							
授業は日本語で演習形式により進める。各課の全文の書き取りを毎回の宿題とし、次の授業の際には提出すること。なお、大学の授業は日本語学校とは異なることを自覚すること。また、授業には国語（日本語）辞典（電子辞典も可）を持参すること。							
IV. 試験と成績評価							
評価は課題提出状況（50%）、授業中の質疑応答（50%）により判定する。学修の到達度を客観的に把握するため、日本語能力試験（7 月）または J. TEST 日本語検定（7 月）の受験が必須となる。なお、携帯電話やスマートフォンの無断使用や教員の指示に従わないものは退場させ欠席とする。全授業回数の 2/3 未満の出席の場合は F 評価の対象とする。							
V. 授業外学修							
語学科目 1 単位の取得には授業と自習を合わせて最低 45 時間が必要であると定められている。 1 日最低 2 時間は日本語の勉強時間を確保し、毎日勉強すること 教科書付属の音声教材をダウンロードし、予習と復習の際に必ず活用すること 音声原稿を書きとることで意味の理解と音声の理解が図られているか確認すること（なお、音声を聞き取れない、または書きとれないことは理解が不十分ということである） 音声から自然な日本語をインプットする方法で毎日実施すること 以上を踏まえ、新出語句の理解、発音などは十分に準備して授業に臨むこと							
VI. 使用教材							
教科書：日本語能力試験 N2 聴解 必修パターン J リサーチ出版							

科目名	日本語コミュニケーションⅡ (留 学 生 科 目)	教員名	藤田 守 ふじた まもる	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
日本語コミュニケーションⅠから継続の積み上げ科目である。円滑なコミュニケーションには自然な日本語の「音」の把握が当面の重要課題である。正しい発音と基本語彙、構文力をひとつひとつ確実にするため、発音の仕方を充分理解し、「聞く」「発音」の動作をくり返し「音」に慣れることを継続する。テキストの音声教材のシャドーウィング（発音の聴取と同時に復唱）やディクテーション（書き取り）によるヒアリングの訓練、他の授業科目でも求められるプレゼンテーションの練習も継続して実施する。 到達目標は以下のとおりである。 ・日本語コミュニケーションⅠで身に付けた日本語力を活用することができる ・質問などの短い発話を聞いて、適切な応答が選択できる ・学士課程で社会科学の専門的学習・研究を進めるのに必要な基礎的な日本語の知識と技術を習得する ・職業生活や社会生活に必要な基礎的な日本語のコミュニケーション能力を習得する <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業週数：15 回]							
[後期] 1. ガイダンス・「教科書・聴解 対策編」第3章 UNIT4 比べるパターン 2. 「教科書・聴解 対策編」第4章 UNIT 1 縮約語のパターン 3. 「教科書・聴解 対策編」第4章 UNIT 2 イントネーションのパターン 4. 「教科書・聴解 対策編」第4章 UNIT 3 指示語（こ・そ・あ・ど）のパターン 5. 「教科書・聴解 対策編」第4章 UNIT 4 応答がセットになっているパターン 6. 「教科書・聴解 対策編」第4章 UNIT 5 理由を言うパターン 7. 「教科書・聴解 対策編」第4章 UNIT 6 意味が複数あるパターン 8. 「教科書・聴解 対策編」第4章 UNIT 7 省略のパターン 9. 「教科書・聴解 対策編」第4章 UNIT 8 擬音語・擬態語のパターン 10. 「教科書・聴解 対策編」第4章 UNIT 9 慣用表現のパターン 11. 「教科書・聴解 対策編」第5章 UNIT 1 会話の流れを読むパターン 12. 「教科書・聴解 対策編」第5章 UNIT 2 1 人の話を受けて2 人が会話するパターン① 13. 「教科書・聴解 対策編」第5章 UNIT 2 1 人の話を受けて2 人が会話するパターン② 14. 「教科書・聴解」模擬問題（前半） 15. 「教科書・聴解」模擬問題（後半）							
III. 講義の進め方							
授業は日本語で演習形式により進める。各課の全文の書き取りを毎回の宿題とし、次の授業の際には提出すること。なお、大学の授業は日本語学校とは異なることを自覚すること。また、授業には国語（日本語）辞典（電子辞典も可）を持参すること。							
IV. 試験と成績評価							
評価は課題提出状況（50%）、授業中の質疑応答（50%）により判定する。学習到達度を客観的に把握するため、日本語能力試験（12 月）または J. TEST 日本語検定の（11 月）受験が必須となる。携帯電話やスマートフォンの無断使用や教員の指示に従わないものは退場させ欠席とする。全授業回数の 2/3 未満の出席の場合は F 評価の対象とする。							
V. 授業外学修							
語学科目 1 単位の取得には授業と自習を合わせて最低 45 時間が必要であると定められている。 1 日最低 2 時間は日本語の勉強時間を確保し、毎日勉強すること 教科書付属の音声教材をダウンロードし、予習と復習の際に必ず活用すること 音声原稿を書きとることで意味の理解と音声の理解が図られているか確認すること（なお、音声を聞き取れない、または書きとれないことは理解が不十分ということである） 音声から自然な日本語をインプットする方法で毎日実施すること 以上を踏まえ、新出語句の理解、発音などは十分に準備して授業に臨むこと							
VI. 使用教材							
教科書：日本語能力試験 N2 聴解 必修パターン J リサーチ出版							

科目名	日本語コミュニケーションⅢ (留学生科目)	教員名	ふじた まる 藤田 守	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
1年次科目からの積み上げにより日常会話ができることが前提である。1年次に身に付けた日本語力を活用して日本語能力試験N1に合格することが2年次の学習目標となるため、日本語能力試験N1レベルに耐えうる高度なレベルが求められる。2年次は専門科目の履修などに備えるため、日本語力を最大限高められるよう趣旨を十分理解すること。これらに対応するため、必要に応じて会話・討論・プレゼンテーションなどの練習も予定する。 到達目標は以下のとおりである。 ・具体的な課題解決に必要な情報を聞き取り、次に何をするのが適当か理解できる ・事前に示されている聞くべきことをふまえ、ポイントを絞って聞くことができる ・テキスト全体から話者の意図や主張などが理解できる ・イラストを見ながら、状況説明を聞いて、適切な発話が選択できる ＜SDGs（持続可能な開発目標）との関連＞ ④教育 ⑧成長・雇用 ⑪都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：15回]							
1. 教科書・聴解 「試験に出る言葉」 2. 教科書・聴解 基礎編「音の特徴を聞き分けよう」 3. 教科書・文法 PART1「1. 文法の復習（1）助詞」 4. 教科書・聴解 基礎編「音の変化を聞き取ろう」 5. 教科書・文法 PART1「1. 文法の復習（2）副詞」 6. 教科書・聴解 基礎編「終助詞」 7. 教科書・文法 PART1「1. 文法の復習（3）接続詞」 8. 教科書・聴解 基礎編「イントネーション」 9. 教科書・文法 PART1「1. 文法の復習（4）敬語」 10. 教科書・聴解 基礎編「指示詞」 11. 教科書・文法 PART1「2. N2・N3文型の復習」 12. 教科書・聴解 基礎編「副詞の省略表現」 13. 教科書・文法 PART2「第1章 対策準備（2）言葉をつなぐ練習」 14. 教科書・文法 PART2「第1章 対策準備（1）N1文型の整理」① 15. 教科書・文法 PART2「第1章 対策準備（1）N1文型の整理」②							
III. 講義の進め方							
授業は予習が完了していることを前提とし日本語で演習形式により進める。聞き取るための具体的な方法を学ぶため、予習の段階で新出語句、発音などで理解できなかった個所を整理把握したうえで臨むと効果的である。							
IV. 試験と成績評価							
評価は課題提出状況（50%）、授業中の質疑応答（50%）により判定する。また、学習目標の到達度の客観的把握のため、日本語能力試験（7月）または、J.TEST 日本語検定（7月）の受験を必須とする。携帯電話、スマートフォンの無断使用や教員の指示に従わないものは退場させ欠席と扱う。全授業回数の2/3未満の出席の場合はF評価の対象となる。							
V. 授業外学修							
語学科目1単位の取得には授業と自習を合わせて最低45時間が必要であると定められている。 1日最低2時間は日本語の勉強時間を確保し、毎日勉強すること 文法は問題を解くだけでなく、理解できない言葉や覚えにくい言葉を明確にすること それらを確実に記憶するため、流ちょうに音読をしながらその言葉を書き出せるように努めること 聴解は教科書付属の音声教材をダウンロードし、予習と復習の際に必ず活用すること 音声原稿を書きとることで意味の理解と音声の理解が図られているか確認すること（なお、音声を聞き取れない、または書きとれないことは理解が不十分ということである） 音声から自然な日本語をインプットする方法で毎日実施すること 以上を踏まえ、新出語句の理解、発音などは十分に準備して授業に臨むこと							
VI. 使用教材							
教科書：日本語能力試験N1 文法 必修パターン Jリサーチ出版 日本語能力試験N1 聴解 必修パターン Jリサーチ出版							

科目名	日本語コミュニケーションⅣ (留学生科目)	教員名	ふじた まる 藤田 守	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
日本語コミュニケーション科目の総まとめの科目である。これまでに身に付けた日本語力を活用して日本語能力試験N1に合格することが2年次の学習目標となるため、日本語能力試験N1レベルに耐えうる高度なレベルが求められる。編入後の学習にも意識を向け積極的な学習姿勢を身に着けるため、必要に応じて会話・討論・プレゼンテーションなどの練習も実施する。 到達目標は以下のとおりである。 ・具体的な課題解決に必要な情報を聞き取り、次に何をするのが適当か理解できる ・事前に示されている聞くべきことをふまえ、ポイントを絞って聞くことができる ・テキスト全体から話者の意図や主張などが理解できる ・イラストを見ながら、状況説明を聞いて、適切な発話が選択できる <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑩都市 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：15回]							
[後期] 1. 教科書・文法「試験に出る言葉」 2. 教科書・聴解 基礎編「会話の流れ」 3. 教科書・文法 PART2「第1章 対策準備(3) 文と文をつなぐ練習」 4. 教科書・聴解 対策編「第1章 課題理解」 5. 教科書・文法 PART2「第2章 実戦練習(1) 問題5に挑戦」 6. 教科書・聴解 対策編「第2章」ポイント理解 7. 教科書・文法 PART2「第2章」実戦練習(2) 問題6に挑戦 8. 教科書・聴解 対策編「第3章」概要理解 9. 教科書・文法 PART2「第2章」実戦練習(3) 問題7に挑戦 10. 教科書・聴解 対策編「第4章」即時応答 11. 教科書・文法「模擬問題」① 12. 教科書・文法「模擬問題」② と 教科書・聴解 対策編「模擬問題」① 13. 教科書・聴解 対策編「模擬問題」② 14. 教科書・聴解 対策編「第5章 統合理解」① 15. 教科書・聴解 対策編「第5章 統合理解」②							
III. 講義の進め方							
授業は予習が完了していることを前提とし日本語で演習形式により進める。聞き取るための具体的な方法を学ぶため、予習の段階で新出語句、発音などで理解できなかった個所を整理把握したうえで臨むと効果的である。							
IV. 試験と成績評価							
評価は課題提出状況(50%)、授業中の質疑応答(50%)により判定する。また、学習目標の到達度の客観的把握のため、日本語能力試験(11月)または、Jtest日本語検定(12月)の受験を必須とする。携帯電話、スマートフォンの無断使用や教員の指示に従わないものは退場させ欠席と扱う。全授業回数の2/3未満の出席の場合はF評価の対象となる。							
V. 授業外学修							
語学科目1単位の取得には授業と自習を合わせて最低45時間が必要であると定められている。 1日最低2時間は日本語の勉強時間を確保し、毎日勉強すること 文法は問題を解くだけでなく、理解できない言葉や覚えにくい言葉を明確にすること それらを確実に記憶するため、流ちょうに音読をしながらその言葉を書き出せるように努めること 聴解は教科書付属の音声教材をダウンロードし、予習と復習の際に必ず活用すること 音声原稿を書きとることで意味の理解と音声の理解が図られているか確認すること(なお、音声を聞き取れない、または書きとれないことは理解が不十分ということである) 音声から自然な日本語をインプットする方法で毎日実施すること 以上を踏まえ、新出語句の理解、発音などは十分に準備して授業に臨むこと							
VI. 使用教材							
教科書：日本語能力試験N1 文法 必修パターン Jリサーチ出版 日本語能力試験N1 聴解 必修パターン Jリサーチ出版							

科目名	ク リ ー ン 農 業 論	教員名	佐藤 毅 さとう たかし	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	後 期																																													
I. 目的と内容および到達目標																																																				
20 世紀は大量生産・大量消費の時代となり、農業においては食の安全・安心が危ぶまれるとともに、環境に及ぼす負荷が増大し、このままの近代化には限界が見えてきた。本講義は、このような視点で農業の現状を理解するとともに、今後目指すべき 21 世紀の農業である環境保全型農業「クリーン農業」の理念と具体像を学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・ 人類の農耕開始から現代に至るまで、農業が環境とどのようにかかわってきたかを正しく認識する。 ・ 急速に近代化した農業がどのような環境問題を抱え、これからの農業がどうあるべきかを理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑥水・衛生 ⑧経済成長と雇用 ⑨イノベーション ⑫持続可能な生産と消費 ⑬気候変動 ⑮陸上資源																																																				
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]																																																				
[後期]																																																				
<table><tr><td>1. 農業と環境の関係</td><td>:</td><td>そもそも農業とは何か、環境とは</td></tr><tr><td>2. 農業生態系に関する基礎知識</td><td>:</td><td>自然生態系と農業生態系の違い</td></tr><tr><td>3. 拡大を続ける人類の活動</td><td>:</td><td>18 世紀の産業革命によって農業や食料生産はどう変化したか</td></tr><tr><td>4. 化学肥料の発明と普及</td><td>:</td><td>化学肥料が農業をいかに変え、農業環境に影響をもたらしたか</td></tr><tr><td>5. 化学肥料による環境負荷と軽減技術</td><td>:</td><td>化学肥料の使用量を合理的に減らすには</td></tr><tr><td>6. 有害生物の防除と化学農薬の開発</td><td>:</td><td>化学農薬が農業をいかに変え、そして環境に悪影響をもたらしたか</td></tr><tr><td>7. 農薬登録と安全性の確保</td><td>:</td><td>我が国の農薬登録制度、農薬の残留基準とは</td></tr><tr><td>8. 減農薬をいかに達成するか</td><td>:</td><td>IPM（総合的病害虫・雑草管理）とは</td></tr><tr><td>9. 遺伝子組換え作物</td><td>:</td><td>遺伝子組み換え作物の現状と北海道の取り組み</td></tr><tr><td>10. 日本の食料・物資の収支</td><td>:</td><td>日本の食料需給の不均衡、日本の輸出入の不均衡</td></tr><tr><td>11. 欧米の農業環境政策</td><td>:</td><td>アメリカの低投入持続的農業、EU の農業環境政策</td></tr><tr><td>12. 日本の農業環境政策</td><td>:</td><td>環境保全型農業の始まり、食の安全安心・規格・表示の取り組み経過</td></tr><tr><td>13. 農業の規範・基準</td><td>:</td><td>農業にも規範・基準の時代、GAP、ISO、HACCP、JAS、YES! clean</td></tr><tr><td>14. 環境行政と環境関連法令</td><td>:</td><td>時代とともに整備、発展してきた日本の環境法と環境政策</td></tr><tr><td>15. クリーン農業を学ぶ意味</td><td>:</td><td>めざすべき環境保全型農業とは</td></tr></table>								1. 農業と環境の関係	:	そもそも農業とは何か、環境とは	2. 農業生態系に関する基礎知識	:	自然生態系と農業生態系の違い	3. 拡大を続ける人類の活動	:	18 世紀の産業革命によって農業や食料生産はどう変化したか	4. 化学肥料の発明と普及	:	化学肥料が農業をいかに変え、農業環境に影響をもたらしたか	5. 化学肥料による環境負荷と軽減技術	:	化学肥料の使用量を合理的に減らすには	6. 有害生物の防除と化学農薬の開発	:	化学農薬が農業をいかに変え、そして環境に悪影響をもたらしたか	7. 農薬登録と安全性の確保	:	我が国の農薬登録制度、農薬の残留基準とは	8. 減農薬をいかに達成するか	:	IPM（総合的病害虫・雑草管理）とは	9. 遺伝子組換え作物	:	遺伝子組み換え作物の現状と北海道の取り組み	10. 日本の食料・物資の収支	:	日本の食料需給の不均衡、日本の輸出入の不均衡	11. 欧米の農業環境政策	:	アメリカの低投入持続的農業、EU の農業環境政策	12. 日本の農業環境政策	:	環境保全型農業の始まり、食の安全安心・規格・表示の取り組み経過	13. 農業の規範・基準	:	農業にも規範・基準の時代、GAP、ISO、HACCP、JAS、YES! clean	14. 環境行政と環境関連法令	:	時代とともに整備、発展してきた日本の環境法と環境政策	15. クリーン農業を学ぶ意味	:	めざすべき環境保全型農業とは
1. 農業と環境の関係	:	そもそも農業とは何か、環境とは																																																		
2. 農業生態系に関する基礎知識	:	自然生態系と農業生態系の違い																																																		
3. 拡大を続ける人類の活動	:	18 世紀の産業革命によって農業や食料生産はどう変化したか																																																		
4. 化学肥料の発明と普及	:	化学肥料が農業をいかに変え、農業環境に影響をもたらしたか																																																		
5. 化学肥料による環境負荷と軽減技術	:	化学肥料の使用量を合理的に減らすには																																																		
6. 有害生物の防除と化学農薬の開発	:	化学農薬が農業をいかに変え、そして環境に悪影響をもたらしたか																																																		
7. 農薬登録と安全性の確保	:	我が国の農薬登録制度、農薬の残留基準とは																																																		
8. 減農薬をいかに達成するか	:	IPM（総合的病害虫・雑草管理）とは																																																		
9. 遺伝子組換え作物	:	遺伝子組み換え作物の現状と北海道の取り組み																																																		
10. 日本の食料・物資の収支	:	日本の食料需給の不均衡、日本の輸出入の不均衡																																																		
11. 欧米の農業環境政策	:	アメリカの低投入持続的農業、EU の農業環境政策																																																		
12. 日本の農業環境政策	:	環境保全型農業の始まり、食の安全安心・規格・表示の取り組み経過																																																		
13. 農業の規範・基準	:	農業にも規範・基準の時代、GAP、ISO、HACCP、JAS、YES! clean																																																		
14. 環境行政と環境関連法令	:	時代とともに整備、発展してきた日本の環境法と環境政策																																																		
15. クリーン農業を学ぶ意味	:	めざすべき環境保全型農業とは																																																		
III. 講義の進め方																																																				
対面授業を基本とするが、コロナの状況等に応じてオンデマンド授業で行う可能性もある。 授業計画に沿って、プリントを配布し、パワーポイントを用いて講義する。 毎回、出席確認を兼ねて、授業内容の理解度等を確認する小テストを実施する。																																																				
IV. 試験と成績評価																																																				
毎回の小テスト（50％）と期末試験（50％）によって、到達目標の達成度を判定し成績評価を行う。																																																				
V. 授業外学修																																																				
毎回配布するプリントだけではなく、ルーズリーフ等を活用して、授業ファイルを作成することを勧めます。 予習として、関連する参考書を読んで生じた疑問点などをファイルに書きだして出席し、積極的に質問すること。復習として、プリントの記載だけではなく、ファイルに重要事項をまとめておくこと。																																																				
VI. 使用教材																																																				
教科書：プリントを毎回配付する。 参考書：『クリーン農業時代』相馬 暁監修（チクマ秀版社）、『北海道いま農業が面白い』『2020 年農業が輝く』相馬 暁（北海道新聞社）、『クリーン農業導入手引き書』北海道農政部編（北海道農業改良協会）2002、『地球をめぐる不都合な物質』日本環境化学会編集（講談社ブルーバックス）、『世界で最初に飢えるのは日本』鈴木宣弘（講談社＋α 新書）																																																				
*実務経験のある教員による授業科目 [実務経験と授業との関係] 担当教員は、農業試験場での実務経験を有し、当該科目における農業の現状を理解するとともに、今後目指すべき 21 世紀の農業である環境保全型農業「クリーン農業」の理念と具体像について教授します。																																																				

科目名	地 域 振 興 論	教員名	工藤 遥 くどう はるか	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
本講義では、学術的な視点と実践的な視点から地域振興を検討することを目的とする。日本全体で人口が減少し、地域が衰退していく中で、現在、各自治体は地域創生の計画を策定し、実施することが求められている。今後、どの地域で生活する上でも地域の振興を考えることは避けられない。講義とグループワークを通じて地域が抱える課題について考える。 到達目標は以下のとおりである。 ・地域とは何かを理解できるようになる。 ・各地域が抱える課題について理解できるようになる。 ・意見や視点の多様性が問題解決には必要なことが理解できるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑨イノベーション ⑧成長・雇用 ⑪都市 ③保健 ⑰実施手段 他							
II. 授業計画〔単位数：2 単位、授業回数：15 回〕							
〔前期〕 1. 授業ガイダンス、地域振興とは 2. 人口減少と地域振興 3. 少子高齢化と地域生活 4. 都市化・過疎化と地域社会 5. 地域政策の歴史 6. 「地方創生」の概況 7. 地域課題とまちづくり 8. 中間まとめ、グループワーク 9. 地域経済・産業の再生、活性化 10. 地域ブランド 11. 観光まちづくり 12. 雇用、移住政策 13. 地域福祉 14. 持続可能性・SDGs と地域振興 15. まとめとふりかえり、グループワーク							
III. 講義の進め方							
スライドを使って講義をする。教科書は使用せず、適宜プリントを配布する。統計データや新聞記事、映像資料等も教材として使用する。授業の最後に出欠確認も兼ねたリアクションペーパーの提出を求める。意見交換や課題発表などのグループワークも実施する。なお、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
リアクションペーパー（50%）、グループワーク課題（10%）、期末レポート（40%）を総合的に評価する。							
V. 授業外学修							
地域毎に抱える課題は異なることから、自分の出身地や居住地、関心のある地域の情報について、ニュースや新聞記事、文献・資料、統計データなどを実際に調べるなどして普段から情報収集を行い、考えや感想などを記録しておくことを推奨する。							
VI. 使用教材							
教科書：使用しない（適宜プリントを配布） 参考書：適時紹介する							

科目名	国 際 農 業 論	教員名	村上 良一 むらかみ りょういち	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
日本は食料輸入大国であり実は経済的に非常に大きな心配を抱えた国である。それは国内外の要因に規定された結果である。本講義では、その過程や構造について説明するため各国・地域の農政や国際交渉、農業関連企業の行動を採り上げて行う。 到達目標は以下のとおりである。 ・世界の農業生産構造と農産物貿易構造について基本的な理解ができる。 ・国際農産物貿易交渉の変遷と主要点について基本的な理解ができる。 ・世界の農業生産と食料供給に多大な影響を及ぼしている多国籍アグリビジネスについて基本的な理解ができる。 ＜SDGs（持続可能な開発目標）との関連＞ ①貧困 ②飢餓 ⑨不平等 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. 農業の社会的役割と現状の主要な生産方法が及ぼす地球環境への影響等の概要について講義 2. 世界の食料問題に影響を及ぼしている農産物供給・貿易構造の現状について講義(教科書 3 章) 3. 農業政策の歴史とガット・ウルグアイラウンド以降の国際農産物貿易交渉の変遷について講義(教科書 4 章) 4. 現段階における国際農産物交渉の対立点やその背景等について講義(教科書 4 章) 5. 周期的に生じつつある「食料危機」について事例紹介を中心に講義 6. ガット・ウルグアイラウンド以降の日本の農業政策の概要と特徴について講義 7. ガット・ウルグアイラウンド以降の米国、EU の農業政策の変遷の概観について講義 8. 多国籍アグリビジネスの概観について講義(教科書序章) 9. 多国籍アグリビジネスの活動について種子ビジネスを事例に講義(教科書 12 章) 10. 輸出志向型農業の問題点と多国籍アグリビジネスについて事例紹介を交えて講義 11. 多国籍アグリビジネスの活動について海外農業投資を事例に講義(教科書 14 章) 12. 農業労働力のグローバル化について日本を事例に講義(教科書 15 章) 13. 日本の食料事情に影響を与えつつある多国籍アグリビジネスの活動事例について講義(教科書 11 章) 14. 多国籍アグリビジネスの活動についてスマート農業を事例に講義(教科書 13 章) 15. 今後の世界と日本の農業・食料事情の展望についての講義(教科書終章)							
III. 講義の進め方							
・講義形式で教科書、スライドを中心に用い、プリント配布、動画視聴などを適宜行う。 ・時々、前回の内容を確認するような発問を行うので、ノートを見ながらでもよいから答えられるように復習をよくしておくこと。 ・また、一部の授業回を遠隔授業方式で行うこともある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は小レポート(30%)期末のレポート試験(70%)の合計で評価する。							
V. 授業外学修							
・教科書の章が明記されている授業回では事前に該当する章を読んで授業に臨むこと。 ・用語・事項を調べる時は『新版 キーワードで読みとく現代農業と食料・環境』を参考にすること。 ・食料・農業に関するニュースについて意識的にチェックしておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書：冬木勝仁・岩佐和幸・関根佳恵編『アグリビジネスと現代社会』(筑波書房)。 参考書：谷口信和他『世界の農政と日本』(農林統計協会)、田代洋一『農業・食料問題入門』(大月書店)、小池恒夫他編『新版 キーワードで読みとく現代農業と食料・環境』(昭和堂)。							

科目名	キャリアスキル	教員名	平尾 政幸 米野 祐司	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
自己の生き方を探求させるという観点から、自己啓発的な体験学習や討論などを通して、進路の選択決定に必要な能力・態度やコミュニケーション能力を養うとともに、自己の充実や生き甲斐を目指し、生涯にわたって学習に取り組む意欲や態度を育成しながら、キャリアスキルを高める。 1 年間を通じて 1 年ゼミナールと連動するが、前期はゼミナール別演習、後期は進路別編成による指導となる。 到達目標は以下のとおりである。 ・自分を知り、社会・職業・学問等を学ぶことで将来の進路を考え、自分の興味・関心・能力・適性にあった進路計画をたてることができる。 ・「読む力」「書く力」「聞く力」「話す力」を向上させて、自己のライフプランを形成することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑤ジェンダー ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑩不平等							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：30 回]							
[前期]				[後期]			
1. 教育課程ガイダンス：教育課程と進級・卒業の履修の仕方の理解、単位取得方法の理解（合同）				1. 進路別クラスガイダンス（合同）			
2～ 学業・履修指導：学生生活の基本指導、				2～			
5. 授業の受け方指導、進路別履修指導 （合同 2、ゼミ別 2）（教科書第 1 部～第 4 部）				1 4. 進路別演習（クラス別）：拓殖大学学部紹介、他大学紹介、将来の進路と学部・学科選択、志望理由書作成、編入学英語練習、論文・レポートの作成と発表、論文の読解			
6～ 進路ガイダンス：就職・編入ガイダンス				業界・企業研究、履歴書作成、面接練習、プレゼンテーションの練習 など			
1 0. （合同 2、ゼミ別 3）（教科書第 5 部～第 7 部）				1 5. 2 年ゼミナールガイダンス（合同）			
1 1. 自己分析・性格適正検査（ゼミ別）							
1 2. 進路演習①（ゼミ別）							
1 3. 進路演習②（ゼミ別）							
1 4. 夏期休暇中の取組計画発表・意見交換（ゼミ別）							
1 5. 進路別クラス編成について（ゼミ別）							
III. 講義の進め方							
前期は学年一斉と 1 年ゼミナール別の形で進める。 後期は学年一斉と進路（就職、拓大編入、他大学編入）別クラスで進める。 学生の報告と発表に基づく討論を中心に展開する。 また、授業の一部を遠隔（オンデマンド：非同期）で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
学生が個々の資質を高める取り組みを積極的に推進させたか。自己の興味・関心、能力・適性にあった進路計画を立てることができたか。「読む力」、「書く力」、「聴く力」、「話す力」を向上させたか。等々、学生個々が自己のライフプランの形成にかかわって行う報告や発表、レポート・取り組み等を総合的に評価する。							
V. 授業外学修							
前期は、授業前に教科書を自ら読み込み、大学での学び方の理解を深めておくと、講義の受け方等の方法等に役立つ。 レポート等の書き方は、実際にテーマを変えながら書くことで身につけることができる。 後期は、考える力、まとめる力を身につけるために、文献調査や事例研究を事前に行っておくことで、進路実現に必要なスキルが一層高められる。							
VI. 使用教材							
教科書：『大学生 学びのツール 改訂版（新入生ガイドブック）』拓殖大学政経学部編 参考書：各担当教員が適宜指示する。							

科目名	1 年ゼミナール	教員名	各専任教員	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
1 年ゼミナールは、学生生活を有意義・順調に送られるよう配慮と指導に留意しながら、大学での学業に必要な基礎的な知識と技能（履修方法、授業や試験の受け方、レポート作成の個別指導など）やスタディスキル向上を中心に授業が展開される。また、前期はキャリアスキルと連動した指導が行われる。 到達目標は以下のとおりである。 ・学業生活を自己管理することができる。 ・設定された課題について論理的に説明できる。 ・進路目標を立案することができる。 ・グループワークやディスカッションなど、協働的な活動の意義を理解することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑰実施手段 etc							
II. 授業計画〔単位数：4 単位、授業回数：30 回〕							
〔前期〕 ・履修を含めた学業の指導 (教科書第 1 部) ・社説の報告・発表 (教科書第 2 部、第 3 部、第 4 部) ・レポート作成 (教科書第 5 部、第 6 部) 〔後期〕 ・進路指導 (教科書第 7 部) ・後期レポートの取組み 授業の具体的な内容は、各ゼミナールの活動内容、展開に応じて適宜行われる。							
III. 講義の進め方							
各ゼミナール担当教員が指示する教材、資料などを基に各学生の自発的な学修を中心とした方法で進められる。							
IV. 試験と成績評価							
ゼミナール毎に、指定された課題に対するレポート等の成果物、毎時間の取り組みが評価対象となる。 履修科目の選定、学習目標の設定、指定された課題をレポートにまとめる、学修した内容を適切にプレゼンテーション（発表、報告）する、などで評価する。							
V. 授業外学修							
前期は、授業前に教科書を自ら読み込み、大学での学び方の理解を深めておく、講義の受け方等の方法等に役立つ。 レポート等の書き方は、実際にテーマを変えながら書くことで身につけることができる。 後期は、ゼミナール担当教員が指示する課題に積極的に取り組むことで、理解力、表現力が高まる。							
VI. 使用教材							
教科書：『大学生 学びのツール 改訂版（新入生ガイドブック）』拓殖大学政経学部編 参考書：各ゼミナール担当教員が適宜指示する。							

科目名	2 年 ゼ ミ ナ ー ル	教員名	各 専 任 教 員	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年 次	前 ・ 後 期
I. 目的と内容および到達目標 学生が各ゼミナールの基本テーマに基づいた自主的選択により形成され、一人ひとりの学生が相互に啓発されながら、具体的なテーマを1年間かけて調査・研究する取り組みが主な内容となる。 各学生は、ゼミナール担当教員の基本テーマの研究に基づいた指導、学内外の関係先からの助言など受けながら、学生生活の集大成として、自らのテーマに取り組むことになる。12月に開催する「卒業制作発表」で、その成果を学内外に発表するとともに、「卒業論文」という形で結実させる。 到達目標は以下のとおりである。 ・ 自己の研究目的、研究方法、内容等を説明できる。 ・ 自己の研究課題について、十分な根拠に基づいて説明・論述できる。 ・ グループワークやディスカッションなどの協働的活動を遂行することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑰実施手段 etc							
II. 授業計画 [単位数：4単位、授業回数：30回] [前・後期] 特定の課題、内容に制約されずに、授業が展開される。 授業は各ゼミナールの研究テーマ、展開に応じて行われる。 なお、卒業制作発表会は2年ゼミナールに位置づける。							
III. 講義の進め方 各ゼミナール担当教員が提示する、資料・教材、方法を基に進められる。 各学生の自発的な学習を中心とした進め方とする。							
IV. 試験と成績評価 ゼミナール毎に提示された課題レポートの成果物、ゼミナール活動が評価対象の中心であるが、卒業制作発表会への取り組み状況なども評価の対象となる。 卒業制作発表会では、自ら設定した研究課題をに基づいて、調査・研究した内容を適切にプレゼンテーションできたかを評価するが、具体的な配点は各ゼミで説明する。							
V. 授業外学修 ゼミナール担当教員が適時指示する課題やテーマについて、次時までには調査をしておくことで、本時の理解が深まる。 限られた講義の時間内で、調査、研究、発表の準備などは到底できないため、空き時間等を有効につかうこと。 学内施設の利用の規定を守り、他の学生と譲り合いながら使用することで、計画的で効率的な研究の方法を身につけることができる。							
VI. 使用教材 教科書 : 各ゼミナール担当教員が指示する。 参考書 : 各ゼミナール担当教員が適宜指示する。							

科目名	ビジネス実務総論	教員名	米野 祐司 よねの ゆうじ	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標 職場で積極的に働くためには「なぜ働くのか」「組織とは何か」など基本的なことを理解する必要がある。それは、現場で「うまく働く」ことのTPO（Time Place Occasion）に適合した「言動ができること」につながる。 しかし「心構え」だけでは不十分であることから、理論に裏付けられた思考力が必要となる。本科目では、この点を踏まえ講義を行う。 到達目標は以下のとおりである。 ・ビジネス実務に求められる基本的な知識を正しく理解できる。（企業の役割、企業人の素養） ・ビジネスの変化を読む力を考察できる。（課題の発見・解決能力、情報活用能力） ・キャリア形成に必要な力を理解できる。（社会人基礎力、人間力） <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑨イノベーション							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回] [後期] 1. 社会人基礎力 2. ビジネスの概念 3. ビジネスをめぐる基本要件 4. ビジネス環境をとらえる 5. ビジネス実務を学ぶ 6. ビジネス実務をめぐる基本 7. ビジネス活動の基幹機能 8. ビジネス実務の活動をとらえる 9. ビジネス実務の基礎知識 10. ビジネス実務の推進力 11. ビジネス実務の能力開発 12. ビジネス実務のキャリア形成 13. ビジネス実務の基本的技術 14. ビジネス実務の創造 15. ビジネス実務の事例研究							
III. 講義の進め方 出欠確認を兼ねたレジュメを配布する。講義形式を中心とし、必要に応じ映像資料の活用を組み合わせた展開とする。また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。Black board							
IV. 試験と成績評価 成績評価は、小レポート（80%）授業への参加（意欲）状況（20%）により評価する。							
V. 授業外学修 授業の進行に合わせて予習範囲は随時指示します。予習では、授業計画ごとのテーマについて、配布資料、参考文献等を読んで意見をまとめておくこと。復習では、授業内容・配布資料を基に要点を整理し、まとめておくこと。							
VI. 使用教材 教科書：使用しない（適宜プリントを配布） 参考書：適宜紹介する							

科目名	ビジネス実務演習Ⅰ	教員名	工藤 遥 畠田 英夫	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標 社会人として職場に必要な基礎知識・技術の修得を目指す。また、「発信力」、「表現力」を問われる昨今のビジネスで必要なプレゼンテーション能力の向上も、本科目で目指す重要な目的のひとつである。 到達目標は以下のとおりである。 ・職業意識の意義を知り、基礎知識を持っている。 ・人前でのプレゼンテーションができる。 ・基礎的なビジネス常識とビジネスマナーを身につけている。 ・社会人に必要な労働法規や税制の初歩的な知識を身につけている。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑤ジェンダー ⑧成長・雇用 ⑩不平等 ⑫生産・消費							
II. 授業計画 〔単位数：1単位、授業回数：15回〕 〔前期〕 1. キャリアと仕事へのアプローチ 2. 仕事の基本となる8つの意識 3. コミュニケーションとビジネスマンの基本 4. 指示の受け方と報・連・相 5. 話し方と聞き方のポイント 6. 来客対応と訪問の基本マナー 7. 会社関係でのつきあい 8. 仕事への取り組み方 9. ビジネス文書の基本 10. 電話対応 11. 統計・データの読み方とまとめ方 12. 情報収集とメディアの活用 13. 企業を取り巻く環境と経済の基本 14. 産業と経済の基本構造と動向 15. ビジネス用語の基本							
III. 講義の進め方 ビジネスキルを修得するために必要な知識については主に講義形式で行うが、事例研究を中心に学生自身のプレゼンテーションなど主体的な参加が必須となる実践的な演習として行われる。 進路希望別クラス編成を実施するので、各クラス担当教員からの具体的計画の説明に留意すること。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は演習中のプレゼンテーション50%、レポート50%で行う予定である。詳しくは、授業計画の具体的な内容に即して担当者より説明を行う。							
V. 授業外学修 ・企業経営、社会問題、国際関係、政治動向などのニュースを日々チェックし、興味関心のあるものについては、自分の意見や感想などを加えてPCに記録・保存する習慣を身につけること。							
VI. 使用教材 教科書：授業時に指示する。 参考書：『ビジネス能力検定ジョブパス3級公式テキスト』ビジネス能力検定研究会著（日本能率協会マネジメントセンター）							

科目名	ビジネス実務演習Ⅱ	教員名	工藤 遥 畠田 英夫	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標 社会人として職場に必要な基礎知識・技術の修得を確実にすることを目指す。また、「発信力」、「表現力」を問われる昨今のビジネスに必要なプレゼンテーション能力の一層の向上も、本科目で目指す重要な目的のひとつである。 到達目標は以下のとおりである。 ・職業意識の意味を知り、基礎知識を修得している。 ・人前でのプレゼンテーションが効果的にできる。 ・基礎的なビジネス常識とビジネスマナーを活用できる。 ・社会人に必要な労働法規や税制の初歩的な知識を活用できる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑤ジェンダー ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑩不平等							
II. 授業計画〔単位数：1単位、授業回数：15回〕 〔後期〕 1. キャリアと仕事へのアプローチ 2. 会社活動の基本 3. 話し方と聞き方 4. 接客と営業の進め方 5. クレーム対応 6. 会議への出席とプレゼンテーション 7. チームワークと人のネットワーク 8. 情報社会での仕事の進め方 9. 多様なビジネス文書 10. 統計・データ分析 11. 情報収集とメディアの活用 12. 会社数字の読み方 13. ビジネスと法律・税金知識 14. 産業と経済の基礎知識 15. 社会人基礎力とビジネス実務							
III. 講義の進め方 ビジネスキルを修得するために必要な知識については主に講義形式で行うが、事例研究を中心に学生自身のプレゼンテーションなど主体的な参加が必須となる実践的な演習として行われる。 進路希望別クラス編成を実施するので、各クラス担当教員からの具体的計画の説明に留意すること。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は演習中のプレゼンテーション 50%、レポート 50%で行う予定である。詳しくは、授業計画の具体的内容に即して担当者より説明を行う。							
V. 授業外学修 ・各自で決めたテーマに関わるニュースや文献・資料などを収集し、それぞれの要点をまとめることを習慣化すること。							
VI. 使用教材 教科書：授業時に指示する。 参考書：『ビジネス能力検定ジョブパス2級公式テキスト』ビジネス能力検定研究会著（日本能率協会マネジメントセンター）							

科目名	情報技術の基礎Ⅰ	教員名	川眞田 政夫 米野 祐司	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標 本科目では、実習を通じ、基礎的なコンピュータの知識と利用技術を習得する。大学での情報活用能力の教育は、専門教育と教養教育の統合教育として、本質的な学びを目指す学士力の構成要素として機能している。信頼性に基づく情報の「選別・識別」、情報の瓢窃などの「倫理」への配慮、情報の整理・分析法、情報の表現・蓄積・発信に関する「手法・心得」などの能力が不可欠となる。 到達目標は以下のとおりである。 ・数値データを活用し、知りたいことについて分析し、判断することができる。 ・表作成における正確な操作、適切な機能活用の基礎的な技能を習得する。 ＜SDGs（持続可能な開発目標）との関連＞ ④教育 ⑦エネルギー ⑨イノベーション							
II. 授業計画 〔単位数：1単位、授業回数：15回〕 〔前期〕 1. データ分析とその表現、Microsoft Excel の基本操作、表の作成と印刷 2. データの入力と表示形式 3. オートフィル機能の活用、表の作成と印刷 4. Excel 関数の利用①（SUM関数・AVERAGE関数） 5. Excel 関数の利用②（MAX関数・MIN関数） 6. Excel 関数の利用③（IF関数・VLOOKUP関数） 7. グラフの作成と編集①（グラフの要素と編集） 8. グラフの作成と編集②（ドーナツグラフと円グラフ） 9. グラフの作成と編集③（2軸上の棒グラフと折れ線グラフの複合グラフ） 10. データの並べ替えと抽出 11. ピボットテーブルとクロス集計 12. 総合練習問題①（合否判定と成績結果） 13. 総合練習問題②（顧客データ処理） 14. コンピュータサービス技能評価試験 表計算部門3級① 15. コンピュータサービス技能評価試験 表計算部門3級②							
III. 講義の進め方 Microsoft EXCEL の基礎的な知識について実習する。 また、一部の授業を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は、毎日の実習課題提出（100%）により評価する。 提出課題は授業中に指示する。							
V. 授業外学修 教科書に実習手順が記載されているので、授業後に復習しコマンドについて習得すること。							
VI. 使用教材 教科書：『大学生の知の情報スキルーWindows10・Office2016 対応ー』、共立出版 参考書：							

科目名	情報技術の基礎Ⅱ	教員名	川眞田 政夫 米野 祐司	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標 本科目では、実習を通じ、基礎的なコンピュータの知識と利用技術を習得する。大学での情報活用能力の教育は、専門教育と教養教育の統合教育として、本質的な学びを目指す学士力の構成要素として機能している。信頼性に基づく情報の「選別・識別」、情報の瓢窃などの「倫理」への配慮、情報の整理・分析法、情報の表現・蓄積・発信に関する「手法・心得」などの能力が不可欠となる。 到達目標は以下のとおりである。 ・表作成における正確な操作、適切な機能活用の基礎的な技能を習得する。 ・文書作成技術を習得し、卒業論文やレポート作成に活用できるようにする。 ・プレゼンテーションに係る双方向コミュニケーションの基礎的な技能を習得する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑦エネルギー ⑨イノベーション							
II. 授業計画 〔単位数：1 単位、授業回数：15 回〕 〔後期〕 1. Microsoft Word の基本操作 2. 文書作成の基礎①（ページレイアウト設定と段落書式） 3. 文書作成の基礎②（ヘッダーとフッターの利用） 4. 文書作成の基礎③（段組を組む） 5. 文字列の検索／置換・画像や図形の編集 6. 表とグラフの作成と編集 7. レポート・論文を書くときに利用する機能①（スタイルの利用） 8. レポート・論文を書くときに利用する機能②（目次の作成と利用） 9. レポート・論文を書くときに利用する機能③（脚注と図表番号） 10. Microsoft PowerPoint の基本画面 11. スライドデザインとレイアウトの選択・図やサウンド、ビデオの挿入 12. 表とグラフの作成・アニメーション効果と画面切り替え 13. スライドの編集とプレゼンテーションの実行 14. プレゼンテーション資料の作成①（ワードアート機能と表機能の利用） 15. プレゼンテーション資料の作成②（サンプルデータの編集）							
III. 講義の進め方 Microsoft Word・Microsoft PowerPoint の基礎的な知識や技術について実習する。 また、一部の授業を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は、毎日の実習課題提出（100%）により評価する。 提出課題は授業中に指示する。							
V. 授業外学修 教科書に実習手順が記載されているので、授業後に復習しコマンドについて習得すること。							
VI. 使用教材 教科書：『大学生の知の情報スキルーWindows10・Office2016 対応ー』、共立出版							

科目名	経営学総論	教員名	わがつま 我妻 きみひろ 公裕	開講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前期																														
I. 目的と内容および到達目標																																					
ビジネスを学ぶ上で、企業と呼ばれる組織・事業体に関する基礎的知識は不可欠であり、しかも持続的に進化している。これら企業の経営に関する仕組みや戦略などを理論的に学ぶことで、ビジネス社会で活躍する有為な人材としての役割を果たせるよう、課題解決能力の育成を目指す。 マーケティング、組織マネジメントなど、企業経営に必要な知識・技術を含めた、将来必要となるキャリアスキルを身に付ける。政治・経済の情勢とも深く関わることから、今日的な課題からも学ぶこととする。 到達目標は以下のとおりである。 ・株式会社、多様な企業・組織の種類と特徴についての理解。 ・マーケティングやマネジメントについての理解（販売戦略と組織管理）。 ・SDGsへの取り組みの理解（企業の社会的役割）。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ①貧困 ②飢餓 ③保健 ④教育 ⑤ジェンダー ⑥水・衛生 ⑦エネルギー ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑩不平等 ⑪都市 ⑫生産・消費 ⑬気候変動 ⑭海洋資源 ⑮陸上資源 ⑯平和 ⑰実施手段																																					
II. 授業計画 [単位数： 2単位、授業回数：15回]																																					
[後期]																																					
<table><tr><td>1. 経営学の基礎（ドラッカー）</td><td>(教科書第1章)</td></tr><tr><td>2. 組織論（バーナード、マズロー）</td><td>(教科書第2章)</td></tr><tr><td>3. 人的資源管理（メイヨー）</td><td>(教科書第3章)</td></tr><tr><td>4. 経営戦略Ⅰ（チャンドラー、アンゾフ）</td><td>(教科書第4章)</td></tr><tr><td>5. 経営戦略Ⅱ（ポーター）</td><td>(教科書第4章)</td></tr><tr><td>6. 生産管理（テイラー）</td><td>(教科書第5章)</td></tr><tr><td>7. マーケティングⅠ（AMA）</td><td>(教科書第6章)</td></tr><tr><td>8. マーケティングⅡ（コトラー）</td><td>(教科書第6章)</td></tr><tr><td>9. 営業管理・意思決定（サイモン）</td><td>(教科書第7章、第8章)</td></tr><tr><td>10. 会計・財務管理</td><td>(教科書第9章、第10章)</td></tr><tr><td>11. 企業経営のグローバル化（SCM）</td><td>(教科書第11章)</td></tr><tr><td>12. 経営情報管理</td><td>(教科書第12章)</td></tr><tr><td>13. 個人・企業のあり方</td><td>(教科書第13章)</td></tr><tr><td>14. 現代社会の課題（2030年に向けて）</td><td>(教科書第14章)</td></tr><tr><td>15. 現代社会の課題（2050年に向けて）</td><td></td></tr></table>								1. 経営学の基礎（ドラッカー）	(教科書第1章)	2. 組織論（バーナード、マズロー）	(教科書第2章)	3. 人的資源管理（メイヨー）	(教科書第3章)	4. 経営戦略Ⅰ（チャンドラー、アンゾフ）	(教科書第4章)	5. 経営戦略Ⅱ（ポーター）	(教科書第4章)	6. 生産管理（テイラー）	(教科書第5章)	7. マーケティングⅠ（AMA）	(教科書第6章)	8. マーケティングⅡ（コトラー）	(教科書第6章)	9. 営業管理・意思決定（サイモン）	(教科書第7章、第8章)	10. 会計・財務管理	(教科書第9章、第10章)	11. 企業経営のグローバル化（SCM）	(教科書第11章)	12. 経営情報管理	(教科書第12章)	13. 個人・企業のあり方	(教科書第13章)	14. 現代社会の課題（2030年に向けて）	(教科書第14章)	15. 現代社会の課題（2050年に向けて）	
1. 経営学の基礎（ドラッカー）	(教科書第1章)																																				
2. 組織論（バーナード、マズロー）	(教科書第2章)																																				
3. 人的資源管理（メイヨー）	(教科書第3章)																																				
4. 経営戦略Ⅰ（チャンドラー、アンゾフ）	(教科書第4章)																																				
5. 経営戦略Ⅱ（ポーター）	(教科書第4章)																																				
6. 生産管理（テイラー）	(教科書第5章)																																				
7. マーケティングⅠ（AMA）	(教科書第6章)																																				
8. マーケティングⅡ（コトラー）	(教科書第6章)																																				
9. 営業管理・意思決定（サイモン）	(教科書第7章、第8章)																																				
10. 会計・財務管理	(教科書第9章、第10章)																																				
11. 企業経営のグローバル化（SCM）	(教科書第11章)																																				
12. 経営情報管理	(教科書第12章)																																				
13. 個人・企業のあり方	(教科書第13章)																																				
14. 現代社会の課題（2030年に向けて）	(教科書第14章)																																				
15. 現代社会の課題（2050年に向けて）																																					
III. 講義の進め方																																					
基本は講義形式とするが、専門的な用語が多出するため、ケーススタディ（事例や新聞記事等）を活用した対話的学びによって理解を深める。そのため、ビジネス活動に関するトピックに注視しておくことよい。 毎時の終了時（理解度の確認）に小テストを実施する。																																					
IV. 試験と成績評価																																					
授業プリント（40%）、小テスト（20%）、課題レポートの内容・完成度（40%）を基本とする。 講義テーマの理解につながる積極的な発問、回答の内容も評価に加算する。																																					
V. 授業外学修																																					
教科書に事前に目を通し、新出用語（専門用語）を抜き出すなどして理解を深めておくこと。 毎時間に使用するプリントは本時終了後に回収、次時の始めに採点後に返却するので、教科書へ書き込みながら不明な点を解消しておくこと。 次時の取り組む課題について、本時の終わりに指示する。																																					
VI. 使用教材																																					
教科書：プレステップ経営学<第2版>北中英明著（拓殖大学商学部教授） 弘文堂 参考書：適宜紹介する。																																					

科目名	現 代 企 業 論	教員名	村 上 良 一 むらかみ りょういち	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
本講義の前半では、日本経済の変遷と現状も交えながら企業の構造的特徴や企業統治、社会的責任といった今日的課題について、後半では主としてグローバル化の下で国内外の企業が行動する際の特徴や課題について講義を行う。上記項目についてできるだけ事例紹介を交えた講義を行う。 到達目標は以下のとおりである。 ・現代企業の特徴と課題について基本的な理解ができるようになる。 ・日本企業の海外展開の歴史と現状について基本的な理解ができるようになる。 ・グローバル化の下での多国籍企業の新しい行動について基本的な理解ができるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑩不平等 ⑫生産・消費							
II. 授業計画〔単位数：2単位、授業回数：15回〕							
〔前期〕 1. 会社と企業 2. 企業とは何か——各視点による区分とそれぞれの諸特徴 3. 株式会社の特徴と仕組み(1)株式とは何か——株式会社の原理 4. 株式会社の特徴と仕組み(2)株式の役割の変化 5. 企業集団と系列(1)——トヨタシステムの事例紹介を中心に 6. 企業集団と系列(2)企業集団と系列の理論 7. 日本企業の特徴とその変容 8. コーポレートガバナンスと「株主主権」論がもたらす意味 9. グローバル経済の現段階と企業 10. 多国籍企業の定義と成長理論 11. ビッグ・テック成長をもたらしたもの(1)技術開発と企業戦略の発展 12. ビッグ・テック成長をもたらしたもの(2)古くて新しい利得手段タックスヘイブンの活用など 13. 多国籍企業の新戦略の実態——アジアを中心に 14. 日本企業のグローバル化対応への課題 15. 企業の社会的責任とSDGs							
III. 講義の進め方							
配布プリントを中心にスライド、板書等を利用して講義形式で行う。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は小レポート（30％）期末レポート試験(70％)の合計で評価する。							
V. 授業外学修							
自分の関心のある分野で事業展開している企業のニュースを集め、コメントをつけて記録し保存しておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書：使用しない 参考書：三戸浩他『企業論(第4版)』（有斐閣）、夏目啓二『21世紀ICT企業の経営戦略』文眞堂、橋本寿朗 他『現代日本経済(第4版)』（有斐閣）、丸山恵也編著『現代日本の多国籍企業』新日本出版社							

科目名	マ ク ロ 経 済 学	教員名	はただ ひでお 畠田 英夫	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
標準的な経済理論にはミクロ経済学とマクロ経済学という二つのアプローチがある。本講義では、国民所得・投資・消費・失業率などの巨視的な集計概念を用いて、システム全体としての経済の運行法則を分析するマクロ経済学の基本的な考え方を学ぶ。多くの経済時事の話題はマクロ経済学の考え方をを用いて読み解くことができる。現在の日本経済が抱える課題と見通しなど、実際の経済問題を取り上げながら基本理論を応用して理解する。 マクロ経済学の基礎的な考え方が現実の経済分析にどれほど有効であることを示しつつ、マクロ経済学の基本的な考え方を学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・ニュースや新聞の経済記事に出てくる、主要な経済指標間の相関関係を理解し説明できる。 ・主要な経済指標の変化が経済全体にどのような変化を引き起こすかを説明することができる。 ・財政政策・金融政策の基本的な手法とその効果を説明することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑫生産・消費 ①貧困 ⑧成長・雇用 ⑩不平等 ⑪実施手段							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業週数：15回]							
[後期] 1. 経済学とはどのような学問か 2. マクロ経済学の基礎概念 3. マクロ経済学における需要と供給 4. 有効需要の原理と国民所得の決定 5. 貨幣の機能と貨幣市場 6. マクロ経済政策 7. IS-LM 分析 I：IS-LM 分析とはなにか 8. IS-LM 分析 II：IS-LM 曲線の導出 9. マクロ経済政策の効果分析 I：財政政策の効果 10. マクロ経済政策の効果分析 II：金融政策の効果 11. 総需要と総供給 I：総需要曲線と総供給曲線 12. 総需要と総供給 II：物価水準の決定と2つの市場観 13. インフレーションと失業 14. 経済成長と経済発展 15. マクロ経済学の全体像と近年の動向							
III. 講義の進め方							
随時課題を解いてもらいながら講義を進行する。各種試験対策に向けて基本的な計算問題も取り扱う。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
授業時に随時行う課題・平常点(80%)・小テスト(20%)により、成績評価をおこなう。							
V. 授業外学修							
毎回の授業時に指示する予復習の学修課題に必ず取り組むこと。マクロ経済理論の理解には一つ一つの積み重ねが非常に重要である。 授業外学修や講義内容その他の質問を歓迎する。							
VI. 使用教材							
教科書：指定しない(適宜資料を指示する)。 参考書：『経済学講義』飯田泰之(筑摩書房) 『入門 経済学 第4版』伊藤元重(日本評論) 『マクロ経済学』アセモグル・レイブソン・リスト(東洋経済新報社)							

1 科目名	ミ ク ロ 経 済 学	教員名	はただ ひでお 畠田 英夫	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
標準的な経済理論にはミクロ経済学とマクロ経済学という二つのアプローチがある。本講義では、家計行動と企業行動の理論から導き出される需要供給分析の基礎的な内容を学ぶ。具体的には、完全競争における部分均衡分析と余剰分析、一般均衡分析とパレート最適、不完全競争市場、市場の失敗など、主要なトピックを取りあげる。機会費用・サンクコスト・不完全競争市場の知識は現実の企業行動を理解するのに役立つほか、余剰分析や市場の失敗の議論を通じて政府の経済的な役割とその政策を評価するための基本的な見方を学ぶことができる。 到達目標は以下のとおりである。 ・完全競争における部分均衡と余剰の分析の基礎を理解している。 ・不完全競争市場について理解している。 ・一般均衡の妥当性と市場の失敗の存在を理解している。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑫生産・消費 ⑨イノベーション ⑧成長・雇用 ⑩実施手段							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[前期] 1. ミクロ経済学とはなにか 2. 家計の行動 I: 無差別曲線と予算制約線 3. 家計の行動 II: 所得効果と代替効果 4. 家計の行動 III: 需要曲線とその性質 5. 企業の行動 I: 費用関数 6. 企業の行動 II: 最適行動と供給曲線 7. 企業の行動 III: 供給曲線の性質 8. 完全競争市場における均衡 9. 不完全競争市場 I: 独占企業の最適行動 10. 不完全競争市場 II: 独占的競争の均衡 11. 効率と公平 I: 経済学における望ましさ 12. 効率と公平 II: 競争均衡の効率性 13. 一般均衡とパレート最適 14. 市場の失敗 15. 伝統的なミクロ経済学の全体像と近年の動向							
III. 講義の進め方							
随時課題を解いてもらいながら講義を進行する。各種試験対策に向けて基本的な計算問題も取り扱う。また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
授業時に随時行う課題・平常点(80%)・小テスト(20%)により、成績評価をおこなう。							
V. 授業外学修							
毎回の授業時に指示する予復習の学修課題に必ず取り組むこと。ミクロ経済理論の理解には一つ一つの積み重ねが非常に重要である。 授業外学修や講義内容その他の質問を歓迎する。							
VI. 使用教材							
教科書 : 指定しない(適宜資料を指示する)。 参考書 : 『経済学講義』飯田泰之(筑摩書房) 『入門 経済学 第4版』伊藤元重(日本評論) 『ミクロ経済学』アセモグル・レイブソン・リスト(東洋経済新報社)							

科目名	地域プロジェクト	教員名	各専任教員	開講 コース	地域振興 ビジネス	1年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
この授業では、地域・企業活動における有識者から、地域振興や地域活動の在り方を学ぶとともに、理解を深める。地域活動に対して興味・関心を高め、スタッフの一人として参加し、実践的・体験的な調査・研究を行える人材の育成をめざす。また、2年次におけるゼミナール活動への理解とともに、様々な課題に対する調査・研究の在り方を理解し、地域における自己の役割、地域振興・地域をデザインすることができる人材の養成を目指す。 到達目標は以下のとおりである。 ・地域社会の課題を理解し、解決に向けた地域協働・活性化活動に参加、遂行することができる。 ・地域社会の実態に即した地域活性化計画の立案・実施することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑰実施手段 etc							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業週数：15回]							
[前期]				[後期]			
1. ガイダンス①				8. 講演「地域と産業」⑥			
2. ガイダンス②				9. 講演「地域と産業」⑦			
3. 講演「地域と産業」①				10. 講演「地域と産業」⑧			
4. 講演「地域と産業」②				11. 卒業制作発表会①			
5. 講演「地域と産業」③				12. 卒業制作発表会②			
6. 講演「地域と産業」④				13. 卒業制作発表会③			
7. 講演「地域と産業」⑤				14. 卒業制作発表会④			
				15. 卒業制作発表会⑤			
III. 講義の進め方							
1年ゼミ単位で授業を実施する。実施は不定期なので、掲示板を注視すること。 講演「地域と産業」は、講演毎に視聴レポートを作成・提出を課す。講演者への質問ができると良い。 講演「地域と産業」は、8回を予定しているが、加減することがある。 「卒業制作発表会」は、2年生が12月に行う「卒業論文」に関わる研究発表会を視聴する。質問や意見・感想、視聴レポートの作成・提出を課す。							
IV. 試験と成績評価							
講演「地域と産業」の視聴レポート。 「卒業制作発表会」の質問・意見、視聴レポート。 成績評価は、講演「地域と産業」レポート（60%）、卒業制作発表会レポート（40%）。							
V. 授業外学修							
事前の示されるテーマや講演題、講師について調べておくことで、講話の内容の理解が深まる。 自己の行動や考え方などを、見直すきっかけとして活用し、以後の学生生活に役立てる。 地域特別演習、地域活動等に積極的に取り組むことで、進路に必要なキャリアやスキルの向上につながる。							
VI. 使用教材							
教科書：使用しない。 参考書：各担当教員が適宜指示する。							

科目名	日 本 酒 学	教員名	専任教員 非常勤講師	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
日本酒学をととして、日本酒の歴史・文化・分類・楽しみ方・風土など日本酒を育む背景を理解するとともに、酒米生産、醸造技術など日本酒ができるまでの過程を学習する。また、アルコール飲料にかかる法規制、アルコールと健康、販売戦略、日本酒による地域振興など、日本酒を題材にして幅広い内容を分野横断的に学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・日本酒醸造は我が国が誇るべき食品加工技術及び文化であることを理解する。 ・地域で生産された米を活用した日本酒造りの基礎的な知識と技術を理解する。 ・日本酒検定 3 級取得レベルの知識を得る。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑫持続可能な生産と消費 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. 概説（清酒の歴史と文化、なぜ日本酒学を学ぶか） 2. 酒類総説（製造法・糖化、発酵、酒税法による分類） 3. 酒を科学し造り手を支える国税局鑑定官室の取り組み 4. 北海道における酒造好適米の生産と販売 5. 北海道における酒造好適米の品種改良と今後の課題 6. 北海道における酒造好適米の栽培技術 7. 発酵とは ～ 酵母と麹・微生物の世界 8. 日本酒の製造工程 9. 私の目指す酒造り 10. 酒蔵の経営とマーケティング戦略 11. 食彩豊かな日本の食卓 ～ 料理と酒のハーモニー 12. アルコール飲料にかかる法規制 13. アルコールと健康 ～ 酒は百薬の長・百悪の長 14. 日本酒と地域振興 15. 総括 ～ 日本酒検定 3 級に向けて							
III. 講義の進め方							
授業は、本学専任教員が専門分野に係る講義を行うほか、各界の専門家を非常勤講師に招いて、オムニバス形式で実施する。主に対面の講義形式で実施するが、場合によって Zoom 等を用いたオンライン授業を行う。講師の都合などで、授業計画に変更があることに留意する。							
IV. 試験と成績評価							
各授業における小テスト（100%）により評価する。							
V. 授業外学修							
オムニバス形式のため、事前にプリントを配布することは難しいので、授業外学習は復習中心となる。予習については、参考書等により関連する内容を予習し、疑問点を整理したうえで授業に臨むこと。日本酒検定 3 級取得をぜひ目指してほしい。							
VI. 使用教材							
毎回プリントを配布する。 参考書として、「新訂 日本酒の基 唎酒師必携」NPO 法人 FBO（料飲専門家団体連合会）を推薦する。							

科目名	農 産 物 利 用 学	教員名	はたけやま 島山 佳幸	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
人間は古くから様々な農産物を原料として各種加工食品を作り出してきた。本講義では、農産物等に含まれる成分の科学的な性質や各種加工食品の製造方法及び製造工程上における食品成分の変化を学び、農産物利用食品の問題点や特に穀類（小麦）の基礎的な加工方法と発酵食品について学ぶ。 農産物を利用し加工することというのは付加価値をつけるだけではなく、農産物の価値を下げないという利点もあることから 6 次産業化の大きな柱になり得る事を学ぶ。 到達目標は以下のとおりである。 ・農産物、農産食品を構成している主成分の種類、性質の基礎的な知識を理解する。 ・農産物を利用した加工食品の特徴を理解し、加工技術と利用方法の基礎について理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑥水・衛生							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. (水分) 食品中の水の状態と働き（結合水・準結合水・自由水） 2. 小麦粉とは（小麦の構造・形状と種類・製造工程） 3. 小麦粉の成分（ビタミン・ミネラル・アミノ酸・澱粉） 4. 小麦粉の製粉工程と小麦フスマの利用と成分 5. 麦の違いと特徴・日本の小麦と世界の小麦 6. 強力粉と薄力粉の違い・小麦に含まれるタンパク質の違いと使い分け 7. 硬質小麦と軟質小麦の違い・小麦粉のブレンド・賞味期限 8. 小麦の澱粉（老化・パンの硬さ）アミロースとアミロペクチン・グルテン形成 9. 小麦から作られる加工食品（うどん・パン・パスタ等） 10. グルテンとアレルギー（アレルギー反応と小麦） 11. 発酵とは（微生物の働き・発酵食品をつくる微生物）発酵のしくみと化学反応 12. 腐敗・食中毒と微生物 13. 発酵食品の種類と製造法（味噌・醤油・ワイン・日本酒・チーズ・ヨーグルト等） 14. 豚肉の加工食品と種類 15. 発酵・熟成で造られる肉製品（生ハム・ドライ・セミドライソーセージ）							
III. 講義の進め方							
授業計画に沿ってプリント(参考資料)を中心に講義する。							
IV. 試験と成績評価							
農産物を構成している化学物質、農産物を利用した食品製造の特徴及び食品を構成している物質の特性について説明できることを到達目標とし、成績評価は、3～4 回の小テスト(33%×3・25%×4)で行う。							
V. 授業外学修							
授業の進行状況に合わせて次回の授業内容を説明するので興味、関心のある部分、疑問に思う部分についてノートにまとめておくことで授業の理解度が高まります。							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない 参考書 : 適宜プリントを配布							

科目名	食 農 社 会 論	教員名	むらかみ 村上 良一	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
飢餓と飽食の併存、食の安全と安心が関心事となつて久しいが、問題解決ははるかに遠いようにみえるなかで、国連でも確認されている「食料主権」という考え方が注目を集めている。講義ではこの考えを意識しながら、主として現代日本を対象に「食と農」に関する現状と課題解決にむけた取り組みや条件などについて採りあげる。 到達目標は以下のとおりである。 ・ 飢餓と飽食が生み出される社会的要因・構造について基本的な理解ができる。 ・ 現代日本の食生活と農業の特徴についての基礎知識を持っている。 ・ 現代の食生活改善の取り組みについて理解できるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ①貧困 ②飢餓 ③保健 ⑩不平等 ⑫生産・消費 ⑮陸上資源							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. 「飢餓」「飽食」「安全」「楽しみ」——食に関するキーワードから 2. 現代日本の食生活は「豊か」か？——進行する「食の貧困」（教科書 1 章） 3. 「豊かな食」を作る人の「貧困」（教科書 2 章） 4. 現代日本の食生活——作られたのか？欲したのか？——「学校給食」を手がかりに（教科書 1 章） 5. 世界と日本の飢餓と貧困の実情紹介 6. 食品ロスの現状とそれが生まれる背景 7. SDGs からみた食と農——フードマイレージ、バーチャルウォーターなどを事例に 8. 食とコミュニティ——フードデザート問題を中心に 9. 産消提携、CSA(教科書 5 章) 10. 地域における食の問題解決の新しい取り組み事例紹介 11. 地産地消と北海道における地域経済循環（教科書 7 章） 12. スローフードと食育 13. フェアトレード、フードバンク、子ども食堂(教科書 1 章) 14. 「食料主権」とは？——その形成過程と食農問題解決における有効性(教科書 12 章) 15. 貧困、不平等、飢餓、健康格差、地球環境破壊、の解決をめざす食のあり方とは？							
III. 講義の進め方							
講義形式で教科書、スライドを中心に用い、プリント配布、動画視聴などを適宜行う。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は小レポート(30%)と期末のレポート試験(70%)で評価することを予定している。							
V. 授業外学修							
・ 教科書の章が明記されている授業回では事前に該当する章を読んで授業に臨むこと。 ・ 食料・農業に関するニュースについて意識的にチェックしておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書 : 冬木勝仁・岩佐和幸・関根佳恵編『アグリビジネスと現代社会』（筑波書房）。 参考書 : 大塚茂他『現代の食とアグリビジネス』（有斐閣）、藤原辰史『給食の歴史』（岩波書店）、藤原辰史『縁食論』（ミシマ社）、池上甲一他『食と農のいま』（ナカニシヤ出版）、池上甲一他『食の共同体』（ナカニシヤ出版）							

科目名	グリーン・ツーリズム論	教員名	村上 良一 むらかみ りょういち	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
グリーン・ツーリズムは日本では農村振興策の一つとして 20 世紀末の 1990 年代以降注目されるようになってきた。本講義では、グリーン・ツーリズムの概要と海外の事例、北海道内外の事例そしてやはり新しく生まれてきた地域資源を再発見する他のツーリズムについても紹介していく。そしてグリーン・ツーリズムを契機に生活全般を見直し環境と調和する持続可能な生活様式についても考えてゆくことを目標とする。 到達目標は以下のとおりである。 ・グリーン・ツーリズムに関する基本的な知識を持っている。 ・日本と北海道のグリーン・ツーリズムの取組みの基礎的な知識を持っている。 ・都市農村交流の意義が理解できるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ④教育 ⑫生産・消費 ⑬気候変動 ⑮陸上資源							
II. 授業計画〔単位数：2 単位、授業回数：15 回〕							
〔後期〕 1. 現代日本社会が抱える諸問題解決の糸口としてのグリーン・ツーリズム 2. 日本のグリーン・ツーリズムの普及過程 3. グリーン・ツーリズムへの多様なアプローチ 4. 農業の構造変化によるグリーン・ツーリズム創出の必要性 5. 日本のグリーン・ツーリズムの事例紹介 6. 西欧のグリーン・ツーリズム 7. 韓国のグリーン・ツーリズム 8. 台湾のグリーン・ツーリズム 9. 中国のグリーン・ツーリズム 10. 海外のグリーン・ツーリズムの事例紹介 11. 北海道のグリーン・ツーリズム（畑作地域） 12. 北海道のグリーン・ツーリズム（稲作地域 草地酪農地域） 13. 体験教育とグリーン・ツーリズム 14. 農家民泊とグリーン・ツーリズム 15. 日本社会とグリーン・ツーリズム——持続可能な生活様式を目指して							
III. 講義の進め方							
・スライド、プリント、板書を適宜使用して進める。 ・また、一部の授業回を遠隔授業方式で行うこともある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は小レポート(30%)と期末のレポート試験(70%)とで評価することを予定している。							
V. 授業外学修							
・グリーン・ツーリズムや都市農村交流に関わるニュースを意識的にチェックしておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない 参考書 : 山崎光博『グリーン・ツーリズムの現状と課題』(筑波書房)、井上和衛『グリーン・ツーリズム—軌跡と課題』(筑波書房)、長尾正克編著『グリーン・ツーリズム 北海道からの発信』(筑波書房)、佐藤真弓『都市農村交流と学校教育』(農林統計出版)、宮田静一『農泊のススメ』(弦書房)。							

科目名	食品・農産物流通論	教員名	村上 良一 むらかみ りょういち	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
本講義は、規制緩和が進行する現下の農産物流通の特徴や課題について明らかにすることを目的とする。そのために最初に流通論の基本的な講義を数回程度行い流通に関するイメージを与える。続いて、食品・農産物流通に関する講義を行う。 到達目標は以下のとおりである。 ・流通一般の意義や基本的な仕組みについて理解し、説明できるようになる。 ・農産物流通について基本的な理解ができ、説明できるようになる。 ・主要な農産物の流通の具体的な仕組みについて基本的な理解ができ説明できるようになる。 ・農産物地域ブランド戦略など農産物販売戦略に役立てられるような基礎的知識が身につけられるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑧成長・雇用 ⑫生産・消費 ⑮陸上資源							
II. 授業計画〔単位数：2単位、授業回数：15回〕							
〔後期〕 1. 講義の進め方や関連学問分野の紹介、流通論の基本について 2. 小売業・卸売業といった流通に関わる基本的概念や社会的意義などについて 3. 物流等流通に関する事例紹介と解説 4. 日本の商業・流通の発展史の概説 5. スーパーマーケット、コンビニ、ネット通販等流通の現在について 6. 農産物流通の独自性について特に農協共販の意義とその課題について 7. 卸売市場の発展過程と意義について 8. 流通再編下、改めて確認されるべき卸売市場の意義とその課題について 9. 食品流通の現状が及ぼす地球環境への影響についての事例紹介 10. 農産物地域ブランド戦略と事例紹介 11. 食管制度廃止以降“一般商品化”が進行する米の流通について 12. 消費上限なき農産物ともいわれる花卉の流通の現状と課題について 13. 畜産物輸入激増へと変貌したもとの畜産物の流通について(食肉) 14. 需給調整が著しく困難でありながら苦境にあえいでいる畜産物の流通について(牛乳・乳製品) 15. 今後の食品・農産物流通の課題と展望について							
III. 講義の進め方							
講義スライドを映写しながら、講義を行うことを基本とする。また、講義の内容理解を深めるため、数回程度、参考資料として解説を加えながらDVD視聴を行うことを予定している。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、小レポート(30%)期末のレポート試験(70%)で行う。							
V. 授業外学修							
・食料品購入時において、価格変動や品ぞろえ、陳列方法の特徴などについて注意深く観察することを心掛けること。 ・食料品のならず、流通一般に関するニュースを日々チェックしておくこと。							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない 参考書 : 日本農業市場学会編『農産物・食品の市場と流通』(筑波書房)、藤島廣二他『フード・マーケティング論』(筑波書房)、桂 暎一編著『青果物のマーケティング』(昭和堂)。							

科目名	社 会 統 計 学	教員名	こばやし ひでたか 小林 秀高	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
社会統計学では、アンケート調査や量的なデータを分析するための手法を学ぶ。統計学は、政府や企業の意思決定や、マーケティング、世論調査のツールとして活用されている。本講義では新聞やニュースに登場する統計を読めるようになることを主な目的とする。授業は Excel を使用する演習と統計学に関する講義の二部からなる。受講時点では Excel の技術や数学的な素養は必要としないが、PC の操作を苦にしないことは必要である。 到達目標は以下のとおりである。 ・基礎的な統計数値や世論調査の意味が分かる ・Excel を使用して 2 変数間の関係を分析できる ・回帰分析および重回帰分析の基礎を理解できる <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. ガイダンス／なぜ分析をするのか 2. データの種類と特徴 3. データの入手とインターネット・アーカイブの使い方 4. 多様な分析の手法：統計分析によって何が分かるのか 5. 記述統計によるデータの把握 6. 記述統計とグラフの作成 7. 回帰分析 1：回帰分析で何が分かるか 8. 回帰分析 2：単回帰分析 9. 回帰分析 3：重回帰分析 10. 2 変数間のクロス集計表 1：クロス表から何が分かるか 11. 2 変数間のクロス集計表 2：クロス表による分析 12. 2 変数間のクロス集計表 3：2 つのデータの間に関係はあるのか？ 13. 統計解析を利用したレポートの作成 1：問いと仮説の設定 14. 統計解析を利用したレポートの作成 2：仮説の分析と検証 15. 統計解析を利用したレポートの作成 3：レポート発表							
III. 講義の進め方							
本講義は講義と演習からなる。講義では統計学の知識や統計を活用した事例を紹介する。演習では既存のデータを使用し、実際に分析を通じて統計の読み方や手法に慣れることを目的とする。演習が含まれるため、遅刻や欠席が多い場合は授業内容についていくことは難しい。PC の操作をともなう演習のため、受講者の人数は環境農学コースと合計で 25-30 名に程度に制限する。選考については初回授業で説明する。 講義の一部は遠隔で実施する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
試験は行わない。毎回の演習内容と期末に作成するレポートで評価する。レポートの作成の基礎的方法は授業内で解説をする。評価は毎回の演習を 60%、レポートを 40%とする。							
V. 授業外学修							
毎回、講義内容に関連する課題を課す。その実施が復習となるため、定められた期日までに必ず取り組むこと。欠席した場合は Blackboard を確認して課題内容を確認すること。							
VI. 使用教材							
教科書：講義時に指示をする 参考書：伊藤 公一朗『データ分析の力—因果関係に迫る思考法』光文社新書 中室牧子、津川友介『「原因と結果」の経済学』ダイヤモンド社							

科目名	N P O 論	教員名	工藤 遥 くどう はるか	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
NPO (Non-Profit Organization) は非営利組織と訳される。近年は日本でも大規模自然災害時の復興支援活動や福祉・教育分野など、非営利組織の活動が目ざましい。 本講義では、広義の非営利組織について概説した後に、その構成部分である NPO の組織、活動、運営、法・制度、行政・企業との関係、課題などについて紹介・解説することを目的・内容とする。 到達目標は以下のとおりである。 ・非営利組織の存在意義について理解できるようになる。 ・非営利組織の活動・運営・法制度の基本について理解できるようになる。 ・非営利組織と政府・営利企業との関係性について理解できるようになる。 <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ⑭実施手段 ⑩不平等 ①貧困 ③保健 ⑫生産・消費 他							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. 授業ガイダンス、現代社会と NPO 2. NPO の定義、存在理由 3. NPO の歴史 4. NPO の活動事例 5. NPO の現状 6. NPO と法・制度①：NPO 法 7. NPO と法・制度②：公益法人制度など 8. NPO と行政の関係 9. 中間まとめ、小テスト 10. NPO と福祉 11. NPO と企業の関係 12. 社会起業家と社会的企業①：特徴、背景 13. 社会起業家と社会的企業②：事例、課題 14. NPO の運営 15. NPO の資金調達と評価							
III. 講義の進め方							
スライドを使って講義をする。教科書は使用せず、適宜プリントを配布する。統計データや新聞記事、映像資料等も教材として使用する。授業の最後に出欠確認も兼ねたリアクションペーパーの提出を求める。授業内で講義内容の理解・確認のための小テストを実施する。なお、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
リアクションペーパー (50%)、小テスト (20%)、期末試験 (30%) を総合的に評価する。							
V. 授業外学修							
講義内容を現実社会の事象と関連付けて理解し、リアクションペーパー課題で具体的かつ深い洞察に基づく考察を書けるようになるためには、非営利組織の活動や社会問題、講義内容に関連するニュースや記事、文献・資料、統計データなどを実際に自分で調べるなどして普段から情報収集を行い、考えや感想などを記録しておくことが肝要である。							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない (適宜プリントを配布)。 参考書 : 澤村明 他『はじめての NPO 論 (第2版)』(有斐閣)、川口清史 他編『よくわかる NPO・ボランティア』(ミネルヴァ書房)、雨森孝悦『テキストブック NPO』(東洋経済新報社)、日本 NPO センター『知っておきたい NPO のこと 1【基本編】・2【資金編】』							

科目名	観 光 産 業	教員名	永山 茂 山崎 紀史	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
この授業の目的は、観光産業の歴史やその成り立ち、現代社会の中でどのような役割をもっているかの基礎知識を習得する事である。 前半の講義では、観光産業の基礎として発展の歴史や、旅行産業を中心とした社会的位置づけを学ぶ。また後半の講義では、北海道の基幹産業としての観光を観光産業論の観点から考察し、旅行産業、宿泊産業、運輸産業およびテーマパークや文化施設について学ぶ。最後に観光産業のホスピタリティの事例などを紹介しながら学んで行く。レポート指導を実施し、指定されたテーマ分量の提出を求め学力を評価する。 到達目標は以下のとおりである。 ・観光産業全般に関する基礎知識を習得し、その業界構造を理解し社会的位置づけを学ぶこと。 ・地元北海道における観光産業の実態やその抱える課題を学び、新たな観光プランを創出できる基礎知識を得ること。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑩不平等 ⑪都市 ⑫生産・消費 ⑬平和							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. 観光学を学ぶために・・・「観光とは何か」（ガイダンス・教科書序章） 2. 観光学の基礎：観光の歴史 ①世界の観光史 （教科書第1章の1） 3. 観光学の基礎：観光の歴史 ②日本における観光前史 （教科書第1章の2） 4. 観光学の基礎：観光の歴史 ③日本の観光時代―観光の国際化と大衆化 （教科書第1章の3） 5. 観光サービスと観光行動および対象の分類 （教科書第2章の1・2） 6. 消費者行動論と観光行動 （教科書第2章の3） 7. 観光と産業・経済 ①訪日観光の現状 （教科書第3章の1） 8. 観光と産業・経済 ②観光産業の定義 （教科書第3章の2） 9. 観光と産業・経済 ③観光統計 （教科書第3章の3） 10. 観光産業論 ①旅行産業の特質と展望 （教科書第4章） 11. 観光産業論 ②宿泊産業の現状と新しい展開 （教科書第5章） 12. 観光産業論 ③運輸産業の特質と航空産業の発展 （教科書第6章） 13. 観光産業論 ④文化施設観光およびテーマパーク産業の展望（レポート指導・教科書第7・8章） 14. 特別講義 「旅行産業の最前線リポート」（山崎講師） 15. まとめ 観光産業とホスピタリティ（レポート提出・教科書第9章） （*講義順は進捗により変更する場合がある）							
III. 講義の進め方							
各回講義要綱・教科書の章立てに添った講義を行う。また必要に応じてパワーポイントや動画も活用する。また講義内容は可能な限り1講義完結型で行ない、分かりやすく講義を進めて行く。							
IV. 試験と成績評価							
授業への参加度（50%）とレポート提出（50%）で評価する。 全授業数の3分の1を欠席した場合は、単位取得の資格がなくなるため「F評価」となる。 なお授業開始20分以内に入室した場合のみ「遅刻」とする。							
V. 授業外学修							
「授業計画」にある教科書の指定された範囲を予め読んでから授業に参加すること。 授業の進行に合わせて予習範囲は適時指示します。 予習で生じた疑問などは事前にノートに書き出して出席すると理解が深まります。							
VI. 使用教材							
教科書：「入門 観光学」竹内正人/竹内利江/山田浩之（編著）ミネルヴァ書房刊 参考書：授業の中で必要に応じて紹介する。							
*実務経験のある教員による授業科目 [実務経験と授業との関係] 担当教員は、旅行業での実務経験を有し、当該科目における観光産業が社会に認知されて行く過程や、旅行業を中心とした産業としての社会的位置づけについて教授します。							

科目名	北 海 道 学	教員名	さかもと 坂本 明	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
この科目の目的は、北海道の自然・地理・歴史・文化を正しく理解することであり、北海道の置かれている現状を分析し、課題を解決するための方法を模索し、将来に役立てることである。 第1回は授業のガイダンス、第2回は自然環境、第3回は経済活動の具体的な統計数字を基に、北海道の理解を深める。第4回から第7回は北海道各地の地誌を学び、そこで暮らす人々の生活を知る。第9回から第11回は北海道の史実を時代ごとに確認する。第12回から第15回は北海道の現状を理解し、北海道だけに焦点を当てるのではなく、他地域との連携も含め、各人が将来像を描く能力を身につけることである。 到達目標は以下のとおりである。 ・授業で学んだ北海道の自然・歴史・文化を正しく認識し、郷土愛を育んでいる自分を自覚できる。 ・積極的に北海道の良さを発信できる人間となるための基礎を備えている。 ・各人が帰属する社会への貢献策の方向性を見いだす能力を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ②飢餓 ⑦エネルギー ⑫生産・消費 ⑯平和							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. はじめに（講義内容の説明） 2. 自然環境(地形・気候・生態系) 3. 経済活動(北海道の数字) 4. 地誌(道東：釧路・帯広・ユネスコ世界自然遺産知床) 5. 地誌(道央：札幌・小樽) 6. 地誌(道北：旭川・名寄) 7. 地誌(道南：函館・松前) 8. 中間まとめ 9. 先住民の文化・風習と現代北海道の生活様式(地名・方言・儀式) 10. 北海道の歴史(開拓使・屯田兵制度) 11. 北海道の歴史(第二次世界大戦と高度経済成長) 12. 北海道の可能性(基幹産業の変遷・国のエネルギー政策) 13. 北海道の可能性(観光分野と第一次産業) 14. 北海道の可能性(他地域との関係) 15. 北海道の可能性(行政の役割)							
III. 講義の進め方							
特にテキストはありませんが、毎回、プリントを用意し、それに則して講義を行う。画像・数字(グラフ、表)はP P 等で提示し解説する。							
IV. 試験と成績評価							
受講状況（10%）、レポート（30%）及び定期試験（60%）で評価する。全授業回数の3分の1を欠席した者は、単位取得の資格が抹消されるためF評価となる。							
V. 授業外学修							
次回の講義に関連する事項を学生自ら調べる課題を出す。 毎回、講義終了時に学生自ら問題意識を持ち思考するような課題を出す。							
VI. 使用教材							
教科書：テーマごとに、プリントを配布する。 参考書：必要に応じて講義の中で紹介する。							

科目名	地域観光ビジネス論	教員名	永山 茂 山崎 紀史	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
この授業の目的は、観光立国を掲げる我が国の中で、北海道地域でのその政策や現状、社会的役割を理解するとともに、将来を見据えた課題などに関する基礎知識を習得する事にある。 前半の講義では観光政策論をベースした他国・他地域の事例を学び、北海道での地域観光ビジネスの実態を学ぶ基礎知識を習得する。後半の講義では応用観光論の視点から、地元北海道で展開される観光ビジネスの実態を知り、特徴的な事例や先進事例などを参考にしながら、課題や将来展望を学ぶ。 レポート指導を実施し、指定されたテーマ分量の提出を求め学力を評価する。 到達目標は以下のとおりである。 ・観光ビジネス全般に関する基礎知識を習得し、これらの業界構造や社会的位置づけ、課題等を学ぶこと。 ・地元北海道における観光ビジネスの実態を知り、新たな観光プランを創出できる基礎知識を得ること。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑩不平等 ⑪都市 ⑫生産・消費 ⑬平和							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. はじめに・・・観光産業のふりかえりと地域観光ビジネスの学び方（ガイダンス・第Ⅰ・Ⅱ部の振り返り） 2. 観光政策論：観光立国と国際観光 観光立国と政策（教科書第10章の1） 3. 近年の国際観光の動向（教科書第10章の2） 4. 国際観光と社会変容（教科書第10章の3） 5. 諸外国の観光政策（教科書第11章の1） 6. 観光政策の事例研究（教科書第11章の2・3） 7. 地域観光とまちづくり、およびSDGsと地方創生（教科書第12章） 8. 北海道の観光政策と身近な事例研究（教科書第12章付属） 9. 北海道地域での応用観光論 ①コンテンツツーリズムとクールジャパン（教科書第13章） 10. 北海道地域での応用観光論 ②ブライダルツーリズム（教科書第14章） 11. 北海道地域での応用観光論 ③メディカルツーリズム④ダークツーリズム（教科書第15章） 12. 北海道地域での応用観光論 ⑤フードツーリズム（食文化観光）（レポート指導・教科書第16・17章） 13. 北海道地域での応用観光論 ⑤祭礼文化と観光（イベント型観光）（教科書第18章） 14. 特別講義 「旅行産業最前線レポート（仮題）」（山崎紀史講師） 15. まとめ 地域観光ビジネスの展望（レポート提出）（*講義順は進捗により変更する場合がある）							
III. 講義の進め方							
各回講義要綱・教科書の章立てに添った講義を行う。また必要に応じてパワーポイント動画も利用する。 また講義内容はできる限り1講義完結型で行ない、分かりやすく講義を進めて行く。							
IV. 試験と成績評価							
授業への参加度（50%）とレポート提出（50%）で評価する。 全授業数の3分の1を欠席した場合は、単位取得の資格がなくなるため「F評価」となる。 なお授業開始20分以内に入室した場合のみ「遅刻」とする。							
V. 授業外学修							
「授業計画」にある教科書の指定された範囲を予め読んでから授業に参加すること。 授業の進行に合わせて予習範囲は適時指示します。 予習で生じた疑問などは事前にノートに書き出して出席すると理解が深まります。							
VI. 使用教材							
教科書：「入門 観光学」竹内正人/竹内利江/山田浩之（編著）ミネルヴァ書房刊 参考書：授業の中で必要に応じて紹介する。							
*実務経験のある教員による授業科目 [実務経験と授業との関係] 担当教員は、旅行業での実務経験を有し、当該科目における北海道地域での基幹産業としての観光ビジネスについて教授します。							

科目名	ボランティア論	教員名	工藤 遥 くどう はるか	開講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
ボランティア活動は社会におけるさまざまな課題を背景として行われている。それ故、ボランティア活動は活力ある持続的な地域社会を築く上でも重要な役割を果たしている。それと同時に、ボランティア（ボランティア活動をする人）自身の自己開発やさまざまな能力を開発する機会でもある。 本講義では、ボランティア活動の基本概念・歴史・社会的意義など基礎的な知識を学ぶ。また、ボランティア活動の活動領域・活動形態・活動動機の多様性を知り、自己との接点を見だし、ボランティア活動を実践する素地を養う。 到達目標は以下のとおりである。 ・ボランティア活動の定義、意義について理解できるようになる。 ・ボランティア活動の多様な領域、活動実践について理解できるようになる。 ・現代社会や地域が抱える課題に対するボランティア活動の役割と可能性を検討することができるようになる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ⑰実施手段 ①貧困 ③保健 ④教育 ⑩不平等 他							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[後期] 1. 授業ガイダンス、ボランティアとは 2. ボランティア活動の基本的性格、理念・理想 3. ボランティア活動の意義・役割 4. ボランティアの歴史 5. ボランティア活動の現状 6. ボランティア活動の行動プロセス 7. ボランティアと公共活動 8. 地域の課題を発見する 9. 福祉分野のボランティア活動 10. 災害分野・環境分野のボランティア活動 11. 教育とボランティア 12. まちづくりとボランティア 13. 国際協力とボランティア 14. ボランティーマネジメント 15. まとめとふりかえり、グループワーク							
III. 講義の進め方							
スライドを使って講義をする。教科書は使用せず、適宜プリントを配布する。統計データや新聞記事、映像資料等も教材として使用する。授業の最後に出欠確認も兼ねたリアクションペーパーの提出を求める。ペア／グループでの意見交換なども行う。なお、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
リアクションペーパー（50%）、グループワーク（10%）、期末レポート（40%）を総合的に評価する。							
V. 授業外学修							
講義内容を現実社会の事象と関連付けて理解し、リアクションペーパー課題やレポート課題で具体的かつ深い洞察に基づく考察を書けるようになるためには、国内外や地域で行われているボランティア活動や社会問題等に関するニュース、文献・資料、統計データなどを実際に自分で調べるなどして普段から情報収集を行い、考えや感想などを記録しておくことが肝要である。							
VI. 使用教材							
教科書：使用しない（適宜プリントを配布） 参考書：岡本栄一 他編『学生のためのボランティア論』（社会福祉法人 大阪ボランティア協会）、内海成治・中村安秀 編『新ボランティア学のすすめ』（昭和堂）、岡本栄一 監修・守本友美 他編著『ボランティアのすすめ—基礎から実践まで』（ミネルヴァ書房） 他							

科目名	初 級 簿 記	教員名	わがつま 我妻 きみひろ 公裕	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	前 期																														
I. 目的と内容および到達目標																																					
企業の経済活動を記録し、財産や損益の状況を計算して明らかにする「簿記」の技術を身に付ける。簿記は、ビジネス活動に必要な会計言語であり、複式簿記に基づいた会計情報を効果的に活用する基礎を学ぶことで、ビジネスに携わる者としての、コミュニケーションに必要な知識を身に付けることができる。 企業の形態によって、記録・計算・整理・報告する業務の難易度は異なるが、その基礎力を獲得することで、アカウンタビリティ、コンプライアンス等、企業の社会的責任を担う人材としての素養も身に付ける。 到達目標は以下のとおりである。 ・「簿記」の基礎的・基本的技術の習得（取引の記録・計算、整理し報告するまでの一巡を理解）。 ・会計情報活用能力の育成（財務諸表を読み解き、分析する力）。 ・日本商工会議所主催簿記検定の合格。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑫生産・消費 ⑰実施手段																																					
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]																																					
[前期] <table><tr><td>1. 簿記の役割・簿記の基礎（会計学とは）</td><td>(教科書スタートアップ1)</td></tr><tr><td>2. 貸借対照表と損益計算書（複式簿記のしくみ）</td><td>(教科書スタートアップ2)</td></tr><tr><td>3. 仕訳の基本（取引と8要素）</td><td>(教科書 Chapter 0 1)</td></tr><tr><td>4. 資産・負債・資本、収益・費用の区分</td><td>(教科書 Chapter 0 1)</td></tr><tr><td>5. 商品売買取引（掛け取引、諸掛かり、返品）</td><td>(教科書 Chapter 0 2)</td></tr><tr><td>6. 現金預金</td><td>(教科書 Chapter 0 3)</td></tr><tr><td>7. 手形取引、電子債権取引（債権・債務取引）</td><td>(教科書 Chapter 0 4)</td></tr><tr><td>8. 有形固定資産取引（購入・売却、減価償却）</td><td>(教科書 Chapter 0 5)</td></tr><tr><td>9. 様々な取引（仮払・仮受、前払・前受、未払、未収、及び預り金）</td><td>(教科書 Chapter 0 6)</td></tr><tr><td>10. 税金と資本金（租税公課・消費税、株式の発行）</td><td>(教科書 Chapter 0 6)</td></tr><tr><td>11. 帳簿組織</td><td>(教科書 Chapter 0 7)</td></tr><tr><td>12. 試算表の作成</td><td>(教科書 Chapter 0 8)</td></tr><tr><td>13. 伝票と仕訳日計表</td><td>(教科書 Chapter 0 9)</td></tr><tr><td>14. 決算Ⅰ（簿記一連の手順、総勘定元帳の締め切り）</td><td>(教科書 Chapter 1 0)</td></tr><tr><td>15. 決算Ⅱ（決算整理、財務諸表の作成）</td><td>(教科書 Chapter 1 1、1 2)</td></tr></table>								1. 簿記の役割・簿記の基礎（会計学とは）	(教科書スタートアップ1)	2. 貸借対照表と損益計算書（複式簿記のしくみ）	(教科書スタートアップ2)	3. 仕訳の基本（取引と8要素）	(教科書 Chapter 0 1)	4. 資産・負債・資本、収益・費用の区分	(教科書 Chapter 0 1)	5. 商品売買取引（掛け取引、諸掛かり、返品）	(教科書 Chapter 0 2)	6. 現金預金	(教科書 Chapter 0 3)	7. 手形取引、電子債権取引（債権・債務取引）	(教科書 Chapter 0 4)	8. 有形固定資産取引（購入・売却、減価償却）	(教科書 Chapter 0 5)	9. 様々な取引（仮払・仮受、前払・前受、未払、未収、及び預り金）	(教科書 Chapter 0 6)	10. 税金と資本金（租税公課・消費税、株式の発行）	(教科書 Chapter 0 6)	11. 帳簿組織	(教科書 Chapter 0 7)	12. 試算表の作成	(教科書 Chapter 0 8)	13. 伝票と仕訳日計表	(教科書 Chapter 0 9)	14. 決算Ⅰ（簿記一連の手順、総勘定元帳の締め切り）	(教科書 Chapter 1 0)	15. 決算Ⅱ（決算整理、財務諸表の作成）	(教科書 Chapter 1 1、1 2)
1. 簿記の役割・簿記の基礎（会計学とは）	(教科書スタートアップ1)																																				
2. 貸借対照表と損益計算書（複式簿記のしくみ）	(教科書スタートアップ2)																																				
3. 仕訳の基本（取引と8要素）	(教科書 Chapter 0 1)																																				
4. 資産・負債・資本、収益・費用の区分	(教科書 Chapter 0 1)																																				
5. 商品売買取引（掛け取引、諸掛かり、返品）	(教科書 Chapter 0 2)																																				
6. 現金預金	(教科書 Chapter 0 3)																																				
7. 手形取引、電子債権取引（債権・債務取引）	(教科書 Chapter 0 4)																																				
8. 有形固定資産取引（購入・売却、減価償却）	(教科書 Chapter 0 5)																																				
9. 様々な取引（仮払・仮受、前払・前受、未払、未収、及び預り金）	(教科書 Chapter 0 6)																																				
10. 税金と資本金（租税公課・消費税、株式の発行）	(教科書 Chapter 0 6)																																				
11. 帳簿組織	(教科書 Chapter 0 7)																																				
12. 試算表の作成	(教科書 Chapter 0 8)																																				
13. 伝票と仕訳日計表	(教科書 Chapter 0 9)																																				
14. 決算Ⅰ（簿記一連の手順、総勘定元帳の締め切り）	(教科書 Chapter 1 0)																																				
15. 決算Ⅱ（決算整理、財務諸表の作成）	(教科書 Chapter 1 1、1 2)																																				
III. 講義の進め方																																					
講義を欠席しないこと（積み重ね学習のため、欠席後の講義に支障が起きる）。 毎時の講義終了時に小テスト（理解度の確認）を実施する。 演習問題を数多く解くことで、講義内容の理解度・定着度が上がる（予習・復習を積極的に）。																																					
IV. 試験と成績評価																																					
授業プリント（30％）、小テスト（20％）、前期終了テスト（50％）を基本とする。 日本商工会議所主催の簿記検定に合格した学生（簿記初級以上の取得者）は、単位取得とする。																																					
V. 授業外学修																																					
教科書に事前に目を通し、本時の講義内容に関する理解を深めておくこと。 毎時間に使用するプリントは本時了後に回収、次時の始めに採点后に返却するので、教科書へ書き込みながら不明な点を解消しておくこと。 次時の取り組む課題について、本時の終わりに指示する。 教科書に掲載の練習問題に忘れずに取り組み、知識の定着を図ること。																																					
VI. 使用教材																																					
教科書：みんなが欲しかった簿記の教科書（日商3級）（TAC出版） 参考書：理解度、受験級に合わせて各自問題集等を購入すること。																																					

科目名	中 級 簿 記	教員名	わがまま 我妻 公裕	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
「初級簿記」の学びを基礎に、より複雑な経済活動の記録・計算・整理する技術を身に付ける。個人企業と株式会社の会計処理の違いは、ステークホルダーへの会計情報の提供にある。会計制度を支える会計原則や会計法規の理解のもと、経済活動の一翼を担うために会計言語を使いこなす能力を身に付ける。 また、情報処理技術が進む中、取引・仕訳・転記・締切・財務諸表作成までを一気に仕上げるソフトウェアが普及しているが、結果から途中経過を読み解く力、結果を次期の活動に役立てる力も身に付ける。 到達目標は以下のとおりである。 ・企業会計理論の基礎的・基本的な知識の習得（企業会計原則、財務諸表等規則・会社計算規則等）。 ・財務諸表の活用（コーポレート・ガバナンス）。 ・日本商工会議所主催簿記検定の合格。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑫生産・消費 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：2 単位、授業回数：15 回]							
[後期]							
1. 商品売買の会計 (教科書 p 3～p 4) 2. 流動資産の会計 (教科書 p 5～p 7) 3. 固定資産の会計 (教科書 p 8～p 9) 4. その他の取引Ⅰ (教科書 p 10～p 12) 5. その他の取引Ⅱ (教科書 p 13～p 17) 6. 決算に関する取引 (教科書 p 18～p 21) 7. 伝票・仕訳集計表 (教科書 p 22～p 23) 8. 帳簿Ⅰ（小口現金出納帳、現金出納帳、当座預金出納帳、銀行勘定調整表） (教科書 p 24～p 32) 9. 帳簿Ⅱ（仕入帳、売上帳、商品有高帳） (教科書 p 33～p 36) 10. 帳簿Ⅲ（売掛金元帳、買掛金元帳、手形記入帳） (教科書 p 37～p 38) 11. 帳簿Ⅳ（その他の帳簿） (教科書 p 39～p 45) 12. 決算Ⅰ（精算表、帳簿の締め切り） (教科書 p 46～p 51) 13. 決算Ⅱ（財務諸表） (教科書 p 52～p 53) 14. まとめⅠ（仕訳、計算問題） 15. まとめⅡ（会計学の基礎）							
III. 講義の進め方							
講義を欠席しないこと（積み重ね学習のため、欠席後の講義に支障が起きる）。 毎時の講義終了時に小テスト（理解度の確認）を実施する。 演習問題を数多く解くことで、講義内容の理解度・定着度が上がる（予習・復習を積極的に）。							
IV. 試験と成績評価							
授業プリント（70%）、小テスト（30%）を基本とする。 日本商工会議所主催の簿記検定に合格した学生（簿記3級以上の取得者）は、単位取得とする。							
V. 授業外学修							
初級簿記で利用した教科書を参考に、事前に、本時の講義内容に目を通しておくとう理解が深まる。 毎時間に使用するプリントは本時終了後に回収、次時の始めに採点后に返却するので、教科書へ書き込みながら不明な点を解消しておくこと。 次時の取り組む課題について、本時の終わりに指示する。 毎時の理解を深めるために、繰り返し課題に取り組むこと。							
VI. 使用教材							
教科書：みんなが欲しかった簿記の問題集（日商3級）（TAC出版） 参考書：理解度、受験級に合わせて各自問題集等を購入すること。							

科目名	会 計 学	教員名	わが妻 我妻 公裕	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前 期																														
I. 目的と内容および到達目標																																					
簿記は、経済事象を数字（貨幣）により記録・計算・整理する普遍的な技術である。一方、会計は社会規範と結びつき、財務会計、管理会計および社会会計など制度会計として確立した社会科学分野の学びである。会計の理論に触れ、簿記の技術の本質を理解することで、変化の激しいビジネス社会において、会計情報を積極的に活用する能力を身に付ける。 「会計」が担う役割に触れ、職業・職種選択における「会計人」についての理解を深める。 到達目標は以下のとおりである。 ・企業会計の原理・原則の理解（ステークホルダーとしての分析力の習得）。 ・ビジネス社会で有為な人材に必要な会計言語の習得（社会の発展に寄与する人材）。 ・日本商工会議所主催簿記検定の合格。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑫生産・消費 ⑰実施手段																																					
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]																																					
[前期]																																					
<table><tr><td>1. 初級簿記・中級簿記の復習</td><td>(教科書スタートアップ)</td></tr><tr><td>2. 純資産の取引（株式の発行、剰余金の配当と処理）</td><td>(教科書 Chapter 0 1、0 2)</td></tr><tr><td>3. 税金</td><td>(教科書 Chapter 0 3、0 4)</td></tr><tr><td>4. 商品売買（割引き・戻り、売上原価の算出・期末商品の評価）</td><td>(教科書 Chapter 0 5)</td></tr><tr><td>5. 手形と電子記録債権（債務）</td><td>(教科書 Chapter 0 6、0 7)</td></tr><tr><td>6. 有形固定資産・無形固定資産の取引</td><td>(教科書 Chapter 0 8、0 9、1 0)</td></tr><tr><td>7. 有価証券（購入・売却、決算時の評価）</td><td>(教科書 Chapter 1 1)</td></tr><tr><td>8. 引当金会計の処理</td><td>(教科書 Chapter 1 2)</td></tr><tr><td>9. 外貨建取引、収益・費用</td><td>(教科書 Chapter 1 3、1 4)</td></tr><tr><td>10. 財務諸表（決算整理）</td><td>(教科書 Chapter 1 5、1 6)</td></tr><tr><td>11. 税効果と法人税等の処理</td><td>(教科書 Chapter 1 7、1 8)</td></tr><tr><td>12. 本支店会計、連結会計①</td><td>(教科書 Chapter 1 9、2 0)</td></tr><tr><td>13. 連結会計②</td><td>(教科書 Chapter 2 1、2 2)</td></tr><tr><td>14. 製造業会計</td><td>(教科書 Chapter 2 3)</td></tr><tr><td>15. まとめ（企業会計の役割）</td><td>(教科書 Chapter 2 4)</td></tr></table>								1. 初級簿記・中級簿記の復習	(教科書スタートアップ)	2. 純資産の取引（株式の発行、剰余金の配当と処理）	(教科書 Chapter 0 1、0 2)	3. 税金	(教科書 Chapter 0 3、0 4)	4. 商品売買（割引き・戻り、売上原価の算出・期末商品の評価）	(教科書 Chapter 0 5)	5. 手形と電子記録債権（債務）	(教科書 Chapter 0 6、0 7)	6. 有形固定資産・無形固定資産の取引	(教科書 Chapter 0 8、0 9、1 0)	7. 有価証券（購入・売却、決算時の評価）	(教科書 Chapter 1 1)	8. 引当金会計の処理	(教科書 Chapter 1 2)	9. 外貨建取引、収益・費用	(教科書 Chapter 1 3、1 4)	10. 財務諸表（決算整理）	(教科書 Chapter 1 5、1 6)	11. 税効果と法人税等の処理	(教科書 Chapter 1 7、1 8)	12. 本支店会計、連結会計①	(教科書 Chapter 1 9、2 0)	13. 連結会計②	(教科書 Chapter 2 1、2 2)	14. 製造業会計	(教科書 Chapter 2 3)	15. まとめ（企業会計の役割）	(教科書 Chapter 2 4)
1. 初級簿記・中級簿記の復習	(教科書スタートアップ)																																				
2. 純資産の取引（株式の発行、剰余金の配当と処理）	(教科書 Chapter 0 1、0 2)																																				
3. 税金	(教科書 Chapter 0 3、0 4)																																				
4. 商品売買（割引き・戻り、売上原価の算出・期末商品の評価）	(教科書 Chapter 0 5)																																				
5. 手形と電子記録債権（債務）	(教科書 Chapter 0 6、0 7)																																				
6. 有形固定資産・無形固定資産の取引	(教科書 Chapter 0 8、0 9、1 0)																																				
7. 有価証券（購入・売却、決算時の評価）	(教科書 Chapter 1 1)																																				
8. 引当金会計の処理	(教科書 Chapter 1 2)																																				
9. 外貨建取引、収益・費用	(教科書 Chapter 1 3、1 4)																																				
10. 財務諸表（決算整理）	(教科書 Chapter 1 5、1 6)																																				
11. 税効果と法人税等の処理	(教科書 Chapter 1 7、1 8)																																				
12. 本支店会計、連結会計①	(教科書 Chapter 1 9、2 0)																																				
13. 連結会計②	(教科書 Chapter 2 1、2 2)																																				
14. 製造業会計	(教科書 Chapter 2 3)																																				
15. まとめ（企業会計の役割）	(教科書 Chapter 2 4)																																				
III. 講義の進め方																																					
講義を欠席しないこと（積み重ね学習のため、欠席後の講義に支障が起きる）。 毎時の終了時に小テスト（理解度の確認）を実施する。 演習問題を数多く解くことで、講義内容の理解度・定着度が上がる（予習・復習を積極的に）。																																					
IV. 試験と成績評価																																					
授業プリント（30％）、小テスト（20％）、前期終了テスト（50％）を基本とする。 日本商工会議所主催の簿記検定に合格した学生（簿記2級以上の取得者）は、単位取得とする。																																					
V. 授業外学修																																					
教科書に事前に目を通し、本時の講義内容に関する理解を深めておくこと。 毎時間に使用するプリントは本時終了後に回収、次時の始めに採点后に返却するので、教科書へ書き込みながら不明な点を解消しておくこと。 次時の取り組む課題について、本時の終わりに指示する。 教科書に掲載の練習問題に忘れずに取り組み、知識の定着を図ること。																																					
VI. 使用教材																																					
教科書：みんなが欲しかった簿記の教科書（日商2級・商業簿記）（TAC出版） 参考書：理解度、受験級に合わせて問題集等を購入すること。																																					

科目名	情報技術の運用 I	教員名	川眞田 政夫 米野 祐司	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標 本科目では、例題を通じ、コンピュータの知識と利用技術を発展的に習得する。大学でのデータ分析能力は、専門教育と教養教育の統合教育として、本質的な学びを目指す学士力の構成要素として機能している。信頼性に基づく情報の「選別・識別」、情報の整理・分析法、情報の表現・蓄積・発信に関する「手法・心得」などの能力が不可欠となる。 到達目標は以下のとおりである。 ・表作成における正確な操作、適切な機能活用の応用的な技能を習得する。 ・数値データを活用し、知りたいことについて分析し、判断することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑦エネルギー ⑨イノベーション							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：15回] [前期] 1. 記録機能を使ってマクロを作成する 2. VBAの基本を身に付ける 3. セルの値や書式を操作する 4. 表のデータを操作する 5. ワークシートを操作する 6. ワークブックを操作する 7. より柔軟に操作対象を指定する 8. 変数で操作対象や値を指定する 9. 関数を使った処理 10. 条件に合わせて処理を変更する 11. 処理を繰り返し実行する 12. コンピュータサービス技能評価試験 表計算部門2級① 13. コンピュータサービス技能評価試験 表計算部門2級② 14. コンピュータサービス技能評価試験 表計算部門1級① 15. コンピュータサービス技能評価試験 表計算部門1級②							
III. 講義の進め方 Microsoft EXCEL の応用的な知識について実習する。 また、一部の授業を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は、毎日の実習課題提出（100%）により評価する。 提出課題は授業中に指示する。							
V. 授業外学修 教科書に実習手順が記載されているので、授業後に復習しコマンドについて習得すること。							
VI. 使用教材 教科書：『EXCELマクロ&VBA』やさしい教科書, SB Creative							

科目名	情報技術の運用Ⅱ	教員名	川眞田 政夫 米野 祐司	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標 本科目では、例題を通じ、コンピュータの知識と利用技術を発展的に習得する。大学でのデータ分析能力は、専門教育と教養教育の統合教育として、本質的な学びを目指す学士力の構成要素として機能している。信頼性に基づく情報の「選別・識別」、情報の整理・分析法、情報の表現・蓄積・発信に関する「手法・心得」などの能力が不可欠となる。 到達目標は以下のとおりである。 ・表作成における正確な操作、適切な機能活用の応用的な技能を習得する。 ・情報の管理、表現、効果的な発信技術を習得し、活用することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑦エネルギー ⑨イノベーション							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業回数：15回] [後期] 1. エラーが発生した際の処理方法 2. ユーザーと対話しながら進める処理 3. ユーザーフォームを利用する 4. 帳票のデータを操作する 5. 条件付き書式 6. 業務成果に直結する便利な関数（基本関数を使いこなす）、（重要な結果を算出する） 7. 計算チェックと絶対参照（計算チェック）、（単純ミスの防止）、（ファイル参照と元データ） 8. ショートカットテクニック（厳選ショートカット）、（必須ショートカット） 9. 貼付技法とオートフィル（コピペの極意）、（便利な機能） 10. 実践的なデータ分析①（データテーブル）、（ゴールシーク） 11. 実践的なデータ分析②（What-if 分析）、（クロス集計） 12. 実践的なデータ分析③（散布図のビジネスへの応用） 13. グラフ機能①（グラフ機能の基本） 14. グラフ機能②（伝わるグラフ・見やすいグラフ） 15. グラフ機能③（最適なグラフの種類）							
III. 講義の進め方 Microsoft EXCEL の応用的な知識について実習する。 また、一部の授業を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価 成績評価は、毎日の実習課題提出（100%）により評価する。 提出課題は授業中に指示する。							
V. 授業外学修 教科書に実習手順が記載されているので、授業後に復習しコマンドについて習得すること。							
VI. 使用教材 教科書：『EXCELマクロ&VBA』やさしい教科書，SB Creative							

科目名	政治理論史	教員名	こばやし ひでたか 小林 秀高	開講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前期
I. 目的と内容および到達目標							
本講義は、現代社会における価値を巡る議論を対象として扱う。講義で扱うのは「自由」の概念とその発達である。講義では、第一に17世紀以降の理論家が自由をどのように考えてきたのか、第二に、自由の概念が現代社会ではどのような問題と関わっているかを、具体的な事例とディスカッションを通じて考える。また講義の内容に関連するため「政治学」を受講していることが望ましい。 到達目標は以下のとおりである。 ・現代における国家と社会、個人の関係について基本的な知識を身につける。 ・自由の概念の発達と現代社会における自由をめぐる問題について議論ができる。 ・国家公務員試験および地方公務員試験に出題される水準の政治学説の基礎を理解する。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ①貧困 ②飢餓 ⑤ジェンダー ⑩不平等 ⑯平和							
II. 授業計画〔単位数：2単位、授業回数：15回〕							
〔前期〕 1. ガイダンス：トロッコ問題 2. 政治とは何か：政治学と他の学問との違い 3. リベラリズム1：自由とは何か：カルネアデスの舟板 4. リベラリズム2：自由と強制：「あなたのため」に強制することは許されるか 5. リベラリズム3：積極的自由と消極的自由 6. リベラリズム4：財産の社会的概念：累進課税制度は必要か 7. リベラリズム5：ケインズとハイエク 8. レポートの書き方1：問いの立て方 9. レポートの書き方2：巨人の肩に乗る 10. リバタリアニズム1：馬鹿なことをする自由 11. リバタリアニズム2：臓器移植市場 12. リバタリアニズム3：戦争の自由と民間軍事会社 13. リバタリアニズム4：商業的代理出産 14. レポートとディスカッション1 15. レポートとディスカッション2							
III. 講義の進め方							
この講義は「講義」と「ディスカッション・パート」(DP)の二つからなる。DPでは時事的な問題と絡めながら、受講者で議論をおこなう。受講学生は主体的な議論への参加が求められる。毎回ディスカッションを行うため遅刻者は授業に参加出来ない。また、2回連続の欠席や合計3回以上欠席した学生は受講を制限する場合がある。 講義の一部は遠隔で実施する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
受講者が多数の場合は期末試験をおこなうが、基本的には授業への貢献度(60%)とレポート(40%)により評価をする。授業への貢献度の詳細は、ディスカッションと発表であるが、評価方式の詳細は授業で説明する。							
V. 授業外学修							
毎回の授業後に簡単なレポートを課す。その内容が復習課題となる。また、各講義内容は関連しているため、欠席した回に関しては、初回授業で指定する参考文献を読んだ上で次の講義に参加すること。							
VI. 使用教材							
教科書：使用しない 参考書：初回に説明する。							

科目名	経 済 学 史	教員名	はただ ひでお 畠田 英夫	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
経済学史は「経済学」の歴史を対象とし、経済学がどのように変化・発展してきたかを扱う。経済学は目の前の経済問題を対象として分析し、その理論化を行った成果である。それゆえ、経済全体に対してどのような見方をするか、あるいは経済問題をどのように捉えるかによっていくつかの異なった枠組み(学派)がある。それらを大きく三つにわけ、ミクロ的・マクロ的・制度的アプローチとしよう。経済学の発展を辿り、それぞれのアプローチとその背後にある経済の見方・捉え方を明らかにするとともに、現代社会に対する主要な見方を理解する。 到達目標は以下のとおりである。 ・社会に対する多様な分析アプローチが有意義な成果を生み出すことを理解している。 ・現代の経済学における主要なアプローチを知っている。 ・過去の主要な経済学者と現代の経済学との関係を理解している。 <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ①貧困 ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑩不平等 ⑫生産・消費 ⑰実施手段							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：15回]							
[後期] 1. 経済学の歴史と現代の経済学 2. 重商主義 3. 重農主義とケネーの経済表 4. スミスと古典派経済学の成立 5. リカードと古典派経済学の展開 6. J. S. ミルによる古典派経済学の集大成 7. マルクスによる制度的接近法の貢献 8. 古典派経済学と限界革命 9. ワルラスと一般均衡理論 10. ジェボンズと裁定行動 11. メンガーとオーストリア学派 12. マーシャルとケンブリッジ学派 13. ケインズとマクロ的接近法の復興 14. ケインズ以降の現代経済学 15. 現代の経済学と3つの接近方法							
III. 講義の進め方							
経済学の歴史に関する動画を副教材として用いて講義を進行する。 また、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
授業時に随時行う課題・平常点(80%)・期末レポート(20%)により、成績評価をおこなう。							
V. 授業外学修							
毎回の授業時に指示する予復習の学修課題に必ず取り組むこと。 経済時事の話題にふれる際に、いろいろな見方・理解の仕方があることを意識して理解を深めたい。経済事象に対するさまざまな見方が経済学を豊かなものにしてきたことを理解し、ものごとを深く考える手がかりとなろう。 授業外学修や講義内容その他の質問を歓迎する。							
VI. 使用教材							
教科書 : 指定しない(適宜資料を指示する)。 参考書 : 『若い読者のための経済学史』 ナイアル・キシティニー(すばる舎) 『資本主義の思想史』 ジェリー・Z・ミュラー(東洋経済) 『経済思想史辞典』 経済学史学会編(丸善) 『経済学大図鑑』 ナイアル・キシティニー他(三省堂)							

科目名	職業能力基礎(SPI)	教員名	工藤 遥 くどう はるか	開講 コース	地域振興 ビジネス	1年次	後期
I. 目的と内容および到達目標							
「SPI」は企業の採用試験で最も利用されているテストの名称である。本授業は採用試験の名称を科目名にし、就職希望学生に対する実践的な就職試験対策の授業として開講する。試験内容は性格検査・言語分野・非言語分野の3つに分かれる。性格検査では、実際に性格検査を行い、そこから知ることができる性格特徴を仕事選びや就職活動にどのように活用すればよいかについて学ぶ。言語分野の問題形式の対策・演習については具体的な解法を理解し覚えることに主眼を置き演習を行う。非言語分野では最頻出問題形式について概要と対策を学び、その後の就職試験対策を効率的に進める素地を養う。 到達目標は以下のとおりである。 ・性格検査を通じて自己分析を深めることができる。 ・「言語分野」対策を自分で講じることができる。 ・「非言語分野」の基本的対策を済ませる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用							
II. 授業計画〔単位数：2単位、授業回数：15回〕							
〔後期〕							
1. SPIの概要と対策、性格検査と結果の活用（教科書 pp. 7-12, 94, 156, 208） 2. [非言語分野] 頻出問題1：計算問題（教科書別冊） 3. [非言語分野] 頻出問題2：損益算、料金計算、仕事算（教科書 pp. 14-53） 4. [非言語分野] 頻出問題1～2の対策、小テスト①・解説 5. [非言語分野] 頻出問題3：濃度算、速度・距離・時間（教科書 pp. 54-75） 6. [非言語分野] 頻出問題4：順列、組み合わせ、確率（教科書 pp. 76-93） 7. [非言語分野] 頻出問題3～4の対策、小テスト②・解説 8. [非言語分野] 頻出問題5：命題、集合、推論（教科書 pp. 96-155） 9. [非言語分野] 頻出問題6：資料・表・長文の読み取り（教科書 pp. 158-175） 10. [非言語分野] 頻出問題5～6の対策、小テスト③・解説 11. [非言語分野] 頻出問題7：図形・空間、グラフと領域（教科書 pp. 188-207） 12. [非言語分野] 頻出問題8：ブラックボックス、物流（教科書 pp. 176-187） 13. [非言語分野] 頻出問題7～8の対策、小テスト④・解説 14. 「言語分野」頻出問題の概要と演習（pp. 210-239） 15. 「言語分野」頻出問題の対策、小テスト⑤・解説							
III. 講義の進め方							
授業計画に沿って、パワーポイントを映写し、講義・演習する。適宜プリントを配布する。数学的知識を必要とする問題の比重が高くなる。毎回、出席を確認する。なお、一部の授業回を遠隔で開講する場合がある。							
IV. 試験と成績評価							
単元毎の小テスト（100%）							
V. 授業外学修							
教科書を使って予習を行い、授業中はプリントの例題や練習問題に積極的に取り組み、授業後はプリントや教科書を繰り返し復習するなどして、自主的に就職試験対策を進めることが大切である。							
VI. 使用教材							
教科書：尾藤健『文系学生のためのSPI3完全攻略問題集』（高橋書店） 参考書：柳本新二『最新！SPI3【完全版】』（高橋書店）、『これが本当のSPI3だ！』（洋泉社）、『SPI&テストセンター』（ナツメ社）							

科目名	キャリア技能Ⅴ (食品衛生責任者)	教員名	はたけやま 晶山 佳幸	開講 コース	地域振興 ビジネス	1・2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標 食品衛生責任者は食品衛生責任者養成講習を受講した者などで、食品衛生責任者として選任されている者と定義している。食品衛生法に定められた許可営業者(食品衛生管理者の設置義務がある業種以外の飲食店営業など)は、営業許可施設ごとに食品衛生責任者を選任し保健所に届け出ることになっていることから、本養成講習を受講し、資格を取得する必要がある。 到達目標は以下のとおりである。 ・食品衛生責任者養成講習会を受講し、食品衛生責任者資格を取得する。 <SDGs(持続可能な開発目標)との関連> ②飢餓 ⑥水・衛生							
II. 授業計画 [単位数：1単位、集中講義] [集中] 1. 衛生法規(伝染病、疾病予防) 2. 衛生法規(環境衛生、労働衛生) 3. 公衆衛生学(食品衛生法、施設基準、管理運営基準等) 4. 食品衛生学(食品事故) 5. 食品衛生学(食品の取扱い) 6. 食品衛生学(施設の衛生管理、自主管理等) 7. 修了考査							
III. 講義の進め方 社団法人 北海道食品衛生協会が企画・運営する食品衛生責任者講習会を受講する。講習会の開催日時や講習会場については別途連絡する。なお、本養成講習会受講者は別途講習料(8,000円)を支払って受講する。							
IV. 試験と成績評価 本養成講習会を欠かさず受講し、修了考査に合格した者は、食品衛生責任者資格が取得できると共に「キャリア技能Ⅴ」1単位を付与する。							
V. 授業外学修 食品を取り扱う際の衛生管理や過去に起きた食中毒や食品事故について事前学習しておくことにより講習会の内容理解が深まる。							
VI. 使用教材 教科書：受講テキストは講習会当日、北海道食品衛生協会から支給される。							

科目名	キャリア技能Ⅷ (ミュージカル)	教員名	保育学科他 専任教員	開講 コース	地域振興 ビジネス	1年次	集中
I. 目的と内容および到達目標 拓大ミュージカルは全学科の学生からなる実行委員会形式によって運営されている。公演は毎年2月下旬に2日間2回に渡り深川市民会館(深川市民交流ホール「み・らい」)で行われ、2日間で約1,400人の観客動員実績がある。実行委員会は、専任教員の指導の下、毎年9月下旬に結成され、5か月間に渡って設定された授業時間及び課外時間を使って活動している。公演を成功させるための活動は、演者以外にも衣装、大道具、小道具の製作、音響、チケット販売、パンフレット広告募集など多岐に渡るため、各部署に分かれて活動している。 到達目標は以下のとおりです。 ・活動当初に定めた自己到達目標の達成のため努力することができる。 ・集団活動での責任感や協調性、主体性などを常に意識して活動することができる。 ・所属部署での役割を最後までやり遂げることができる。 <SDGs(持続可能な開発目標)との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑫生産・消費 ⑮陸上資源							
II. 授業計画[単位数：2単位、集中] 公演日は2024年2月中旬を予定。 以下の活動分野(所属部署)があり、それぞれの活動計画によって後期から制作が進められる。 〈制作スタッフ〉 保育学科他専任教員の他、以下の非常勤講師が指導にあたる。 ・前田順二 講師 演技指導 ・藤井綾子 講師 衣装製作指導・ダンス指導 ※その他、舞台製作アドバイザー・衣装製作アドバイザーを置く 1 キャスト 2 音響 3 舞台美術(大道具・小道具) 4 衣装 5 舞台監督 〈事務局スタッフ〉 1 総務・会計 2 広報渉外							
III. 講義の進め方 10月上旬から2月中旬の公演日に向けて活動する。 通常時間中の活動は原則として月・金(16:00～17:20)、土曜(9:10～16:00)。なお、土曜日、休暇期間中の活動は授業時間外(課外)活動となっている。休暇期間を利用した活動は、日曜・祭日を除く平日(9:10～16:00)。ただし、年末年始の活動は実施しない。							
IV. 試験と成績評価 試験は実施しない。成績評価は活動実践(90%)及び活動記録シート(10%)で行う。							
V. 授業外学修 活動の成果を積み上げながら進めるので、毎回とも準備に労苦を惜しまず、計画的・積極的に休むことなく参加することが求められる。準備は授業時間だけでは不足する場合があるので、部署ごとに必要に応じて授業外にも取り組むことが大事である。							
VI. 使用教材 台本や楽譜、舞台設計図など、必要な資料は、授業で配布する。また、公演後は活動過程・公演を収録したDVDが製作される。							

科目名	キャリア技能Ⅸ (ミュージカル)	教員名	保育学科他 専任教員	開講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	集中						
Ⅰ. 目的と内容および到達目標													
拓大ミュージカルは39年の実績と伝統に支えられた本学の特徴的学びの活動である。1年次では企画力・協調性・忍耐力・集中力など、様々な人間力を育み、感動の涙を自ら体験することを第一の目的として活動を体験するが、2年生としての関わりは、1年生を指導し、リーダーシップを発揮し、社会人として巣立つ前の最後の学び、特にリーダーシップ性を高めることを目標にしている。 組織運営の最初から最後までを責任を持って関わることで、1年次では知りえなかった様々な問題や課題を体験できる。その経験は、社会人として大きな糧になるもの。労苦を共に体験することも重要な目的である。 到達目標は以下のとおりである。 ・活動当初に定めた自己到達目標達成のため努力をすることができる。 ・2年生としての責任感やリーダーシップなどを常に意識して活動することができる。 ・所属セクションでの役割を最後までやり遂げることができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑫生産・消費 ⑮陸上資源													
Ⅱ. 授業計画〔単位数：2単位、集中〕													
公演日は2024年2月中旬を予定。 以下のような活動分野があり、それぞれの活動計画によって後期より制作が進められる。 <制作スタッフ> 1 キャスト 2 音響 3 舞台美術（大道具・小道具） 4 衣装 5 舞台監督部 <事務局スタッフ> 1 総務会計部 2 広報渉外部				保育学科他の専任教員の他、以下の非常勤講師が指導にあたる。 <table><tr><td>前田順二</td><td>講師</td><td>演技指導</td></tr><tr><td>藤井綾子</td><td>講師</td><td>衣装製作指導・ダンス指導</td></tr></table> ※その他、舞台製作アドバイザー・衣装製作アドバイザーを置く。				前田順二	講師	演技指導	藤井綾子	講師	衣装製作指導・ダンス指導
前田順二	講師	演技指導											
藤井綾子	講師	衣装製作指導・ダンス指導											
Ⅲ. 講義の進め方													
10月上旬から2月中旬の公演日に向けて活動する。 通常授業期間中の活動は原則として月・金（16:00～17:20）土曜（9:10～16:00）。 なお、土曜日、休暇期間の活動は授業外時間（課外）活動となっている。 休暇期間を利用した活動は、日曜祭日を除く平日（9:10～16:00）。ただし、年末年始の活動は例年行わない。													
Ⅳ. 試験と成績評価													
試験は実施しない。成績評価は活動実践（90%）及び活動記録シート（10%）で行う。													
Ⅴ. 授業外学修													
活動の成果を積み上げながら進めるので、毎回とも準備に労苦を惜しまず、計画的・積極的に休むことなく参加することが求められる。準備は授業時間だけでは不足する場合があるので、部署ごとに必要に応じて授業外にも取り組むことが大事である。													
Ⅵ. 使用教材													
教科書：台本や楽譜、舞台設計図など、必要な資料は、授業で配布する。 参考書：毎年、活動過程・公演を収録したDVDが製作されるので参考にして欲しい。													

科目名	インターンシップ	教員名	こばやし ひでたか 小林 秀高	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次 2 年次	後 期 前 期
I. 目的と内容および到達目標							
地域振興の担い手の育成及び学生の就業能力の向上のため、インターンシップを通じた社会的・職業的自立を図るために必要な能力を培う。このような就業体験により、地域企業と学生及び教職員とが相互理解を図り、地域社会に貢献できる人材を育成する。 2 年次の休業中の一定期間、事業所（企業又は公共機関）において日帰りで、職業の現場における実地的な知識や技術・技能に触れることにより、主体的な職業選択能力や高い職業意識を育成することを目的とする。 到達目標は以下のとおりである。 ・ 勤労観や職業観の理解の深化を図り、将来の進路について考え、職業選択能力を養う。 ・ 事業所などの現場において、現実の知識や技術に触れ、大学における学習の取組みに役立てる。 ・ 学生が教職員や保護者以外の社会人と接することで新たなコミュニケーション能力を育てる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ③保健 ⑧成長・雇用 ⑫生産・消費							
II. 授業計画〔単位数：2 単位、授業回数：30 回〕							
（事前学習） 1. インターンシップの目標について 2. 地域の事業所の概要について 3. 地域の産業構造と特色について 4. 労働環境等について 5. インターンシップ先について 6. インターンシップの心構えについて （インターンシップ実施） 7. ～27. 一定期間のインターンシップ実施 （事後学習） 28. インターンシップの総括について 29. インターンシップ体験報告会の準備 30. インターンシップ体験報告会							
III. 講義の進め方							
事前・事後の学習については、学生自身の企業及び業界の調査・研究を重視しながら、インターンシップで体得すべき内容の認識を深めるようにするとともに、事後学習ではインターンシップ体験の検証を体験報告会実施によって成果を客観的に見直すことを重視する。 一部の研修や説明は遠隔で実施する場合もある。							
IV. 試験と成績評価							
成績評価は、学生が提出する「インターンシップ日誌」20%、インターンシップ先が提出する「インターンシップ評価表」30%、巡回指導に当たった専任教員の報告書 20%、体験報告会の内容 30%で行う。							
V. 授業外学修							
インターンシップは実施する企業および業界の研究に事前の課題として取り組む。予習・復習については履修後に個別に指示をする。							
VI. 使用教材							
教科書：指定しない 参考書：事前学習時に適宜指示する。							

科目名	地域特別演習 A～D	教員名	各専任教員	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1・2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
地域活動に積極的に参加し、企画・運営のスタッフの一員として主催担当者や市民とともに、協働しながら、自己啓発や地域貢献できる人材の育成を目指す。また、地域の実状に直接触れることで、課題を発見・解決する手順や得られる成果を通じて、地域振興に役立つ「地域活性化プラン」策定の一助とする。地域活動の一部を担うとともに地域活動の改善策などの作成を通じて、地域をデザインすることができる人材の養成を目指す。 到達目標は以下のとおりである。 ・地域社会の実状を理解し、地域協働の活動を円滑に遂行することができる。 ・地域社会の実態に対応する地域活性化プランを作成することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑰実施手段 etc							
II. 授業計画 [単位数：1単位、授業週数：15回]							
[前期] *前期に実施の場合				[後期] *後期に実施の場合			
1. ガイダンス①：取組みの仕方と事例紹介 2. ガイダンス②：取組みの確定 3. 事前研修 4～ 1 3. 担当教員との協議・打ち合わせ（2時間）、 取り組みの実施（4時間） 実施後の改善協議（1時間）、 改善された取り組み（3時間） 1 4. 取り組みのまとめと地域活性化プランの立案 1 5. 地域活性化プランの発表				1. ガイダンス①：取組みの仕方と事例紹介 2. ガイダンス②：取組みの確定 3. 事前研修 4～ 1 3. 担当教員との協議・打ち合わせ（2時間）、 取り組みの実施（4時間） 実施後の改善協議（1時間）、 改善された取り組み（3時間） 1 4. 取り組みのまとめと地域活性化プランの立案 1 5. 地域活性化プランの発表			
III. 講義の進め方							
ガイダンス時に取組事例を紹介し、学生の希望によって取り組み内容を確定する。基本的には、希望をもとにしたグループ編成で実施する。実際の取り組みの場面は、学外や週末を活用することが多いため、移動や実施に際して安全に配慮して行う。							
IV. 試験と成績評価							
深川市等地域の活動の事前・事後の研修に対し真摯に、積極的に取組んだか。また、それらの成果として、報告レポートの作成・発表を課す。 成績評価の方法は、地域特別演習毎に明らかにする。							
V. 授業外学修							
地域活動に参加することになるため、事前に本市の概況について文献調査などで理解しておくことよい。継続的に参加することで、様々な人とつながり、視野を広げることができる。 関わった分野への理解を深めることで、自己のスキルを一層高めることができる。							
VI. 使用教材							
教科書 ：使用しない。 参考書 ：各担当教員が適宜指示する。							

科目名	海外研修	教員名	農学ビジネス学科 専任教員	開講 コース	地域振興 ビジネス	1・2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標 この科目は、海外における語学研修および諸活動を対象とし、研修前後に単位認定に関わる所定の申請を行った者を対象に、学科会議等の審査を経て単位を付与するものである。 例えば、拓殖大学の政経学部と国際学部で実施される海外研修については、前期と後期に各学科の学生掲示板に募集要項が掲示されるので、学生は、それを見て応募する。あらかじめ所定の手続きを済ませ、参加可否を主催担当者による選考に委ねている。このほか、民間旅行会社等で実施される海外研修に参加する場合においても対象となる。 到達目標は以下のとおりである。 ・国際化社会・グローバル化社会で必要な国際感覚を身につける。 ・海外研修に必要な十分な語学力を身につける。 ・海外での職業生活や社会生活に必要なコミュニケーション能力を身につける。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑰実施手段 etc							
II. 授業計画 [単位数：2単位、現地研修日数：約10日間以上] 1. 海外研修応募のための書類作成・申し込み 2. 履修指導 3. 海外研修の単位認定の学務学生課への事前申請 4. 海外研修に関する諸手続き指導 5. 事前研修（現地事情、研修課題、外国語、危機管理） 6. 海外研修参加 7. 事後研修（修了報告書作成・提出） 8. 口頭発表 9. 修了報告書の学務学生課への提出 10. 単位認定の申請手続き							
III. 講義の進め方 海外で語学研修および諸研修活動を行う。具体的なスケジュールや研修内容は、研修によって異なる。							
IV. 試験と成績評価 事前研修（33%）・現地研修（33%）・事後研修（34%）に関する担当者の評価をもとに、学科会議にて審議の上、単位認定の可否を判定する。よって、研修終了後はその旨をゼミナール担当教員に申し出た上で、学務学生課窓口において単位認定の申請手続きをあらかじめ行うこと。							
V. 授業外学修 訪問地の地理的、文化的概況を事前に調査することで、語学以外のスキル向上につながる。 「百聞は一見にしかず」であるが、物見遊山ではないので、事後のまとめに必要な情報のメモを忘れない。 獲得した能力の活用方法、目的を明確にすることで、効果的な研修と進路実現に結びつけられる。							
VI. 使用教材 教科書：担当教員が指示する。 参考書：担当教員が適宜指示する。							

科目名	卒 論 演 習	教員名	各専任教員	開 講 コース	地域振興 ビジネス	2年次	前・後期
I. 目的と内容および到達目標							
地域振興ビジネスコースでは2年間の学びの一つの到達点を「卒業論文」と位置づけ、全学生が卒論演習を履修する。所属ゼミナール教員の指導のもとでテーマを選択し指導を受ける。卒論演習は時間割にコマは割り当てられず、授業時間とは別に個別指導を中心とした論文指導が行われる（講義の進め方参照）。論文の作成は、指導教員とのミーティングと個別添削、2年ゼミナールでのディスカッションを繰り返しながら進められる。 到達目標は以下のとおりである。 ・関心にもとづいて課題設定をすることができる。 ・適切な資料を自ら収集し、読解することができる。 ・論理的な一定量の文章を書くことができる。 ・人前で自分の成果を発表・説明することができる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育 ⑧成長・雇用 ⑨イノベーション ⑰実施手段 etc							
II. 授業計画 [単位数：2単位、授業回数：30回]							
1 課題の設定				3 文章の作成			
・社会現象を対象とした課題の発見 ・主体的なテーマの設定 ・テーマを論じるために必要な論文構成の作成				・論文としての一定水準・分量の文章作成 ・文章作成と添削の重要性 ・参考・引用・注解の適切な使用法			
2 文献の収集・読解				4 プレゼンテーション			
・論文作成に必要な図書館の使い方 ・テーマに関する基本的な資料の検索と収集 ・一定水準・分量の文献・論文などの読解 ・集めた情報の適切な整理法				・与えられた時間を活用したプレゼンテーション ・目的を明確にしたプレゼンテーション ・適切な質疑応答			
III. 講義の進め方							
「卒論演習」は「2年ゼミナール」と連動して展開される科目であるが、ゼミナールの時間外で教員が設定する時間に行われる活動である。 「2年ゼミナール」の時間は、主に卒業論文作成に必要な学習、知識の習得および学生間の議論や情報共有のためにあてられ、教員との個別の指導や執筆時間にかかる活動の時間があてられる。具体的な進め方は各ゼミナール担当教員の指示に従うこと。							
IV. 試験と成績評価							
卒論演習の評価は、1. 論文の完成度（40%）、2. 論文への主体的な取り組み（30%）、3. 論文の発表（30%）の3項目で行う。1は短期大学として要求される論文の質と形式の達成度、2は論文作成への積極性、ゼミナールでの議論の貢献度、卒業制作発表会の運営など、3は卒業制作発表会での発表、論文完成への取り組みの状況を評価する。							
V. 授業外学修							
卒業論文の作成にあたっては、研究テーマの設定、論文の構成・展開等、ゼミナール担当教員と適宜協議し、指導を受けながら進めると良い。 調査研究にあたっては、図書館の活用、Internet 検索等、読み込むまでに相当の時間を要するため、計画的に取り組むこと。なお、情報の信憑性、時間の経過など、複数の出典元からの情報を精査すること。 様々な期日を守ることも大切な評価の要素である。							
VI. 使用教材							
教科書 : 各ゼミナール担当教員が指示する。 参考書 : 各ゼミナール担当教員が適宜指示する。							

科目名	日 本 事 情 I (留 学 生 科 目)	教員名	佐藤 賢	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	前 期
I. 目的と内容および到達目標							
本授業は留学生が、日本の習慣と文化に慣れ日本社会及び日本人を理解するための授業である。 また、現在日本社会において問題とされている現象についての知識を増やし、自国の社会現象と対比できる能力を身につけること、日本の伝統文化や慣習に対する理解を深めることを目標とする。これは日本の生活・文化を来日後できるだけ早い時期に習得し理解し、日本での生活に溶け込んでもらうことを目的とする。 到達目標は以下のとおりである。 ・綺麗な日本語を話せるようになる。 ・敬語の使い方が理解できる。 ・社会人としての言葉使いができるようになる。 ・日本の歴史や文化が理解できる。 <SDGs（持続可能な開発目標）との関連> ④教育							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[前期] 1. 覚えておきたい日本語の日常表現 2. 敬語の使い方 3. 生活事情 4. 日本の都道府県 5. 日本人の食生活 6. 日本の春夏秋冬 7. 日本の芸能 8. 日本の大学 9. 日本の教育制度 10. 日本の産業構造の変化 11. 現代日本と世界とのつながり 12. 現代日本の政治・経済 13. 日本の家族 14. 宗教（日本人の宗教） 15. 日本の方言							
III. 講義の進め方							
教科書や配布プリントにそって、授業を進める。授業は日本の習慣や文化を紹介し、その内容を容易に説明しながら日本語会話、敬語の使い方を学習する。また、日本でのマナーやルールについても説明し、後半は日本の歴史についても理解を深める。各週の講義ともその目的・要点を明確にしつつ授業を展開する。							
IV. 試験と成績評価							
単元毎のレポート (50%)、最終の課題レポート (30%) 授業に取り組む姿勢・意欲 (20%) を総合的に評価する。							
V. 授業外学修							
・分からない日本語表現などをリストアップしておく ・自国と日本とは何が違うかなど明確にしておく ・日本人のバックグラウンドを理解しておく							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない (適宜プリントを配布) 参考書 : 釜淵優子著『しごとの日本語』(アルク)、桂島宣弘著『留学生のための日本事情入門』(文理閣) 日本事情・文化を考える (国際交流基金)、話すことを考える (国際交流基金)							

科目名	日 本 事 情 II (留 学 生 科 目)	教員名	佐藤 賢	開 講 コース	地域振興 ビジネス	1 年次	後 期
I. 目的と内容および到達目標							
本講義は留学生が、日本の習慣と日本の文化をより理解するための授業である。 日本事情Ⅱでは新聞記事の要約・比較、日本文化の疑問点や共感点の発表、他己紹介など日本語を使って、意見発表やディベートを行っていく。これらを通じ異文化である日本を理解してもらいそれぞれが日本語を使って何ができるかを理解し日本での生活に溶け込んでもらうことを目的とする。 到達目標は以下のとおりである。 ・新聞記事やニュースの内容を理解することが出来る。 ・習得した日本語で何ができるのか確認する。 ・第三者に自分の意見や考え方を正確に伝えることが出来る。 ・TPO に即した日本語を使うことが出来る。 <SDGs (持続可能な開発目標) との関連> ④教育							
II. 授業計画 [単位数：1 単位、授業回数：15 回]							
[後期] 1. 各自の日本語読解のレベルの確認 2. 各自の語彙能力の確認 3. 文法の特徴を理解できているのかを確認 4. 日本語の文章を読み、理解する練習 5. 日本語で文章を書く練習 6. 他人が書いた文章を正確に理解できるか確認 7. 日本語で考える力を養う 8. 相手の意見と自分の意見との対立を発見する 9. 日本の社会問題の解説 10. 日本の歴史 11. 日本の政治システムを解説 12. 現在の日本社会の諸問題について解説 13. 各自で研究・調査した事項の発表 14. 各自で研究・調査した事項の発表 15. 日本事情を学び自分の知賢がどのように変化したかをレポートを書く							
III. 講義の進め方							
教科書や配布プリントにそって、授業を進める。授業は理論や知識を受動的に身に付けるのではなく、自分の考え、他人の意見を理解して吸収する力を身に付けることを目的にする。また、日本でのマナーやルールについても説明し、後半は日本の歴史についても理解を深める。各週の講義ともその目的・要点を明確にしつつ授業を展開する。							
IV. 試験と成績評価							
試験 (50%)、最終の課題レポート (30%) 授業に取り組む姿勢・意欲 (20%) を総合的に評価する。							
V. 授業外学修							
・日本のマンガ又は簡単な小説など読んでおく。 ・指定した新聞記事など読んでおく。 ・社会問題を自分なりに分析しておく。							
VI. 使用教材							
教科書 : 使用しない (適宜プリントを配布) 参考書 : 釜淵優子著『しごとの日本語』(アルク)、桂島宣弘著『留学生のための日本事情入門』(文理閣) 日本事情・文化を教える (国際交流基金)、話すことを教える (国際交流基金)							